

一戸町文化財調査報告書第70集

# 御所野遺跡V

## — 総括報告書 —

2015.12

岩手県二戸郡一戸町

一戸町教育委員会





配石遺構群



空中写真 (西から)



FD52配石



FD54配石



FI58配石



FG60配石



EJ48配石



FB46配石



FE58配石



FG52配石





中央調査区Ⅱa区



中央調査区Ⅱb区



中央調査区Ⅳ区



中央調査区Ⅰ区



中央調査区GA70トレンチ



DF22豎穴建物跡



DE24豎穴建物跡



HD158豎穴建物跡



DF14豎穴建物跡



GF64-02豎穴建物跡



炭化種子出土狀況 (FJ46-01豎穴建物跡)



IC126粘土採掘坑



炭化種子出土狀況 (FC48掘立柱建物跡)



円筒上層式土器



大木式土器



アスファルト塊と付着土器



トックリ形土器



石棒



土偶



粘土入り土器

## 序

御所野遺跡の発掘調査は一戸町の農工団地の造成工事に伴い平成元年に開始されました。まもなく古代の古墳群と縄文時代中期の配石遺構を持つ大規模な集落遺跡であることが判明したため、遺跡を保存するための発掘調査を実施し、平成5年に国史跡に指定されています。

一戸町教育委員会では、当初から遺跡は保存後史跡公園として活用する方針としていたこともあり、整備のための基本計画を策定するとともに遺構復元などを目的とした発掘調査を継続してまいりました。史跡整備は順調に進み、平成14年には御所野縄文公園としてオープンしました。その後も発掘調査は継続し、平成17年までは遺構復元のための調査、平成20年までは遺跡の範囲確認を目的とした調査、平成24年までは内容確認のための調査を実施してまいりました。以上平成元年からの長期にわたる発掘調査の成果にもとづき、新たな分析を加えて作成したのが今回の総括報告書です。

御所野遺跡の発掘調査については、文化庁や岩手県教育委員会をはじめ、多くの方々からご指導ご協力をいただいております。また総括報告書の作成にあたり、御所野遺跡指導委員会委員の先生方や、御所野縄文博物館嘱託研究員、一戸町文化財調査専門委員の方々など、それぞれの分野の先生方から専門的なご指導をいただき、ご執筆もいただきました。

以上の方々に衷心よりお礼申し上げますとともに、重要な遺産として今後とも御所野遺跡を保存していくことを誓い刊行にあたっての序といたします。

平成27年12月

一戸町教育委員会  
教育長 古 籬 英 彦





## 例 言

- 1 本書は平成元年度から平成24年度にわたり実施した御所野遺跡の発掘調査の総括報告書である。
- 2 遺跡名・遺跡略号・所在地は、次の通りである。  
遺 跡 名：御所野遺跡  
遺跡略号：GSN  
所 在 地：岩手県二戸郡一戸町岩館字御所野
- 3 発掘調査はすべて一戸町教育委員会が実施した。
- 4 これまでの発掘調査の経過や既刊報告書については、第1章第1～4節に記した。
- 5 本書の作成ならびに刊行は、平成25～26年度の国庫補助金を受けて、一戸町教育委員会が行った。
- 6 本書はこれまでの既刊報告書による調査成果と平成21年度から行っている御所野縄文博物館嘱託研究員による研究成果に基づく内容である。
- 7 本書の作成にあたっては、御所野遺跡指導委員会の委員の先生方から全般にわたってご指導いただいた。指導委員の先生方は下記の通りである。記して感謝申し上げます。

### 御所野遺跡指導委員会

- 委員長 岡村 道雄（独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所名誉研究員）
- 委 員 辻 誠一郎（東京大学大学院教授）
- 委 員 山田 昌久（首都大学東京教授）
- 委 員 湯本 貴和（京都大学霊長類研究所教授）
- 委 員 平澤 毅（独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所 文化遺産部景観研究室長）

- 8 本書は、一戸町教育委員会ならびに御所野遺跡指導委員、分析協力者、嘱託研究員などが執筆した。執筆分担は目次および各項の文末に記した。なお、嘱託研究員の（ ）内には当時の所属を記した。  
分析協力者 西本豊弘（国立歴史民俗博物館名誉教授）、高妻洋成（独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所）、阿部芳郎・本多貴之・宮腰哲雄（明治大学）、富樫雅彦（武蔵大学）、山本総光（東京大学本部教育・学生支援部）、米倉浩司・小林和貴（東北大学植物園）、佐々木由香・米田恭子・黒沼保子・バンダリ スダルシャン（株式会社パレオ・ラボ）
- 嘱託研究員  
平成21年度 阿部昭典（國學院大學伝統文化リサーチセンター）・辻圭子（元国立歴史民俗博物館）・石井良（首都大学東京大学院博士前期課程）・田中孝尚（東北大学植物園）  
平成22年度 阿部昭典（國學院大學伝統文化リサーチセンター）・辻圭子（元国立歴史民俗博物館）・中村耕作（國學院大學文学部）  
平成23年度 村本周三（斜里町教育委員会）・阿部昭典（國學院大學伝統文化リサーチセンター）・岡村道雄（独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所名誉研究員）  
平成24年度 佐々木由香（株式会社パレオ・ラボ）・辻本裕也（パリオ・サーヴェイ株式会社）・岡村道雄（独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所名誉研究員）  
平成25年度 佐々木由香（株式会社パレオ・ラボ）・富樫雅彦（武蔵大学）・遠藤匡俊（岩手大学）

平成26年度 秦昭繁（山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館）

9 総括報告書作成の体制

一戸町教育委員会

総括：遠藤裕一（教育長・平成25年度）

古館英彦（教育長・平成26年度）

高田和徳（世界遺産登録推進室長 兼 御所野縄文博物館長）

事務担当者：中村明央（御所野縄文公園文化財係長）・菅野紀子（世界遺産登録推進室文化財主事）

整理担当者：菅野紀子・久保田滋子（文化財調査員）

室内整理：木村由美子・久保豊（いちのへ文化芸術NPO）、山田梅子、根反早百合、沢久保智恵子、

野辺地智代子、苗代沢優子、市橋光子、峠ツエ、外岡レイ子、根口イト、後藤恵子

10 整理作業の一部は、特定非営利活動法人いちのへ文化・芸術NPOに委託した。

11 発掘調査時に取り上げた植物遺体群については第3章第2節（7）、土壌の水洗方法及び水洗によって抽出された植物遺体については第3章第2節（8）に記した。

12 出土土器付着物の成分分析および放射性炭素年代測定は、株式会社パレオ・ラボに委託した。

13 Summaryの英文作成については、ジョン・アートル氏（金沢大学）に依頼した。

14 調査および報告書作成にあたり、次の方々および機関から御指導・御協力を賜った。記して感謝申し上げます（順不同・敬称略）。

文化庁、岩手県教育委員会、水ノ江和同（文化庁）、佐藤嘉広（岩手県教育委員会）、永嶋豊・岩田安之（三内丸山遺跡保存活用推進室）、菅原孝平（二戸市立二戸歴史民俗資料館）、土谷信高（岩手大学）、辻野匠（独立行政法人産業技術総合研究所）、矢作健二（バリノ・サーヴェイ株式会社）、小林克（秋田県埋蔵文化財センター）、鈴木三男（東北大学名誉教授）、能城修一（独立行政法人森林総合研究所）、柴田恵（一戸町文化財調査専門委員）

15 本書に掲載している遺構実測図・遺物実測図の用例は下記のとおりである。

（1）遺構実測図の縮尺は、各図にスケール及び縮尺を付した。

（2）層位の表記には、基本層序にローマ数字、各遺構堆積土・トレンチ層序に算用数字を使用した。

（3）土層の色調観察には『新版標準土色帖』（1993 小山・竹原編著）を参考にした。

（4）遺物実測図の縮尺は、各図にスケールおよび縮尺を付した。

（5）図中で使用したスクリーントーンの主な用例は次の通りである。これ以外の使用箇所については各図に用例を表記した。

地山  焼土  炭化物  磨面  アスファルト 

16 用語の統一や本書で示す時期区分については、第1章第3節に記した。

17 出土した遺物および諸記録の保管については、第1章第3節に記した。

18 本書の編集は菅野紀子・久保田滋子が担当した。

# 目 次

第1章 はじめに	1
第1節 調査の目的と経過（高田和徳）	1
(1) 保存を目的とした調査	1
(2) 遺構復元のための内容確認調査	1
(3) 遺跡周辺の範囲確認調査	2
(4) 遺跡内容確認のための調査	2
第2節 遺跡の保存と整備の経過（高田和徳）	22
(1) 保存に至る経過	22
(2) 整備の経過	22
第3節 調査の方法と報告書の作成（菅野紀子）	23
(1) 調査の方法と遺物の取り上げ	23
(2) 資料の整理と保管	25
(3) 報告書の作成	25
(4) 既刊報告書とその内容	26
第2章 遺跡の歴史的環境	28
第1節 遺跡の位置と環境（辻誠一郎）	28
第2節 遺跡の地形・地質（辻誠一郎）	28
第3節 遺跡の層序（辻誠一郎）	29
(1) 基本層序	29
(2) 遺跡の土地造成	32
第4節 御所野遺跡の集落生態系（山本総光・辻誠一郎）	32
第3章 遺跡の概要	37
第1節 検出した遺構（高田和徳）	37
(1) 東側調査区の遺構群	37
(2) 中央調査区の遺構群	41
(3) 西側調査区の遺構群	65
(4) 焼失堅穴建物跡	67
第2節 出土した遺物	85
(1) 土器（菅野紀子）	85
(2) 石器（岡村道雄）	94
(3) 土製品・石製品（岡村道雄）	116
(4) アスファルト関係遺物（岡村道雄）	135
(5) 漆付着遺物（菅野紀子）	138
(6) 御所野遺跡の動物遺体の問題（西本豊弘）	139
(7) 植物遺体群（種実類および木材）（辻圭子）	142
(8) 土壌試料の大型植物遺体（佐々木由香）	155

(9) レプリカ法による土器圧痕の分析 (佐々木由香・菅野紀子・木村由美子・米田恭子・バンダリ スタルシヤン) …	164
(10) レプリカ法による敷物圧痕の観察 (佐々木由香・黒沼保子・米倉浩司・小林和貴・菅野紀子・木村由美子) ……	180
第3節 御所野遺跡の時期と変遷 (高田和徳) ……	197
(1) 遺跡の時期と変遷 ……	197
(2) 御所野遺跡と周辺の遺跡 ……	202
第4章 自然科学分析手法による成果 ……	207
第1節 御所野遺跡の年代 (辻誠一郎) ……	207
第2節 土器の胎土分析 (高田和徳) ……	209
第3節 御所野遺跡出土土器付着物の成分分析 (パレオ・ラボ) ……	215
第4節 放射性炭素年代測定 (パレオ・ラボAMS年代測定グループ) ……	219
第5節 御所野遺跡および馬場平遺跡より出土した黒色物質の赤外分光分析 (高妻洋成) …	221
第6節 御所野遺跡試料分析結果について (本多貴之・阿部芳郎) ……	227
第5章 総括 (高田和徳・菅野紀子) ……	229
第1節 馬淵川流域の縄文遺跡と御所野遺跡 ……	229
第2節 東北地方北部での御所野遺跡の位置付け ……	232
第3節 御所野遺跡の価値と重要性 ……	237
第4節 課題と展望 ……	239
Summary ……	243
報告書抄録 ……	245

# 図版目次

第1図 御所野遺跡の位置	5	第44図 焼失竪穴建物跡と遺物出土状況 (2)	75
第2図 史跡範囲図	6	第45図 焼失竪穴建物跡と遺物出土状況 (3)	76
第3図 調査区位置図	7	第46図 焼失竪穴建物跡と遺物出土状況 (4)	77
第4図 調査区位置図 (平成元~4年度)	9	第47図 焼失竪穴建物跡と遺物出土状況 (5)	78
第5図 調査区位置図 (平成6~24年度)	10	第48図 焼失竪穴建物跡と遺物出土状況 (6)	79
第6図 東側Ⅰ~Ⅹ調査区検出遺構分布図	11	第49図 焼失竪穴建物跡と遺物出土状況 (7)	80
第7図 中央・西側調査区検出遺構分布図	13	第50図 焼失竪穴建物跡と遺物出土状況 (8)	81
第8図 縄文の森調査区検出遺構分布図	15	第51図 焼失竪穴建物跡と遺物出土状況 (9)	82
第9図 東側Ⅰ~Ⅲ調査区遺構配置図	17	第52図 焼失竪穴建物跡と遺物出土状況 (10)	83
第10図 中央・西側調査区遺構配置図	19	第53図 焼失竪穴建物跡と遺物出土状況 (11)	84
第11図 西Ⅰ~Ⅳ調査区・馬場平遺跡Ⅰ・Ⅱ調査区位置図	21	第54図 土器集成図 (1)	89
		第55図 土器集成図 (2)	90
第12図 御所野遺跡と周辺の地形・地質	30	第56図 土器集成図 (3)	91
第13図 御所野遺跡と周辺の東西地形・地質断面	30	第57図 土器集成図 (4)	92
第14図 御所野遺跡の基本層序 (新称: 御所野層)	31	第58図 土器集成図 (5)	93
第15図 植物注酸体分析の調査地点	35	第59図 石器カタログ (1)	103
第16図 植物注酸体ダイアグラム (GSN 1)	35	第60図 石器カタログ (2)	104
第17図 植物注酸体ダイアグラム (GSN 2)	35	第61図 石鏝の製作工程と着柄、使用	105
第18図 植物注酸体ダイアグラム (GSN 3)	36	第62図 御所野遺跡出土石鏝の法量 (長さ×幅)・(長さ×重さ)	106
第19図 植物注酸体ダイアグラム (GSN 4)	36	第63図 GH68竪穴建物跡 (大木8b式期) 1~2層全石器組成 (n=376)	114
第20図 植物注酸体ダイアグラム (GSN 5)	36	第64図 馬場平遺跡C7竪穴建物跡 (円筒上層d~e・大木8a~8b古式期) 全石器組成 (n=221)	114
第21図 竪穴建物跡の時期別分布 (東側Ⅰ~Ⅲ調査区)	39	第65図 GF64-02竪穴建物跡 (円筒上層d~e・榎林式期) 全石器組成 (n=139)	114
		第66図 GD64竪穴建物跡 (大木8b~9新式期) 全石器組成 (n=830)	115
第22図 IIa区柱穴規模	42	第67図 HD114竪穴建物跡 (大木9新式期) 全石器組成 (n=178)	115
第23図 IIb区柱穴規模	42	第68図 DF22竪穴建物跡 (大木10古式期) 全石器組成 (n=115)	115
第24図 V区柱穴規模	42	第69図 装身具カタログ	125
第25図 配石遺構全体図	47	第70図 祭祀具カタログ (1)	126
第26図 配石遺構・掘立柱建物跡・小判形土坑位置図	48	第71図 祭祀具カタログ (2)	127
第27図 掘立柱建物跡と柱穴の規模別分布 (IIa区)	49	第72図 祭祀具カタログ (3)	128
第28図 掘立柱建物跡と柱穴の規模別分布 (IIb区)	51	第73図 追加報告 祭祀具 (1)	129
第29図 掘立柱建物跡と柱穴の規模別分布 (V区)	53	第74図 追加報告 祭祀具 (2)	130
第30図 盛土遺構の推定範囲	54	第75図 滑車形土製瓦葺り分布図	131
第31図 中央調査区における南北方向断面図	55	第76図 斧形土製品分布図	132
第32図 IV区遺構配置図	57	第77図 三角形土版分布図	133
第33図 盛土遺構と重複する竪穴建物跡	58	第78図 キノコ形土製品分布図	134
第34図 竪穴建物跡の時期別分布 (I区)	59	第79図 アスファルト塊とアスファルト付着遺物	137
第35図 竪穴建物跡の時期別分布 (IIa区)	60	第80図 焼骨が出土した調査区	141
第36図 竪穴建物跡の時期別分布 (IIb区)	61	第81図 焼骨の出土地点	141
第37図 III区遺構配置図	63		
第38図 竪穴建物跡の時期別分布 (V区)	64		
第39図 竪穴建物跡の時期別分布 (西側調査区)	66		
第40図 御所野・馬場平遺跡焼失竪穴建物跡の規模	70		
第41図 御所野遺跡焼失竪穴建物跡出土土器総重量	73		
第42図 馬場平遺跡竪穴建物跡出土土器総重量	73		
第43図 焼失竪穴建物跡と遺物出土状況 (1)	74		

第82図	西側調査区の焼失住居DF22堅穴建物跡とDE24堅穴建物跡から出土したクリ材以外の炭化材および種実の出土状況	143	第80図	御所野遺跡周辺遺跡出土編物痕の土器およびレブリカ(1)	193
第83図	中央調査区IIa区のFA52-05堅穴建物跡におけるトチノキ主体種子実遺体群の出土状況	145	第80図	御所野遺跡周辺遺跡出土編物痕の土器およびレブリカ(2)	194
第84図	中央調査区IIb区のFC50-2, FC50-1, FC48掘立柱建物跡の平面図と柱穴の断面図	146	第81図	御所野遺跡周辺遺跡出土編物痕の土器およびレブリカ(3)	196
第85図	FJ46-01堅穴建物跡の枡跡におけるトチノキ主体種子実遺体群の出土状況	149	第81図	御所野遺跡および周辺遺跡出土木炭痕の土器およびレブリカ	196
第86図	FJ46-01堅穴建物跡から出土したトチノキ種子	149	第82図	中央調査区における堅穴建物跡の分布	199
第87図	御所野遺跡から出土した炭化種実	158	第83図	東側調査区の堅穴建物跡の変遷	200
第88図	御所野遺跡での土壌水洗方法(1)	159	第84図	西側調査区の堅穴建物跡の変遷	200
第89図	御所野遺跡での土壌水洗方法(2)	160	第85図	馬場平遺跡の堅穴建物跡の変遷	201
第90図	御所野遺跡での土壌水洗方法(3)	161	第86図	御所野遺跡周辺の遺跡(縄文時代中期後半~後期初頭)	205
第91図	御所野遺跡での炭化種実抽出・分類方法(1)	162	第87図	一戸町地質図	211
第92図	御所野遺跡での炭化種実抽出・分類方法(2)	163	第88図	粘土が出土した堅穴建物跡の分布	213
第93図	御所野遺跡出土の圧痕付着土器(1)	171	第89図	粘土出土状況	214
第94図	御所野遺跡出土の圧痕付着土器(2)	172	第90図	底部外面黒色付着物(分析№1)の赤外線吸収スペクトル	217
第95図	御所野遺跡と馬場平遺跡出土の圧痕付着土器	173	第91図	胴部内面塗膜(分析№2)の赤外線吸収スペクトル	217
第96図	御所野遺跡出土土器の圧痕レブリカの走査型電子顕微鏡写真(1)	174	第92図	胴部内面塗膜(分析№2)のX線分析スペクトル	217
第97図	御所野遺跡出土土器の圧痕レブリカの走査型電子顕微鏡写真(2)	175	第93図	胴部外面赤色顔料(分析№3)の蛍光X線分析スペクトルおよびFP法による半定量分析結果	217
第98図	御所野遺跡出土土器の圧痕レブリカの走査型電子顕微鏡写真(3)	176	第94図	土器付着物の成分分析	218
第99図	御所野遺跡出土土器の圧痕レブリカの走査型電子顕微鏡写真(4)	177	第95図	試料採取土器内面	220
第100図	馬場平遺跡出土土器の圧痕レブリカの走査型電子顕微鏡写真と現生ヤブツルアズキ	178	第96図	暦年較正結果	220
第101図	馬場平遺跡と大平遺跡出土土器の圧痕レブリカの走査型電子顕微鏡写真	179	第97図	フーリエ変換赤外分光分析装置	221
第102図	土器底部圧痕を採取した遺跡の立地	180	第98図	試料番号1の赤外線吸収スペクトル	222
第103図	御所野遺跡および周辺遺跡の編物痕でみられる編組技法	183	第99図	試料番号2の赤外線吸収スペクトル	223
第104図	土器底部編物痕のレブリカおよび現生ササ類の桿	187	第100図	試料番号3の赤外線吸収スペクトル	223
第105図	土器底部圧痕を採取した遺跡の立地と敷物圧痕の種別(縄文時代中~後期のふ)	190	第101図	試料番号4の赤外線吸収スペクトル	223
第106図	御所野遺跡出土編物痕の土器およびレブリカ(1)	191	第102図	試料番号5の赤外線吸収スペクトル	224
第107図	御所野遺跡出土編物痕の土器およびレブリカ(2)	192	第103図	試料番号6の赤外線吸収スペクトル	224
			第104図	試料番号7の赤外線吸収スペクトル	224
			第105図	試料番号8の赤外線吸収スペクトル	225
			第106図	試料番号9の赤外線吸収スペクトル	225
			第107図	試料番号10の赤外線吸収スペクトル	225
			第108図	分析試料	226
			第109図	御所野遺跡試料Py-GC/MS分析結果	228
			第110図	馬淵川流域を中心とした縄文時代中~後期の集落遺跡	231
			第111図	円筒土器出土主要遺跡	232
			第112図	円筒土器文化圏における主な集落遺跡と配石遺構	236

## 表 目 次

第1表 御所野遺跡発掘調査一覧 …………… 3	第21表 土壌試料から得られた炭化種実 …………… 156
第2表 御所野遺跡保存整備事業一覧 …………… 24	第22表 御所野遺跡から出土した炭化種実 …………… 157
第3表 御所野遺跡既刊報告書一覧 …………… 26	第23表 種実圧痕検討遺構と1次抽出土器個体数 …… 164
第4表 御所野遺跡関連参考文献一覧 …………… 27	第24表 御所野遺跡出土土器圧痕の同定結果 …… 166
第5表 御所野・馬場平遺跡焼失堅穴建物跡一覧表 …… 70	第25表 馬場平遺跡出土土器圧痕の同定結果 …… 167
第6表 石罫型式と石材（御所野遺跡全体） …………… 107	第26表 土器圧痕の一覧 …………… 168
第7表 石罫の欠損率（御所野遺跡全体） …………… 107	第27表 御所野遺跡出土敷物圧痕の観察結果 …… 182
第8表 御所野遺跡における石罫のアスファルト付着率 …………… 107	第28表 御所野遺跡出土敷物圧痕と時期 …………… 182
第9表 石罫型式と欠損部位 …………… 107	第29表 馬場平遺跡・田中遺跡・下地切遺跡・大平遺跡・ 柘の木遺跡出土敷物圧痕の観察結果 …… 184
第10表 FJ46-02堅穴建物跡出土割片・チップ集計表 …………… 108	第30表 御所野遺跡以外の出土敷物圧痕と時期 …… 184
第11表 分析対象とした堅穴建物跡の特徴と石器の出土数 …………… 109	第31表 編物痕の素材植物の幅と厚さ …………… 186
第12表 御所野遺跡GH68堅穴建物跡、馬場平遺跡C7・ C5堅穴建物跡層別石器出土状況 …………… 110	第32表 御所野遺跡周辺の遺跡 …………… 204
第13表 御所野遺跡DF14、HD114、HB120堅穴建物跡 層別石器出土状況 …………… 111	第33表 土器型式と放射性炭素年代 …………… 208
第14表 御所野遺跡GF64-02、FJ46-02、GD64堅穴建物跡 層別石器出土状況 …………… 112	第34表 粘土分析による分類 …………… 210
第15表 御所野遺跡西側調査区焼失一括堅穴建物跡 (DF22・DE24・DH28・DG26)の層別石器 出土状況 …………… 113	第35表 粘土出土地点一覧 …………… 212
第16表 出土土製品・石製品一覧表 …………… 123	第36表 分析を行った試料とその詳細 …………… 215
第17表 追加報告土製品一覧表 …………… 123	第37表 生漆の赤外線吸収位置とその強度 …………… 216
第18表 漆付着遺物一覧表 …………… 138	第38表 測定試料および処理 …………… 219
第19表 御所野遺跡の縄文時代遺構および土層から出土 した炭化種実類遺体 …………… 151	第39表 放射性炭素年代測定および暦年較正の結果 …………… 220
第20表 炭化種実類遺体群からみた掘立柱建物跡と他の 柱穴との比較 …………… 154	第40表 分析試料 …………… 221
	第41表 アスファルトの赤外線吸収スペクトル …… 222
	第42表 馬淵川流域を中心とした中～後期の集落遺跡 …… 231
	第43表 円筒土器文化圏における主な集落遺跡と配石遺構 …… 235





## 第1章 はじめに

### 第1節 調査の目的と経過（第3～5図、第1表）

#### （1）保存を目的とした調査

御所野遺跡の発掘調査は平成元年度にはじまった。一戸町の農工団地造成に伴う試掘調査として中央部で遺構の有無を確認したところ、縄文時代の配石遺構群と古代の古墳群を検出した。配石遺構群の周辺に竪穴建物跡が密集する貴重な遺跡としてマスコミに大きく取り上げられたこともあり、遺跡を保存しようという機運が一気に高まった。一方で、地域経済の活性化のため発掘調査終了後計画通り開発をしようという意見も根強く、保存と開発というそれぞれ対立する請願書が一戸町議会にも提出されるなど大きな社会問題となった。

平成2年度から平成4年度までは遺跡の保存を目的とした調査を3ヶ年間実施した。平成2年度は中央調査区の配石遺構群東側に設定した栗林トレンチおよび西側調査区において遺構の分布を確認した（注1）。平成3年度は東側調査区のⅠ～Ⅹ区にトレンチを設定し、遺構の分布を確認した（注2）。以上の2ヶ年の範囲確認調査により、遺跡は台地の全面に広がっていることが明らかになり、その結果を受けて正式に遺跡を保存することになった。

平成4年度は、遺跡の内容を確認するため中央調査区の配石遺構群とその南側の包含層の性格を明らかにすることを目的として調査を継続した。配石遺構群周辺のトレンチ（Ⅱb区）の調査では、墓坑と考えられる土坑群と掘立柱建物跡に伴う柱穴群を検出し、配石遺構が墓に伴うことと、南側のトレンチ（Ⅳ区）の調査では、南側の小高い包含層が中央部北側の削平地に伴う「盛土遺構」であることが明らかになった。野外調査は8月には終了し、その後遺物の整理作業を実施して平成5年の2月に報告書を刊行した（注3）。この報告書をもとにして平成5年12月に国指定史跡となっている。

#### （2）遺構復元のための内容確認調査

御所野遺跡の保存にあたって、一戸町では史跡公園として整備して活用する方針を決めていたため、平成6年度から整備事業の計画と関連させながら発掘調査を継続することにした。特に集落の全体像を把握するとともに建物をもとに復元するのかがということが重要な課題であったが、そのためにはまだ資料不足だったこともあり、引き続き調査を実施することになった。

遺構復元のための内容確認調査は、平成6年度から平成14年の史跡公園オープンまでの調査とその後の調査に区別できる。前者では、平成6年度の中央調査区のⅠ区の大型竪穴建物跡をはじめ、Ⅱb区の掘立柱建物跡と重複している竪穴建物跡や土坑群の調査、さらに配石遺構西側のⅢ区の遺構確認調査を行った。平成7年度に作成した「整備基本計画」にもとづき、平成8年度からは遺構復元の情報を得るための調査として平成12年度までの5ヶ年間継続した。平成8年度は西側調査区のうち北側の2,400㎡を調査、焼失竪穴建物跡を9棟検出し、縄文時代の土層根建物跡を確認した。同年には、東側調査区のうち一部博物館建設予定地となっていた東側1調査区の東寄り部分を調査している。西側調査区の焼失竪穴建物跡の調査は平成9年度も継続し、遺構復元予定地である東側2調査区も詳細な内容確認調査を行った。

平成10年度は博物館などの関連施設の建設計画が確定したこともあり、その建設予定地である東側1調査区の西寄りを調査し、史跡指定地外にあたる遺跡北東部の調査はすべて終了している。なお西よりに密集している竪穴建物跡などの遺構群は盛土をしてそのまま保存している。屋外体験施設建設予定地の東側3調査区の調査では、竪穴建物跡とともに縄文時代の粘土探掘坑を調査し、この部分も

文化庁と協議をして設計変更後遺構を盛土保存した（注4）。

平成11・12年度は中央調査区Ⅱb区を調査し、掘立柱建物跡群と重複する竪穴建物跡や土坑の分布状況を確認した。

以上の平成12年度までの調査結果に基づき、東側、中央、西側のそれぞれに竪穴建物、中央部の配石遺構周辺では西側に掘立柱建物や柱列を復元し、平成14年4月に「御所野縄文公園」としてオープンした。

その後中央部の配石遺構周辺では、未調査の北側と東側にも掘立柱建物群が分布する可能性が強いことから、平成14年度と平成17年度に北側（Ⅱa区）、平成15年度から平成17年度までの3ヶ年間は東側（Ⅴ区）の調査を行った。いずれの調査区でも掘立柱建物跡とともに竪穴建物跡、土坑、焼土遺構、柱穴などの遺構が密集していた（注5）。

### （3）遺跡周辺の範囲確認調査

遺跡周辺の範囲確認調査は平成15年度から実施している。遺跡東側の丘陵地は、「縄文の森」と名付けて縄文時代の森を再現しようと計画していたこともあり、整備事業を進める前に遺構の有無を確認することになった。丘陵頂部の平坦面を調査したところ、竪穴建物跡や土坑を検出した（注6）。平成16年度からは新たに指定地の東端から丘陵頂部までの緩斜面を調査し、さらに丘陵頂部も調査区を拡張している（注7）。以上の3ヶ年の調査によって確認した「縄文の森」の範囲は、平成18年度に史跡の追加指定を受けている。平成19年度は追加指定地のさらに東側の山地頂部の馬背状の平坦地から南側斜面を調査して竪穴建物跡などの遺構を検出している。この範囲も平成25年度に追加指定されている。

平成19年度は西側の範囲確認調査も実施しており平成20年度まで継続した。平成2年度の調査で西側調査区の北西端に何らかの遺構があることを確認しており、その内容を確認するために全面を調査したところ、中世墳墓群が検出され、なかには人骨が出土した墓坑もあった。同調査区では縄文時代の遺構を確認したこともあり、遺構がさらに緩斜面まで広がる可能性もあったため新たに西Ⅲ調査区を設定し、さらに段丘下の馬場平地区まで調査範囲を広げたが、遺構は確認できなかった。また西側調査区の北側から北東部にかけて西Ⅰ・Ⅱ調査区を設定して調査したが、遺構は確認されなかった（注8）。以上の5ヶ年の範囲確認調査により御所野遺跡の範囲はほぼ確定した。

### （4）遺跡内容確認のための調査

平成元年度から発掘調査を実施しているが、平成20年度までの調査でも集落構造とその変遷の解明にはまだまだ多くの課題があった。そのため、遺跡中央部の多くの遺構が重複する削平地と削平土を盛ったと考えられる南側の「盛土遺構」について、形成過程とその範囲の確認、重複する遺構との層位的な関係の把握などを目的とし、平成21年度から4ヶ年にわたって調査を行った。以上から遺跡の中央部に6つのトレンチ（Ⅳ区、Ⅳ区東トレンチ、Ⅳ区西トレンチ1、Ⅳ区西トレンチ2、Ⅳ区配石トレンチ、Ⅳ区配石南トレンチ）を設定した。Ⅳ区は平成4年度に調査したFH48・FH46・FJ46・GA44トレンチを含み、平成10年度に設定・調査したトレンチであり、このⅣ区を再掘して調査した。（注9）。

（高田 和徳）

第1表 御所野遺跡発掘調査一覧

(1) 保存目的の調査

調査年度	調査地区	調査区	調査内容
平成元	中央		古墳群・配石遺構群の検出
平成2	中央		配石遺構群の調査
		GA70トレンチ	トレンチを設定・遺構調査
		I区	G168竪穴建物跡調査
		III区	EF34-01竪穴建物跡調査
	西側	西側調査区	遺構確認調査
平成3	中央	IV区	GB44トレンチ調査
			GB44-01竪穴建物跡調査
	東側	東側I～X1区	トレンチを設定 HB120、HD114竪穴建物跡調査
平成4	中央	IV区	遺構確認調査
			F148・F146・F146・GA44トレンチ調査
			F148-01竪穴建物跡調査
		IIb区	が跡、埋設土器調査 墓坑、掘立柱建物跡調査 配石遺構調査 (FA52・FB52・FB54・FE50・FE52・FG50トレンチ)

(2) 遺構復元のための調査

調査年度	調査地区	調査区	調査内容
平成6	中央	I区	竪穴建物跡調査
		IIb区	FF48トレンチ調査
		III区	遺構確認調査
平成8	東側	東側1調査区	遺構調査
	西側	西側調査区	焼失建物跡等調査
平成9	東側	東側2調査区	遺構調査
	西側	西側調査区	焼失建物跡等調査
平成10	中央	東側1・3調査区	遺構調査
		I区	遺構調査
平成11	中央	IV区	遺構確認調査
平成12	中央	IIb区	遺構調査
平成14	中央	IIa区	遺構調査
平成15	穂文の森	H地点	内容確認調査
	中央	V区	遺構調査
平成16	穂文の森	トレンチI～XⅦ	範囲確認調査
	中央	V区	遺構調査
平成17	中央	IIa区	遺構調査
		V区	遺構調査
		I～8トレンチ	範囲確認調査

(3) 範囲確認調査

調査年度	調査地区	調査区	調査内容
平成19	穂文の森	I～8トレンチ	指定地外にて範囲確認調査
	西側	西I～IV調査区	遺構調査
平成20	馬場平道跡	I・II調査区	範囲確認調査

(4) 内容確認のための調査

調査年度	調査地区	調査区	調査内容
平成21	中央調査区	IV区	内容確認調査
平成22			
平成23			
平成24			

発掘調査報告書

(平成元年度～平成4年度調査)

(注1) 1991 『御所野遺跡—平成2年度御所野遺跡発掘調査概報—』

(注2) 1992 『御所野遺跡—平成3年度御所野遺跡発掘調査概報—』

(注3) 1993 『御所野遺跡Ⅰ—縄文時代中期の大集落跡—』

発掘調査報告書

(平成6年度～平成10年度調査)

(注4) 2004 『御所野遺跡Ⅱ』

(平成11年度～平成17年度調査)

(注5) 2006 『御所野遺跡Ⅲ』

発掘調査報告書

(平成15年度調査)

(注6) 2004 『—戸城跡・御所野遺跡・野里遺跡—平成15年度町内遺跡発掘調査報告書—』

(平成16・17年度調査)

(注7) 2006 『御所野遺跡—平成16・17年度町内遺跡発掘調査報告書—』(注7)

(平成19年度調査)

(注8) 2013 『御所野遺跡Ⅳ』(注9)

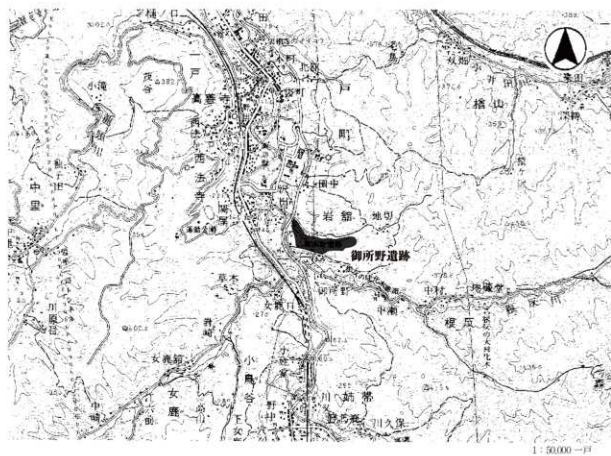
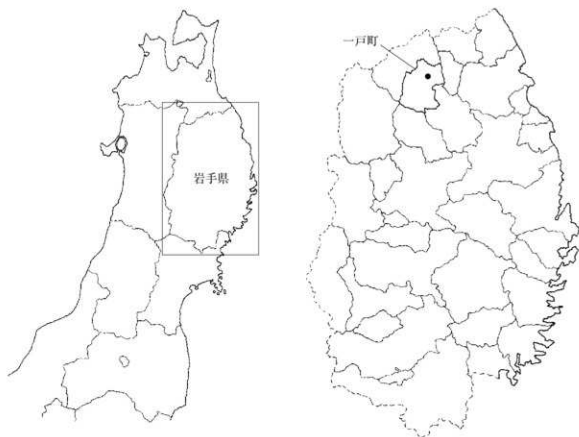
(平成19・20年度調査)

(注8) 2009 『御所野遺跡・馬場平遺跡—平成19・20年度町内遺跡発掘調査概報—』

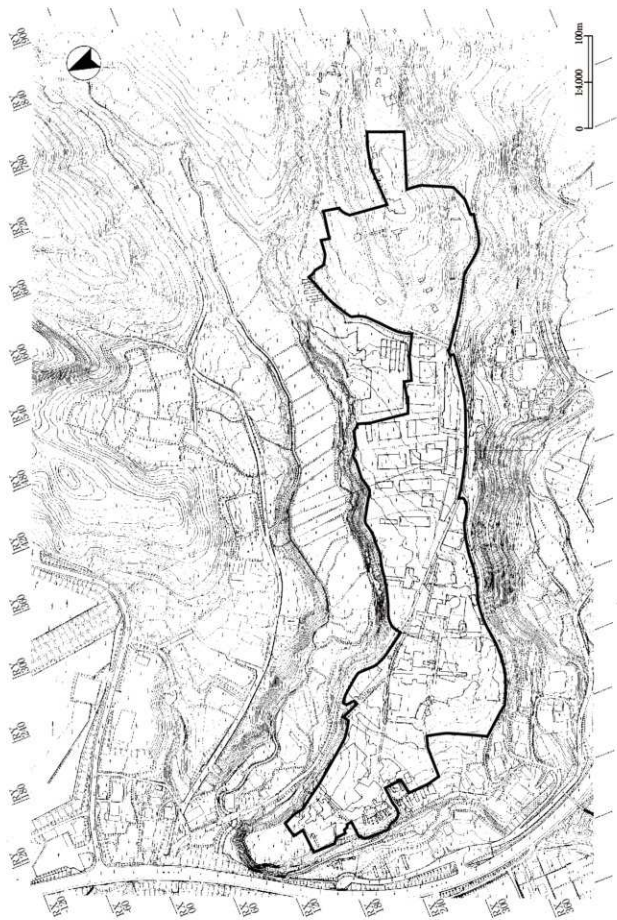
発掘調査報告書

(平成21年度～平成24年度調査)

(注9) 2013 『御所野遺跡Ⅳ』(注9)

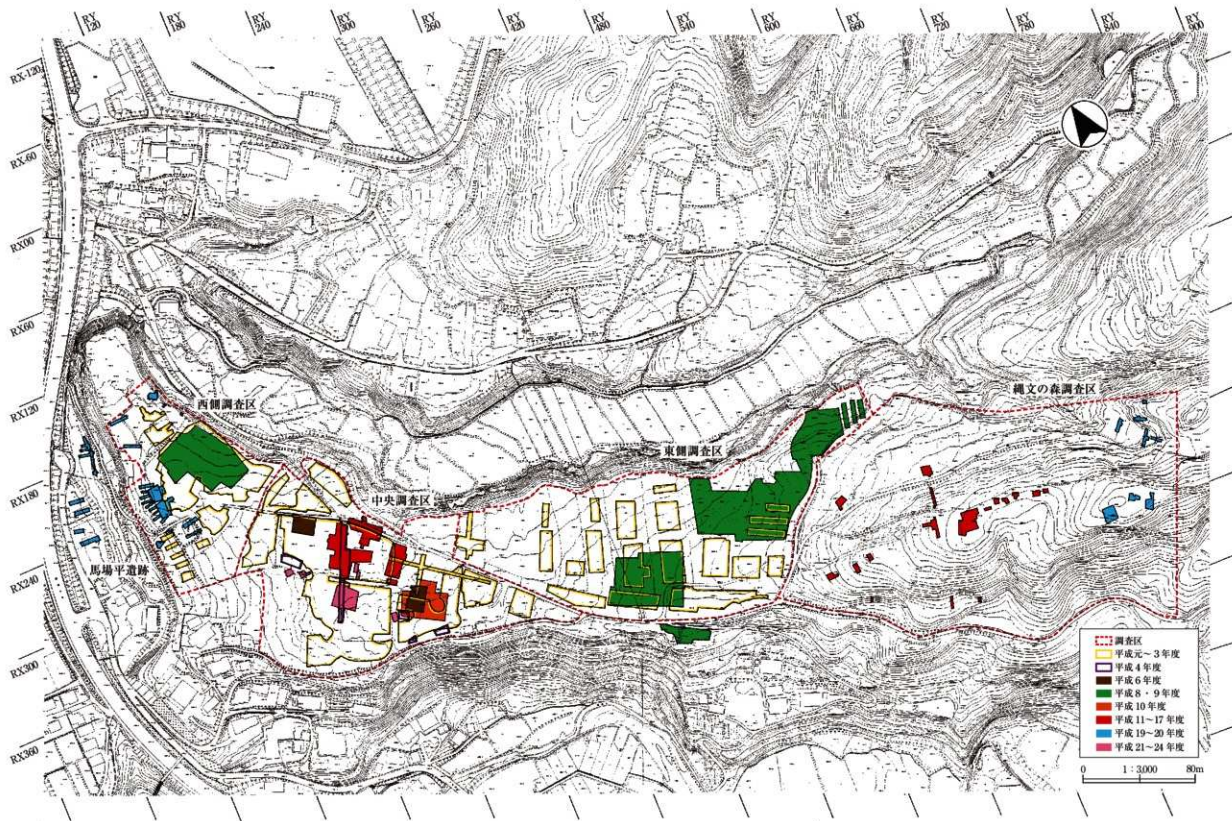


第1図 御所野遺跡の位置

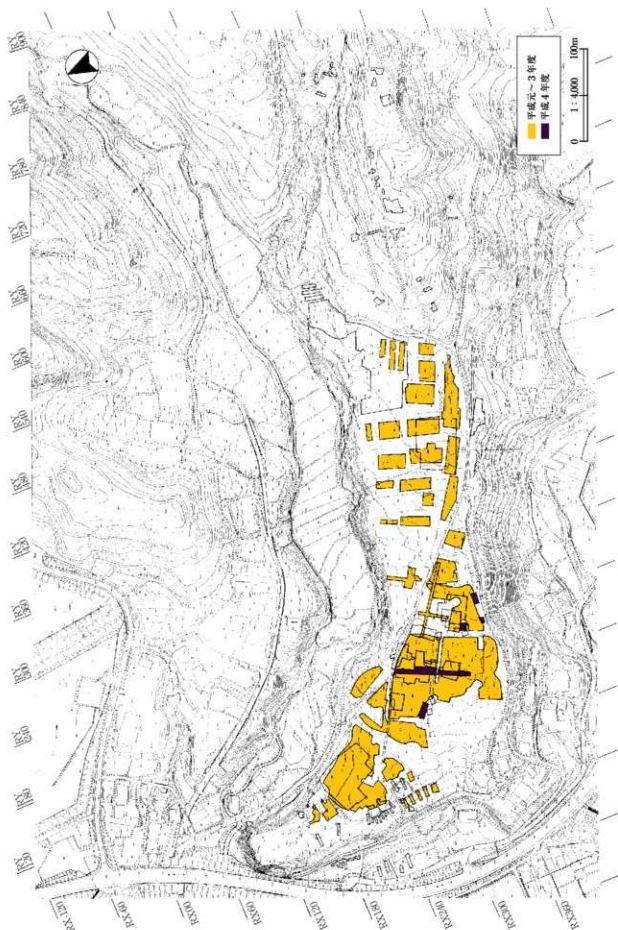


第2圖 史跡範圍圖



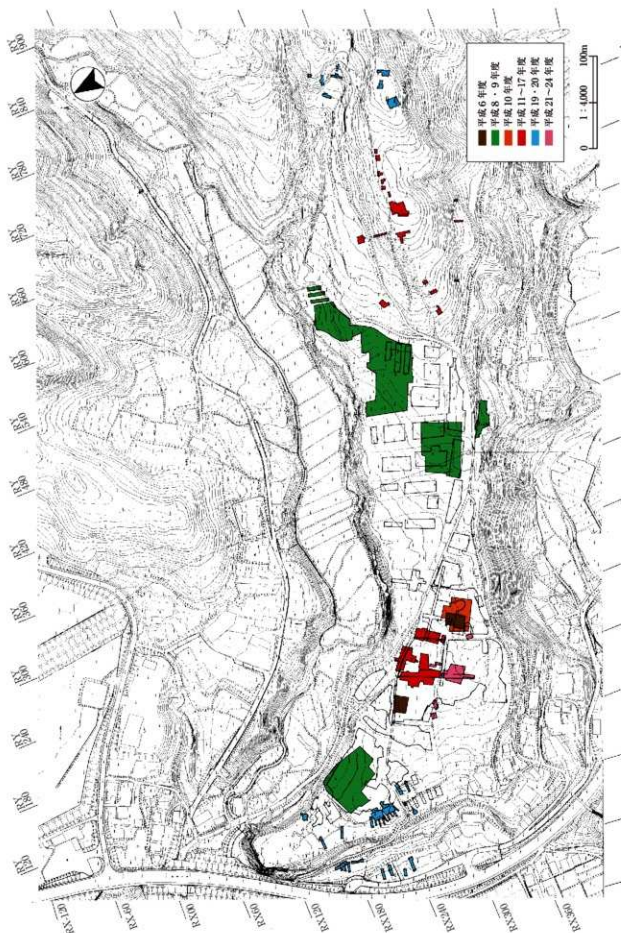


第3図 調査区位置図

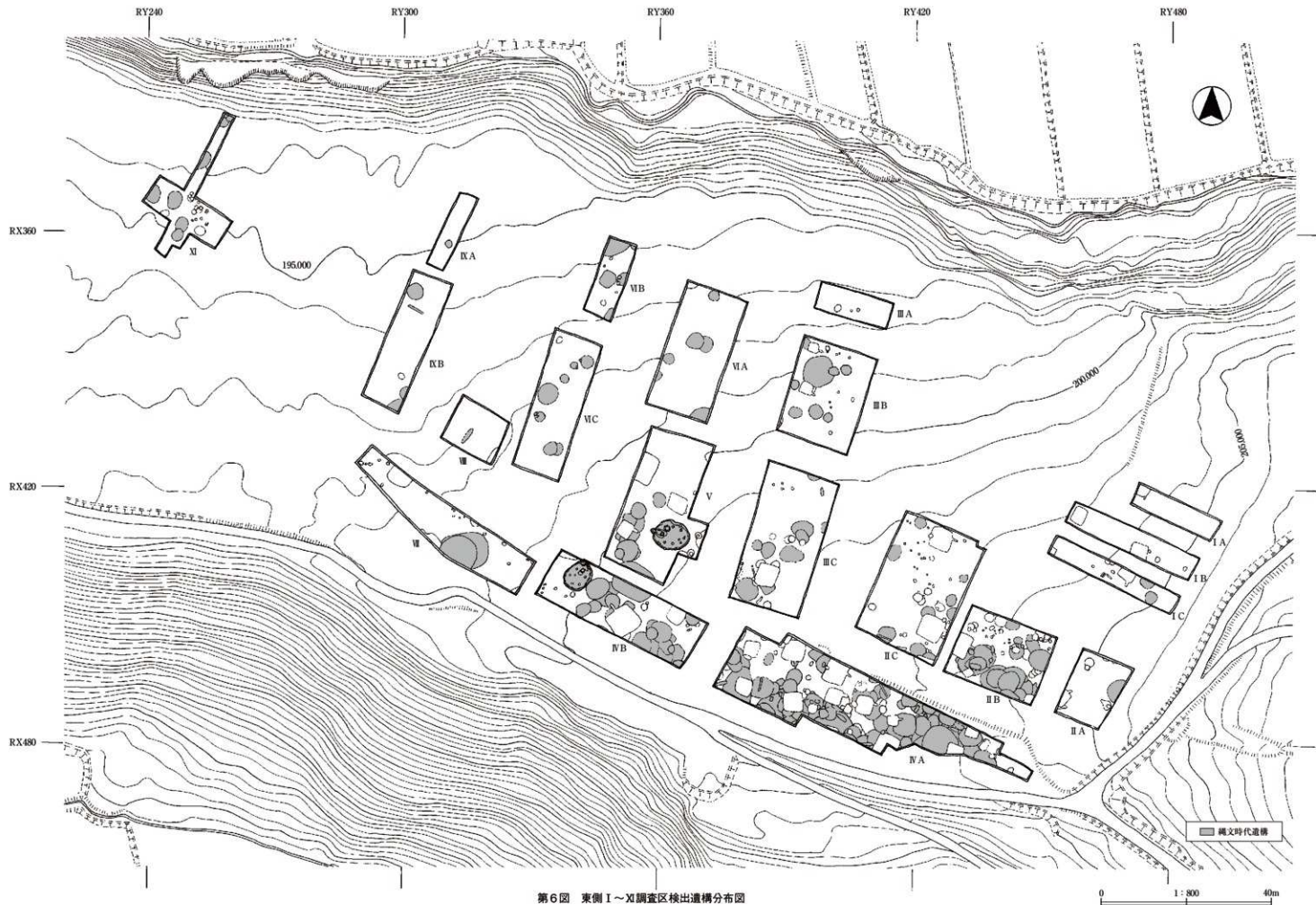


第4図 調査区位置図（平成元～4年度）





第5図 調査区位置図（平成6～24年度）

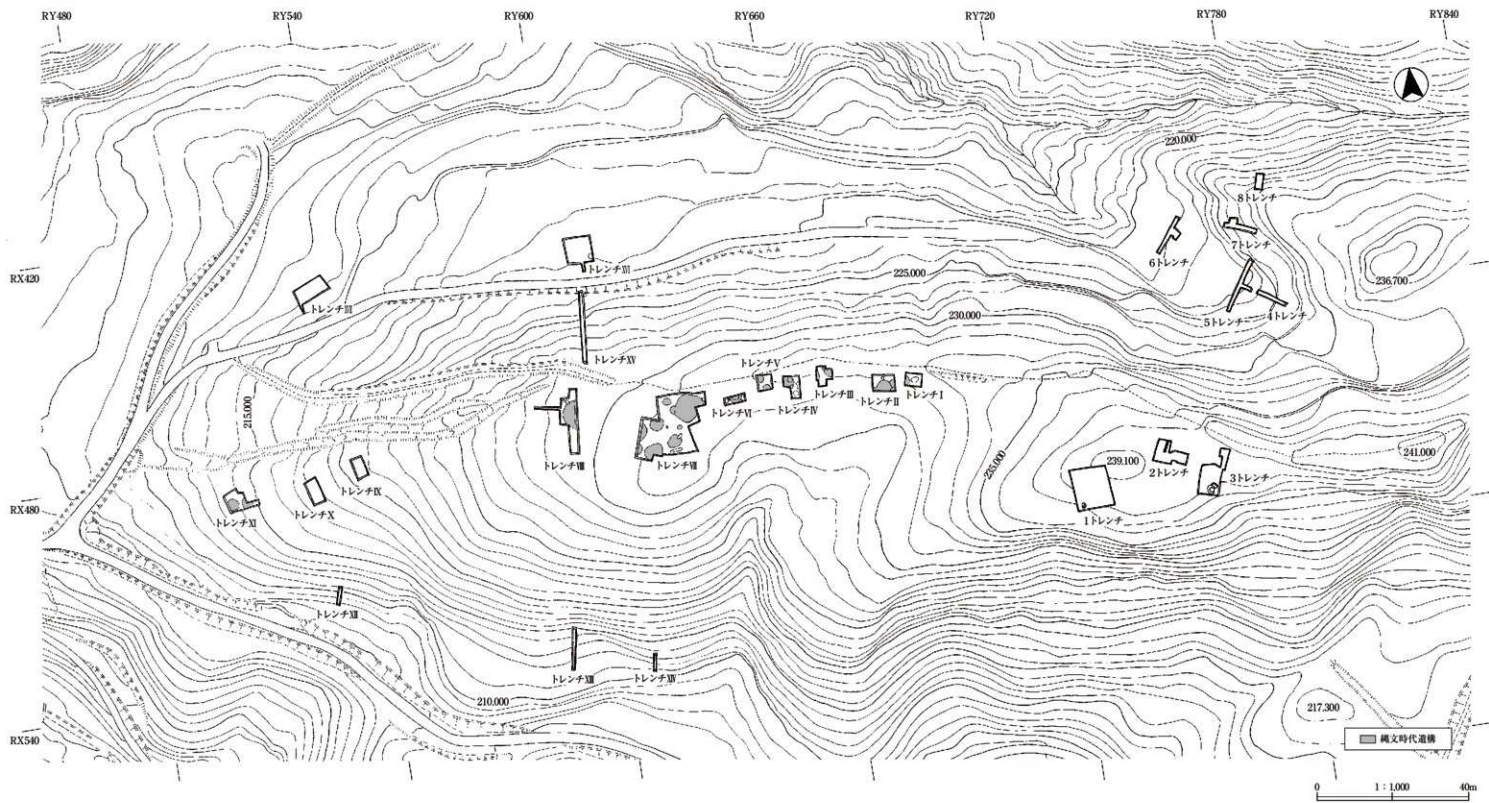


第6図 東側I～XI調査区検出遺構分布図

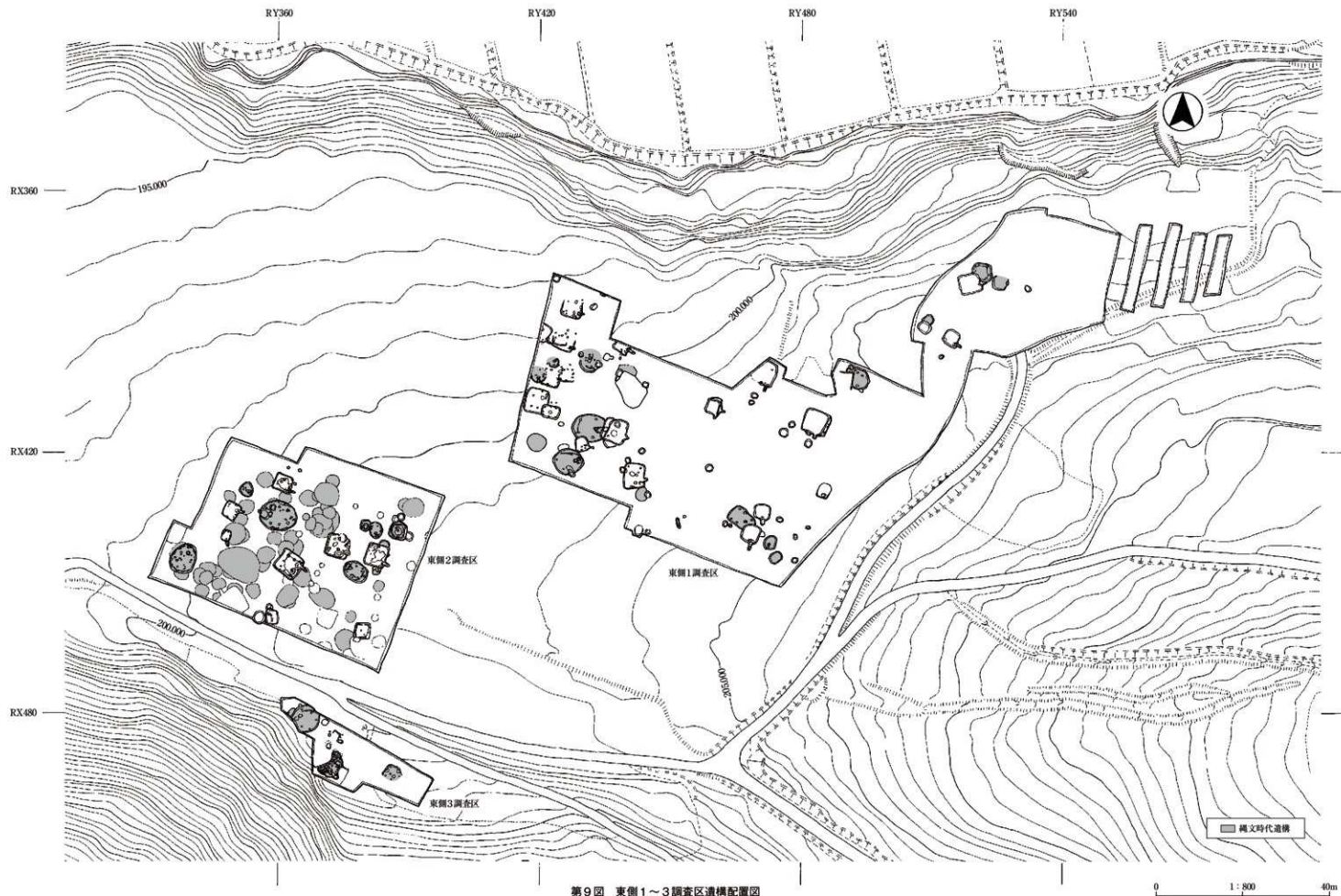


第7図 中央・西側調査区検出遺構分布図

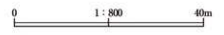


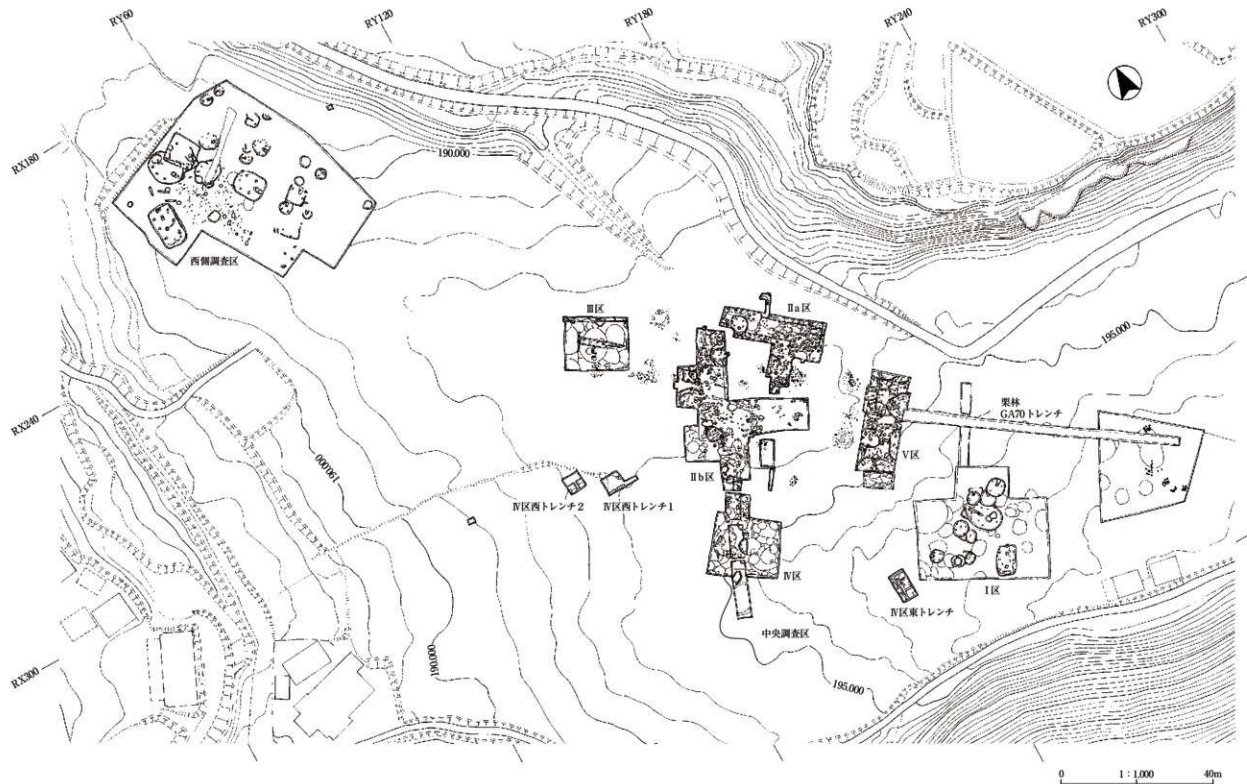


第8図 縄文の森調査区検出遺構分布図



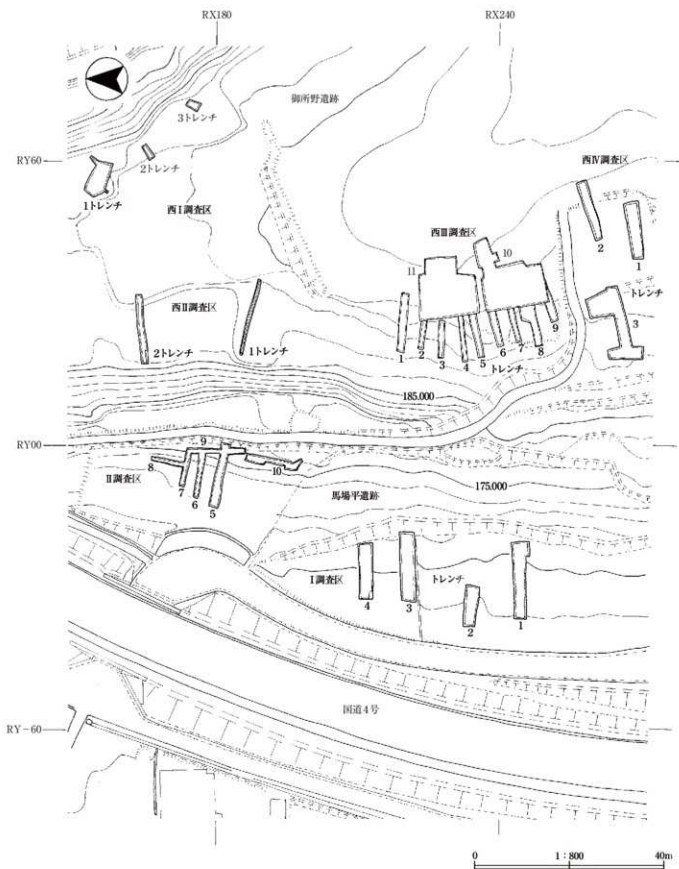
第9図 東側1～3調査区遺構配置図





第10図 中央・西側調査区遺構配置図





第11図 西I～IV調査区・馬場平遺跡I・II調査区位置図

## 第2節 遺跡の保存と整備の経過（第2表）

### （1）保存に至る経過

御所野遺跡の発掘調査は一戸町の農工団地造成に伴う調査としてスタートしたが、発掘調査が始まった当初から古代の末期古墳群と縄文時代の配石遺構群が良好に保存された重要な遺跡であることは明らかになっていた。平成元年秋に開催した現地説明会には600人以上が参加し、マスコミにも大きく取り上げられ、遺跡の保存への機運が一気に高まっていった。このような住民の声を受けて同年12月の町議会で遺跡の保存を求める請願2件が提出されるなど、遺跡をめぐる動きが次々と変わり、町としても保存が開発か判断できかねるような状況がしばらく続いた。年明け早々、岩手県教育委員会の担当者に同行してもらい文化庁と協議したところ、文化庁としても重要な遺跡であると認識しており、保存の方向で検討するようという指導を受け、平成2年度から国庫補助事業として範囲確認調査を実施することになった。しかし、3月の議会には当初計画通り農工団地として開発を求める請願2件も提出された。

平成2年度には西側調査区、平成3年度は東側調査区で、古代と縄文時代の遺構の分布を確認し、遺跡は台地全面に広がっていることが判明した。遺構のおおよその分布を確認した平成2年度の発掘調査後一戸町長が遺跡は保存して史跡公園として活用することを発表し、ここで遺跡の保存が事実上確定した。発掘調査は平成4年度も継続し、遺跡中央部の配石遺構周辺と南側の包含層を調査したところ、配石遺構群周辺は墓域、包含層は配石遺構群下の割平に伴う盛土遺構であることが判明した。以上の3ヶ年の調査成果をまとめた報告書（『御所野遺跡Ⅰ』）を文化庁に提出し、平成5年4月に史跡指定の答申を受け、同年12月に国指定史跡となった。

### （2）整備の経過

史跡整備事業は平成5年11月の御所野遺跡整備指導委員会の設置からはじまった。そのなかで整備構想と遺跡の内容を検討しながら具体的な計画を作成した。計画づくりでは最初に地元住民の意見を参考にするため「御所野遺跡の整備を語る会」を開催し、その後専門のコンサルタントも入れ、指導委員会や町の文化財調査専門委員会などで議論し、平成7年2月に「御所野遺跡整備基本構想」を策定し、全体の方向性や大綱を示した。同年4月からは指導委員会で内容を検討しながら、平成8年3月に整備基本計画を作成、引き続き基本設計の作業を進め平成9年度から整備工事がスタートした。

整備事業に先立ち、平成6年度から国庫補助事業として指定地の公有化を進め、平成7年度までに史跡指定地のほぼ全域の公有化を終了した（注1）。平成8年度からは、遺跡の保全と周辺の環境整備を図るために自治省（現総務省）の起債事業を導入し、平成11年度までの4年間で周辺土地全域の用地を取得した（注2）。

整備事業は文化庁の地方拠点史跡等総合整備事業の5ヶ年事業として、遺構を保護するための盛土造成工事、堅穴建物跡や掘立柱建物跡などの遺構復元、ガイダンス施設建設など、博物館建設の一部であるセンター施設建設などの事業を実施した。地方拠点史跡等総合整備事業のほか博物館建設の一部は、同じ文化庁の埋蔵文化財センター建設事業、関連事業として林野庁の木材流通合理化事業で駐車場から史跡公園へのアプローチのための歩道橋（きききのつりはし）を整備している。史跡公園の整備は御所野遺跡環境整備事業（Ⅰ～Ⅲ期）として平成9年度から平成11年度まで継続して実施した。Ⅰ期では盛土造成工事、Ⅱ期には屋外のガイダンス施設2棟と展望台建設、植生復元のための植栽など、Ⅲ期では同じく造園工事で植栽工事のほか堅穴建物跡などの遺構を復元した。平成11年度には「きききのつりはし」の一部を建設している。



平成12年度からはセンター施設と埋蔵文化財センターの合体した博物館建設事業がスタートし、平成13年度までの2ヶ年で建設し、並行して一部展示工事も進めた。平成13年度にはⅣ期工事として堅穴建物跡や掘立柱建物跡など遺構復元とともに、「きききのつりはし」の導入部の建設やその下に「水場遺構」などを設置し、翌平成14年4月に「御所野縄文公園」としてオープンした。

平成14年度のオープン後も史跡公園の整備は継続している。中央部の配石遺構周辺では平成14年度から平成16年度までの3ヶ年の調査で掘立柱建物跡や柱列に伴う柱穴群を調査し、平成18年度に掘立柱建物2棟と柱列2列を復元した。

平成19年度からは遺跡周辺の植生復元を図るため御所野遺跡植生復元整備指導委員会を設置した。委員会では平成21年度までの3ヶ年で検討し、「御所野遺跡植生復元整備計画書－縄文里山づくり事業－」を作成、平成22年度から縄文時代の植生復元事業をはじめている。事業はいずれも国庫補助事業の一般整備として実施し、針葉樹などの人工林を伐採し、広葉樹を植栽している。遺構復元については、史跡公園のオープン前に復元した各遺構群が10年経過し、部分的に傷んできたため、平成21年度から復元建物の修理を行っている。修理にあたっては、復元後の知見などを取り入れ、より実証的な復元のため詳細に検討し作業を進めている。現在6年目で掘立柱建物の屋根の葺き替えなどを行っている。

注1 平成6年度は24,497㎡、平成7年度は28,977㎡、いずれも畑地を取得している。指定地のうち道路・水路、東北電力鉄塔用地をのぞく全域を公有化した。その後平成12年度に史跡指定地にあった東北電力の鉄塔を移転、鉄塔用地も取得しており、史跡指定地全域の公有化が完了している。

注2 平成8年度から平成11年度までに周辺土地73,910㎡を取得している。

(高田 和徳)

### 第3節 調査の方法と報告書の作成

#### (1) 調査の方法と遺物の取り上げ

##### グリッド設定 (第3図)

御所野遺跡の発掘調査では、平成元年度より平面座標は同一の座標系を使用し、遺構の平面座標は平面直角座標X系を座標変換した調査座標で表示している。

$$\text{調査座標原点} \quad X = RX - 22,129 = RX \pm 0$$

$$Y = RY + 40,414 = RY \pm 0$$

グリッドは、これを起点とし、遺跡全体を60×60mの大グリッドを設定し、さらにこれを6×6mの小グリッドに区割りしている。大グリッドは、起点から北から南へA・B・C・・・のアルファベットを付し、小グリッドは、起点から西から東へ2・4・6・・・の算用数字、北から南へA～Jのアルファベットを付している。グリッドの呼称は「GA46」などのように、それらの組み合わせとする。

##### 調査地区の名称 (第3図)

御所野遺跡の調査地区は大きく4区分して調査を進めてきた。これらの調査地区の位置と名称については番地の境界線をもとに設定しており、平成元～24年度までに行われた発掘調査の調査区とともに第3図に示した。

大区分した地区は、遺跡東端の丘陵部分にあたる「縄文の森調査区」、遺跡東側の斜面を主とする「東側調査区」、遺跡中央部の平坦面とその南側の緩斜面を主とする「中央調査区」、遺跡西端の「西側調

## 第2表 御所野遺跡保存整備事業一覧

年度	事業名	事業内容
平成6	史跡等購入事業	史跡指定地の買上
平成7	史跡等購入事業	史跡指定地の買上
平成8	地域文化保全事業	史跡指定地及び周辺土地の買上
	地域文化保全事業	史跡指定地及び周辺土地の買上
平成9	御所野遺跡環境整備事業	史跡保存復元地区の実施設計作成。および史跡保存復元地区の盛土造成、排水、張り芝、仮設道路（園路）などの各工事及びその設計監理。遺構復元のための発掘調査。
	御所野遺跡環境整備事業	ガイダンス施設建設（建築・電気設備・機械設備工事）、造園（張り芝等）・植栽（高木117本の植栽、立木2本の移植）の各工事及びその設計監理。遺構復元のための発掘調査。
平成10	地域文化保全事業	史跡指定地及び周辺土地の買上
	駐車場等整備事業	駐車場造成工事
	木材流通合理化事業	駐車場から織文公園へのアクセスのための歩道橋（きさきのつりはし）設置
平成11	御所野遺跡環境整備事業	土木（盛土造成、排水溝、暗渠排水、園路舗装）、造園（休憩施設の設置、植栽、樹名板工、山道整備）、遺構復元（堅穴建物7棟）の各工事及びその設計監理。センター施設実施設計作成。その他遺構復元のための発掘調査。
	地域文化保全事業	史跡指定地及び周辺土地の買上
	木材流通合理化事業	駐車場から御所野織文公園へのアクセスのための歩道橋（きさきのつりはし）設置
平成12	御所野遺跡環境整備事業	センター施設の建設（建築・電気設備・機械設備工事）、野外体験工房倉庫建設工事、及びその設計監理。復元建物のタキソ工開作。史跡保存復元地区実施設計の作成。
	センター施設展示工事業	遺構復元のための発掘調査
	理蔵文化財センター建設事業	センター施設（理蔵文化財センター分）の建設
平成13	御所野遺跡環境整備事業	センター施設の建設（建築・電気設備・機械設備工事）及びその工事監理。サイン設置、焼失遺跡跡保存処理。ガイダンス施設、復元建物のタキソ工開作。
	理蔵文化財センター建設事業	遺構復元（堅穴建物7棟、掘立柱建物4棟、柱列3列）、土木造園（園路、張り芝）の各工事及びその工事監理。
	センター施設展示工事業	センター施設（理蔵文化財センター分）の建設
	駐車場等整備事業	駐車場舗装・進入路整備工事
平成14	御所野遺跡環境整備事業	遺構復元（掘立柱建物）のための発掘調査（配石遺構北側のⅡa区）、発掘調査報告書作成と整備事業報告書作成のための室内整理。
	水場遺構整備工事業	遺構復元のための発掘調査
	水場遺構整備工事業	水場遺構の整備
平成15	御所野遺跡環境整備事業	遺構復元（掘立柱建物）のための発掘調査（配石遺構北側のⅡa区205㎡、配石遺構東側のV区288㎡）と整理作業。平成6～8～10年度発掘調査報告書『御所野遺跡Ⅱ』刊行。平成9～13年度実施の地方拠点史跡等総合整備事業の報告書『御所野遺跡環境整備事業報告書Ⅰ』刊行。
平成16	御所野遺跡環境整備事業	遺構復元のための発掘調査。発掘調査報告書（Ⅱ）と史跡公園整備報告書（Ⅰ）の作成。遺構復元のための発掘調査（配石遺構東側V区288㎡）と整理作業
	範囲確認調査（縄文の森調査区）	範囲確認調査（縄文の森調査区）
平成17	御所野遺跡環境整備事業	遺構復元（掘立柱建物）のための発掘調査（配石遺構東側V区320㎡）と整理作業。平成11～12、14～17年度遺構の発掘調査報告書『御所野遺跡Ⅲ』刊行。平成11年度に復元した堅穴建物の解体修理（中央ムラ大型住居1棟）。
	遺構復元工事実施設計	遺構復元工事実施設計
平成18	御所野遺跡環境整備事業	遺構復元（平成14～17年度調査で検出した掘立柱建物2棟、柱列2列）、平成14～18年度整備事業の報告書『御所野遺跡整備事業報告書Ⅱ』刊行。追加指定地整備（縄文の森の下草刈り、針葉樹伐採）。
	遺構復元工事	遺構復元工事
平成21	史跡御所野遺跡保存整備事業	復元遺構の解体修理2棟（東ムラ大型住居1棟、東ムラ掘立柱建物1棟）、『御所野遺跡植生復元整備計画書—縄文里山づくり事業—』の作成。
平成22	史跡御所野遺跡保存整備事業	復元遺構の解体修理2棟（西ムラ中型住居1棟、西ムラ小型住居1棟）。
平成23	史跡御所野遺跡保存整備事業	縄文時代の植生復元（針葉樹伐採）、復元遺構の解体修理1棟（西ムラ大型住居1棟）。
平成24	史跡御所野遺跡保存整備事業	縄文時代の植生復元（針葉樹伐採）、復元遺構の解体修理2棟（東ムラ中型住居1棟、東ムラ小型住居1棟）、公園園路舗装の修理（公園西側の一部）。
平成25	史跡御所野遺跡保存整備事業	縄文時代の植生復元（針葉樹伐採）、復元遺構の解体修理3棟（中央ムラ大型住居、中型住居、小型住居各1棟）。
平成26	史跡御所野遺跡保存整備事業	縄文時代の植生復元（公園の外業種伐採）、復元遺構の解体修理10棟（中央ムラ掘立柱建物3棟の屋根修理、東ムラ大型・中型・小型住居各1棟、中央ムラ大型住居・西ムラ大型・中型・小型住居各1棟の屋根修理）、公園ガイダンス施設の床板修理。

査区]である。

#### 調査区及びトレンチの設定 (第3～5図)

これまでの発掘調査の目的と概要については第1章第1節で詳述したとおりである。第3図にはこれまでのすべての調査区やトレンチの位置や、調査の目的と年度別に示した。平成元～4年度に行われた遺跡の保存を目的とした調査では、東側・中央・西側調査区において調査区やトレンチを設定し、調査が行われた(第4図)。平成6～24年度に行われた内容確認調査では、中央調査区I区・IIb区・IV区において、同じ調査区やトレンチを再掘し、継続して調査を行った(第5図)。平成15～20年度に行われた遺跡の範囲確認を目的とした調査では、縄文の森調査区と西側調査区に新たにトレンチを設定し、調査を行った(第5図)。

#### 遺構の精査、遺構の名称

遺跡保護のため、遺構の掘り下げは最小限にとどめ、掘り下げの際は二分法や四分法を用いて行った。調査で新たに検出の一部でも掘り下げを行った縄文時代の堅穴建物跡や土坑には、グリッド名を付して「FJ46-02堅穴建物跡」のように遺構名を付した。このほかの時代の土坑や柱穴についてはトレンチごとに連番で遺構名を付している。平成10・24年度にIV区と配石トレンチにおいて検出のみ行った遺構については、1～の仮遺構Noを付している。

#### 遺物の取り上げ

遺物の取り上げは遺構単位、グリッド単位で、層位ごとに取り上げた。グリッド単位で遺物の取り上げを行う際は、6×6mの小グリッドを、さらに1×1mごとに36分割し、この単位ごとに取り上げた。この1×1mの区割りには北西から東へ1～6、一列南へ下がって7～12のように、1～36の算用数字を付し、「GA46-1」などのように、グリッドと組み合わせて表記した。

土壌試料の微細遺物の回収方法や整理方法については第3章第2節(8)を参照いただきたい。

## (2) 資料の整理と保管

### 総括報告書作成にあたっての資料整理

総括報告書の作成にあたって、既刊報告書では不掲載となっていた遺物も重量計測や台帳作成などの再整理を行った。土器については収納袋ごとに重量計測と台帳作成を行ったほか、底部圧痕の残る土器片の台帳作成も行い、レプリカ法による土器底部圧痕観察の対象資料の抽出を行った。石器類では、礫石器の一部と剥片・チップ類のほとんどが既刊報告書の不掲載遺物となっていたため、重量計測と台帳作成を行った。土製品については不掲載遺物の全点の観察表を作成した(第17表)。一部は実測図を作成し、今回の報告書に掲載することとした(第73・74図)。動物遺体および植物遺体についても重量計測を行い、既刊報告書の掲載・不掲載遺物の台帳を統一した後、保管場所をまとめるなどの再整理を行った。

### 資料の保管

既刊報告書の掲載遺物と諸記録(現場図面・遺物実測図・写真)は御所野縄文博物館で保管している。総括報告書作成にあたり再整理を行った不掲載遺物は文化財収納センターにて保管している。

## (3) 報告書の作成

### 遺構・遺物の検討

遺構については、種別ごとに形態的な特徴や分布、時期などを中心に整理し、検討を行った。遺物については、分類基準の見直しや、一括資料を抽出し、組成や編年などの検討を中心に行った。また、

遺物の出土状態などから遺跡の性格などについて考察を行った。アスファルトおよび漆付着の可能性のある一部の遺物については、自然科学分析的手法による検討を行った。

#### 用語の統一

今回の総括報告書の作成に当たっては、文化庁の「発掘調査のびき—集落遺跡発掘調査編—」を参考とし、用語の統一を図った。「盛土遺構(もりどいこう)」「動物遺体」「植物遺体」の用語については、これまでの慣例などに従い、そのまま用いた。

#### 時期区分と土器型式

本文中に表記した土器分類に基づく時期区分と概ね相当する土器型式は、以下の通りである。

時期	土器分類	土器型式
I 期	I 群	円筒上層 c 式
II-1 期	II-1 群	円筒上層 d 式
II-2 期	II-2 群	円筒上層 e 式
III-1 期	III-1 群	大木8b(古)式併行
III-2 期	III-2 群	大木8b(新)式併行
IV-1 期	IV-1 群	大木9(古)式併行
IV-2 期	IV-2 群	大木9(新)式併行
V-1 期	V-1 群	大木10(古)式併行
V-2 期	V-2 群	大木10(新)式併行

#### 竪穴建物跡の区分

竪穴建物跡の大型竪穴、中型竪穴、小型竪穴の区分は馬場平遺跡の報告に準じている(一戸町教育委員会 1983)。長短軸いずれも 3m 以下を小型竪穴、3～6m を中型竪穴、それ以上を大型竪穴としている。

#### (4) 既刊報告書とその内容

御所野遺跡の発掘調査報告書一覧(第3表)と御所野遺跡関連参考文献一覧(第4表)は下記のとおりである。発掘調査の内容と報告書名の対照については第1表および第3表を参照いただきたい。

(菅野 紀子)

第3表 御所野遺跡既刊報告書一覧

調査年度	発行年	編纂・発行機関	書名	巻名
H1(1980)～ H2(1990)	1991	一戸町教育委員会	御所野遺跡—平成2年度御所野遺跡発掘調査概報—	一戸町文化財調査報告書第26巻
H3(1991)	1992	一戸町教育委員会	御所野遺跡—平成3年度御所野遺跡発掘調査概報—	一戸町文化財調査報告書第29巻
H1(1980)～ H4(1992)	1993	一戸町教育委員会	御所野遺跡1—縄文時代中期の大型竪穴—	一戸町文化財調査報告書第32巻
H6(1994)～ H10(1998)	2004	一戸町教育委員会	御所野遺跡Ⅱ	一戸町文化財調査報告書第48巻
H12(2000)～ H13(2003)	2004	一戸町教育委員会	一戸城跡、御所野遺跡、野原遺跡—平成15年度町内遺跡発掘調査報告書—	一戸町文化財調査報告書第49巻
H11(1989)～ H17(2005)	2006	一戸町教育委員会	御所野遺跡Ⅲ	一戸町文化財調査報告書第53巻
H16(2004)～ H17(2005)	2006	一戸町教育委員会	御所野遺跡—平成16、17年度町内遺跡発掘調査報告書—	一戸町文化財調査報告書第54巻
H19(2007)～ H20(2008)	2009	一戸町教育委員会	御所野遺跡・馬場平遺跡—平成19、20年度町内遺跡発掘調査報告書—	一戸町文化財調査報告書第64巻
H21(2009)～ H24(2012)	2013	一戸町教育委員会	御所野遺跡Ⅳ	一戸町文化財調査報告書第68巻
	2004	一戸町教育委員会	御所野遺跡埋蔵品発掘調査報告書Ⅰ	一戸町文化財調査報告書第50巻
	2007	一戸町教育委員会	御所野遺跡埋蔵品発掘調査報告書Ⅱ	一戸町文化財調査報告書第60巻
	2010	一戸町教育委員会	御所野遺跡植生復元整備計画書—縄文火山がづくり事業—	
	2014	一戸町教育委員会	発掘御所野遺跡保存管理計画	

第4表 御所野遺跡関連参考文献一覧

No	著者名	出版年	著 作 名	発 行
1	高田和徳	1990	「若手組・二戸組―戸御所野遺跡」『日本考古学年報』42	日本考古学協会
2	高田和徳	1993	「若手組・二戸組―戸御所野遺跡」『日本考古学年報』45	日本考古学協会
3	高田和徳	1993	「縄文中期後半の大集落群―若手組御所野遺跡―」『季刊考古学』第42号	鎌田園
4	高田和徳	1990	「若手組・二戸組―戸御所野遺跡の配石遺構」『文化財発掘出土情報』第6号	ジャパニ通信社
5	高田和徳	1996	「よみがえる縄文時代の大集落」『日本の古代遺跡50箇所』	保育社
6	高田和徳	1997	「御所野遺跡の集落家屋」『考古学ジャーナル』No.415	ニュー・サイエンス社
7	高田和徳	1997	「御所野遺跡の集落構成とその変遷」『日本考古学協会1997年度大会 研究発表要旨』	日本考古学協会
8	茂川道男・西山和史	1997	「縄文時代中期の地塊型六住居とその復原(1) (2)」	日本建築学会大会学術講演集
9	茂川道男・西山和史	1997	「御所野遺跡で出土した縄文時代中期の地塊型穴住居跡」『奈良文化財研究所年報』	奈良国立文化財研究所
10	小林英	1997	「縄文のムラ。墓と祈り」『こまごまであった日本の地変時代』	角川書店
11	山田昌久	1997	「縄文集落の大きさとムラ」『縄文地帯を巡る―三内丸山遺跡から原日本が見える』	NPO法人島島
12	高田和徳・山田昌久	1997	「御所野遺跡の考古学的な集落分析」『人類誌集報』2	東京慈恵大学考古学研究室
13	高田和徳	1999	「縄文土層居住型の実際の復原」『人類誌集報』3	東京慈恵大学考古学研究室
14	高田和徳・西山和史・茂川道男	1998	「縄文時代の土層居住型の復原(一) (二)」『月刊文化財』417・418号	第一出版局
15	高田和徳・西山和史	1998	「縄文土層居住型の復原―御所野遺跡の実験」『先史日本の住居とその周辺』	河合社
16	高田和徳	1999	「縄文時代の穴住居」『考古学ジャーナル』No.447	ニュー・サイエンス社
17	高田和徳	1999	「縄文土層居住型の復原」『月刊文化財』	第一出版局
18	高田和徳	2000	「土層型居住の穴住居」『季刊考古学』第73号	鎌田園
19	茂川道男・西山和史	2000	「先史時代の木造建築技術」『木の建築』50号	木造建築研究フォーラム
20	林謙作・岡村益雄編	2000	「縄文集落の復原」	学生社
21	高田和徳	2000	「東北内陸部の拠点集落」『白の洞』通巻533号	東北地方圏地域文化部
22	高田和徳	2001	「御所野遺跡の地塊型穴住居にみる空間分割」『穴住居の空間分割と構築』	国際日本文化研究センター
23	茂川道男・西山和史・高田和徳	2001	「縄文集落遺跡の復原―御所野遺跡を中心に―」『穴住居の空間分割に関する復原研究』	奈良国立文化財研究所 平城宮跡発掘調査部
24	高田和徳	2003	「縄文集落の復原研究―若手組御所野遺跡の暫定から―」『日本考古学』第33号	日本考古学協会
25	高田和徳	2003	「御所野遺跡の保存と活用」『日本野史』7月号	高田和徳
26	高田和徳	2003	「青森地方の縄文時代」『地方史研究』304号	地方史研究協議会
27	中村利典	2003	「御所野縄文博物館」『考古学ジャーナル』No.508	ニュー・サイエンス社
28	高田和徳	2003	「地塊型穴住居とその意味」『考古学ジャーナル』No.509	ニュー・サイエンス社
29	高田和徳	2003	「マハリノ北部の土層居住型―上・下」『若手組2003(1)』8・9 夕刊	若手日報社
30	高田和徳	2005	「遺跡を中心とした文化財行政―史跡公園を核とした総合的な文化財の調査研究とその活用―」『平成17年度―戸御所野年報』	―戸御所野委員会
31	高田和徳	2005	「縄文のイヌムラの風景 御所野遺跡」	新泉社
32	松本直子	2005	「先史日本を復元する―2 縄文のムラと社会」	岩波書店
33	高田和徳	2006	「土層居住型を核として」『北方博物館交流18号』	財団法人北海道博物館交流部
34	高田和徳	2006	「森と川に栄えた内陸の縄文文化」『土層居住の出現とその分布』『土層居住型の調査』	―戸御所野委員会
35	村本隆三・高田和徳・中村利典	2006	「若手組御所野遺跡における歴史民俗学調査」『考古学と自然科学』第53号	日本文化財科学会
36	高田和徳	2007	「復原された縄文の風景―御所野遺跡の調査から―」『平成19年度―戸御所野年報』	―戸御所野委員会
37	高田和徳・藤本直樹・藤末三太郎・吉田邦夫・辻眞一	2008	「史跡公園の施設整備の実績について」『考古学ジャーナル』No.574	ニュー・サイエンス社
38	2008	「東北地方北部におけるトナリノ利用の変遷」『環境文化研究誌』第1号	環境文化研究会	
39	止ま子・辻眞一・大杉志郎・高田和徳	2008	「若手組御所野遺跡における縄文中期後半の集落の変容について」『環境文化研究誌』第1号	環境文化研究会
40	高田和徳	2008	「若手組北部における縄文中期後半の集落の変容について」『環境文化研究誌』第1号	環境文化研究会
41	高田和徳	2010	「御所野遺跡と土層居住の調査」『三内丸山遺跡などの盛と遺構の研究―子集』	三内丸山遺跡研究会
42	高田和徳	2010	「御所野遺跡の縄文茅葺り」『遺跡研究誌』第7号	日本遺跡学会
43	阿部昭典	2010	「前置部分石壁の出現と機能―用途に関する検討―」『御所野遺跡を中心として』	―戸御所野委員会
44	止ま子	2010	「御所野遺跡から出土した植物遺存品にもとづく植生復元と植物資源利用」『平成21年度―戸御所野年報』	―戸御所野委員会
45	石井貞	2010	「石壁の形態特性に関する実験研究」『平成21年度―戸御所野年報』	―戸御所野委員会
46	阿部昭典	2011	「おぼろけと土器の実験考古学的な研究―縄文文化は、住居の形で構築したのか―」『平成22年度―戸御所野年報』	―戸御所野委員会
47	止ま子	2011	「出土植物遺存品と炭化木材からの御所野遺跡の植生状況と植物利用」『平成22年度―戸御所野年報』	―戸御所野委員会
48	岡村利博	2011	「若手組北部における縄文中期後半の居住環境と土器」『平成22年度―戸御所野年報』	―戸御所野委員会
49	村本隆三	2012	「御所野遺跡およびその周辺の上層部」『平成23年度―戸御所野年報』	―戸御所野委員会
50	阿部昭典	2012	「御所野遺跡とその周辺遺跡の住居形態」『平成23年度―戸御所野年報』	―戸御所野委員会
51	おむらみちお	2012	「御所野遺跡の集落構成とその変遷―御所野縄文土層居住の復元―」『平成23年度―戸御所野年報』	―戸御所野委員会
52	佐々木山香	2013	「御所野遺跡における利用植物の解明」『平成24年度―戸御所野年報』	―戸御所野委員会
53	止本裕也	2013	「御所野遺跡の立地環境に関する検討」『平成24年度―戸御所野年報』	―戸御所野委員会
54	おむらみちお	2013	「御所野遺跡の縄文時代中期後半の石器」『平成24年度―戸御所野年報』	―戸御所野委員会
55	佐々木山香	2014	「土器に基づく御所野遺跡の利用植物」『平成25年度―戸御所野年報』	―戸御所野委員会
56	柴田忠・中井女子・高田和徳	2014	「御所野遺跡出土土器製成技術の編み物復元」『平成25年度―戸御所野年報』	―戸御所野委員会
57	斎藤隆彦	2014	「御所野遺跡の石壁について―縄文時代中期後半の石壁を中心に―」『平成25年度―戸御所野年報』	―戸御所野委員会
58	丸山江流	2014	「御所野遺跡周辺の縄文集落に関する歴史地理学的研究」『平成25年度―戸御所野年報』	―戸御所野委員会
59	高田和徳	2015	「自然と共生した縄文文化と世界遺産―北海道・東北の縄文遺跡群―」『わが文化財』266号	若手組文化財保護委員会
60	佐々木山香・菅野智子・中井女子・柴田忠・高田和徳	2015	「縄文時代の植物資源の栽培同定と加工技術―若手組―」『御所野遺跡を中心として』	日本考古学協会
61	柴田忠	2015	「御所野遺跡の植生と住居空間の構築について」『平成26年度―戸御所野年報』	―戸御所野委員会

## 第2章 遺跡の歴史的環境

### 第1節 遺跡の位置と環境

御所野遺跡は、馬淵川が小島谷から一戸への基盤岩からなる狭い溪谷を抜けたすぐ右手の台地上に位置している。景観としては馬淵川中流域の小盆地（ここでは一戸盆地と呼ぶ）の南西端、すなわち馬淵川流域生態系の中で小規模ながら独立性をもつ盆地地形の南部に位置する。巨視的に見ると、北上高地の北西端に位置し、また、馬淵川水系および北上川水系の西方の奥羽山脈の北東端に位置しており、以下のように地生態系では中生代ジュラ紀付加体と新第三紀中新世堆積岩類・第四紀火山岩類の境界域に位置している。

馬淵川の谷底を中心に分布する中生代ジュラ紀付加体（北部北上帯の葛巻～釜石帯）と、その上に不整合で重なる新第三紀中新世の堆積岩類の二つが一戸盆地と周辺山地の地生態系の基盤をなしており、御所野遺跡の基盤は、後者の新第三紀中新世堆積岩類からなる。御所野遺跡は、この堆積岩類が古馬淵川の活動によって浸食されてきた平坦な河岸段丘面上に位置している。河岸段丘は離水期または離水後に十和田火山から流下した大不動火砕流（軽石流、浮石流）に覆われ、さらに高館火山灰層の上部、八戸火砕流、二の倉火山灰群、十和田火山完新世テフラ群に覆われる。

生物生態系は、温帯落葉広葉樹林帯あるいは冷温帯林に含められ、暖かさの指数45～85を生育域とするブナとミズナラを特徴種としている。しばしば北上高地の森林はブナを欠く冷温帯林、降水量が少ない乾燥気候下で成立した中間温帯あるいは上部温帯などと捉えられてきたが、かつてブナ・ミズナラ帯があり、人間の活動によってブナが激減した状態をそのように呼んできた。後述する一戸段丘の段丘崖や上位の開析の著しい岩館段丘では地すべり・崩壊が著しいため、生物多様性のある二次植生が形成される。

以上のような地生態系および生物生態系における位置は、縄文時代の人間活動にとつての地下資源、生物資源の内容を示している。

(辻 誠一郎)

### 第2節 遺跡の地形・地質

遺跡の地形・地質は、北上高地から奥羽山脈に連続する基盤地質と、主として河岸段丘とそれを開析した谷底平野からなる地形および地形面構成堆積物として捉えることができる。基盤地質は、中生代ジュラ紀付加体と新第三紀中新世堆積岩類からなっている。前者は馬淵川の谷底に露出しており、ホルンフェルスやチャート、輝緑凝灰岩などからなる。これは御所野遺跡が位置する段丘面の西側の段丘崖下にまで分布する。馬淵川の東側には、それら中生界ジュラ系を不整合に覆って新第三系中新統が広く分布しており、御所野遺跡の基盤地質をなしている。中新統すなわち中新世堆積岩類は、後述する河岸段丘の基盤および山地をなしており、一戸盆地においては以下のような累層に区分されている（八木下ほか、1996）。すなわち下位のものは四つ役層と傾城峠安山岩層、上位のものは門ノ沢層および末ノ松山層である。御所野遺跡は、上・下層の境界に位置しており、遺跡の南側では傾城峠安山岩層が、北側では門ノ沢層が基盤をなしている。遺跡は後述するように東側の岩館段丘と西側の一戸段丘にまたがっているが、両面の変化点が基盤地質の境界にあたる。八木下ほか（1996）によれば四つ役層と傾城峠安山岩は指交関係にあると考えられ、前者が今日の一戸盆地を大きくした堆積盆地の南西・南から北へ流下堆積した礫層を主体とするのに対して、後者は一戸盆地の東方における火山の活発な活動による噴出物を主体としている。両層ともにおびたしい珪化木を包含しており、とく

に根反川流域に露出する傾城峠安山岩には、森林が埋没したことを示す化石林（埋没林）が挟在しており、火山噴火という突発的の事件によって森林が短期間に埋没したこと、火山噴出物からのゲル状態の珪酸化合物の置換によって緻密な珪化木が形成されたことを示唆している。これらが地下資源の第一の主要素である。

基盤地質で特筆すべきこととして、景観としても重要な要素である茂谷の山塊がある。御所野遺跡の前方（北西方向）にそびえており、その基盤地質は花崗岩質岩石と斑輝岩質岩石である。とくに山頂部から遺跡に向かっては白色の花崗閃緑岩が主体であり、同質の岩石は遺跡の配石遺構からも出土している。これが地下資源の第二の主要素である。

御所野遺跡を含む一戸盆地の地形区分を第12図に示す。また、御所野遺跡を縦断する東西方向の地形・地質断面図を第13図に示す。馬淵川に沿う低平な完新世の河岸段丘はさらに二つあるいは三つに細分されるが、ここでは一括して示してある。また段丘崖は当該段丘に含めてある。形成後の浸食や地滑り・崩壊によって段丘崖地形は変形しているからである。基本地形は高い方から、山地、岩館段丘、一戸段丘、福岡段丘、完新世段丘である（松山、1981）。御所野遺跡は一戸段丘と岩館段丘に対比される地形面上に形成された。一戸段丘は、河岸段丘礫層の直上に大不動火砕流（大不動浮石流凝灰岩）が堆積するため、火山灰台地と捉えられることもあるが、その離水期あるいは離水後に整合に覆っているので基本的には河岸段丘である。火砕流の放射性炭素年代は約30,000BPであるので（寺田ほか、1994）、段丘面形成はそれ以前の後期旧石器時代である。これら段丘構成層が地下資源の第三の主要素である。

御所野遺跡の中央から西側の主要部の地形は一戸段丘に含められるが、傾斜が急で高度を増す東側の地形は岩館段丘に対比される。すなわち遺跡の地形面は二つからなり、上述したように基盤地質もこれに対応している。

なお、遺跡の西端部には緩やかな斜面が認められ、ここでは地表から約150cmの深さまで黒ボク土の堆積が確認された。また、遺跡の東端部において遺跡北側の地切川が流下する谷底平野から南東方向に深い谷地形があるが、この谷底では厚さ4mにおよぶ黒ボク土状の堆積物が確認されている。いずれも現地形より深い埋没谷の存在が示唆される。

（辻 誠一郎）

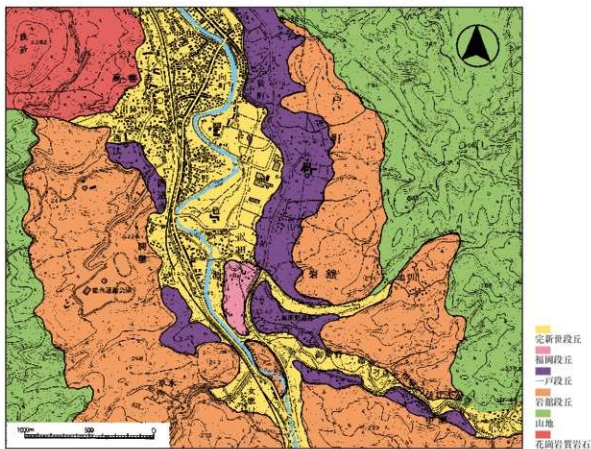
### 第3節 遺跡の層序

#### （1）基本層序

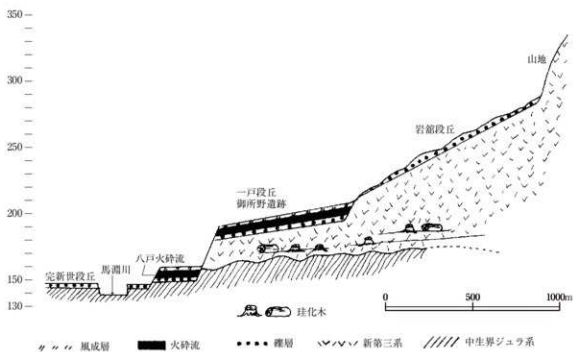
これまでの発掘調査において設定されてきた御所野遺跡の基本層序は、いわゆる人為堆積層の再確認とⅢ層より下位のテフラ層序の再検討によって、以下のように再設定する。また、新第三紀中新世堆積岩層を不整合に覆う段丘礫層以上の一連の後期第四紀堆積物を御所野層（ごしょのそう、Goshono Formation）と命名・定義する（第14図）。御所野層は、現時点では一戸段丘を直接構成する一連の堆積物であるが、東側の岩館段丘を構成する堆積物についての詳細が明らかになれば再定義されるであろう。御所野層の大半は水成堆積物ではなく、段丘礫層を覆う風成堆積物からなっている。また、御所野遺跡に居住した人間の活動によって形成されたいわゆる人為堆積物が挟在すること、土取りなど地層の削剥といった人間の活動による斜交がおびただしく確認されることが大きな特徴である。

御所野層は、以下のように上位からⅠ層～Ⅸ層の9層に区分される（第14図）。

Ⅰ層：黒褐色から暗褐色の砂質シルトからなる土壌。層相によってⅠa、Ⅰbに細分される。Ⅰaは現在までの耕作土、Ⅰbは細粒で白色鉱物粒を含む。



第12図 御所野遺跡と周辺の地形・地質



第13図 御所野遺跡と周辺の東西地形・地質断面



II層：黒褐色および黒色の砂質シルトからなる土層。層相および挟在テフラによって上位からIIa、IIb、IIc、IIdに細分される。IIaは黒褐色の砂質シルトからなり、白色鉱物粒を多く含む。IIbは黒褐色の砂質シルトからなり、白色火山灰からなる大湯1軽石（いわゆる十和田aテフラ）を挟在する。IIcは黒色シルトからなり、白色鉱物粒を多く含む。IIdは黒色シルトからなるがIIcより粗粒。

御所野遺跡人為堆積層：III層を覆い、II層に覆われる黒褐色から黄褐色の攪乱堆積物からなり、III層以下の堆積物のブロックや黒褐色と黄褐色が混在する土壌であったりする。場所によって変化する。遺跡中央部のIV区におけるGA44トレンチでは、上位から①、②層が確認される。①層は、黄褐色土壌のブロックからなり、炭化物粒や土器片、チップの混入が認められる。「盛土1層」「盛土2層」とされてきた層に相当する。②は、黒褐色の土壌からなり、炭化物粒や土器の小片が少量混入する。「盛土3層」とされてきた層に相当する。鉱物組成などの特徴についてはバリノ・サーヴェイ株式会社

(2013)に詳述されている。他の地区については便宜的にユニット名が与えられているが、すべてが人間の活動によるものであるため、地区間のユニットの対比はできない。

III層：暗褐色の砂からなり、灰白色から黄白色の軽石質火山灰からなる中振軽石を挟在する。

IV層：暗褐色のシルト質砂からなり、赤褐色軽石からなる南部軽石および暗褐色のローム質土壌からなる。2層に細分され、IVaはテフラの一次堆積物および二次堆積物からなる。IVbは南部軽石降下前の暗い褐色埋没土壌である。

V層：黄褐色から明黄褐色のシルト質粘土からなり、褐色から赤褐色スコリアを特徴的に含むことから鉄・マグネシウム成分に富む二の倉スコリア群を主体とする一次堆積物および二次堆積物である。層相によって暗褐色から黄褐色のVa、黄褐色から明黄褐色のVbに細分される。二の倉火山灰群は約400年以下の間隔で10回前後の噴火による火山灰の集合であるため、VaとVb層には複数の火山灰が混在している可能性がある。二の倉火山灰群は下方から上方に化学変化するので、今後の分析によって降下ユニットが識別できる可能性がある。

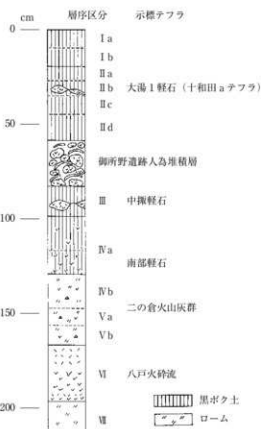
VI層：白色軽石と灰白色火山灰からなる八戸火砕流。

VII層：黄褐色から明黄褐色のローム。高嶺火山灰層の上部に相当する。

VIII層：灰白色軽石と灰白色火山灰からなる大不動火砕流。

IX層：水成の河岸段丘礫層。

なお、示標テフラの年代は以下のようである。IIbに挟在する大湯1軽石の年代は915年である。III層の中振軽石は約5,900年前、IVa層の南部軽石は約9,200年前、V層の二の倉スコリア群は約11,700～



第14図 御所野遺跡の基本層序（新称：御所野層）

約14,300年前(噴火は長期間におよぶ)、VI層の八戸火砕流は約15,500年前と算出されている(Hayakawa 1985; 工藤・佐々木2007; 工藤2008; 辻2014)。

## (2) 遺跡の土地造成

上記のような基本層序を踏まえて、御所野遺跡において行われた土地造成について検討しておこう。基本的な考え方は、基本層序単位のうち、御所野遺跡人為堆積層は御所野ムラの人間によって形成されたものであること、これら人為堆積層は土地の削平とそれとともなう土の移動によってもたらされることである。削平される場所があれば、盛りられるか廃棄される場所があるということである。削平は連続的であるべき基本層序が不連続になることであり、盛土は基本層序に人為堆積層が付加されることである。

これまでの御所野遺跡の発掘調査によって明らかになった基本層序と各地の遺構・遺物の編年から、集落構造の変遷は以下のようであったとされている(おかもら2012)。大木8b式期から中央区の土地造成と墓地を中心とした竪穴建物の環状配置、盛土遺構の形成が始まって大木式の集落構成になった。次いで9式期からは、さらに西・中央東・東地区に各竪穴建物群が営まれ、10式期へと継承された。10式期には、中央の2基の墓群に環状配石が設置され、周囲に竪穴建物と併存した掘立柱建物が巡ったとされる。

この経緯の中で、もっとも大規模な土地造成が行われたのは、大木8b式期における中央区の土地造成であろう。そこで、中央区のIV区における南北層序断面図から、土地造成の様相を見ておこう(『御所野遺跡IV』2013の第7図参照)。現在の地形図においても、中央区の南半部が標高195～196mであるのに対して北半部は194m弱しかなく、土地造成の歴史が地形図にも反映されている。断面図では、配石遺構のある北半部では中擬軽石を挟むⅢ層あるいはその下位層までが削割されており、Ⅱ層およびⅠ層が非整合の関係で覆っている。南半部では、基本層序で記述した御所野人為堆積層のユニットである①、②がⅢ層を直接覆っており、Ⅲ層形成後に大規模な土地造成が行われたことがわかる。北半部の削平は遺物から大木8b式期とされ、南半部の盛土に形成されたおびただしい竪穴建物が同じく大木8b・9式古式期であることから、土地削平と盛土形成、それに引き続く竪穴建物建設は大木8b・9式古式期の期間内に行われたことになる。おそらく、御所野遺跡においては中央区のこのような土地造成がもっとも大規模なものであったと考えられる。

発掘調査においては、遺構の埋積物の下限までは確認されるが、それより下位の層序が確認されていないことが多い。この確認が行われることにより、土地造成の規模や性格が明らかになるので、遺構の側面および下位層の層序の確認が望まれる。

(辻 誠一郎)

## 第4節 御所野遺跡の集落生態系

人間の活動によって形成された生態系は人為生態系と呼ばれている。景観生態学では文化景観と呼んでいる。人為生態系は森林から改変された草地が一般的であるが、居住域をはじめとして、未来に資源利用のための林地や貯蔵・採集のための空間においても形成される。集住域だけではなく集住する人間の生活にかかわる景観は集落生態系と呼ばれている。本節では、植物珪酸体分析という手法を用いて、御所野遺跡において集落生態系がどのようなものであったか、またいつ頃から集落生態系が形成されたのかを検討した。この検討結果はすでに公表されているので(山本2013)、結果と結論を以下にまとめておきたい。

植物珪酸体分析を試みた地点は第15図に示す5地点である。地点番号は分析用に付した固有のものである。地点GSN-1は遺跡の北東部の縁辺であり、I層からVa層が連続的に堆積する。地点GSN-2は中央部の中央ムラとされる西端にあたり、I層からV層までが連続的に堆積する。地点GSN-3は中央ムラの盛土遺構が確認されたところで、①②の盛土層と下位のⅢ層および上位の人為堆積物とI層が堆積する。地点GSN-4も盛土遺構が確認されたところで、①の盛土と下位のⅢ層からⅤ層までが堆積する。地点GSN-5は遺跡の南端にあたり、Ⅱ層とⅢ層上部が確認された。

各地点における植物珪酸体分析の結果をダイアグラムで示した(第16図～第20図)。図示するように地点ごとの局地植物珪酸体群帯が設定される。地点GSN-1では、ⅣaとⅢ層がI帯、Ⅲ層とⅡd・ⅡcがⅡ帯、Ⅱb・ⅡaとI層下部がⅢ帯、I層上部がV帯に分帯される。地点GSN-2では、V層とⅣ層がI帯、Ⅳ層上部とⅢ層がⅡ帯、Ⅱd・Ⅱc・ⅡbがⅢ帯、ⅡaとI層がⅣ帯に分帯される。地点GSN-3では、Ⅲ層からⅡbまでがI帯、I層がⅡ帯に分帯される。地点GSN-4では、Ⅵ層からⅣbまでがI帯、ⅣaとⅢ層下部がⅡ帯、Ⅲ層上部と盛土①がⅢ帯に分帯される。地点GSN-5では、Ⅲ層からⅡbまでがI帯、ⅡaがⅡ帯に分帯される。以上のような生層序区分の手続きを経て、御所野遺跡植物珪酸体群帯は以下のように設定される。すなわち、チマキザサ節型が優占し、他がほとんど見られない御所野I帯、チマキザサ節型が優占し、キビ連・ススキ属・ウシクサ族が随伴する御所野Ⅱ帯、チマキザサ節型の急減とキビ連の増加によって特徴づけられる御所野Ⅲ帯、キビ連の優占とイネの産出によって特徴づけられる御所野Ⅳ帯の4帯である。

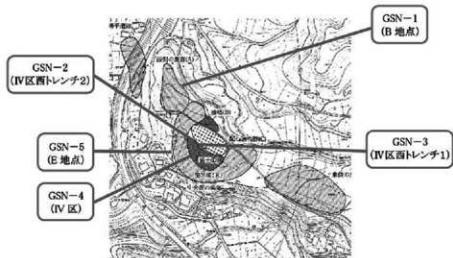
御所野遺跡植物珪酸体群帯が示す台地上の景観は以下のものである。御所野I帯ではチマキザサ節のみが繁茂する暗い森林景観であった。御所野Ⅱ帯すなわち中振軽石の下位では森林景観であった。ところが御所野Ⅲ帯では、明るく開けた環境下で生育するキビ連・ススキ属・ウシクサ族が随伴するようになり、中振軽石以降では徐々に草地景観が拡大していった。中央ムラの盛土①からは多量のキビ連が検出されており、ススキ属も多産するので、盛土の地点周辺ではキビ連が優占する草地が形成されていたか、あるいは栽培されていた可能性もある。御所野Ⅲ帯すなわちⅡ層ではキビ連が最優占となるので、遅くとも平安時代にはキビ族の栽培がおこなわれていたであろう。地点GSN-1やGSN-5といった台地縁辺では産出が目立たないことから、時代は異なるもののキビ族栽培は台地の中央部を中心に行われていたであろう。御所野I帯すなわちⅡa以上ではイネも栽培されていた。キビ連との共伴からこのイネはおそらく陸稲であった。

以上のように、御所野遺跡においては中振軽石が降灰前の縄文早期から縄文前期にはすでに御所野台地の土地利用が始まっており、森林から草地への変更が行われていた。縄文中期後半の御所野ムラにおいては、中央部では北半部での削平と南半部でのその盛土など大規模な土地造成が行われ、この周辺ではキビ族やススキ属が草地景観を作っていた。中央部2地点での植物珪酸体の産状の差異からは、両者の棲み分けが示唆される。すなわち、盛土の西側ではススキ属が卓越し、中央部ではキビ族が卓越した可能性がある。いずれにせよ登場の主要素であるススキ属と、栽培植物を含むキビ族が盛土形成時に卓越していたことは起筆すべきことである。この分析では、典型的なキビ族珪酸体にはアワ属、続いてヒエ属が多かったので、栽培農園があった可能性がある。その後、Ⅱ層、I層の時代においてもこのような土地利用は継続したといえ、とくに平安時代からはイネ(陸稲とみられる)が加わった細作が盛んであったといえる。

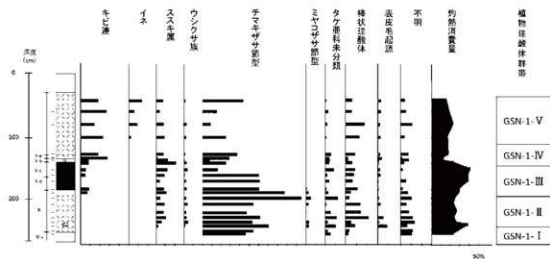
(山本総光・辻 誠一郎)

## 引用文献

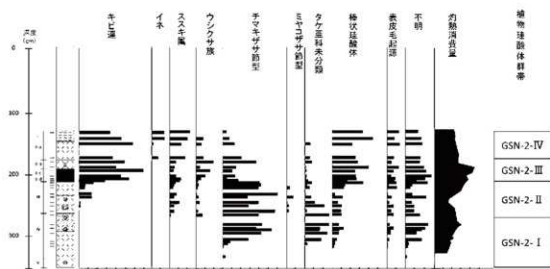
- 松山 力 (1981)「遺跡群の位置及び周辺の地形・地質」『一戸バイパス関係調査報告書1』P. 3-18, 一戸町教育委員会
- 八木下晃司・川守田浩・小守一男・杉山了三 (1996)『岩手県一戸町東部、馬淵川本支流域に産出する球化木とその地質について』一戸町教育委員会
- 寺田和雄・太田貞明・鈴木三男・能城修一・辻 誠一郎 (1994)「十和田火山東麓における八戸テフラ直下の埋没林への年輪年代学の適用」『第四紀研究』33, P.153-164.
- バリノ・サーヴェイ株式会社 (2013)「調査地点の層序と盛土遺構の形成過程」『御所野遺跡IV』P.125-140, 一戸町教育委員会.
- Hayakawa, Y. (1985) Pyroclastic geology of Towada volcano, Bull. Earthq. Res. Inst., Univ. Tokyo, 60, P.507-592
- 工藤 崇 (2008)「十和田火山噴火エピソードE及びG噴出物の放射性炭素年代」『火山』53, P.193-199.
- 工藤 崇・佐々木寿 (2007)「十和田火山後カルデラ期噴出物の高精度噴火史編年」『地学雑誌』116, P.653-663.
- 辻 誠一郎 (2014)「十和田二の倉火山灰の放射性炭素年代とその意義」『八戸市埋蔵文化財センター是川縄文館研究紀要』第3号, P. 1-4.
- おかむらみちお (2012)「御所野遺跡の集落構造とその変遷—御所野縄文里山景観の復元—」『平成23年度一戸町文化財年報』P.71-81, 一戸町教育委員会
- 山本総光 (2013)「東北地方北部御所野遺跡における縄文時代以降の集落生態系史」東京大学大学院新領域創成科学研究科社会文化環境学専攻修士論文, 73pp.



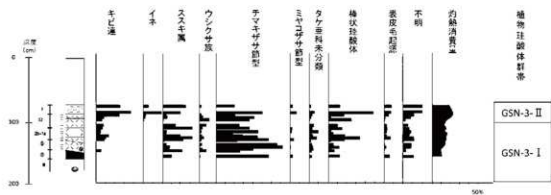
第15図 植物珪酸体分析の調査地点



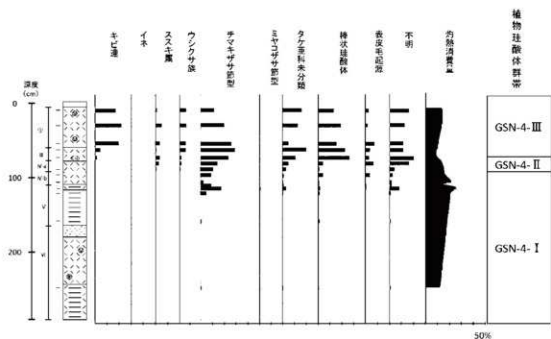
第16図 植物珪酸体ダイアグラム (GSN1)



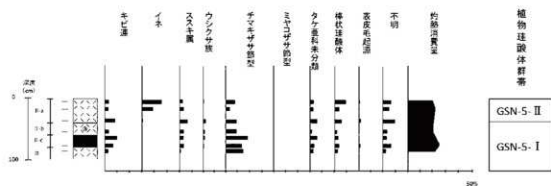
第17図 植物珪酸体ダイアグラム (GSN2)



第18図 植物珪酸体ダイアグラム (GSN3)



第19図 植物珪酸体ダイアグラム (GSN4)



第20図 植物珪酸体ダイアグラム (GSN5)

### 第3章 遺跡の概要

#### 第1節 検出した遺構

##### (1) 東側調査区の遺構群

御野野遺跡（一戸段丘面）の東側全域を東側調査区として設定している（第3図）。調査地区の面積は南北120m、東西270mの20,000㎡となる。台地はほぼ平坦であるが、調査区は東南部の平坦面から北西方向へ緩やかに傾斜している。平成3年度の調査は用地が未取得であったこともあり、地境毎にI～IX区毎にトレンチを設定して遺構の分布を確認した。調査の結果ほぼ全域で遺構の分布を確認している。

その後整備計画にもつぎ、平成8年度に調査を再開しており、平成8年度は埋蔵文化財センターとガイダンス施設の建設予定地の1調査区、平成9年度は東集落の遺構復元予定地の2調査区、平成10年度は1調査区の精査と屋外のガイダンス施設の建設予定地に隣接する3調査区を調査している。

以上の調査は、当初から遺跡保存に向けた遺構の有無確認が目的だったこともあり、各遺構は掘り下げていない。大半は遺構確認面で図面に記録するとともに、遺物の出土地点などを記入しながら取り上げている。したがって各遺構の時期や内容も限られたものとなっている。そのなかで1調査区と3調査区は建物の建設予定地だったこともあり、検出した遺構のほとんどを完掘している。遺構復元予定地の2調査区は、平成3年のトレンチ調査で確認したⅢc区、V区、ⅣB区を中心に、ⅣA区の一部を調査区に含み、検出した83棟の竪穴建物跡のうち16棟を調査している。なお2調査区は、平成3年度には57棟だった竪穴建物跡が、各トレンチ間の未調査区も含めて再度確認したところ83棟まで増えている。以上の調査方法で得られた東側調査区の概要は次のとおりである。

検出した遺構は竪穴建物跡、土坑、掘立柱建物跡、柱穴列、粘土採掘坑などである。竪穴建物跡はほぼ全域に分布しており確認面積60%で233棟確認している。そのうち34棟を調査しているが、時期ごとの分布は次のとおりである。

##### Ⅱ期（第21図）

竪穴建物跡は1調査区と2調査区において掘り下げて調査している。1調査区では3ヶ所に分布している。1ヶ所は北東端部で、径3～5mの竪穴が4棟重複している。径5mが1棟のほかは、いずれも径3mの小型竪穴で、重複する2棟にさらに1棟が接していることから、それぞれが同時存在の可能性はない。さらに南西方向に10数m離れて径3mの小型竪穴がある。次に中央南端で2棟検出している。1棟は径6.4m×4.7mとやや大きく、もう1棟は径3mで、それぞれは5～6mほど離れている。もう1ヶ所は調査区中央西側で古代の竪穴と重複している。残存部は部分的であり規模なども不明である。他の同時期の竪穴群から30m以上離れており区別できるが、周辺で同時期の竪穴はなく遺物も出土していない（Ⅱ期の新旧は不明）。

2調査区ではいずれも径3m程の小型の竪穴を2～3棟を調査している。1棟は調査区中央の南端部、北東側ではほぼ同規模のものが重複している。周辺には未調査の竪穴が数多く分布しており竪穴群の構成などは不明である。東側調査区のⅡ期の遺構群は以上であるが、そのほか遺構確認調査では東南端のⅣA区で遺物が多く出土している。遺構は密集しており詳細は明らかではない。

##### Ⅲ期（第21図）

Ⅲ期の遺構は確認していないが、ⅣA区で土器がいくつか出土している。いずれもⅢ群のなかでは比較的新しいⅢ-2期の土器群である。

#### IV期 (第21図)

2調査区中央やや西寄りの大型のHB120堅穴を中心として、中型のHE126、HD114のほか、柱穴のない小型の堅穴を同時期の建物群と考え復元している。調査区内や周辺に密集する堅穴が大型、中型、小型とも確認でき、しかも同時期の土器群がまとまって出土していることを根拠としている。そのほかHB120の北側で検出した4本の柱穴を掘立柱建物跡と考えHA122とし、さらにその東側の柱穴も一体のものと考えて復元している。IV期の遺構群は2調査区のほか、遺構検出時にIV区A、IV区B、さらにVI区、VII区などからもIV群土器が多く出土しており、検出した遺構群のなかにはIV群土器が多いことからIV期の遺構が多く含まれていると予想される。

#### V期 (第21図)

東側調査区のいずれのトレンチでもV群土器が出土しており、ほぼ全面に遺構が分布する可能性が高い。堅穴建物跡は1調査区の西端で5棟調査しているが、径6m以上の大型堅穴が2棟、径4m程の中型堅穴が1棟、3m以下の小型堅穴が2棟となっている。そのほか未調査の堅穴にも大型、中型、小型のものがあり、2～3棟で一時期の建物群が構成される可能性が高い。

#### 土坑 (第9・21図)

土坑は東側調査区全体で91基調査している。いずれも堅穴建物跡が密集するII区、IV区で多く、いずれもその周辺で検出されることから東側調査区では堅穴建物との関係が強いことがうかがえる。8基調査しているが、形態も多様でフラスコ形土坑から皿形土坑、さらには浅い長方形土坑、円形で焼土を伴う小規模な土坑などがある。フラスコ形土坑は平面形態などから大半は貯蔵用と考えられる。

#### 掘立柱建物跡 (第9・21図)

2調査区の北西部で1棟調査している。5個の柱穴を調査しているが、その配置から4本柱の建物跡と考え、1本は単独柱と判断して復元している。平面形はやや歪んだ四角形で、各柱間は2.5m～3.2mとほぼ3m前後と長い。掘り方は径50～70cm、柱痕は径30cm前後、深さは50～70cmで、1本だけ107cmと深くなっている。

#### 柱穴列 (第21図)

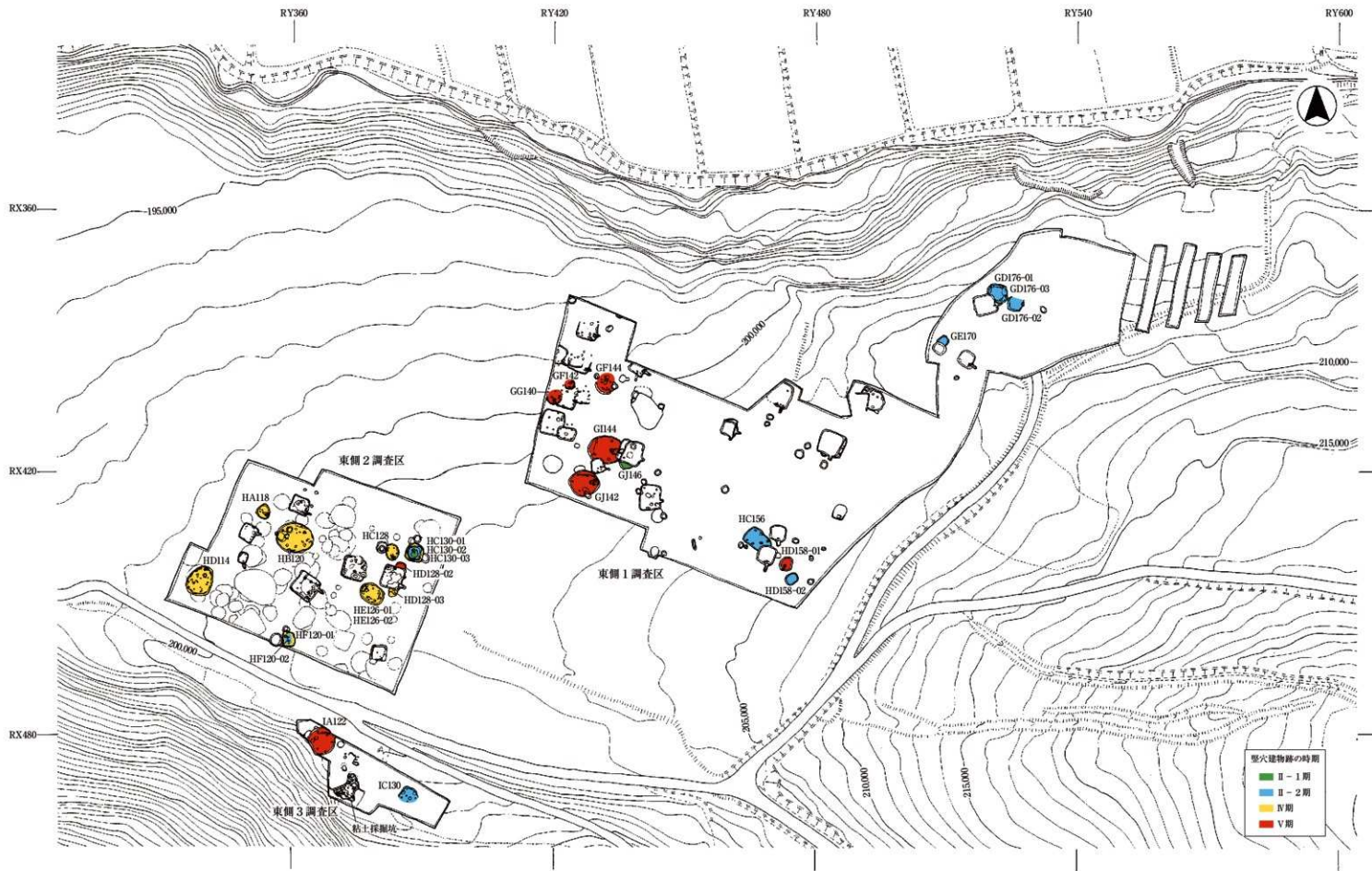
HD114堅穴の南側で柱穴を3個検出している。いずれも掘り方は50～60cmで、各柱間は2.7mと3.0mとなっている。

#### 粘土探掘坑 (第21図)

東側調査区中央南よりの3調査区で検出している。南北6.42m、東西4.63m、深さ100～180cmでやや形態は不規則である。基本層序Vb層の浅黄橙色粘土を採取した探掘坑である。縦坑を掘り下げた後Vb層を横に掘削したと考えられ、粘土を採取したVa層より上位の土が混在した状態で埋まっていた。なかに粘土ブロックが入っていたり、横坑の壁に良質の粘土が付着しているところも多い。

堆積土中から土器と土偶が出土している。土器はII～IV期の破片も出土するが、圧倒的に多いのはV期で、しかもほぼ定形に近いものが2点出土している。いずれも大木10式(新)のものである。土偶は列点文が施されており、同時期のものである。





第21図 竪穴建物跡の時期別分布 (東側1～3調査区)

## (2) 中央調査区の遺構群

### 配石遺構 (第25・26図)

中央部北側に位置する。周辺は広範囲にⅢ～Ⅳ層、部分的にはⅤ層まで削平されており、Ⅱc層の黒色土をとり除くとⅣb・Ⅴ層、あるいは場所によってはⅥ層で検出される。配石遺構群はこのように人為的に削平された平坦面の東西80m、南北50mの範囲に構築されている。

配石遺構群は大きく東西2ヶ所に分布している。いずれも中央部が空白となり、その周囲に個別の配石遺構が分布する。東側は東西25m、南北15mが空白地となり、その外側に各配石遺構が分布しており、全体が長方形、あるいは長楕円形を呈している。個々の配石遺構は8ヶ所で確認しているが、組石が単独のもの複数で構成されるものがある。いずれも1m前後、あるいは1.3～1.5mの巨石を伴う例が多い。この巨石は東側の配石遺構群に限られている。なお、巨石のなかには、過去の土地所有者が放いて地境に立てたものもある。組石の形態も多様で、円形、楕円形、方形、長方形などであるが、複数ある場合は径2m前後の円形の縁にやや大きめの石を横に配置し、そのなかにやや小粒の石を充填しているのが2ヶ所ある。またその周囲に小型の組石を配置する場合がある。巨石のなかには、明らかに茂谷山から運んだと考えられる花崗岩（石英モンソニ岩）も含まれている。

西側の配石遺構群は東西16m、南北9mとやや規模が小さくなるが、同じくその周囲に個々の配石遺構が7ヶ所ある。いずれも東側の配石遺構群とは形態も異なっており、環状になるもの、列状のものなど多様である。FB46のようにいくつかの組石で構成されるものもあるが、そのほかはいずれも単独の組石となっている。

以上の東西2ヶ所にある配石遺構群のほかに、南側に3ヶ所、Ⅴ区の竪穴建物群周辺で2ヶ所、GA70トレンチの南側に4ヶ所、いずれも単独の組石からなる配石遺構が分布している。組石の下は未調査であるが、配石遺構が削平地だけでなく周辺にも構築されたことを示している。

以上の配石遺構群のうち、Ⅳ区のFI46配石の横でⅢ～Ⅳ期の竪穴建物跡を調査しているが、竪穴の上に配石遺構が構築されていること、さらに配石遺構周辺でⅤ～Ⅱ期の土器が出土している。また削平地上の配石遺構群の周辺からもⅤ期の土器がいくつも出土することから、少なくとも配石遺構群が構築された時期はⅤ～Ⅱ期と推定される。削平地の配石遺構が古く、その後周辺にも配石が拡大して構築された可能性も考えられるが、それでも配石遺構群の時期が古くまで遡ることは考えられない。

### 土坑と掘立柱建物跡 (第27～29図)

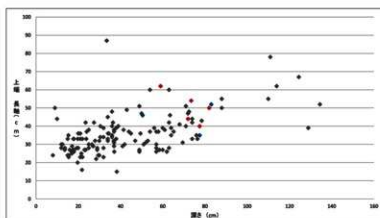
配石遺構群の空白地には墓坑とフラスコ形土坑が分布する。フラスコ形土坑のなかには墓坑と重複しているものや、周辺のトレンチ内で竪穴建物跡などに切られているものもあり、全体的に古くなる。墓坑はいずれも径1m程の小判形の浅い土坑で、同じ場所にまともまっている。同じ小判形の土坑は、竪穴建物跡が分布するⅡa区、あるいはⅡb区、Ⅲ区、Ⅴ区でもいくつか確認しており、周辺に分布している。

Ⅱa区ではフラスコ形土坑とともに、小判形、あるいは長方形土坑も検出しており、小判形土坑は、南側のFE58配石とFD54配石の間に密集している。

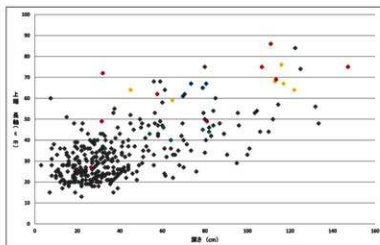
Ⅱb区の中央東側でもFG52配石とFD52配石の間に同じく径1m前後の小判形の土坑が密集している。そのうち7基を掘り下げている。同じような小判形、あるいは長方形土坑が竪穴建物跡群と重複しているが、確認できたものはいずれも各竪穴建物跡より新しい。フラスコ形土坑も14基確認している。また竪穴建物跡との関係はⅣ期より古く、Ⅲ期と同時期か古い時期の遺構と考えられる。なかには基本層序Ⅲ・Ⅳ層起源の堆積土が含まれているものもあり、削平前の遺構が含まれている可能性も

ある。

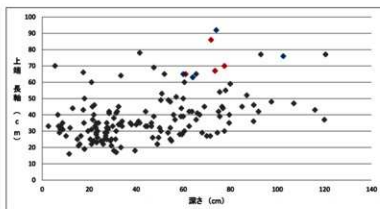
Ⅲ区の土坑は小判形のものが多く、そのなかの1基はEJ42配石と共存しており墓坑と考えられる。柱穴は9個確認しているが、AあるいはB群の3個を半裁して掘り下げているが、2個はいずれも深さ146cm、162cmとかなり深い。以上の土坑、柱穴群はいずれも竪穴建物跡の検出面で確認しており、竪穴建物跡より新しい遺構である。



第22図 II a区柱穴規模



第23図 II b区柱穴規模



第24図 V区柱穴規模

V区の土坑は23基確認しており、形態から小判形、フラスコ形、円形がある。小判形土坑は深さ40～50cmで中央より南側に集中している。いずれも周辺で重複する建物跡群を切るものが多くIV期以降のものが多い。形態・規模から墓坑の可能性が高い。フラスコ形土坑は開口部はやや狭いが、底部で最も開く断面がフラスコ形を示すので、同じく中央部から南側に分布しているが、いずれもIV・V期の竪穴に切られており古いものが多く、なかにはⅢ群土器が出土しているものもある。円形土坑としたものは、径1m以下と小規模で壁が直立する土坑群で、中央に集中しており、なかにはⅢ群土器が床土から出土しているものもある。また土坑に石を伴うものもあり、それらは墓坑の可能性もある。柱穴はA～C群を確認しているが、掘立柱建物に伴うB群、それより規模は大きい建物跡とならないもの、さらに小型の柱穴群をほぼ全滅で検出している。以上の柱穴群はC群を除いていずれも竪穴建物跡を切っておりIV・V期以降と考えられる。

配石遺構と墓坑群の外側には掘立柱建物跡などに伴う多様な柱穴が密集している。各柱穴は掘立柱建物跡以外の柱穴も多いことから調査区ごとにその規模と分布について検討した。

各調査区の柱穴は第22～24図のように開口部径30～70cm、深さ40～90cm(A群)、開口部径50～80cm、深さが100cm以上(B群)、開口部径20～40cm、深さ15～40cm(C群)に分類できる。A群はおおむね掘立柱建物跡に伴う柱穴群と考えられ6本柱の長方形配置となる。掘立柱建物跡にはⅡb区FC48のように開口部径が大きく、深い柱穴をもつ建物跡もあれば、同じⅡb区のFB52のように柱穴の規模が小さいものもあり、その規模は多様である。全般的に大きい柱穴をもつ掘立柱建物は規模は大きい、必ずしも建物跡と柱穴の規模は比例するものではない。Ⅱb区のFC50-1は建物跡の規模は大きくはないが、柱穴は大きく深い。V区のA群の柱穴は深さ40～100cmと分布範囲が広がっており他の調査区より深い。また開口部径20～50cmで深さ40～70cmの柱穴群も多いことから、V区では掘立柱建物跡以外の柱穴がA群に含まれている可能性がある。B群は柱穴の規模は大きいがいずれも建物として対応する柱穴がないことから単独柱と考えられる。C群の柱穴はそれぞれの調査区でもほぼ同じように分布している。Ⅱa区では、調査区東側の焼土周辺に広がる焼骨の分布範囲に近い南側に集中している。Ⅱb区、V区でもC群の柱穴群は一定の範囲に集中している。このような分布のありかたは規模の小さい柱穴群の機能を考える上でひとつのヒントになるのかも知れない。

### 盛土遺構 (第30～33図)

中央部南側に位置する。この場所には古代の古墳群が南北に分布しており、平成元年度に行った円形周溝の調査の際は、土器・石器などとともに焼骨片・炭化材片・焼土粒などを含む遺物包含層と認識していたが、トレンチを設定し掘り下げたところⅢ～V層が逆転していることが判明、「盛土遺構」と命名している。盛土遺構の北側に相当する配石遺構群周辺ではⅢ～V層の一部を欠いていることから、大規模に削平した土を南側に盛土していることが明らかになった。盛土遺構では次のような堆積がみられる。

**盛土①層** 浅黄色土と黄褐色土の混土、部分的に黒色土、黒褐色土が混入。Ⅳb～V層起源の堆積土で部分的にⅣa層が含まれる。

**盛土②層** 黒色土と黒褐色土の混土。Ⅲ～Ⅳa層起源。当初は盛土2層、3層と区分していたが、3層は南端の一部に分布に限られることと、2層と明確に区別できなかったため同一層とした。

各層は盛土①層、盛土②層ともに層厚は20～30cmである。盛土①層は遺構検出の際に10～20cmほど掘り下げており、全体として層厚は30～40cm、盛土全体としては50～70cmの厚さとなる。以上の

盛土①層と②層は上下に明確に区分できるとその分布を異にしていることから一定の時間差があると考えられる。堆積状況からは②層はややゆっくり、①層は一気に盛られた可能性がある。このような差により①層、②層と識別できている。

盛土遺構の範囲は、Ⅳ区の南北中央トレンチの南・北端で確認している。Ⅳ区西トレンチ1では①層と②層、同じくⅣ区西2トレンチでは東端で②層を確認しており、西トレンチ周辺まで②層が分布していることは確実である。Ⅳ区東トレンチでも②層を確認しているが、①層は確認できなかった。以上から盛土遺構は、大きく2時期にわたって削平と盛土をくり返したことが明らかになった。①層は東西90～100m、南北20～25m、その上にローム層を主体とした②層が堆積するが、その範囲はやや狭く東西80m、南北20m程である。

盛土遺構の時期については、Ⅳ区中央トレンチ内のGB44堅穴建物跡の上で①層・②層を確認していることと、同じⅣ区中央トレンチ北側のFJ46-02堅穴建物跡が②層を掘り込んでいる。FJ46-02は出土土器からⅢ-2と考えられ、以上から②層の形成時期はⅢ期でも早い段階と想定される。①層については同じトレンチ内のGA44-01堅穴に切られており、Ⅲ-2以前と考えられる。以上から盛土①層・②層ともかなり近接した時期に形成されたと考えられる。

平成21～24年度には、盛土遺構の内容や形成過程を把握することを目的として調査した。Ⅳ区中央トレンチで掘り下げたところ盛土層のブロックと考えて記録していたが、堅穴建物跡などの遺構が重複する様子が明らかになった。FJ46-02堅穴建物跡の調査では、堆積土からも多量の遺物とともに骨片が炭化物や焼土粒を伴って多量に出土している。また骨片はGB44堅穴建物跡の堆積土から焼土塊とともに出土している。調査区全域において、骨片とともに現地性の焼土が検出されたり、堅穴建物跡の堆積土に多量の骨片とともに焼土塊や炭化物などが土器・石器とともに集中的に出土している。以上から盛土遺構周辺では繰り返し火を焚いて焼く行為が行われていたことを示している。

骨片以外に炭化植物種子が出土している。FJ46-01の炉中から多量に出土しており、(詳細は第3章第2節を参照)意図的に種子を焼く行為が行われていたことを示している。

なおⅣ区中央トレンチでは347㎡の範囲で堅穴建物跡を90棟近く検出している。同じように盛土遺構全体のうち北側は堅穴建物跡が密集しているものと考えられる。いずれも盛土層を掘り込んで構築されているのが大半であり、Ⅲ期からⅣ期にかけての遺構が集中していると考えられる。大規模な盛土造成後同じ場所に連続と堅穴建物が構築されたことになる。

## 堅穴建物跡

堅穴建物跡については各調査区毎にその分布状況を記述する。

### Ⅰ区 (第34図)

栗林の南側に設置したトレンチで1,420㎡のなかで55棟の堅穴建物跡と土坑3基を確認している。そのうち19棟の堅穴を調査しており、Ⅱ-2期の堅穴が7～8棟、Ⅲ-1期が1～2棟、Ⅳ期が4～5棟、Ⅴ期が2棟である。その他時期不明の堅穴が2棟となる。

Ⅰ区の北側にある栗林のなかには、東西、南北に幅4mのトレンチを設定し、GA70トレンチとしている。東西トレンチでは長さ60mの範囲に自然面が全くなく長軸12m以上の大型堅穴が同じ場所で重複していた。南北トレンチでは南側に一部自然面が残っているが、それ以外は堅穴がいくつも重複していた。トレンチ内の調査のため詳細な時期は不明であるが、堆積土中からⅢ～Ⅳ期、Ⅴ期の土器が出土している。堅穴建物跡は栗林の東側のトレンチでも7棟検出している。

## IIa区 (第35図)

配石遺構北側のトレンチで520㎡を調査した。トレンチ北東部に包含層があり、土器、石器などとともに焼土粒、骨片、さらに炭化物が多量に出土している。3ヶ所で焼土を確認しており、焼土内、及び周辺に骨片が散在している。包含層は北側、さらに東側にも広く分布するものと考えられる。以上の包含層は最上位で検出しており、包含層を除去してから堅穴建物跡や柱穴群などを確認している。包含層内の遺物の出土状態は配石遺構南側の盛土遺構上の状況と酷似している。なおC群の柱穴群は同じ面で確認しており、ほぼ同時期の可能性もある。

堅穴建物跡24棟、土坑7基、陥穴土坑1基を検出している。トレンチ内の全域を調査していないため不明であるが、少なくとも50棟近い堅穴が予想される。トレンチ調査のため堅穴の時期、規模とも不明であるが、調査区北端でⅢ期とⅤ期、西側でⅡ期とⅤ期の堅穴を確認している。

## IIb区 (第36図)

東側配石遺構群の西側に位置する。南北に長いトレンチで約400㎡を調査した。

堅穴建物跡21棟、土坑90基、柱穴を636個検出している。堅穴のうち時期が確定しているのは、中央北寄りⅡ期とⅢ期、そのほか北西端から中央、南側にⅣ期が5棟、北東壁際でⅢ期とⅣ期が重複している。そのほかほぼ全域に堅穴が分布するが、南側はやや薄くなる。北側は特に密集しており、ほとんど地山がなくなっている。

## III区 (第37図)

西側の配石遺構群の西端部に設置したトレンチで調査面積は235㎡である。

調査区のほぼ全域に遺構が分布しており、堅穴建物跡24棟、土坑7基、柱穴9個を検出している。各遺構の範囲を記録した後幅2mのサブトレンチを設定し、さらに50cm程掘り下げてその新旧を確認したが、詳細は明らかにできなかった。堅穴のなかには、径9m、幅7mを越す大型の建物があるほか、径6m以上、さらに径4～5mのものもある。トレンチ内からはⅡ～Ⅴ期の土器が出土しているが、重複する遺構のなかで最も新しいEH40-10堅穴の堆積土中からはⅤ期の土器が出土している。

## IV区 (第31・32図)

IV区は盛土遺構周辺に設定した調査区である。盛土遺構の内容確認のために南北に設置した中央トレンチ、その北西側で盛土遺構と配石遺構との間にその関係を確認するために設定した配石トレンチと配石南トレンチ、さらに盛土遺構の東西の範囲の確認を目的として設定したのがそれぞれ東トレンチ、西トレンチ1、西トレンチ2である。

中央トレンチ(第32図)347㎡では配石遺構1基、堅穴建物跡18棟、土坑10基、柱穴21個を検出している。そのほかトレンチ内のほぼ全面で遺構が重複しており、検出面で確認した堅穴は76棟を数えており、それを加えると94棟となる。部分的なものも含めて掘り下げた堅穴から出土した土器は大半がⅢ・Ⅳ期土器である。IV区は盛土遺構中に設定したトレンチであるが、南側のGA44・FJ44トレンチ内の堅穴建物跡はいずれも盛土①・②層を切っている。FH46トレンチ・FH48トレンチでは遺構の重複により盛土①・②層との新旧は確認できなかったが、Ⅲ期土器あるいはⅣ・Ⅴ期土器が出土しており、盛土遺構より新しい遺構が多い。

IV区で検出した堅穴建物跡では堆積土に特徴がある。人為的に埋め戻されたものが多いこと、特に暗褐色土、あるいは黒褐色土を主体とする層と褐色ロームを主体とする層とが同じ遺構内に堆積していること、堆積土中に特に前者に多いが、土器・石器などの遺物や炭化物・焼土粒などとともに骨片の含まれる例が非常に多いことが挙げられる(第32図)。焼土は堆積土中に焼土粒として多量に含まれるだけでなく、堆積土中に焼土ブロックとして含まれている。また、現地性焼土が堅穴の堆積土中や

検出面でも確認されている。炭化物のなかには明らかにその場で焼かれたと考えられる種子が多量に出土するものもある。FJ46-01堅穴建物跡の炉跡から出土した炭化種子は、炉跡を中心としてその周辺2m×1mの範囲から多量に出土している。種子の上には黄褐色土ブロックを含む暗褐色土が堆積しており、種子を燃やした後土を被せて炭化させたと考えられる。

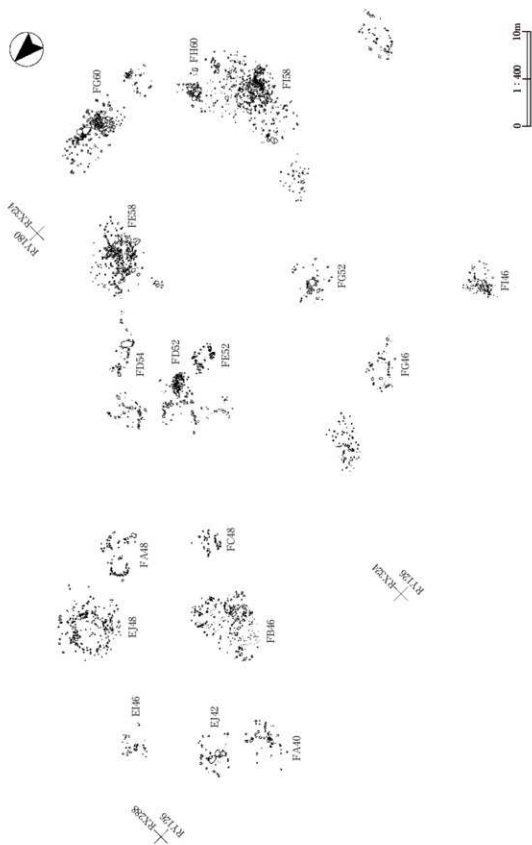
東トレンチ（第30・33図）は中央部南東端で盛土遺構の範囲を確認するために設定したトレンチである。調査区北西部のトレンチ断面で盛土②層を確認しており、盛土層の下層が東トレンチ周辺まで分布していることが確認できた。但し①層は確認できなかった。調査面積は33㎡で、堅穴建物跡3棟、土坑7基を検出している。Ⅱ-2期からⅢ期と考えられる堅穴建物跡をそれぞれ1棟ずつ調査している。GF56-01堅穴の堆積土1～3層からは遺物が多く出土している。調査区北端に位置するGE56-01堅穴は堆積土2層以下と床上に炭化材や焼土が残存しており焼失堅穴建物跡である。堆積土中から出土した土器は破片であるが、いずれもⅢ期のものである。重複する堅穴はこの堅穴より新しい遺構である。堅穴以外では土坑7基を検出している。またGE56-01堅穴から多量の遺物が出土している。西トレンチ（第30図）も盛土遺構の西側の範囲を確認するために設定したトレンチである。西トレンチ1で盛土①・②層、西トレンチ2で盛土②層を部分的ではあるが確認しており、盛土遺構の東西の範囲を確認することができた。西トレンチ1は調査面積29㎡で堅穴建物跡2棟、柱穴1個を検出している。堅穴建物跡は同じ場所でも重複している。遺物は破片であるが、Ⅳ古期とⅡ新期の土器が出土しているが、いずれもトレンチ断面中で確認した遺構であり、詳細は不明である。下層の堅穴の堆積土中からはササ類と同定された炭化物がまとめて出土している。西トレンチ2は盛土層も含む遺物包含層と考えられ、Ⅲ～Ⅳ期の遺物が出土している。なお西トレンチ2は旧地形の谷の始まり部分に相当する。

#### V区（第38図）

V区は配石遺構群の東側に位置しており、掘立柱建物跡に伴う柱穴の確認調査のために設定した調査区である。調査の結果、ほぼ全面で遺構が重複していた。検出した遺構は、堅穴建物跡が27棟、土坑23基のほか大小の柱穴240個である。そのほか基本層序Ⅱ層中から1～0.3mほどの石がほぼ中央部に南北に列状に分布していた。石の下にはⅡ層の黒褐色土が入り込んでおり、明らかに周辺の配石を抜いてこの場所に片づけたような状態で検出された。後述するが、V区内では一部配石が残存している土坑も検出しており、古代以降に抜き取られたものと考えられる。

堅穴建物跡は中央部に若干空白地があるが、その北側と南側に密集している。北側は西寄りの北端でⅤ期の堅穴1棟を確認しているほかは、Ⅲ期の堅穴をⅣ期の堅穴が切って、さらにⅣ期の堅穴が数棟ずつ重複している。長軸7～8m以上の大型堅穴が少なくとも3棟はある。炉の位置から入口を推定できるものが数棟あるが、いずれも西側が入口となっている。南側の堅穴群も同時期であるが、中央西端でⅢ期を1棟検出しているほかは、南端と東端でⅤ期の堅穴を数棟確認しており、東側の1棟も大型堅穴建物跡である。そのほか西寄りⅣ期の堅穴3棟が重複している。

このほかに掘立柱建物跡に伴う柱穴群の検出を目的に南端に小規模なトレンチを設定した。このトレンチでは柱穴は確認できなかったが、ほぼ全面で堅穴が重複していた。遺構検出が調査の目的だったため掘り下げは行なわなかった。

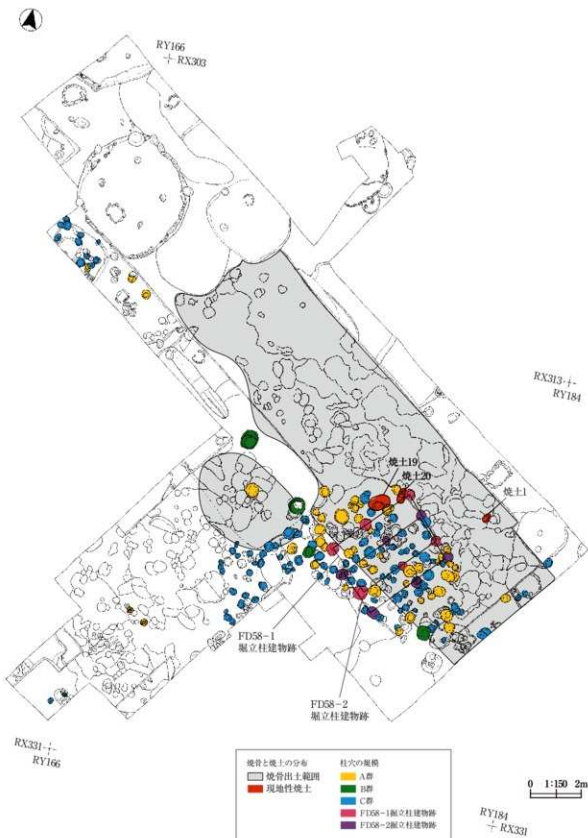


第25図 配石遺構全体図



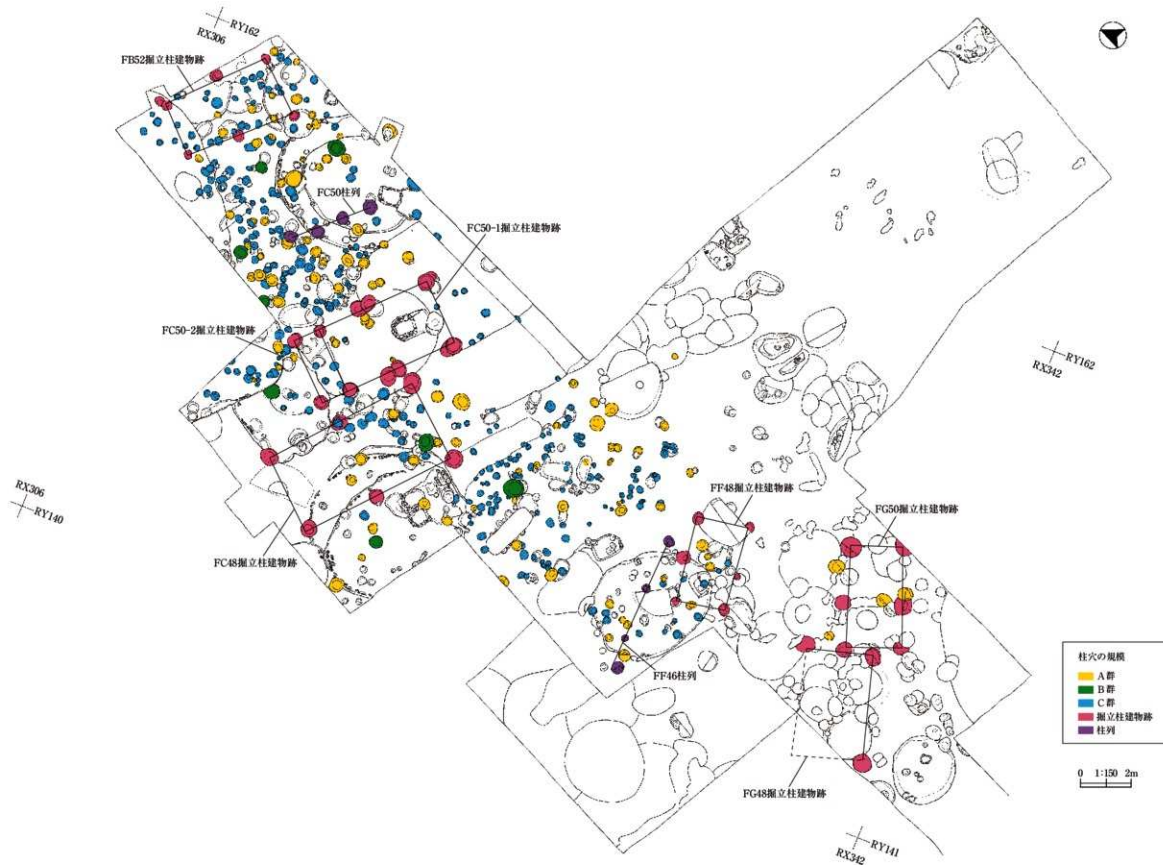


第26図 配石遺構・掘立柱建物跡・小判形土坑位置図

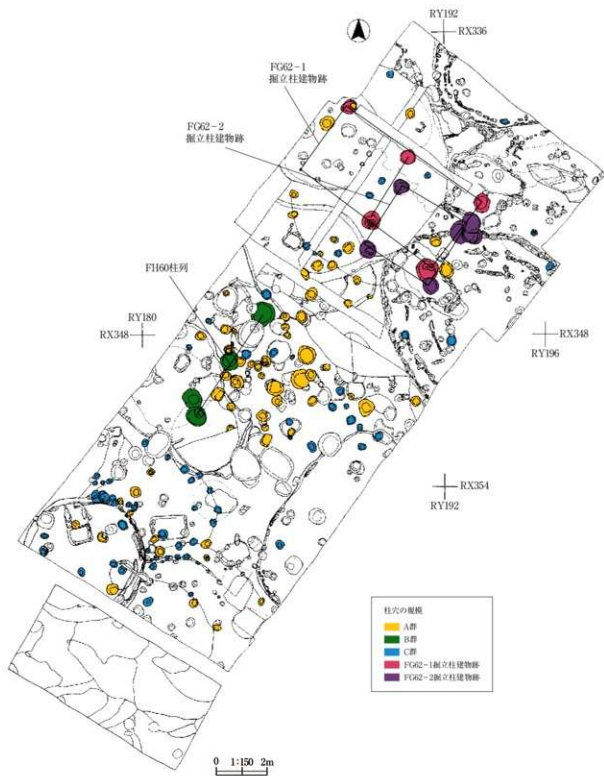


第27図 堀立柱建物跡と柱穴の規模別分布 (IIa区)

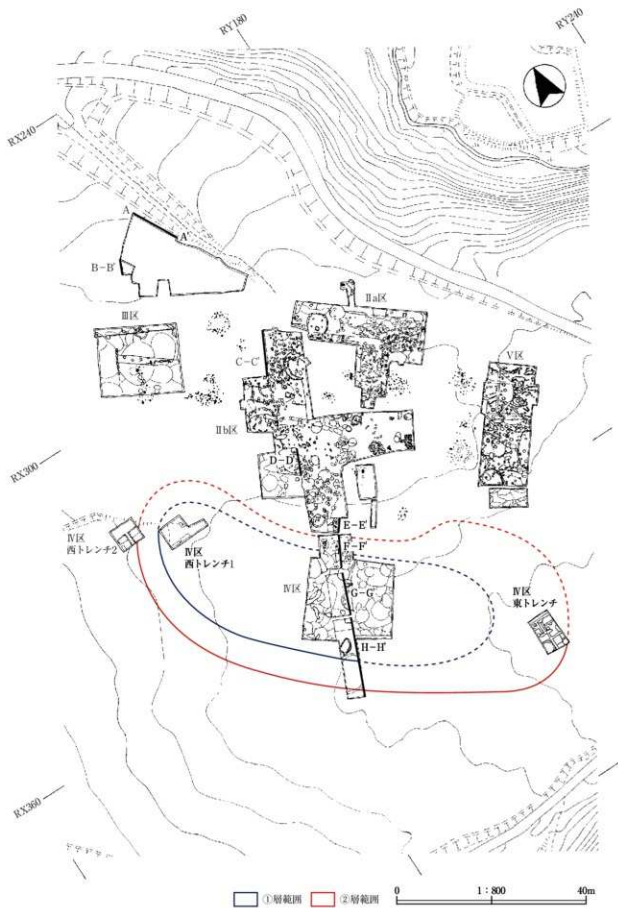




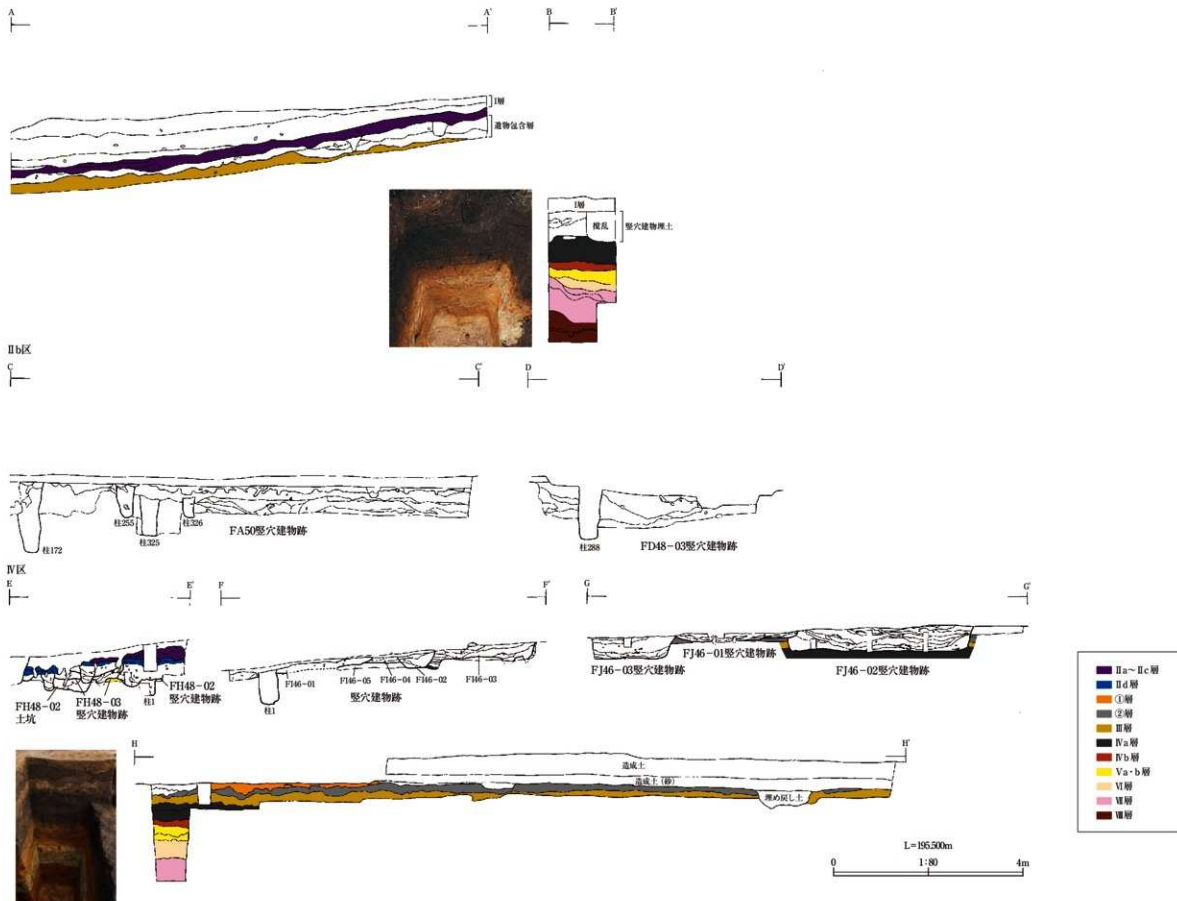
第28図 掘立柱建物跡と柱穴の規模別分布 (IIb区)



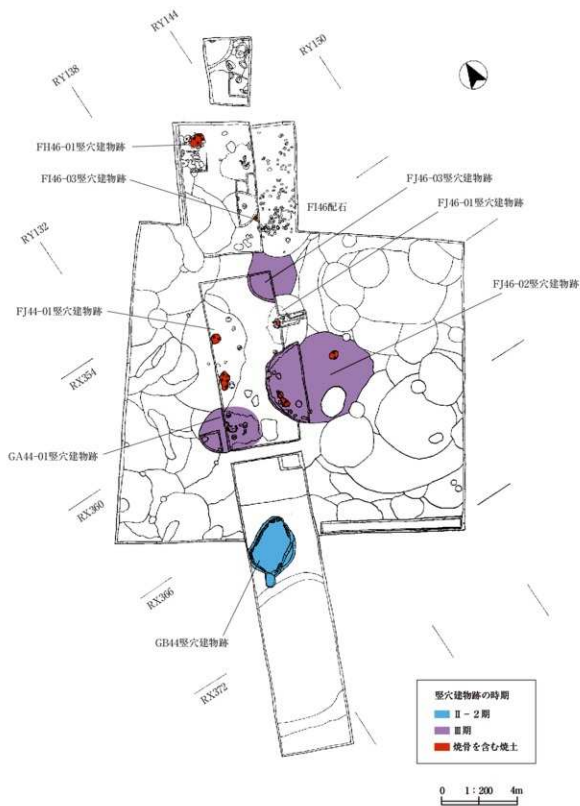
第29図 掘立柱建物跡と柱穴の規模別分布 (V区)



第30図 盛土遺構の推定範囲



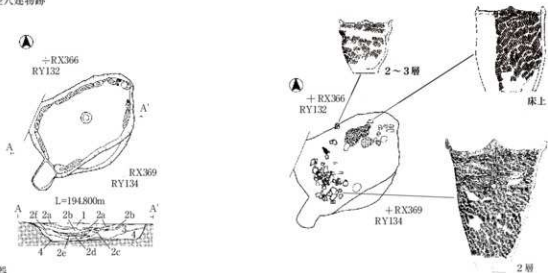
第31図 中央調査区における南北方向断面図



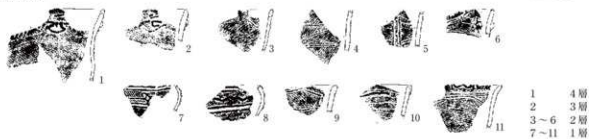
第32図 IV区遺構配置図



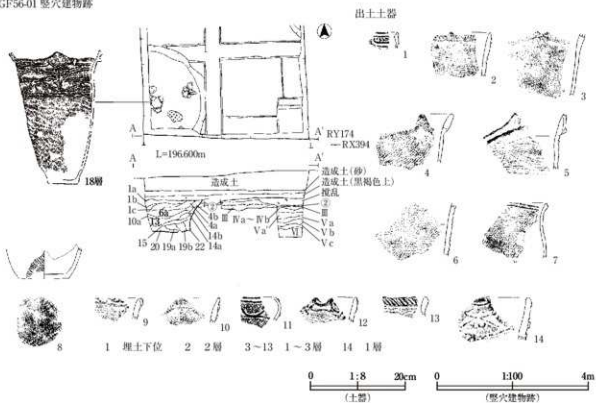
GB44 竪穴建物跡



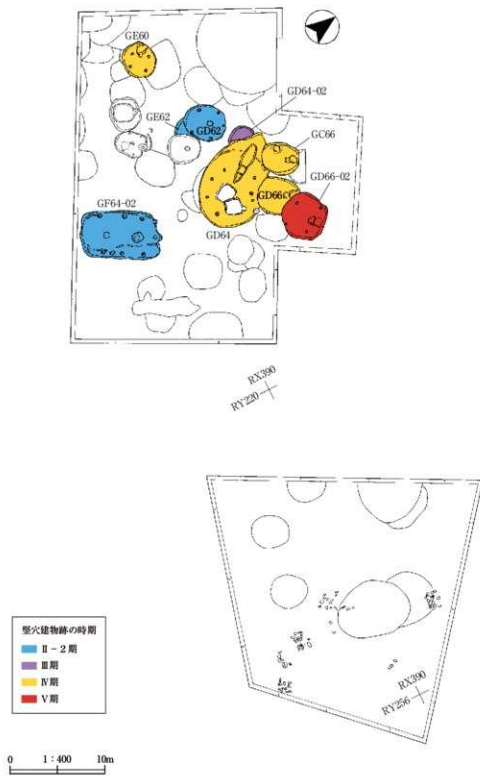
出土土器



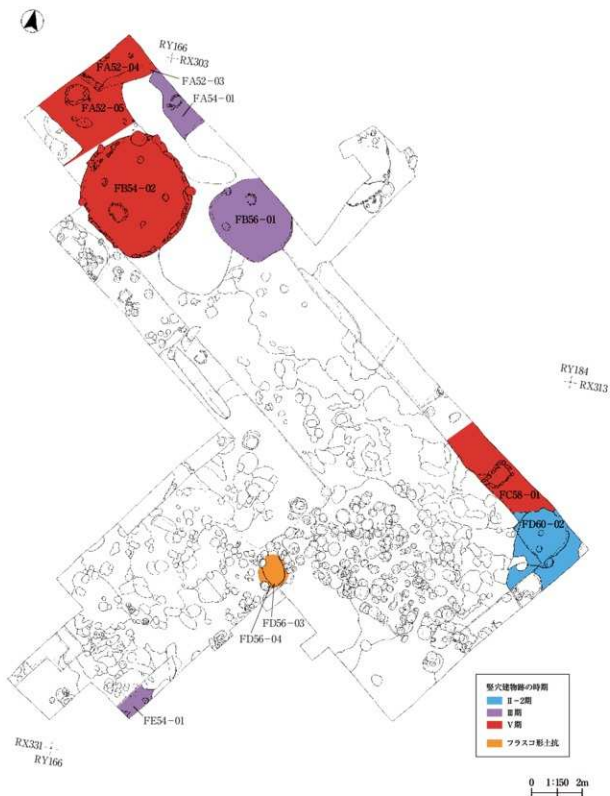
GF56-01 竪穴建物跡



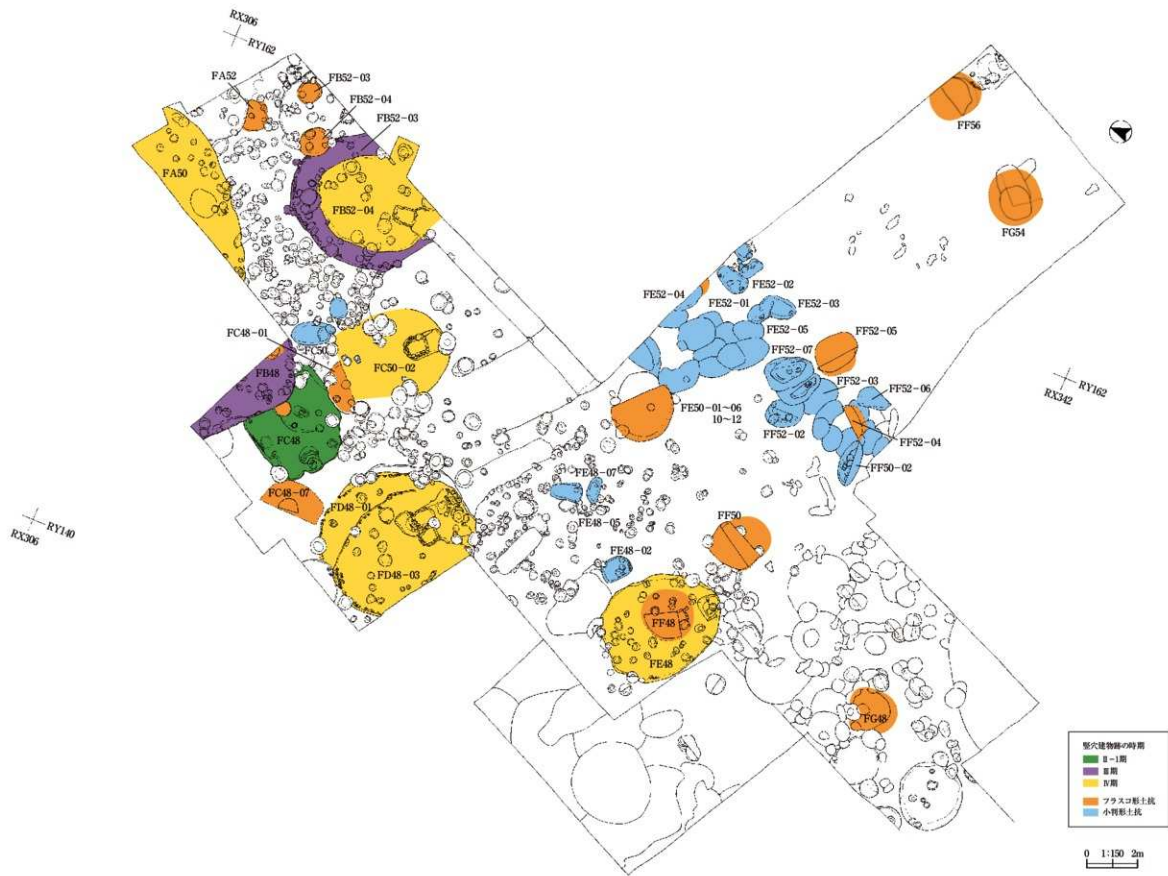
第33図 盛土遺構と重複する竪穴建物跡



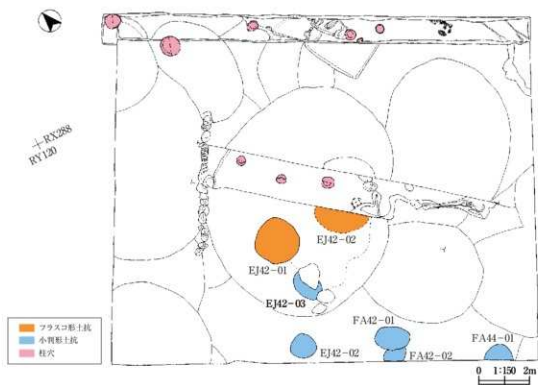
第34図 竪穴建物跡の時期別分布（I区）



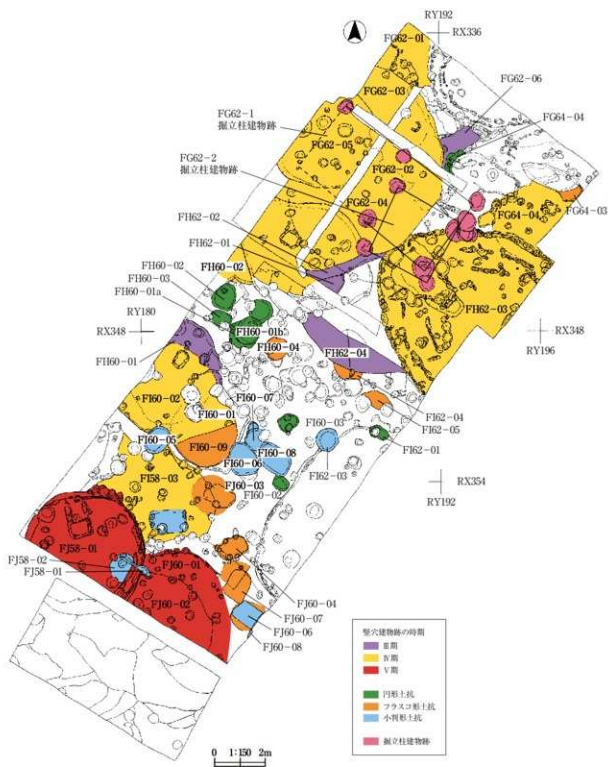
第35図 竪穴建物跡の時期別分布 (IIa区)



第36図 竪穴建物跡の時期別分布 (IIb区)



第37図 III区遺構配置図



第38図 竪穴建物跡の時期別分布 (V区)

### (3) 西側調査区の遺構群

西側調査区は中央から北西方向のDグリット10,460mのうち2,975mを調査している。平成2年の調査ではほぼ全域に遺構が分布することを確認しており、同年の調査結果により遺跡の保存が決定した。その後平成8年度から遺構復元のための調査を2年間実施している。平成19年度からは西端部の確認調査を実施し、ほぼ遺跡の範囲が確定している。

調査区北西端の約2,000m<sup>2</sup>は中世城館となっている。さらにその北側は明治以降に建てられた学校敷地や煉瓦製作のための粘土採取地として削平されている。

遺構は竪穴建物跡が28棟、土坑24基、埋設土器2基、陥穴土坑3基、そのほか小柱穴群を検出している。竪穴建物跡は主に南西から北西方向に延びる尾根状の段丘頂部から東側の緩やかな斜面に分布しており、28棟のうち23棟を調査している。竪穴建物跡は直径10m以上、あるいは7～8mの大型から、5～6m、さらに3～4mなど中型から小型のものまでである。竪穴建物跡は出土した土器や竪穴建物の特徴などから、御所野Ⅱ期からⅤ期までの遺構と考えられる。時期の確定している竪穴建物跡はⅡ期が4棟、Ⅲ期が1棟、Ⅳ期が8棟、Ⅴ期が6棟、さらにⅣ期かⅤ期のいずれかが3棟、不明1棟の23棟である。

土坑はやや西寄りの段丘頂部の平坦面で19基、西側の緩やかな斜面で5基の24基を検出している。いずれもⅤ層で検出していることから上部は削平されている可能性が高い。プラスチック土坑は2基検出しているが、いずれも直径1m以上の土坑で特に1基は2mを越す大型の土坑である。断面形が箱型の土坑は、直径1mを越す大型のものと0.5mの小型のものがある。以上の土坑はいずれも調査区北西部で検出している。小型の土坑は平面形が円形、あるいは楕円形で深さ30cm弱の浅い皿形土坑である。皿形土坑は竪穴建物跡の複式炉に伴う掘り込み部の可能性もある。そのほか長方形の浅い土坑を西端で、東側斜面下で埋設土器を2基検出している。いずれも正位の埋設土器であるが、それぞれⅡ群土器、Ⅳ群土器と時期を異にしている。

陥穴土坑はいずれも北西端で3基を検出している。長軸は北西方向が2基、北方向が1基で、長さ3mの溝状の陥穴土坑であるが、いずれも40cm前後と浅い。御所野遺跡の他地区の陥穴土坑と比較しても深さはほぼ3分の1程であり、検出層位がⅤ～Ⅵ層ということから周辺はかなり削平されている可能性が高い。以上の遺構群の時期は次のとおりである。

Ⅱ期は竪穴建物跡を4棟調査している。大型が1棟、東隣に径5m前後の中型とやや離れて小型2棟の4棟である。小型のDD26竪穴建物跡はややずれているが、そのほかの3棟は長軸方向が北ということで一致する。竪穴の出土土器はⅡ群土器が多いが、なかには隆線の間に刺突を伴う一型式古い土器が同じ竪穴建物跡で共伴している。平成19年度に調査した東側斜面下のテラス状の平坦面から円筒上層C式土器が出土しており、Ⅱ期でも比較的古い時期の遺構群と考えられる。竪穴建物群のほかに埋設土器1点がⅡ期に相当する。

西側調査区では円筒上層d式だけでなく、遺構外などから沈線を主体とした円筒上層e式なども出土しており、Ⅱ期でも変遷している。

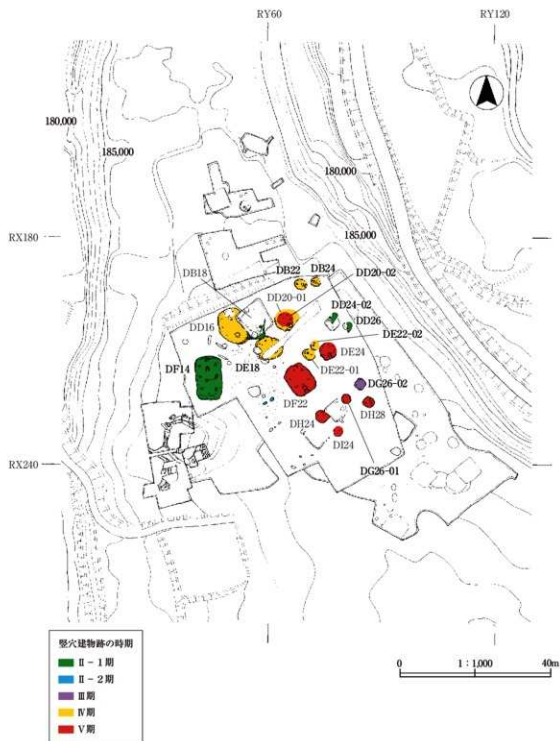
Ⅲ期は調査区の東南の斜面下でDG26-02竪穴建物跡1棟だけである。風倒木により攪乱されているためか、炉跡や柱穴は検出されなかった。竪穴建物跡以外には第Ⅲ群土器は出土していない。

Ⅳ期の竪穴建物跡8棟は調査区北側に分布している。長径10mの大型竪穴のほか、6m前後が2棟、4～5m前後が3棟、3m前後の小型竪穴が1棟である。

Ⅴ期の竪穴建物跡6棟は調査区中央で検出している。いずれも床面に炭化材が残っており、焼失している。径8mを越す大型のものが1棟、径4mの中型が1棟、3m前後の小形が4棟である。出土

土器の比較から大型と中型が1棟ずつ、それに小型2棟を一時期の竪穴建物群として復元している。

以上が各時期の明らかな竪穴建物の分布状況である。そのほかに遺物は出土していないが、複式炉をもつことからIV期かV期と考えられる竪穴建物跡が4棟ある。中型が1棟、小型が3棟である。そのほか時期不明が1棟、未調査が4棟である。いずれも調査区のほぼ中央に位置している。



第39図 竪穴建物跡の時期別分布 (西側調査区)



#### (4) 焼失竪穴建物跡

御所野遺跡では平成8年度の西側調査区の調査で良好な焼失竪穴建物跡の資料が得られたほか、各調査区でも検出しており19棟を数えている(第5表)。調査区毎の内訳は東側調査区が1棟、中央調査区はI区4棟、IIa区2棟、IIb区3棟の合計9棟、西側調査区9棟である。時期が判明している竪穴建物跡は15棟あり、東側調査区は1棟がV期、中央調査区I区はII期が2棟、IV・V期がそれぞれ1棟ずつある。配石遺構周辺のIIa区とIIb区は、トレンチ内で遺構が密集していることもあり時期を確定できないものが多いが、IIb区はIV期が1棟、残る2棟は遺構の切り合いなどからIII～IV期と考えられる。西側調査区はほぼ全面を調査し完掘していることからいずれも時期は確定しており、II期が2棟、IV期が1棟、V期が6棟となっている。

#### 焼失竪穴建物跡の概要

##### II期(第5表)

中央調査区I区では大型竪穴建物跡(GH68)とそれよりやや小さい竪穴建物跡(GF64-02)の2棟を調査しており、いずれも竪穴の北東部に部分的に炭化材が残存するほか、中央部の床面には焼土が形成されている。

##### GH68(第43・44図)

長軸120m以上の大型竪穴建物跡で北東部壁寄りに炭化材がまとまって出土している。16点を樹種同定したが、いずれもクリで、1点だけクリ近似種であった。遺物が多量に出土しているが、床上および4～5層から出土した遺物群と2～3層中から出土した遺物群とに区別でき、それぞれ時期を異にしている。2層中で石囲炉を検出していることから、竪穴凹地を利用した祭祀行為が行われた可能性もある。2層中には焼土粒や炭化材も微量だが含まれている。

##### GF64-02(第45・46図)

長軸8mの大型竪穴建物跡で、床面の中央と堆積土中に炭化材や焼土が残存するとともに1層中に石囲炉がある。遺物とともに焼土粒や炭化材の小片が出土することから同じく祭祀を伴う廃棄行為が行われた可能性がある。

##### DF14(第47図)

南北に長い大形竪穴建物跡で北壁側に炭化材が集中している。埋設土器は5基あり、第II群土器が用いられている。第II群土器を含む4～5層出土遺物は焼失時の一括遺物と考えられる。1～3層では第IV群土器が出土しており、竪穴建物跡に一括廃棄されたものである。

##### DD18

竪穴建物跡の大部分は古代の遺構により削平され北側の一部しか残存していないため詳細は不明であるが、北壁側に炭化材が残存している。遺物は土器片が2点出土しているが、いずれもII群土器である。

##### IV期(第5表)

##### GD64(第48図)

土器・石器が出土している。特に土器が多く出土層位から次のように3区分した。

床上や6～7層の出土遺物1～3は焼失時の一括土器と考えられる。4～11は2～5層、12～15は1層から出土している。そのほか1層～5層から破片資料も大量に出土している。炭化材は15点同定しており、14点がクリである。

#### FB52-04 (第36図)

中央調査区のⅡb区で検出した径5×3.7mの中型堅穴建物跡である。床上に炭化材が分布するほか堆積土4層以下に焼土粒や炭化材、さらに骨片が多く含まれている。炭化材の樹種、さらに出土遺物の詳細は不明である。

#### DE18 (第49図)

西側調査区の中型堅穴建物跡である。堅穴の一部は中世の溝で壊されているが、炭化材は周縁部に多く残存している。割れた小片とやや長く太い材とがあるが、前者はほぼ床上、後者は堆積土中から出土しており、南隣のDF22の出土状況と酷似している。なかには直立したままの材があり、小ビットと重なることから壁際の杭に相当するものである。また板状の割材があるほか、東端の張り出し部分からは樹皮らしいものも出土している。樹種鑑定を行った100点のうち、87点がクリ、オニグルミ、ニガキ、ハリギリ、サクラ属などが1点ずつ、そのほかは広葉樹まで鑑定できるのが8点、選孔材が1点であった。

そのほかⅡb区の大形堅穴(FC50-01、FA50-01)の2棟もⅢ期、あるいはⅣ期の堅穴であるが、堅穴の一部しか調査していないため詳細については不明である。

#### V期 (第5表)

東側1調査区で1棟、中央1調査区で1棟、西側調査区が6棟となっている。東側と中央調査区の2棟はいずれも小型の堅穴建物跡(HD158、GD66-02)である。

#### HD158 (第50図)

長軸3m程の小型堅穴で、堅穴内に柱穴はない。炭化材はいずれも床上10～15cmの堆積土1層から出土している。径10cm前後の横断面形が丸いものが多い。床面から6個体の土器が出土しており、そのうち2点には漆が付着している。樹種鑑定を行った炭化材26点のうち23点がクリ、そのほかケヤキ、ハリギリ、広葉樹が各1点含まれていた。

#### GD66-02 (第51図)

長軸5m前後の堅穴で、南東部から南側の壁際床面に炭化材、床面上5～10cmの2層中で焼土を検出している。堆積土2～3層にはいずれも炭化材や焼土粒が含まれており、火災時に堆積した土層と考えられる。炭化材は15点の樹種を同定したところ、11点がクリで、ほかはニレ属が2点、コナラ属1点、広葉樹1点であった。トックリ形土器が6点出土しており、4点が出入口の反対側、2点が出入口側から出土している。そのほか鉢形土器も1点出土している。

西側調査区の6棟は、大型堅穴(DF22)1棟、中型堅穴(DE24)が1棟、そのほか小型堅穴(DH28、DG26、DI24)が3棟、その他規模不明な堅穴が1棟ある。

#### DF22 (第52・53図)

床面のほぼ全面に炭化材が残る保存良好な堅穴である。炭化材は出土層位から3群に大別しており、その特徴から建物が焼け落ちた過程が推定できる。大半は屋根材と考えられるが、壁際では割材を使用した腰板がそのまま残存している。500点樹種同定しているが、クリ材が444点、そのほかは第52図のとおりである。床面には北西部の壁際に石棒と花崗岩が並列し、その内側に三角形の扁平な花崗岩が直立していた。出入口と反対の北西部からは漆塗りの壺形土器やトックリ形土器、堅穴の中央部両端からは石皿、石斧、石鎌、磨石、炭化種子、さらに円形土器片版、棒状土製品などが出土している。

#### DE24 (第50図)

床面のほぼ全面から炭化材が出土している。いずれも幅10cm前後のものが多く、堅穴の中心に向かって放射状に残存するものとそれに直行するものがある。なかには壁際に板状に直立しているものもあり、腰板の痕跡と考えられる。床上から土器や石器が出土したほか、北西部の床面からも花崗岩が出土した。入口と炉跡を結ぶ中軸線上に深鉢形土器が倒立した状態で埋設されていた。炭化材は127点を樹種鑑定したところ、98点がクリで、そのほか29点はオニグルミなどの落葉広葉樹であった。

#### DH28 (第51図)

長軸3mほどの小型の堅穴である。炭化材は堅穴のほぼ全面から出土しているが、中央部はやや少なく、周縁部が多い。いずれも幅10cm以下の全体的にやや小さい。いずれも床より15cmほど上から出土している。大形、中形、小形の深鉢形土器が出土している。炭化材は7点樹種鑑定したところ、いずれもクリであった。

#### DG26 (第51図)

長軸2.4m程度の小型の堅穴である。炭化材は中央部から南側にかけてまとまって出土している。いずれも細めのものが多く、幅広いもので5～6cm、長さも10cm程度のものである。いずれも床面から10～15cm程度上から出土した。樹種は不明である。

#### DI24 (第51図)

長軸2.5mほどの小型の堅穴である。斜面下に位置するため北東側は残存していない。炭化材は炉跡の周辺から集中して出土したほか、堆積土中にも多く含まれている。樹種は不明である。

#### DD22

形態及び規模も不明であるが、小型の堅穴と考えられる。複式炉の形態などからⅤ期と考えられる。堅穴内に炭化材や焼土が分布しているが、詳細は不明である。

以上のほかにⅡa区の2棟 (FC56-02、FB58-02) も床面に炭化材や焼土が分布しており、焼失したと考えられるが、トレンチ内で部分的にしか確認していないため所属時期も含めてその詳細は不明である。

#### 焼失堅穴建物跡の時期

御所野遺跡はⅠ期からⅤ期までの遺跡であるが、焼失堅穴建物跡はⅠ・Ⅲ期を除いた各時期のものを確認している。Ⅲ期についても中央Ⅱa区とⅡb区で検出した堅穴建物は限られたトレンチ調査のため確定できなかったが、周辺の遺構群との重複関係からⅢ期の可能性が高いものも含まれている。以上から御所野遺跡では、Ⅱ期からⅤ期の各時期の各堅穴建物が焼けていることはほぼ確実である。しかもⅡ期のうち、西側調査区の北端に位置するDF14建物跡は円筒上層c式土器が含まれており、集落の成立時期から焼失建物があったことになる。特に西側調査区で多いが、そのうちの4棟はほぼ同時期と考えている。調査範囲が限られていることから必ずしも全体の時期毎の特徴を示せないが、各建物数はⅡ期4棟、Ⅲ～Ⅳ期2棟、Ⅳ期3棟、Ⅴ期は8棟、時期不明が2棟となっており、Ⅴ期が最も多くなっている。

#### 焼失堅穴建物跡の規模 (第5表、第40図)

焼失堅穴建物跡は大型、中型、小型のものがあり、特に規模による偏在は認められない。長軸が10m以上の大型堅穴が4棟ある。中央Ⅰ調査区ではGD64 (Ⅳ期)、GH68 (Ⅱ期)、中央Ⅱb区の

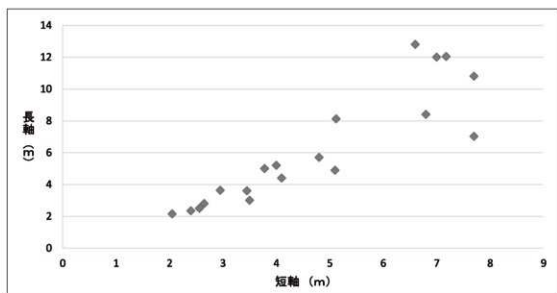
FA50（Ⅱ期）、西側調査区のDF14（Ⅱ期）の4棟である。床面積の判明している3棟はいずれも60㎡以上あり、西側調査区のDF14が最も大きく床面積は65㎡である。長軸7～8m以上を測る竪穴建物跡は、中央Ⅰ区のGF64-02（Ⅱ期）、西側調査区のDE18（Ⅳ期）、DF22（Ⅴ期）の3棟である。

長軸4～6m、床面積が14～20㎡の中型竪穴建物跡は6棟ある。最も保存状態の良いのは、西側調査区で最初に土屋根建物と確認したDE24（Ⅴ期）である。竪穴内には良好に炭化材が残存しており、貴重な復元資料となった。

小型竪穴も比較的多い。いずれも長軸4m以下で、床面積も10㎡以下である。いずれもⅤ期の竪穴で、東側調査区で1棟、西側調査区で4棟ある。

第5表 御所野・馬場平遺跡焼失竪穴建物跡一覧表

No.	名称	調査区	規模 (m)	面積 (㎡)	壁高 (m)	平面形	伊の形態	時期
1	HD158	東側Ⅰ調査区	3.61 × 2.95	7.30		楕円形	複式伊Ⅲ	Ⅴ期
2	GD64	中央Ⅰ調査区	10.80 × 7.70	89.60		楕円形	複式伊Ⅰ	Ⅳ期
3	GD66-02	中央Ⅰ調査区	4.89 × (5.10)	(17.30)		楕円形	複式伊Ⅱ	Ⅴ期
4	GF64-02	中央Ⅰ調査区	8.12 × 5.12	34.75		長方形	土器埋設伊Ⅰ 地床伊Ⅰ 石組伊Ⅱ	Ⅱ期
5	GH68	中央Ⅰ調査区	12.0 × 7.0	66.00	96 ~ 100	長方形	石圍伊Ⅱ 土器埋設伊Ⅱ	Ⅱ期
6	PH58-02	中央Ⅱa調査区	不明	不明	34 ~ 38	不明	不明	不明
7	FC56-02	中央Ⅱb調査区	6.0m(推定)	不明	47	不明	不明	不明
8	FA50-01	中央Ⅱb調査区	10m以上	不明	不明	不明	不明	Ⅲ～Ⅳ期
9	FIE2-04	中央Ⅱb調査区	(5.00) × (3.78)	不明	27	楕円形	複式伊Ⅰ	Ⅳ期
10	FC50-01	中央Ⅱb調査区	(5.40) × 不明	不明	37	不明	不明	Ⅲ～Ⅳ期
11	DD18	西側調査区	(5.20) × 不明	不明	1 ~ 37	隅丸正方形	不明	Ⅱ期
12	DE18	西側調査区	7.02 × (7.70)	(32.51)	4 ~ 38	不整五角形	複式伊Ⅱ	Ⅳ期
13	DF14	西側調査区	12.04 × 7.18	65.06	57 ~ 98	長方形	土器埋設石圍伊Ⅱ 埋設土器	Ⅱ期
14	DE24	西側調査区	4.70 × (4.10)	(14.12)	3 ~ 30	楕円形	複式伊Ⅱ	Ⅴ期
15	DF22	西側調査区	8.43 × 6.88	46.91	0 ~ 70	楕円形	複式伊Ⅱ	Ⅴ期
16	DH28	西側調査区	3.00 × 3.50	7.03	22 ~ 51	円形	複式伊Ⅲ	Ⅴ期
17	DG26	西側調査区	2.34 × 2.40	3.97	10 ~ 32	円形	複式伊Ⅱ	Ⅴ期
18	DH24	西側調査区	2.50 × (2.56)	(4.81)	2 ~ 15	円形	複式伊Ⅱ	Ⅴ期
19	DU22	西側調査区	不明	不明	不明	不明	複式伊Ⅱ	Ⅴ期
20	A4	馬場平地区	2.80 × 2.65	6.53		隅丸正方形	地床伊Ⅱ	Ⅰ～Ⅱ期
21	B2	馬場平地区	3.60 × 3.45	9.64		円形	地床伊Ⅱ	不明
22	B3	馬場平地区	2.15 × (2.05)	(3.77)		円形?	地床伊Ⅱ	不明
23	C1	馬場平地区	5.70 × 4.80	23.55		楕円形	地床伊Ⅱ	Ⅱ期
24	C7	馬場平地区	12.80 × 6.60	76.91		長方形	土器埋設伊Ⅱ + 地床伊Ⅱ	Ⅱ期
25	C13	馬場平地区	(5.20) × (4.00)	(17.02)		楕円形	地床伊Ⅱ	Ⅱ期



第40図 御所野・馬場平遺跡焼失竪穴建物跡の規模

### 炭化材・焼土の出土状況

これまでの調査で、最も炭化材や焼土が良好に残っていたのは西側調査区のDF22堅穴建物跡である。床上のほか、堆積土3層中、さらには3層上面まで焼土が形成され、さらに炭化材が分布している。堅穴西壁もかなり強い火力を受け真っ赤に焼けている。炭化材は出土層位から3層上の小片、3層中の比較的大柄な材、床上の弾けた材に3分したほか、主に西側壁際に連続して直立したままの材もある。このような炭化材や焼土、さらに遺物などの出土状態は、焼失実験の結果から焼失時に一括して形成されたものであることを確認している。同じように屋根に土が載っていたことを具体的に示すことができた。焼失堅穴建物の場合、堆積土中から炭化材や遺物が出土した場合でも一括遺物として考えることが可能である。

東隣のDE24でも炭化材が良好に残っていた。同じく床面だけでなく堆積土中にも残存しており、同じく一括遺物と考えられる。西南壁際に確認した板材は、堅穴壁に設置した腰板と考えられる。また明らかに両側を削り込んでいる炭化材もあり、建築材にはそのままの丸材だけでなく、加工したものがかなり使用されていることがうかがえる。DF22北側のDE18も炭化材が良好に残存しているが、堅穴中央が中世の溝により壊されている。東側調査区のHD158も炭化材が良好に残っていた。いずれも床上10～15cm上から出土しており、屋根の一部が崩落した後に焼け落ちた際の建築材と考えられる。必ずしも中心部への整然とした放射状配置ではないが、堅穴の外から内側へ長く残る材が多く、柱穴がないことから又首などの構造材の可能性もある。炭化材は径10cmと太く長いものが多い。以上の4棟以外はいずれも部分的に炭化材や焼土が残っているものが多い。

### 炭化材の樹種

縄文時代の建築材としてクリが多用されることは以前から知られているが、御所野遺跡で検出した焼失堅穴建物跡から出土した炭化材も大半はクリ材である(第45・49・50・52図)。各堅穴はⅡ期が1棟、Ⅳ期が1棟、Ⅴ期が3棟であるが、各時期ともクリを主体的に使用しておりその割合もほぼ同じである。5棟の堅穴以外にも数量は少ないが、4棟で樹種を鑑定しておりいずれも大半はクリ材であった。クリ材以外の炭化材も11種出土しているが、いずれも少量であり、建築材なのも含めて使用方法は不明である。そのなかで西側調査区のⅤ期の堅穴ではほぼ同時期の可能性が高いDF22とDE24からオニグルミがまとまって出土している。しかも第50・52図のように1ヶ所に集中せず分散していることから建物の特定部分に使用されている可能性もある。ただ時間的にはⅤ期に限られている。馬場平遺跡C7堅穴建物跡はⅡ期の大型堅穴である。多量の炭化材が出土したが、この堅穴でもクリが90%以上を占めており圧倒的に多い。

### 遺物の出土状況

今回検討した焼失堅穴建物跡は19棟であるが、出土遺物量は各堅穴によってかなりバラつきがある(第41図)。詳細に出土状態を検討したところ、各遺物は焼失時の堅穴内にあった一括遺物(A群)と焼失後堅穴に廃棄されたもの(B群)とに区分できた。

ここでは遺物の出土状態から各堅穴群を次のように分類する。

#### I群 A群だけでB群が含まれないもの

西側調査区が最も多く6棟、そのほか中央調査区、東側1調査区で1棟ずつの8棟である。いずれもほぼ完形品に近い土器が出土し、なかにはトックリ形土器のような特殊な土器(DF22、GD64-02)や漆などの付着した土器(HD158、DF22)が出土している。DF22では堅穴奥壁際に花崗岩を設置し

たり、石棒や立石が直立したまま残存していた。土器以外では石鏃や石斧、石皿、磨石、敲石などのほか、棒状土製品、円形土器片版なども出土している。花崗岩は隣接しているDE24でほぼ同じ位置に配置されている。以上の出土遺物はいずれも堅穴焼失時に堅穴内にあったものである。

## Ⅱ群 B群が多く含まれるもの

中央調査区ではⅡ期が2棟（GH68、GF64-02）、Ⅳ期が1棟（GD64）で、長軸が10mを超すか、それに準じた8m以上の大きい堅穴である。西側調査区でも径12mを越す大型堅穴（DF14）が1棟ある。以上の堅穴のうちⅡ期の3棟とⅣ期の1棟では遺物の出土状態がやや異なっている。前者の場合出土遺物は土器・石器の他、周辺に焼土があったり、土中に焼土粒、あるいは炭化材やその小片が含まれ、しかも完形品に近い土器が多いのに対して、後者は完形品に近いものもいくつか含まれるが圧倒的に小破片が多い。以下4棟の遺物出土状況について詳述する。

### GH68（第43・44図）

堆積土は1～5層までであるが、最下層の5層には炭化材や焼土が含まれており、焼失時に屋根、あるいは周辺から一気に流入したと考えられることから、床上や5層出土の遺物は焼失時の一括遺物と考えられる（A群）。B群の出土遺物は3層中と3層上面から出土している。前者では焼土面を2ヶ所確認しており、後者にはかなり上位であるが石組み炉が伴う。石組炉のなかに焼土面は形成されていないが炭化材が残存しており、炉として利用したことは確実である。以上の遺物は前者はⅡ期、後者はⅢ期のものである。

### GF64-02（第45・46図）

堅穴内には1～6層が堆積している。同じく最下層の5～6層は焼失時の堆積土と考えられ、出土した遺物はA群である。B群の遺物群は、1～2層と3～4層とに区分される（第45図）。前者はⅡ期、後者はⅢ期を主体とする遺物群で、いずれも堅穴よりはやや新しい時期の遺物である。周辺では焼土を検出しており、炭化材の小片や焼土粒も出土することから同じく凹地を利用した廃棄行為が行われたと考えられる。

### DF14（第47図）

堅穴内の堆積土は1～6層に区分した。炭化材や焼土が分布することから4～6層は焼失時の堆積土と考えられ、出土した遺物も堅穴に伴うと考えられる。床上の埋設土器5点も同時期のものである。以上の遺物（A群）はいずれもⅡ期に相当する。2層中からも多くの遺物（B群）が出土している。出土する遺物はいずれもⅣ期のものであり、堅穴が廃棄された時期とは時間的な間隙がかなりある。また、周辺ではDD16大型堅穴などⅣ期の堅穴数棟を調査している。

### GD64（第48図）

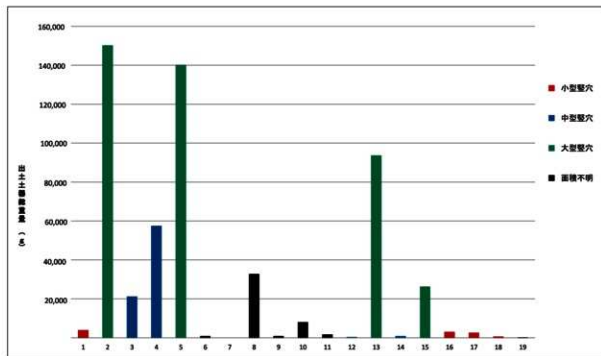
1～7層まで分層しているが、最下層の6～7層は堆積土層や遺物の出土状態などから焼失時に堆積したと考えられ、特に7層中には比較的大きな炭化材が含まれている。床上や6～7層からは粗製土器のほかⅣ期と認識できるものもある。ただ以上のA群土器は少なく、大半が5層以上の堆積土から出土したB群土器で、3層と5層から炭化材とともに出土している。

以上4棟の堅穴はいずれも大型堅穴か、あるいはそれに準ずる規模の大きい堅穴であり、堅穴焼失後窪地を利用して遺物の廃棄行為を行った可能性が高い。しかも以上の4棟はいずれも柱穴跡の観察や床面に残る周溝跡などの痕跡から少なくとも2回は建て替えを行っている。

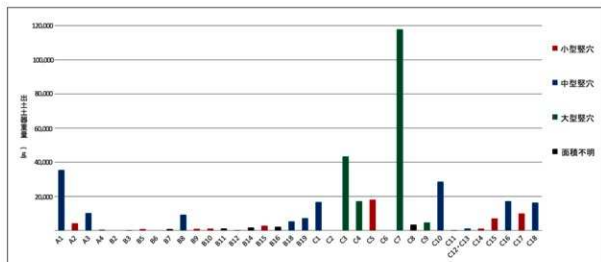
以上御所野遺跡から出土した焼失堅穴建物跡群は、焼失後の扱いから大別することができた。ひとつは焼失後堅穴を再利用する一群（Ⅱ期～Ⅳ期）と焼失後そのまま放置される一群（Ⅴ期）があるこ

とが明らかになった。前者の場合、いずれも立て替え後に焼失していることと焼失時に必ずしも遺物を伴うわけでもない。それに対して後者の場合、ほぼすべての堅穴から完形土器が出土するとともに、なかにはDF22、GD66-02のようにトックリ形土器のような特殊な土器がまとまって出土したり、漆などの彩色土器、あるいは西側調査区の2棟のように花崗岩を堅穴内に配置したりするなど、きわめて祭祀的な色彩が強くなる。当初後者の堅穴建物群は、御所野遺跡の最終段階のV期にあたり廃棄利用がされないものと考えていたが、その後土器の細分により焼失した堅穴はV期でも古い時期のものでその後も集落が継続していたことが明らかになった。以上から御所野遺跡の焼失堅穴はより祭祀的な意味で焼かれたと考えた方がよさそうである。

(高田 和徳)

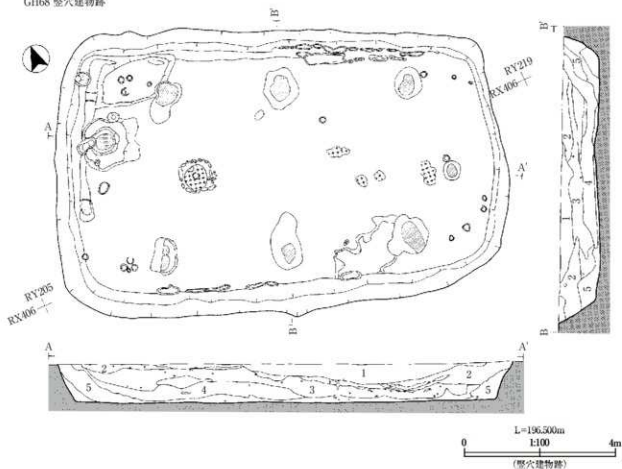


第41図 御所野遺跡焼失堅穴建物跡出土土器総重量 (No.は第5表と対応する)

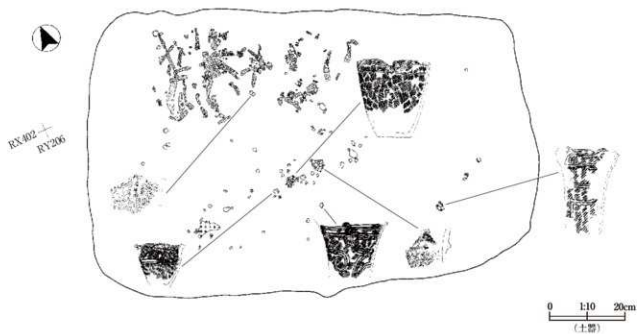


第42図 馬場平遺跡堅穴建物跡出土土器総重量

GH68 竪穴建物跡



GH68 竪穴建物跡  
4-5層・炭化材出土状況

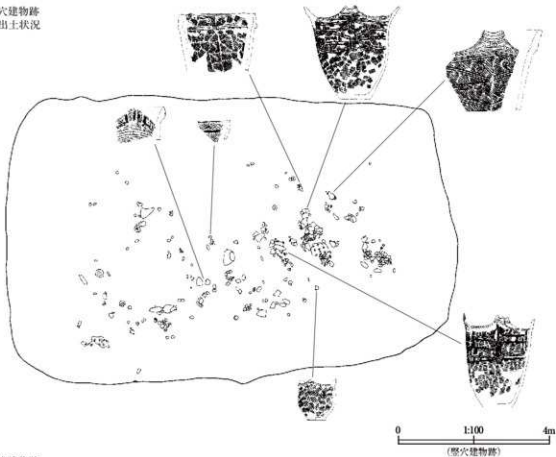


第43図 焼失竪穴建物跡と遺物出土状況(1)



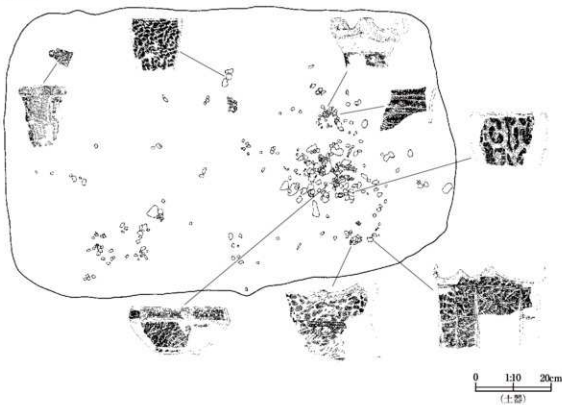
GH68 竪穴建物跡  
3層土器出土状況

RX402 +  
RY206



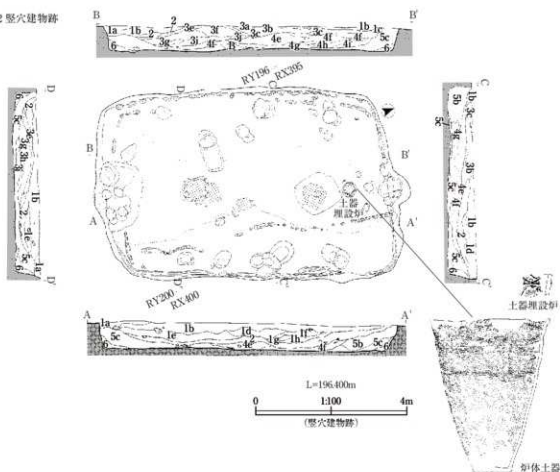
GH68 竪穴建物跡  
2層土器出土状況

RX402 +  
RY206

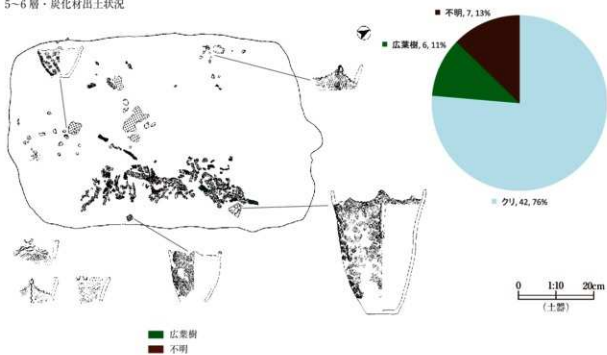


第44図 焼失竪穴建物跡と遺物出土状況 (2)

GF64-02 竪穴建物跡

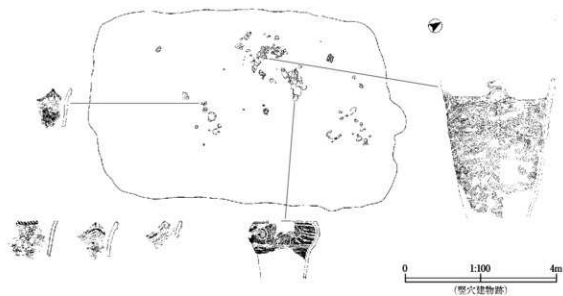


GF64-02 竪穴建物跡  
5-6層・炭化材出土状況

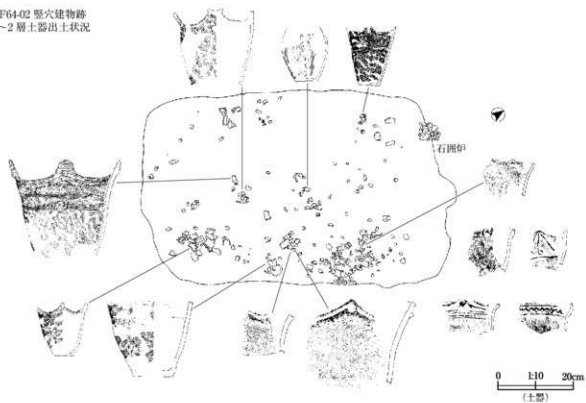


第45図 焼失竪穴建物跡と遺物出土状況 (3)

GF64-02 竪穴建物跡  
3~4層土器出土状況

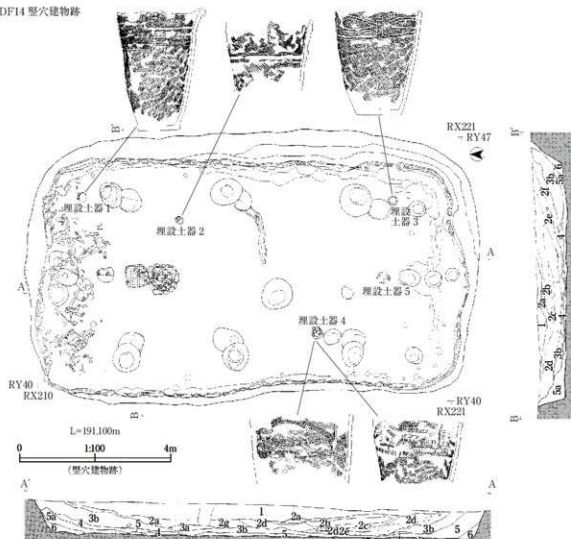


GF64-02 竪穴建物跡  
1~2層土器出土状況

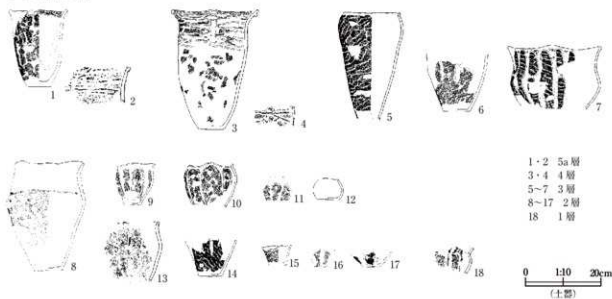


第46図 焼失竪穴建物跡と遺物出土状況(4)

DF14 竪穴建物跡

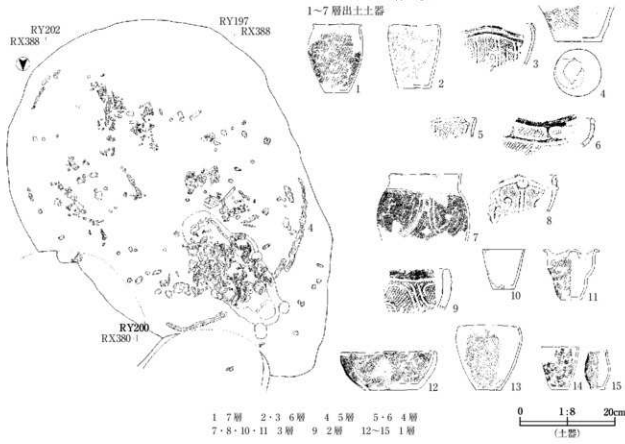
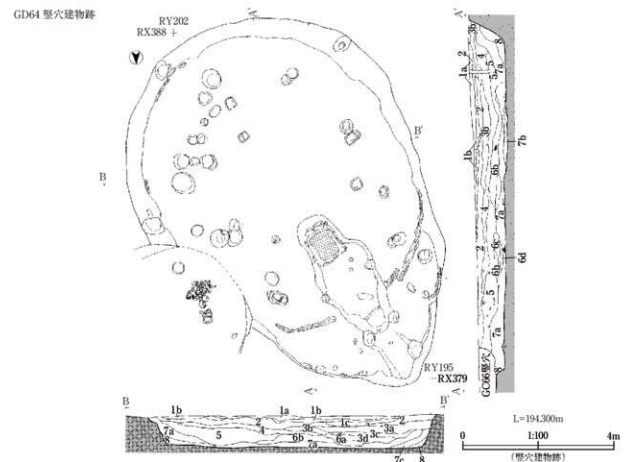


1~5a 層出土土器



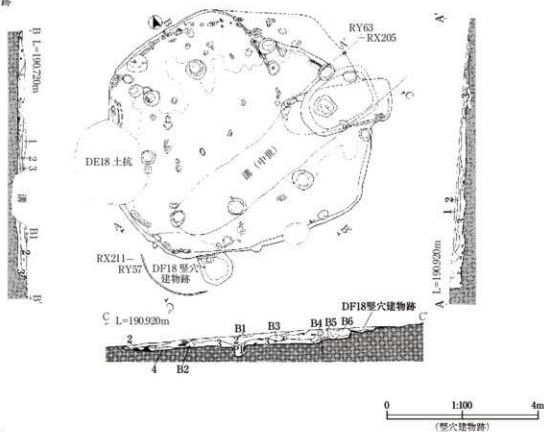
第47図 焼失竪穴建物跡と遺物出土状況 (5)

GD64 竪穴建物跡

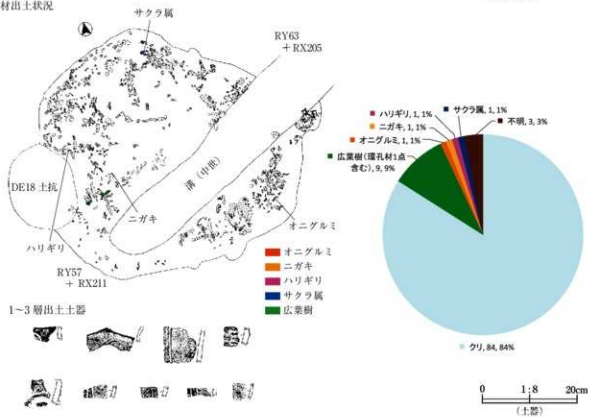


第48図 焼失竪穴建物跡と遺物出土状況 (6)

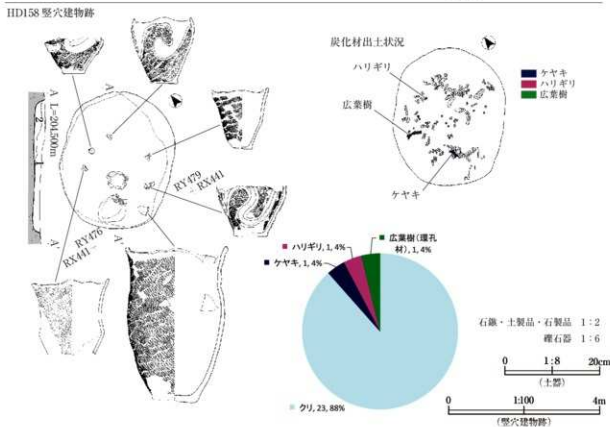
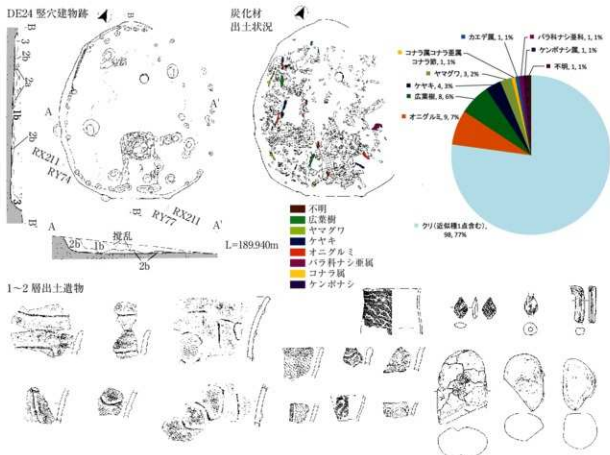
DE18 竪穴建物跡



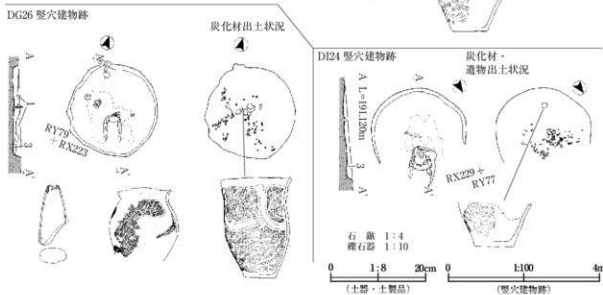
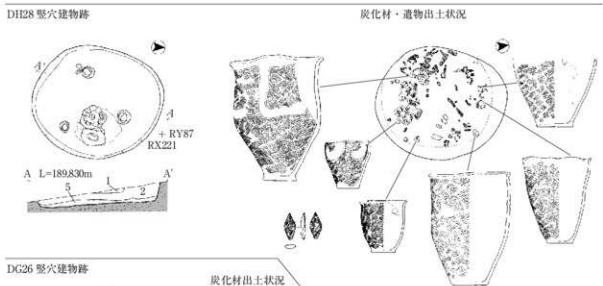
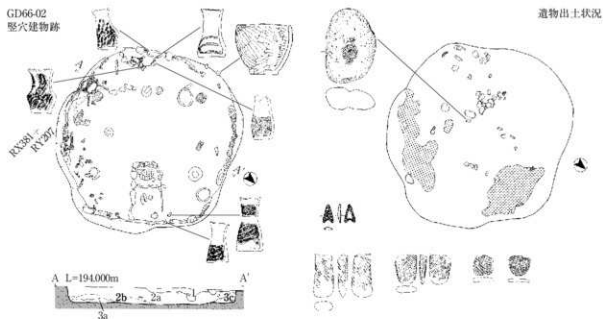
炭化材出土状況



第49図 焼失竪穴建物跡と遺物出土状況 (7)



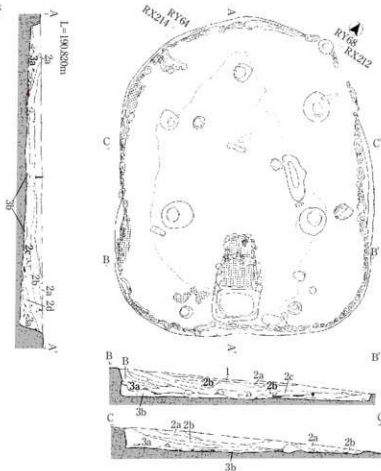
第50図 焼失竪穴建物跡と遺物出土状況(8)



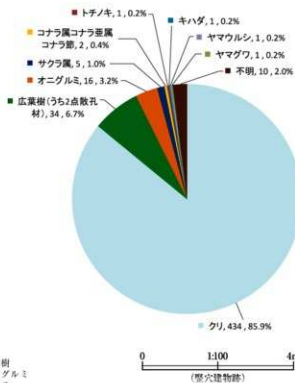
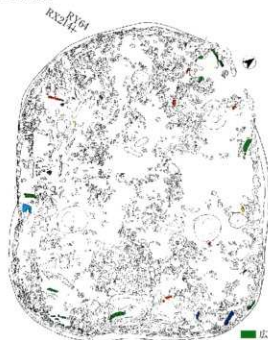
第51図 焼失竪穴建物跡と遺物出土状況(9)



DF22 竪穴建物跡

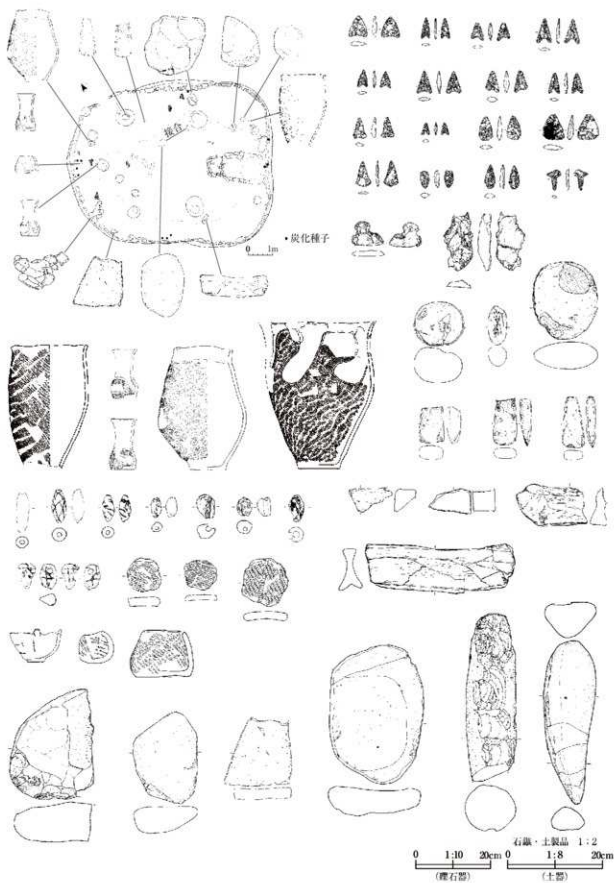


DF22 竪穴建物跡  
炭化材出土状況



第52図 焼失竪穴建物跡と遺物出土状況 (10)

DF22 竪穴建物跡 遺物出土状況 (床面)



第53図 焼失竪穴建物跡と遺物出土状況 (11)

## 第2節 出土した遺物

### (1) 土器

御所野遺跡では、縄文時代早期から晩期までの土器が出土しているが、主体となるのは縄文時代中期中葉から末葉の土器である。今回は、この出土土器の主体を占める中期中葉から末葉の土器について再整理し、その変遷について検討を試みた。

最初の報告書である『御所野遺跡Ⅰ』では、中期中葉から末葉の土器をⅠ～Ⅵ群に分類し、土器編年について考察が行われた。その後刊行された『御所野遺跡Ⅱ～Ⅳ』の報告書では、この群別をもとにした分類が行われてきたが、層位的な一括資料に基づいた整理はあまり行われてこなかったのが現状である。そこで今回の総括報告書作成にあたっては、堅穴建物跡出土土器を層位ごとに、器種、器形、文様などの主な特徴をまとめ、再整理を行った。

再整理を行った資料は、一定量が層位的に出土している堅穴建物跡の出土土器を抽出し、分析対象とした。また、御所野遺跡に隣接する馬場平遺跡出土遺物も分析対象とした。第54～58図は、対象とした一括資料を集成したものである。

#### 第54図 (第Ⅱ群土器)

##### DF14堅穴建物跡出土土器

DF14堅穴建物跡の埋設土器および4～5層から出土した土器群(1～7)は、御所野遺跡において最も古い様相をもつ土器群である。器種はすべて深鉢で、胴部にやや丸みを持ちながら直立し、口縁部が外反する器形を主体とする。隆線を主な文様とする。地文施文後、胴部上半には縦方向の4単位区画の中に弧線文や横線文が描かれる。隆線上に原体圧痕のみられるもの(2・3・5)とみられないもの(4・7)やボタン状の貼り付けがみられる(4・5)。これらの土器は第Ⅱ群土器に分類され、円筒上層d式に相当すると考えられる。

なお、1は胴部上半に複雑な隆線間に刻目が施され、隆線上には原体圧痕がみられ、やや古い様相を持つことから第Ⅰ群土器に分類され、円筒上層c式に相当すると考えられる。

##### 馬場平遺跡C7堅穴建物跡出土土器

人為堆積と考えられる埋土下位(9～13層)からは多量の遺物が出土しており、土器埋設炉の炉体土器、伏罨、床上および12～13層出土土器を対象とし、集成した(9～24)。

器種は浅鉢(24)が1点含まれるほかは、深鉢である。器形は、胴部にやや丸みを持ちながら直立し口縁部が外反するもの(17・19・20・22)、やや小形で丸みを持ちながら直立し口縁部が外傾する、鉢に近いもの(12・13)、直線的に外傾するもの(14・16・20・21)、キャリバー形のもの(11)があり、DF14堅穴建物跡出土土器と比べると、器形のバリエーションが多いのが特徴である。胴部上半に縦方向の4単位区画の中に隆線(12・18・19)や沈線(22)による弧線文が描かれるものや、口縁部の突起下から隆線による区画や突起状の貼り付けのみがみられ、弧線文は施されないもの(16・17・20・23)がある。11はキャリバー形で、口縁部には沈線による波状文や渦巻文が描かれる。13は波状口縁を呈し、口唇部には隆線による貼付や原体圧痕がみられつつも、胴部には3本一組の沈線による渦巻文などが描かれ、注目される。これらは第Ⅱ群土器に分類され、DF14堅穴建物跡出土土器よりもやや新しい様相を持ち、円筒上層d～e式の中間的な様相を持つ一群と考えられる。なお、11・24は大木8a式、13は円筒上層e式と大木8a式の折衷型と考えられる。

## 第55図 (第Ⅱ～Ⅲ群土器)

### GH68竪穴建物跡出土土器

GH68竪穴建物跡は、建物廃絶後に建物跡内への土器廃棄が行われたと考えられ、堆積土中から多量の遺物が出土している。

床土および4～5層出土土器は、隆線を主体とする文様を持つもの(33・35)もみられるが、口縁部突起下や口唇部には隆線が施されるものの、胴部上半の4単位区画の間を沈線による弧線文が描かれるものが多い。完形のものがないため、器形の詳細は不明である。また、キャリバー形で、胴部に沈線による懸垂文や渦巻文が描かれるもの(25・39)や口縁部に刻目のある突起をもちながら、調整が施されていない隆線による波状文が描かれるもの(27)も出土している。これらの土器群は、第Ⅱ群土器に分類され、円筒上層e式と大木8a式(25・27・39)の共伴を示す事例と考えられる。

3層出土土器は、口縁部に突起を持ち、口唇部に隆線や刻目をもつもの、胴部は沈線による弧線文が描かれるものを主体とする。口唇部に隆線による凹線をもち、波頂部に渦巻のモチーフが付くもの(47)も含まれる。これらの土器群は床土および4～5層出土土器よりも新しい様相がみられる。第Ⅲ群土器に分類され、榎林式に相当すると考えられる。

2層からは多量の遺物が出土しており、第Ⅱ～Ⅲ群土器(円筒上層e式～榎林式)が混在している。

## 第56図 (第Ⅲ群土器)

### GF64-02竪穴建物跡出土土器

GF64-02竪穴建物跡も、建物廃絶後に建物跡内への土器廃棄が行われたと考えられ、堆積土中から多量の遺物が出土している。

炉体土器および4～5層出土土器は、深鉢を主体とし、器形は胴部にやや丸みを持ちながら立ち上がり口縁が外傾するもの(72・79)や胴部が直線的に立ち上がり、口縁が外反するもの(80)などがみられる。口縁部突起は山形状に小さくなっている。文様は沈線を主体とし、胴部上半の4単位区画間を3本一組の波状文などが描かれる。81はキャリバー形で、口縁部には調整が施されていない隆線による有縁渦巻文が描かれる。これらの土器群は第Ⅱ～Ⅲ群土器に分類され、円筒上層e式および榎林式に相当する土器群と考えられる。

1～2層出土土器には、波状口縁を呈し、口唇部には隆線による貼付や刻目をもつもの(83～88)や、口縁部が長く外反する大形の器形で、口唇部の隆線による凹線と波頂部の渦巻文を特徴とし、胴部には沈線による区画文や弧線文をもつもの(89・90)がある。キャリバー形で、隆線による有縁渦巻文や波状文などをもつものもみられる(92～94)。これらの土器は第Ⅲ群土器に分類され、榎林式に相当し、大木8b式に併行すると考えられる。

### 馬場平遺跡C5竪穴建物跡出土土器

4～2層は人為堆積と考えられ、特に4層と2～3層の間から多量の遺物が出土している。

器種は深鉢を主体とし、浅鉢や小形の土器が少量加わる。大形の深鉢では、胴部が細長く、丸みを持ちながら立ち上がり口縁部が短く外傾するもの(97)や、胴部からゆるやかにカーブし口縁が内弯するもの(98)がある。胴部が直線的に立ち上がり、口縁が外傾するもの(95・99)、胴部が球形状に膨らみ、口縁部が外反するやや小形のもの(100)も出土しており、器形のバリエーションが最も豊富な土器群である。文様は沈線や隆線による懸垂文や有縁渦巻文が主体である。これらの土器は第Ⅲ群土器に分類される。榎林式に相当し、大木8b式に併行すると考えられる。なお、GF64-02竪穴建物跡1～2層出土土器群よりも新しい様相を示す土器群と考えられる。

## 第57図 (第Ⅳ群土器)

### GD64堅穴建物跡出土土器

GD64堅穴建物跡から出土した土器は、遺物量は多いものの、ほとんどが破片で器形を伺える資料は少ない。今回の再整理では不掲載遺物も観察を行い、掲載遺物との接合も試みたが、器形や文様を伺えるほどの接合には至らなかったものが多かった。

床面出土の遺物はない。7～3層出土土器(103～118)は、隆線や沈線によって口唇部直下から渦巻文や「の」の字状にのびた渦巻文、逆U状文が描かれるものが多い。隆線の断面は、頂部が狭い台形状を呈するようになる。これらの土器群は、第Ⅲ群土器に近い様相が認められるが、文様要素が変化しており、第Ⅳ群土器に分類され、大木9式古段階に併行するものと考えられる。

### GD66・DF14・HB120堅穴建物跡出土土器 (第57図)

GD66堅穴建物跡は、GD64堅穴建物跡を切る建物跡である。さらに、GD66堅穴建物跡を切ってGD66-02堅穴建物跡(第Ⅴ群土器が出土。詳しくは第52図を参照いただきたい。)がつくられている。これらのGD64→GD66→GD66-02の堅穴建物跡の新旧関係と各建物跡出土一括遺物は、第Ⅳ～Ⅴ群土器の変遷を確認できる事例である。ここでは、GD66堅穴建物跡4層出土土器のほか、DF14堅穴建物跡2層出土土器、HB120堅穴建物跡2～4層出土土器を集成し、検討を行う。

器種は深鉢を主体とし、小形の壺(139・140)も少量加わる。深鉢の器形は、a)肩が張り内湾する胴部から口縁部がそのまま短く直立するもの(119・122・141・142)、b)内湾する胴部から口縁部が直立または外反するもの(121・126・129・131・146)、c)内湾する胴部から口縁部が短く外反するもの(132・145・147)、d)胴部からゆるやかにカーブし口縁部が内湾するもの(120)を特徴とする。b)やc)は波状口縁や小形のものが多くみられる。

文様は沈線による逆U字状や区画文を主体とし、地文を磨り消し無文帯を作出するもの(121)と、地文を磨り消さないもの(119)がある。また、頸部に1または2列の刺突がめぐるもの(129)や、さらに沈線による逆U字状文(126・146)などが描かれるものがある。

これらの土器は第Ⅳ群土器に分類され、大木9式に併行するものと考えられる。なお、GD64堅穴建物跡7～3層出土土器よりも新しい様相を示す土器群であり、大木9式新段階に併行するものと考えられる。なお、頸部に刺突がめぐるものについては最花式に類似する特徴をもつ。

なお、HB120堅穴建物跡1層から出土した148は沈線による曲線的な区画内に充填縄文が施されることから、第Ⅴ群土器に分類され、大木10式に併行するものと考えられる。

## 第58図 (第Ⅴ群土器)

### DF22・DH28・DG26・DE24堅穴建物跡出土土器

第3章第1節で詳述されたように、DF22・DE24(出土土器については第51図を参照いただきたい)・DH28・DG26堅穴建物跡は西側調査区で確認された焼失堅穴建物跡であり、出土土器は一括性が高い。DF22堅穴建物跡出土土器である155は、掲載遺物と不掲載遺物を再整理し、2～4層出土土器が接合したものである。

器種は深鉢を主体とするが、これに少量の壺・小形のトックリ形土器が加わる。深鉢の器形は、胴部が「く」の字状に張りながら立ち上がり口縁部が外反するもの(149・159・160)、胴部が丸みを持ちながら立ち上がり口縁部が短く外反するもの(152・155)、直線的に立ち上がるもの(152)を特徴とする。口縁部形態はすべて平口縁である。口縁部に接する沈線が直線的に連結しながら、胴部にJやL字状の沈線により区画された文様帯を特徴とする。文様帯部分は磨消縄文と充填縄文がみられる。

地文のみが施文されるものも多い。これらの土器は第V群土器に分類され、大木10式古段階に併行するものと考えられる。

#### FJ60-01・FJ58-01・FB54-02竪穴建物跡出土土器

先に述べた土器群と同様、器種は深鉢を主体とし、蓋(163)や小形の注口(171)が少量加わる。深鉢は、胴部や頸部にあまりくびれがなくなり、ゆるやかな直線的に外傾または直立する器形がみられるようになる。また、胴部が細長く、大形のものが多くなる傾向がみられる。沈線によって区画された文様は連結して胴部全体へ展開していくようになり(162・172)、口縁部に接する横位の沈線はより直線化する(166・167)。また、口縁部にヒレ状突起がつくものや胴部にヒレ状隆帯がつくものが散見される(162・166・172・174)。地文のみが施文されるものも多く、結節縄文が施文されるものが特徴的にみられる。これらの土器は第V群土器に分類され、先に述べた土器群より新しい様相を示すと考えられ、大木10式新段階に併行するものと考えられる。

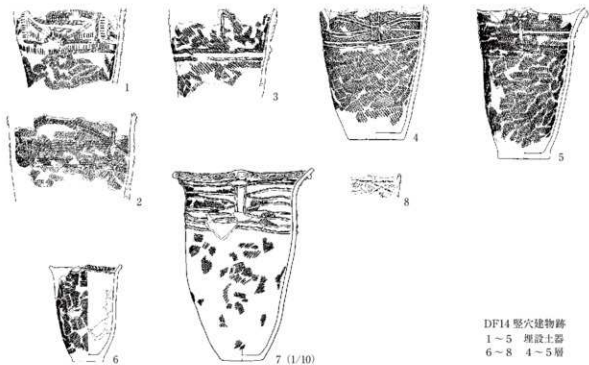
#### FC58-01竪穴建物跡・IC126粘土探掘坑出土土器

176・178は口縁部が内弯する深鉢で、やや小形である。口縁の波頂部から垂下する襷状の隆線に沿って刺突が施されたり(176)、刻目が施された隆帯が張り付く(178)。胴部には円文をモチーフとした沈線による区画文や突起がつく。これらの土器群については第V群土器との層位的な関係を捉えることができなかつたため分類しなかつたが、器形や文様に差異がみられることから、第V群土器に後続する一群の可能性がある。後期初頭に位置づけられる可能性が考えられ、今後の検討課題としたい。

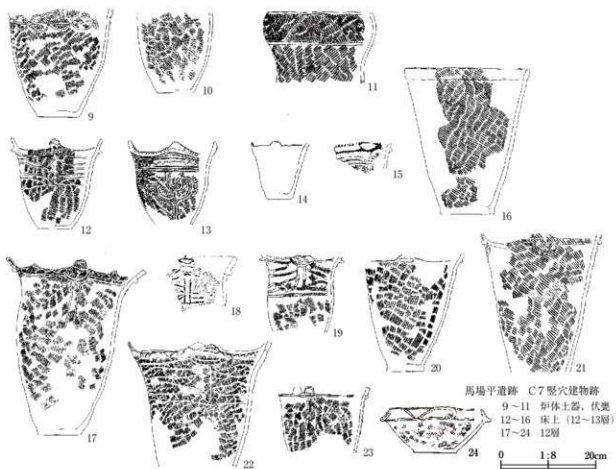
(菅野 紀子)

#### 主要参考文献(紙面の都合上、一戸町教育委員会発行の報告書については割愛した。)

- 稲村晃嗣 2008「門前式土器」『総覧縄文土器』(株)アム・プロモーション  
大迫教育委員会 1986「観音堂遺跡—第1次～6次発掘調査報告書—」大迫町埋蔵文化財報告書第11集  
小保内裕之 2004「八戸市松ヶ崎遺跡出土の縄文時代中期後半の土器について」  
『第2回東北・北海道縄文時代中期後半の諸問題』海峽土器編年研究会  
小保内裕之 2008「陸奥大木系土器(榎林式・最花式・大木10式併行土器)」『総覧縄文土器』(株)アム・プロモーション  
酒井宗孝 1998「岩手県北部における縄文時代中期の土器様相」『紀要XⅧ』(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター  
永瀬史人 2015「北東北における円筒土器文化の変容過程に関する考古学的研究」  
『特別史跡三内丸山遺跡年報18』青森県教育委員会  
早瀬亮介・菅野智則・須藤隆 2006「東北大学文学研究科 考古学陳列館所蔵大木圓貝塚出土基準資料—山内清男編年基準資料—」『東北大学総合学術博物館紀要』第6号 東北大学総合博物館  
村本周三 2012「御所野遺跡およびその周辺の土器編年」『平成23年度一戸町文化財年報』一戸町教育委員会  
盛岡市教育委員会 2008「柿ノ木平遺跡・環根遺跡」第1分冊 柿ノ木平遺跡 本文編  
森 幸彦 2008「大木9・10式土器」『総覧縄文土器』(株)アム・プロモーション



DF14 竖穴建物跡  
 1~5 埋設土器  
 6~8 4~5層

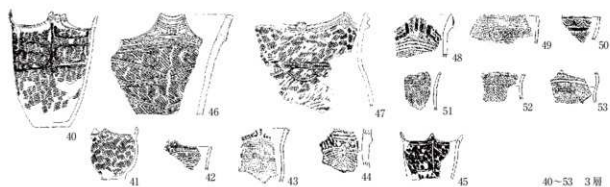


馬場平遺跡 C7 竖穴建物跡  
 9~11 单体土器、伏罨  
 12~16 床上 (12~13層)  
 17~24 12層  
 0 1:8 20cm

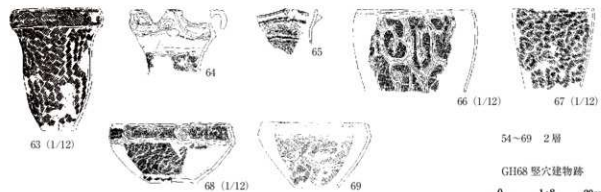
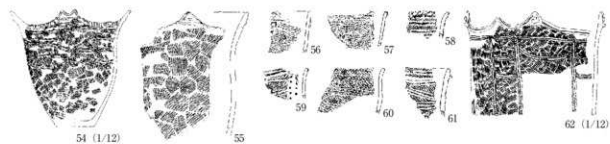
第54図 土器集成図(1)



25 床上 26-39 4-5層



40-53 3層



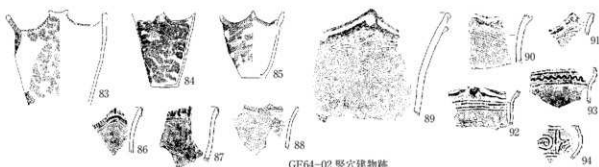
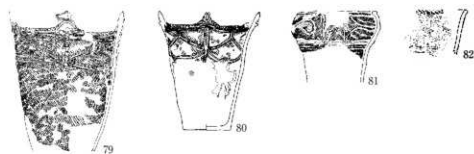
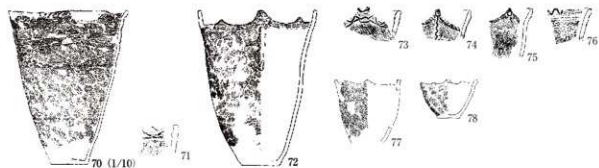
54-69 2層

GH68 聖穴建物跡

0 1.8 20cm

第55圖 土器集成圖(2)



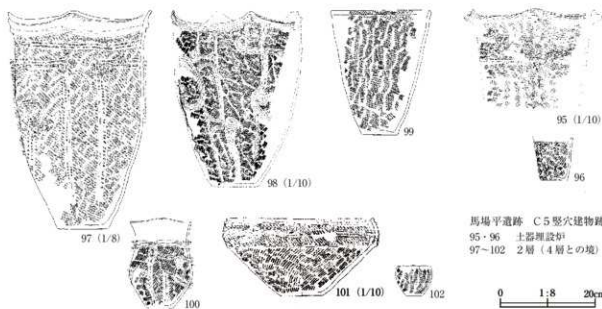


GF64-02 竪穴建物跡

70・71 土器埋設が

72-78 最下層 (5c層)

79-82 4-5層 83-94 1-2層



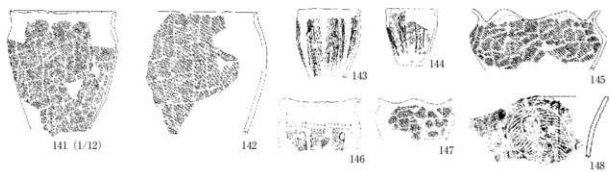
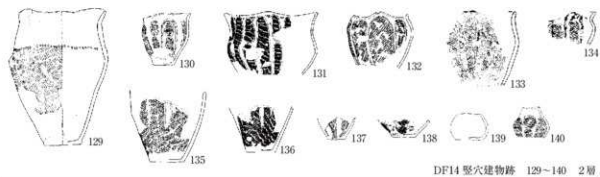
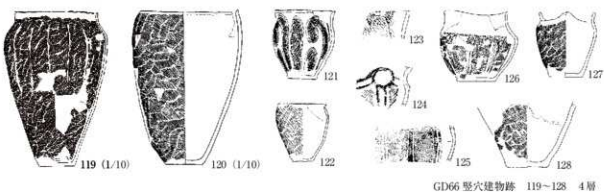
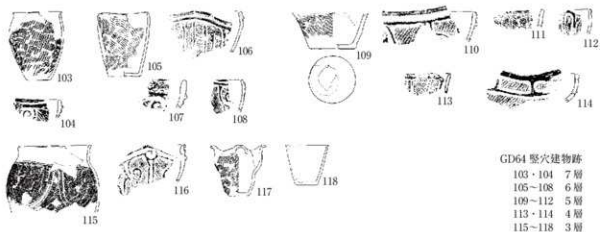
馬場平遺跡 C5 竪穴建物跡

95・96 土器埋設が

97-102 2層 (4層との境)

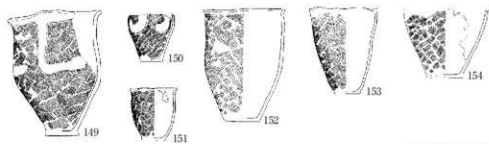
0 1:8 20cm

第56図 土器集成図 (3)

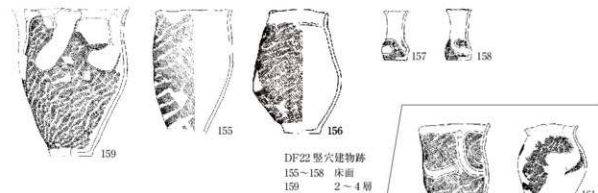


0 1:8 20cm

第57图 土器集成图(4)

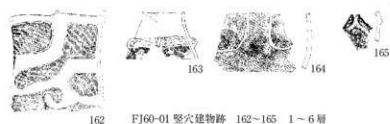


DH28 竖穴建物跡 149~154 1~5層

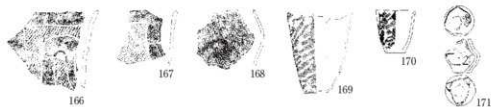


DF22 竖穴建物跡  
155~158 床面  
159 2~4層

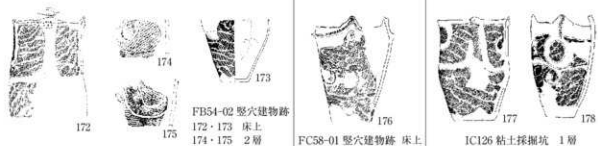
DG26 竖穴建物跡  
160~161 1~4層



FJ60-01 竖穴建物跡 162~165 1~6層



FJ58-01 竖穴建物跡 166~171 1~3層



FB54-02 竖穴建物跡  
172·173 床上  
174·175 2層

FC58-01 竖穴建物跡 床上

IC126 粘土採掘坑 1層



第58图 土器集成图(5)

## (2) 石器

### 1. 石器の器種、器種分類 (第59・60図、器種カタログ)

器種分類については、これまでの馬場平遺跡・御所野遺跡に始まる一連の分類研究の成果を基本的に踏襲し(一戸町教育委員会 1983、一戸町教育委員会 1993)、その後の発掘による資料の増加、今日の視点による再吟味の結果を踏まえて、以下のように器種を再検討した。

#### a. 定型剥片石器

##### 石鏃 (第59図1～5)

これまでは、石器の下端に茎の無い「無茎鏃」をⅠ類とし、そのうち平基をa、前者より細身で凹基のものをbに細分している。また茎を作ったもの(有茎鏃)をⅡ類とし、細身の木葉形から柳葉形をⅢ類としてきた。

そこで改めて全体形や厚み、基部の形態や作り出し、アスファルトの付着範囲や状態、つまり着柄方法に注目して分類すると、凹基そして数は少ないが平基に矢柄の先端部を三角形に尖らせて鏃に並行になるようにスリットを入れ、アスファルトと共に装着するⅠ類と、矢柄先端の空洞にアスファルトと共に基部あるいは先端部を挿入して固めるⅡ類に大別される。また、Ⅱ類は体部が細身の木葉形から柳葉形で、全体的に厚みがありごろっとした棒状になるもの(Ⅱa類)と、中茎が作り出されるもの(Ⅱb類)に細分できる。ただし、境界は漸移的であり、基部の外形も有茎の意図的な作出という点では、判定が難しい。そこで鋼線より内側に挟りこまないものをⅡ類aとし、基部が鋼線より内側に挟りこまれるものを有茎・Ⅱ類bとした。両細分型式の境界が明確でなく、いずれの着柄法も同じだと推定できることから区別しなくとも良いのかもしれない。

なお、これまで石鏃と報告してきた石鏃のうち形態の分かる(分類できた)1,320点中に17点(1.3%)しかないが、寸詰まりで薄手に作られ、より良質の石材で作る傾向のある石鏃を着柄法の点でⅡ類に含め、その中で細分として木葉形・Ⅱ類cとした。

一方、基部などが破損して型式不明の石鏃があるが、不明として取り扱う。またこれまで「粗い調整によって形を大まかに作った「粗加工石鏃」「石鏃未成品」「Ⅳ類」と呼んできた類は、完成された場合の形態が想定できるが、剥離が荒く、細かな周辺の加工がなく、完成品より一回り大きい。もちろん着柄されたことはないのでアスファルトなどの接着剤の付着は認められない。これらの特徴からⅣ類を「未製品」として評価し、石鏃の型式分類から独立させる。したがって不明(破損など)と未製品(かつてのⅣ類)は、いずれも型式分類や型式組成からは除外する。なお、未製品については、石鏃の製作工程で再度取り上げる。

##### 石槍 (第59図6～8…(4)アスファルト関連遺物を参照)

これまで木葉形の「木葉形石槍」Ⅰ類と基部の作り出しをもつ有茎のⅡ類に細分されてきた。全体的に見て5cm強の小型のものと、8cm程の中型のものがみられ、石鏃との大きさ、形態の違いもある。また、石匙のつまみ部に似た基部をもつものもあり、Ⅲ類として区別した。

なお、石槍製作の初期段階と思われる両面加工されたものを、一括して両面加工石器としたが、未製品と考えられるので定型石器として取り扱わない。

#### b. 他の定型的な剥片石器(石匙・石錐・石筥)

他に剥片素材の定型石器として、これまで馬場平遺跡以来、分類し報告してきたものとしては、石匙・石錐・石筥がある。石匙はつまみ付きのナイフ、スクレイパーともいえ、剥片を縦形と横形に使った場合を区別してきた(第59図9・10)。また、定型的な石錐としては、棒状のものと、つまみが付くものがあり、二分されるが、出土数は少ない(第59図11・12)。

石鏡は、長手の剥片の肥厚した端部にスクレイパーエッジが見られるものである（第59図13）。

このような加工の割合は少なく、出土も少数であるため、ここでは従来の分類を踏襲することとした。なお、三日月形石器は、祭祀具と考え第3章第2節（3）、P.120で述べる。

### c. 不定型剥片石器

#### スクレイパー（第59図14・15）

剥片の縁辺にバルブの発達しない平坦で奥まで入る幅の狭い剥離を連続的に施した刃部（スクレイパーエッジ）を作出したもので、石鏡と異なって不定形である。

#### ノッチ

剥片素材の一部に数回の二次加工を施し、凹状の刃部を作出したものを。

#### 二次加工のある剥片（以下、R剥片と記す）

剥片の縁辺にスクレイパーエッジでない、約2mm以下の連続した微細剥離または散漫な二次加工がみられるもの。

### 楔形石器と両極剥片・石核

両極打法により、剥片などの素材の両端につぶれと表裏に両極剥離痕跡をもち、時に両極剥離による剪断面がみられるものである。小型の素材を効率よく割るために両極打法を用いて剥片を得ることがあるが、御所野遺跡ではそれによってできた両極剥片、あるいはそれを素材にした剥片石器は確認できない。また両極剥片をとった後には残核が残るが、両極石器と区別しにくい。ここでは小型で良質なメノウ質珪化木を使い、両極剥離が進み、両端に楔として使用した痕跡も含む剥離が顕著に認められるものを、楔形石器として抽出した（第59図17）。

### d. 磨製石斧（第60図18～21）

合計83点出土している。頭部を角形にして側面も磨きだした両刃の「定角式」を基本形として、大型（長さ13～10cm、幅5cm前後）、中型（長さ8～7cm、幅3cm前後）、小型（長さ4～3cm、幅1.5cm前後）がある。全体形が推定できるものが36点あり、大型6点（16.7%、内アオトラ石製4点）、中型14点（38.9%、内アオトラ石製10点）、小型15点（41.7%、内アオトラ石製12点）、細身で長いミニチュア石斧1点（アオトラ石無し）であった。

ミニチュア石斧は、周辺遺跡である田中Ⅱ遺跡から、両端が刃部状に磨かれた粘板岩製で全体が良く磨かれ、使用痕が見られない両頭のタイプが三本、堅穴建物跡の床面からまとめて発見されている。祭祀具として独立した器種とするのが適切かもしれない。

各大きさの石斧の約5～8割は、アオトラ石（北海道日高地方沙流川流域原産の青色片岩）で作られている。水平の節理が発達しているため擦切り技法で分割され、そのために定角形になると考えられる。他の磨製石斧には安山岩、粘板岩、砂岩が用いられている。

### e. 礫石器

礫石器については、選択された礫の形態、大きさ、石材、そして特に凹んだ敲打痕（凹孔）、擦れ痕、磨耗痕などの使用痕、つまり機能に注目して、叩き潰す、はさみ割る、台石、磨り石、石器製作ハンマーなど、遺跡で行われたであろう作業・製作の機能・用途も推定して器種分類した。また成形加工の様相なども細分の要素に加味した。この分類は研究的にも（上條 2007など）、各地の報告書でも一般的に行っている基本的な分類を基礎としている。なお礫に主に敲いたり磨ったりした使用痕が見られる石器を、青森県では敲磨器類と呼ぶことが多い。

礫石器は、多く砂岩、花崗岩、輝石安山岩礫などを運び、そのまま使用した石器の総称である。ただし、一部を断ち切るように分割・剥離したり、側面などを敲打による成形・潰し加工したものも含

む。分類群の名称は、凹んだ敲打痕が目立つものを凹石、浅い敲打痕が目立つものをリタッチャー（石器製作ハンマー）、打痕が目立つものを敲石、擦れ痕や摩耗痕が目立つものを磨石とした。以下に分類の目安、つまりその器種の特徴を記して各器種を説明する。

#### 敲石

硬質砂岩のちょうど片手に握れるほどの小礫を用い、一端または両端に敲打痕を有するもの（第60図22）、硬質砂岩の扁平円礫の端部に細かな敲打痕が残るもの（第60図24）、また一個縁に敲打、一端部の一肩に敲打、両端に敲打、磨痕を伴うもの、凹孔が複合して認められるもの多く、これらを敲磨器とした（第60図28）。さらに比較的緻密な球状の石英質安山岩の小礫を用い、多い場合は全周に敲打痕の見られる敲石もある。扁平な楕円形から円礫の側面を敲打使用したことによって平坦になった敲石がある（第60図26）。

また、スタンプ形石器と呼ばれる南関東地方の早期雑糸土土器期に特徴的な器種に似ている敲石の一種がある。丸い棒状礫を裁断して両側面に敲打・凹みによる側面を作出し、裁断面を底面として敲き下ろしたため、衝撃剥離が半周するものもある（第60図30）。砂岩小礫の表面や一個縁に磨痕を残すものや、側縁部の使用箇所を移動させながら使用したリタッチャー（ハンマー）もみられる。

#### 凹石

平面の中央部付近に単独または複数の深い凹痕をもち、両面に見られるものも多い（第60図27）。スタンプ状敲石、石皿片などにも凹痕跡をもつものがみられた。なお、この凹痕は、敲打痕の集合が浅い窪みをなしているものである。

#### 磨石

原石表面の微細な粒子の凹凸が、摩耗によって潰れて平滑になり、時には擦痕が残る（第60図29）。擦痕の方向や強さによって、運動方向や対象物の硬さなどが推定できる場合もある。

#### 石皿、台石

砂岩や石英質安山岩などを、敲打などによって縁のある皿状に仕上げ、中央の凹みが機能面になる石皿（第60図33）と、緻密な安山岩などの大型板石の平面に摩耗面が残り、一部敲打が残る場合もある台石（第60図32）とがある。

#### 擦切り具（石鏟）

緻密な砂岩の板石の縁辺に、縁辺に沿って両面に擦痕が顕著に認められ、その範囲の上端に段が付き、その範囲の断面がU字になる（第60図31）。合計四点出土し、磨製石斧の母材の切断に用いられた手持ちの砥石の一種と考えられる。

## 2. 各石器の特徴

### a. 石鏟（富樫 2014）

#### 石鏟の細分型式と特徴

I類は長さ約1～3.5cmで中央値約2cm、II類は長さ約2～5cmで中央値約3cmに集中する（第62図）。全体を五類型に細分したが、前述したようにIIa類（細い木葉形・柳葉形）とIIb類（有柄）の違いは、茎部の作り出しの明瞭さだけである（第59図3・4）。遺跡全体でI類が32.7%、II類が53.0%であり、両型式で全体の約85%を占め、御所野遺跡の主要な石鏟型式となっている。IIaとIIb類は、中茎の作り出しの違いによると前述したが、大きさや幅、石材選択にも差は見い出せないし、層位的（新旧）にも両者に差はないので、同一意図のもとで製作されたと考えられる。ただし、II類は円筒上層d・e・大木8b式期には9割以上も高率であったものが、大木9古～10古式期には1割以下に減少してしまう。

大木文化の影響を受けた時期的変化と思われる。

なお、遠隔地石材（硬質頁岩）の比率が在地石材（珪化木）より、どの細分型式でも1.4～1.7倍高いが、両石材が同じように使われて石鏃が作られていた（第6表）。

アスファルト付着の認められる石鏃は、全体の約10.6%に認められ、各細分型式別の付着率は、I類10.3%、II類10.9%で型式による有意差はない（第8表）。ただし、アスファルト付着は、保存状態によっては消滅してしまう場合も多いと考えられ、また確認が難しく、顕微鏡などを用いての観察、着柄による変色などについて詳細に観察する必要がある。なお、アスファルトが付着したものは、使うために装着した石鏃ではあるが、未使用の場合も考えられ、その点で衝撃剥離や折れ（この場合の折れは使用によるとは断定できよう）が先端に見られる石鏃は、確実に使用後のものといえよう。

#### 石鏃の着柄と使用

これまで全国的に見て石鏃に欠柄が残っていた例は、まれである。北海道恵庭市ユカンボシE11遺跡では、扁平で無茎の石鏃が片削ぎされた木製の柄の先端に装着、埼玉県さいたま市の寿能遺跡と南鴻沼遺跡では木製の先端を細い三角形に尖らせて縦にスリットを入れた柄に無茎石鏃が漆を膠着材として差し込まれ、北海道木古内町の札苅遺跡ではササ類に基部が装着されてアスファルトで固められ、宮城県大崎市の中沢目貝塚、岩手県大船渡市の大洞貝塚と陸前高田市の中沢目貝塚（未報告、三陸大津波で流出か？）では、中柄としての鹿角製狭状に無茎凹基石鏃がアスファルトで装着されていた。御所野遺跡の石鏃の基部に付着したアスファルトの付着状況から、ササ類の柄に装着されたII類と先端を細い三角形に尖らせた柄に装着したI類が想定できる。

先端・基部などが欠損した石鏃が、全体のほとんどであった（第9表）。これらの欠損は対象物に当たって欠損した場合や製作中の欠損、廃棄後のアクシデントによる破損などが想定される。対象物に当たって先端から槌状剥離（衝撃剥離という（第61図）が、側面ないし平面に生じた欠損については前述したが、その他の欠損品の多くはアスファルトで着柄する前の製作中に欠損してしまったものと考えられる。アスファルト付着無しの欠損品が、全体の約4割あり、御所野遺跡は多くの失敗品を出した生産遺跡であり、遠隔地石材の頁岩の未製品・欠損品も多く、在地石材の珪化木製石鏃とはほぼ同じ様相を示す（第7表）。両石材とも同じように持ち込み、多量に石鏃を生産していた生産遺跡であったことを示す。またアスファルトが付着して破損しているものは、使用して破損したものが、集落に持ち帰られた場合が想定できる。一方未製品で破損しているものは約10%あり、それらの多くは製作中の破損と考えられる。なお、アスファルトを付着させ着柄された石鏃が、欠損している数は少ない（第8表）。

#### 石鏃の製作（母材・両面加工石器からチップまでの資料による石鏃製作工程の復元）

石鏃や石槍より一回り以上大きな半両面加工から両面加工された石鏃や石槍などのブランク（母型）を一括して両面加工石器とした。最終形態（細分型式）が、類推できない未製品ともいえる。

石鏃の製作石材・母岩別に石鏃の製作工程を示す各段階の未製品、ポイントフレイクなどの製作過程剥片、二次加工段階のチップを抽出して石鏃制作の実態を検討した。なお、合わせて石核・剥片、接合資料を抽出して、遺跡で行われた石器製作の全体の復元を目指したが、石核・接合資料が少ないため分析できなかった。

御所野遺跡の石鏃の約35～40%は、遺跡の北側を流れる根反川で採取した珪化木を用いて製作し、一方で搬入した遠隔地石材、硬質緻密な珪質頁岩を用いての石鏃が製作されている。東北日本海側産などの珪質頁岩製の石鏃は、遺跡全体から出土した石鏃1,359点中の797点（58.6%）で、未製品における硬質頁岩の割合は50.6%であった（第6表）。両石材とも母材（ブランク）の状態で大量に運び込まれ、

石鏃に加工されていたことが分かる。さらに成形加工を進めたポイントフレイク（剥片）、仕上げや再生加工の際に生じたはずの膨大な量のチップは、水洗選別も行った資料によれば（一戸町教育委員会2013）、前者は頁岩約69.2%で珪化木23.1%、後者はバルブが残るチップで頁岩約77.0%で珪化木19.8%であった。珪質頁岩にこだわって成形加工・細部加工・再加工が入念に行われていたことが分かる（第10表）。

なお、少ないながらも石槍は、搬入石材である硬質頁岩が圧倒的多数用いられている。珪化木では大きな素材が得られなかったためであろう。

最後になったが、おびただしい量が出土したポイントフレイクとチップについて説明しよう（第61図下写真）。ポイントフレイクは、複打面の交互剥離の後縁を取り込むこともあり、大きな打角をもち複方向剥離の背面形成で、断面の腹面側は内湾する。大きさは1～2cm程度である。チップの大きさは、1cm以下で4～5mmにピークをもつ。ただし、チップは、土壤水洗選別しないと検出は難しく、ポイントフレイクよりも検出数が少ない。

以上より、石鏃の製作（第61図の上）は、剥片の周辺加工から始まり、次いで半両面加工へと進み、この段階から断面凸レンズ上の両面体（両面加工石器）に整えられる。その過程では、ポイントフレイクと認定される剥片が順次生産されるようになる。そして基部の作り出し、縁辺加工の仕上げなどの段階で、各細分形態に仕上げられ、多量のチップが生産された。

## b. 石槍

### 石槍未製品の特徴と判別について

既報告でIV類とした石鏃は、石鏃未製品としたことは前述したが、同様に、平面形が槍先形や尖頭器様の形状を示すもの、両面加工もしくは半両面加工されるが、先端部の作り出しが不十分なもので、いずれも石鏃よりもやや厚手で大きいなど、最終的な細部調整を施す前段階の未製品の特徴をもつ。また、石鏃未製品よりも長身の一群を、石槍未製品として分類した。アスファルトの付着も見られない。

### 製作工程の復元

石鏃と同様に、素材を二次加工して形を整え、両面を剥離して器体を薄くしていき、縁辺に付刃のための細部加工を施した。

## c. 剥片石器の石材

### メノウ質の珪化木

剥片石器の主要石材はこれまで硬質頁岩として報告し、石鏃を中心とする器種に多用されていると報告してきた。その後、周辺の石材調査によって頁岩としてきたものの約半数は、著しく珪化してメノウ質・緻密になった根反川流域産の珪化木であることが判明した。この珪化木は、同一の木であっても黒・褐色・黄褐色・緑・黄緑・灰色・灰白色・白など多彩な色調を示すが、全体的には褐色・茶・黄褐色を呈するものが多い。

御所野周辺での珪化木産地は、御所野遺跡の直ぐ南を流れる馬淵川の支流、根反川と姉帯川の流域一帯にあり、ここは、国の天然記念物の地域指定が行われている。新第三紀の1,700万年前ごろと推定されている火砕流堆積物に埋没したものである（八木下1996）。ただし、指定対象の倒木や樹立している珪化木は、それほど珪化が進んでおらず、木質部の組織細胞が残存しているものも多い。つまり、石器に利用されるほど珪化が進んでいるものは少ない。なお、ここから採取した珪化木の剥片を顕微鏡で見ると石英の形態は多結晶構造を示し、珪質頁岩と同じだという（秦2015）。また、根反川の支流の二ツ森に至る林道や支流の河川河床礫や崩落した山麓にも、珪化木は多量に存在している。



## 珪質頁岩

秦(秦 2015、前掲)の肉眼観察によれば、珪質頁岩は表面がざらついで良質でないB類、幾分良質で緻密なC類、光沢があり緻密で良質なD類に分類でき、D類には縞状のラミナ(年輪)が発達しているものもある。D類は、男鹿半島地域だけでなく、青森県側の深浦や津軽半島の蟹田川でも確認されている。特にD類の内でも縞の発達した珪質頁岩の産地は、秋田県三種町の小又川周辺の大規模原産地であるという。

## 3. 石器組成の特徴

### a. 組成分析の目的

各地区の竪穴建物跡ごとの各層位別に石器組成を明らかにした(第12～15表)。まず石核や剥片までの全石器の種類・器種と量、使用した石器(定型石器からスクレイパー・二次加工や使用痕(刃こぼれ)ある剥片)と裸器までの組成、ある目的をもって意図的に剥離・加工して整った形に作った石器(定型石器)の種類・器種と量をそれぞれ明らかにした。

### b. 分析対象とした竪穴建物跡と出土石器の特徴

御所野遺跡全体の石器に関する情報を得るため、各地区を代表し、資料数も保証され、時期の変遷が分かる資料、そして、大木10式期の同期に一括焼失した竪穴建物跡セット、合計13種の石器群を抽出・選別して分析対象とした。なお、以下の御所野GH68竪穴建物跡の一部と馬場平C5竪穴建物跡については、出土石器群の中から剥片類を抽出していない。またFJ46-02竪穴建物跡(一戸町教育委員会 2013)以外は、土壌の水洗選別による剥片以下の微細遺物の抽出は実施していない。

先ず、それらの竪穴建物跡の概要を説明する(第11表)。

#### 御所野GH68竪穴建物跡

長方形で特殊ピットをもつ円筒系の竪穴型式である。埋設土器は、現状保存したため土器型式は不明であるが、床面上では大木8a式土器も出土している。覆土中では、大木8a・b式、円筒上層d～e式、折衷の在土器型式(榎林式)が出土している。割合的には、円筒系要素が強い土器群に、大木系土器が客体的に組成しているが、層位的には2層より上層で大木8b式土器が多くなる傾向がある。石器群の内、剥片類の占める割合は、233点で約半数以上が剥片類である。

#### 馬場平C7竪穴建物跡

隅丸長方形の円筒系竪穴型式である。埋設土器は、円筒系土器であるが、覆土中の土器は、御所野GH68竪穴建物跡と同様に、円筒系要素が強い土器群に、大木系土器が客体的に組成している。また床面上とその上層では大木8a式土器も少量出土する。3～5層になると大木8b式土器が多くなる。石器群の内、112点が剥片類であり、半数近くを占める。

#### 馬場平C5竪穴建物跡

隅丸方形の円筒系の竪穴型式である。埋設土器は大木8b式土器で、覆土中も大木8b式土器が主体をなす。床面から堆積土中も少量の遺物しか発見されていない。

#### 御所野GF64-02竪穴建物跡

長さ8.1mある大型に近い長方形の竪穴建物で、短辺の壁際に特殊ピットも持つ、円筒系の竪穴建物跡である。建て替えが行われ、最終的には焼却解体された。出土土器は、各層とも榎林式の色彩が強い。

#### 御所野FJ46-02竪穴建物跡

中央区の南東寄りにある(一戸町教育委員会 2013)。平面形は楕円形で複式炉をもつと思われるが、

東側の半分強は未発掘なので炉を確認できていない。覆土は10数層に細分した。出土土器は各層とも大木8b新式(榎林式)土器を主体とする。また、覆土観察用のベルトから堆積土を採取し、水洗選別して剥片・チップなどの微細遺物も採取した。

#### 御所野GD64竪穴建物跡

中央区にあり、長径10mを少し超えた楕円形の焼失大型竪穴建物跡である。沢部型複式炉をもち、先端が突出する平面形をもつ。第一堆積土から上層まで10回近く廃棄・物送りがされ、各層とも遺物出土数が多い。土器は大木9古式を主体にして大木8b～10古式が混じる。

#### 御所野DF14竪穴建物跡

西側調査区の西端の平坦面から緩斜面にかかる所にあり、南北120mの大型隅丸長方形で、北壁寄りに特殊ピットをもつ円筒系の焼失竪穴建物跡である。円筒上層d・e式を主体にした土器などの遺物を多量に含む第一次堆積土から、上層も多量に大木9新式期の遺物を出土した。

#### 御所野HD114竪穴建物跡

東側2調査区の西寄りに位置し、長軸が北東7.8mの一端がやや尖り、その壁際に特殊ピットと開いた裾部の石列が抜かれたと思われる複式炉をもつ卵形の大型に近い竪穴建物跡である。大木9新式期の竪穴建物跡で、上層の凹地が、廃棄・送りの場になっていた。多量な同期の遺物が出土し、多量な剥片類が含まれていた。

#### 御所野HB120竪穴建物跡

東側2調査区の中央やや北寄りに位置する。長径8.4mの大型に近い楕円形の竪穴建物跡である。西端の壁際には特殊ピットをもち、その内側には裾部の石列が抜かれた複式炉がある。床面上の一次堆積土や上層からは大木9新式が主体的に出土する。

#### 西区一括焼失竪穴建物跡 (DF22、DH28、DE24、DG26)

西側調査区の中央寄りにまとまってある4棟の竪穴建物跡で一括で焼失していた。いずれも南東壁際に沢部式の複式炉をもち、大木10古式期に属する。炉側の一辺が直線的で、全体は楕円形の長径8.4mの大型に近い竪穴と、中型楕円形、小型円形の2棟が位置関係から見てもセットになっていた竪穴建物跡である。

大型に近い最も大きなDF22竪穴建物跡の炉と反対側の奥壁には、茂谷山の花崗岩、徳利形などのミニチュア土器3点、炭化した種実が発見された。ここは奥壁の祭壇であり、北隅の支柱穴には、完形の磨製石斧がそえられるなど、家送りの祭祀が行われた可能性がある。

#### c. 各地点の各竪穴建物跡から出土した石器の組成

各地区の竪穴建物跡から層位的に一括出土した石器の組成を第12～15表、第63～68図の円グラフに示した。以下、各地点・各土器型式期の石器組成の特徴を列記する。

・各地点の竪穴建物跡に廃棄された石器群の組成は、土器型式期の違いも越えて類似し、廃棄の普遍性も示している。つまり御所野遺跡と馬場平遺跡の一般的な石器組成が示せたと考える。

・いずれも30～50点ほどの定型剥片石器のうち、石鏃が80～85%を占め、極めて特徴的な組成を示している。未製品、製作工程品の多量出土と合わせて突出した石鏃製作である。一方、日常的な加工具である、石錐、石匙、石鏡は1～2点含まれる程度で、場当たり的に使った二次加工ある剥片や使用痕ある剥片、楔形石器、スクレイパーも少ない。青森・秋田・岩手県内の当該期の石器組成では、スクレイパーは組成の半数程度を占める状況とは大きく異なる(一戸町教育委員会2006)。

・礫石器は、各石器群で20～60点に及ぶ磨石・敲石類が多数が出土しており、安定して組成している。台石・石皿も1・2点は組成され、砥石もその半分位の割合で出土している。

・磨製石斧も、各石器群に1点弱は組成する必要な道具であったといえよう。

#### 4. 石器の出土状態

##### 1. 床面出土の石器の位置

特に焼失竪穴建物跡の場合は、本来の使用位置・場所を留めている可能性がある。例えば奥壁に石棒や茂谷山の花崗岩などが置かれ、炉の脇に石皿・台石があたかも台所道具のように置かれていた。

##### 2. 竪穴建物跡の凹地に廃棄された遺物群

多くの竪穴建物跡には、第1次堆積土（床面を覆う住居廃絶後の堆積土で、遺物を多量に包む場合が多い。また焼失竪穴建物跡の場合は、炭化材・焼土・ロームブロックを含む）の堆積後の段階で数度にわたり、竪穴建物跡の凹地に石器・土器などが、大量に集中的に廃棄（物送り）されていることが分かる。

#### 5. 石器などから見た文化系統

石器群の他に、共伴する土器の型式、竪穴建物の形態、炉の型式、特殊ピットなど、集落にみられる両系統の特色を総合的に見て、御所野遺跡での文化受容・変容の様相、遺跡集団の変化などについて考察する。

齊藤（齊藤 2011）によれば、円筒土器文化圏内にある青森県内の石鏃は、中期中葉頃から茎を作り出し、断面形がレンズ状ではなく、“ゴロっとした”形になるという。御所野遺跡でも初期の円筒上層d・e・大木8b式には、このタイプの石鏃が、遠隔地石材の頁岩製石鏃に目立ち、メノウ質珪化木製の石鏃にもほぼ同じ割合で同様の形態をなすものが多い。しかし、大木系色が強くなる大木9・10式期には、このタイプは減少して無茎（1類）が圧倒的多数を示す。また、石槍も当初は一定量組成され、円筒系の組成・特徴を示すが、大木9新式期～10式期には影をひそめるようだ。さらに柱状節理をもつ凝灰岩製の石棒は、型式的にも北方の影響を受けたと考えられるが、石材の産地と製作地については、今後の課題である。

次に前述の文化系統要素を個別の事例で見てみよう。大木8b式期の馬場平遺跡C5竪穴建物跡は、方形基調の竪穴形態であり、円筒系要素を示す。しかし出土する土器はほとんど大木系である。また石鏃の型式は柳葉形が卓越し、中型の石槍（有茎も含む）や木の葉形の小型石槍も組成するなど円筒系の特徴を持ち、祭祀具である石棒も円筒系である。

その後、大木9式期になると、円形基調の平面形と複式炉をもつ大木系の竪穴建物跡から、土器は円筒と大木系、折衷型（複式）が共存するようになるが、石器は円筒系の様相を残す場合もある。このように北（円筒系）と南（大木系）の要素が同一竪穴建物跡に共存して見られ、単一の系統を語れない。南北の両要素を取り合入れた固有の地域性（複林文化）を保ちつつ、次第に大木色を強めていったと考えられる。

#### 6. 石器群のまとめ

石鏃が定型薄片石器の9割近くを占め、時期による割合の差もなく、多量・高率に出土する。また少ないながら石槍が一定量安定して組成することは東北日本の特徴であり、この地域で狩猟のウエイトが高かったことを窺わせる。

また石鏃とその未製品の高率出土、ポイントフレイクなどの多出は、御所野遺跡が石鏃の製作集落だったことを示している。直ぐ南の崖下を流れる根反川で珪化木を粗削り、選別して御所野・馬場平

などに持ち込み、石鏝製作を頻繁に行っていたと考えられる。まさに原産地遺跡の様相も示している。今後はこの石材で作られた石器の広がりとその時期を調べ、いつからいつまで、どの範囲まで流通・利用されていたかを明らかにしなければならない。

一方、使用痕を重視して敲き痕のある敲石、敲き窪んだ凹石、磨り痕・磨面が見られる磨石、及びそれらの複合石器を敲磨器とし、小型緻密質扁平な岩石を用いて端部の屑に敲打痕の見られるハンマー、スタンプ形石器などの礫石器を分類した。各使用痕は原石面に必ずしも顕著に表れていなかったり、逆に水による摩耗痕を摩耗痕と見誤りやすいので注意を要する。焼石などと同様に何らかの意図で遺跡に持ち込まれた礫は、持ち帰って観察する必要がある。これらは、在地で適当な形や大きさの砂岩や石英安山岩などを採取し、敲く・割る・磨るなど多様な用途に用いられていたことが分かる。凹石・敲石、敲磨器などと合わせて定型石器の3割ほどを占め、台石、石皿も4%ほどと少ないながら安定して組成され、民具に見られるトチ敲き石に似たスタンプ形石器も含め、堅果類の加工・処理が頻繁に行われたことを示している。また定型の剥片石器（加工具）は、石鏝が異常に多いため低率であるが、磨製石斧や敲磨器や石皿・台石は安定して組成されている。森の植物食料や資材を利用していた様子がうかがえる。

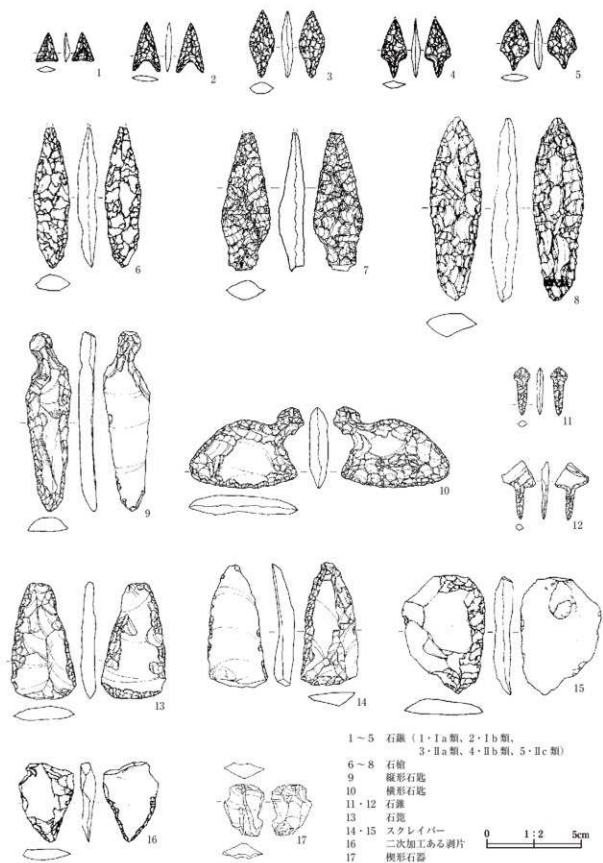
多量な石鏝関連の資料によって製作過程、石材選択、製作過程と利用実態（着柄法…形態とアスファルトの付着状況、衝撃剥離など）も明らかになった。一方で、それ以外の剥片石器製作は低調であり、資料数が少なく、接合資料、石核もわずかな出土数で、それらを製作するための製作システムは把握できなかった。

なお、剥片石器の素材に用いられた硬質な珪質頁岩には、白い筋が入る秋田県三種産、東北日本海側産など少なくとも3種類が認定できた。また北海道日高地方沙流川流域のアオトラ石製磨製石斧、少量だが黒曜石の石鏝や剥片なども出土し、かなりの遠隔地物流が行われていたことがわかる。

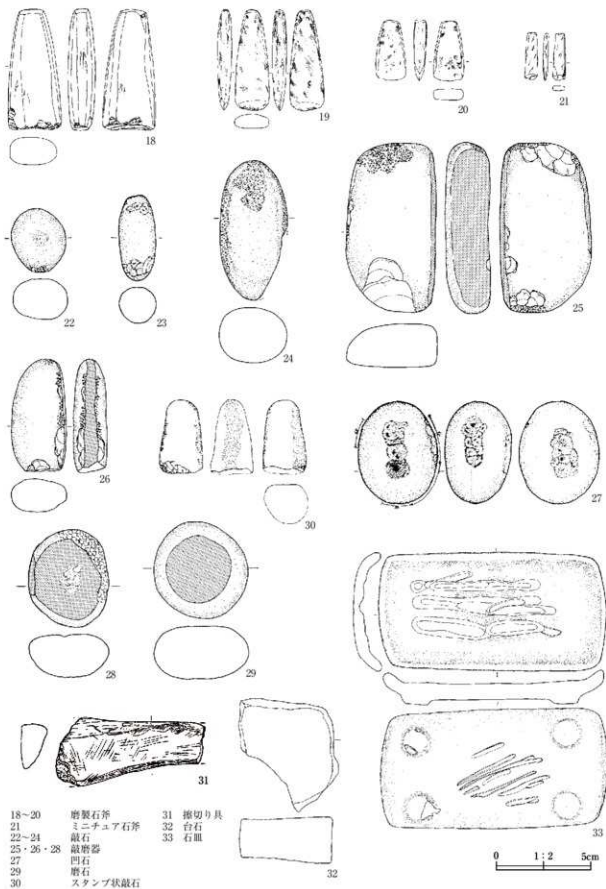
（岡村 道雄）

## 引用文献

- 一戸町教育委員会 1983 「一戸ハイパス関係埋蔵文化財報告書Ⅲ」 一戸町文化財調査報告書第4集
- 一戸町教育委員会 1993 「御所野遺跡Ⅰ」 一戸町文化財調査報告書第32集
- 一戸町教育委員会 2006 「大平遺跡」 一戸町文化財調査報告書第56集
- 一戸町教育委員会 2013 「御所野遺跡Ⅳ」 一戸町文化財調査報告書第68集
- 上條信彦 2007 「石皿と磨石」 『縄文文化の考古学5』 同成社
- 齊藤岳 2011 「青森県史 別編 三内丸山遺跡」
- 富樫雅彦 2014 「御所野遺跡の石鏝について」 『平成25年度一戸町文化財年報』 一戸町教育委員会
- 秦昭第 2015 「御所野遺跡の珪化木と珪質頁岩の石器製作」 『平成26年度一戸町文化財年報』
- 八木下晃司ほか 1996 「岩手県一戸町東部・馬淵川本支流域に産出する珪化木とその地層について」 一戸町教育委員会



第59図 石器カタログ (1)



第60図 石器カタログ(2)



II類の製作工程復元図

Ia類の未製品

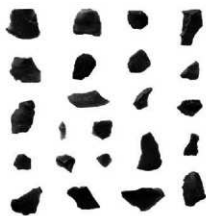
アスファルトが付着した石鏃

衝撃剥離がみられる石鏃

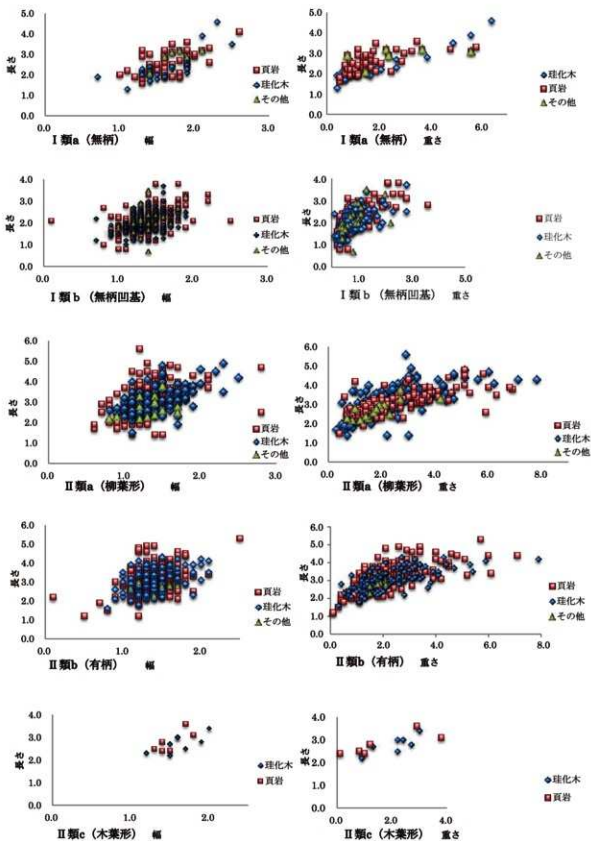
0 1:2 5cm



ポイントフレーク (大きさ77%)



バルブのあるチップ (大きさ77%)



第62図 御所野遺跡出土石鏃の度量（長さ×幅）・（長さ×重さ）



第6表 石鍍型式と石材(御所野遺跡全体)

	メノウ貫珠化本製	球貫頁岩製	その他石材	合計
I a類(無茎石鍍)	28 (34.6%)	47 (58.0%)	6 (7.4%)	81
I b類(無茎凹基石鍍)	164 (39.4%)	231 (55.5%)	21 (5.0%)	416
II a類(柳葉形石鍍)	143 (36.3%)	236 (60.1%)	14 (3.6%)	393
II b類(有茎石鍍)	148 (35.8%)	254 (61.5%)	11 (2.4%)	413
II c類(木葉形石鍍)	10 (58.8%)	7 (41.2%)	0 (0.0%)	17
(形態不明)	13 (36.1%)	22 (52.8%)	4 (11.1%)	39
未製品	71 (43.8%)	82 (50.6%)	9 (5.6%)	162
合計	577	879	65	1521

第7表 石鍍の欠損率(御所野遺跡全体)

	メノウ貫珠化本製 欠損品/完形品	球貫頁岩製 欠損品/完形品	その他石材 欠損品/完形品	合計 欠損品/完形品
I a類(無茎石鍍)	12/28 (42.9%)	9/47 (19.1%)	0/6 (0.0%)	21/81 (25.9%)
I b類(無茎凹基石鍍)	64/164 (39.0%)	105/231 (45.5%)	6/21 (28.6%)	175/416 (42.1%)
II a類(柳葉形石鍍)	54/143 (38.8%)	132/236 (55.9%)	10/14 (71.4%)	196/393 (49.9%)
II b類(有茎石鍍)	54/148 (36.5%)	115/254 (45.3%)	4/11 (40.0%)	173/413 (41.9%)
II c類(木葉形石鍍)	3/10 (33.3%)	2/7 (28.6%)	0/0 (0.0%)	5/17 (29.4%)
(形態不明)	13/13 (100.0%)	19/22 (86.4%)	4/4 (100.0%)	36/39 (92.3%)
未製品	7/71 (9.9%)	8/82 (9.8%)	3/9 (33.3%)	18/162 (11.1%)
合計	207/577 (35.9%)	390/879 (42.1%)	27/65 (41.5%)	624/1521 (41.0%)

第8表 御所野遺跡における石鍍のアスファルト付着率

	アスファルトの付着あり		アスファルトの付着なし		合計
	完形品	欠損品	完形品	欠損品	
I a類(無茎石鍍)	1 1.20%	0 0.00%	78 96.20%	2 2.50%	81 100.00%
I b類(無茎凹基石鍍)	29 7.00%	21 5.00%	160 38.50%	206 49.50%	416 100.00%
II a類(柳葉形石鍍)	20 5.10%	16 4.10%	171 43.50%	186 47.30%	393 100.00%
II b類(有茎石鍍)	24 5.80%	28 6.80%	210 50.80%	151 36.60%	413 100.00%
II c類(木葉形石鍍)	0 0.00%	1 5.00%	12 70.60%	4 23.50%	17 100.00%
(形態不明)	0 0.00%	0 0.00%	10 25.60%	29 74.40%	39 100.00%
未製品	2 1.20%	1 0.60%	142 87.70%	17 10.50%	162 100.00%
合計	76 5.00%	67 4.40%	783 51.50%	595 39.10%	1521 100.00%

第9表 石鍍型式と欠損部位

石鍍型式	石材	欠損部位						合計
		1先端	2基部	3先端~側辺	4側辺	5先端+基部	6中間部	
I a類 無茎	珪化木	3	4	1	1	3	0	12
	球貫頁岩	5	4	0	0	0	0	9
	その他	0	0	0	0	0	0	0
	小計	8	8	1	1	3	0	21
I b類 無茎凹形	珪化木	28	23	3	3	6	1	64
	球貫頁岩	44	42	2	1	15	1	105
	その他	2	2	1	0	1	0	6
	小計	74	67	6	4	22	2	175
II a類 柳葉形	珪化木	21	19	1	2	8	3	54
	球貫頁岩	60	21	3	6	31	11	132
	その他	3	2	0	0	3	2	10
	小計	84	42	4	8	42	16	196
II b類 有茎	珪化木	21	20	1	0	9	2	53
	球貫頁岩	34	44	3	1	33	0	115
	その他	2	0	0	0	2	0	4
	小計	57	64	4	1	44	2	172
II c類 木葉形	珪化木	0	2	0	0	1	0	3
	球貫頁岩	0	1	0	0	1	0	2
	その他	0	0	0	0	0	0	0
	小計	0	3	0	0	2	0	5
合計	223	184	15	14	113	20	569	
形態不明 (欠損品)	珪化木				13			13
	球貫頁岩				19			19
	その他				4			4
	小計				36			36
未製品	珪化木				7			7
	球貫頁岩				8			8
	その他				3			3
	小計				18			18

第10表 FJ46-02竪穴建物跡出土剥片・チップ集計表

凡例：①ポイントフレイク ②剥片 ③チップ (バルブあり) ④チップ (バルブなし) ⑤剥片片 ⑥石片 / ( ) 内は石材数で、( )内は、(頁数、柱化本、その他)の順。

層名	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)	(7)	合計
A-A' 1層	0	0	2	4	1	7	0	14
A-A' 2層	1	1	1	14	15	0	0	32
A-A' 3層	3	1	3	43	22	2	2	75
A-A' 4層	0	0	5	32	5	0	2	44
A-A' 5a層	2	0	2	9	8	1	3	25
A-A' 5b層	7	0	3	12	6	0	2	30
A-A' 6a層	0	0	0	11	2	5	0	18
A-A' 6b層	6	0	8	24	19	5	2	64
A-A' 6b層下	0	0	1	2	0	0	0	3
A-A' 7層	7	0	7	52	25	1	1	93
A-A' 8層	23	1	21	113	117	4	0	279
A-A' 9層上	25	1	15	75	60	9	0	185
A-A' 9a層	0	1	2	6	4	2	0	15
A-A' 9b層	0	0	0	0	1	0	0	1
A-A' 9c層	7	2	5	33	34	1	2	84
A-A' 9d層	0	1	1	0	0	0	1	3
A-A' 9層下	3	0	1	11	0	0	0	15
A-A' 10層	1	0	1	17	13	1	0	33
A-A' 11層	1	0	2	40	6	1	2	52
12層	16	8	9	83	33	2	2	170
13層	8	15	4	7	0	9	2	45
15層	0	0	1	3	2	0	0	6
D-D' 2層	0	0	0	8	10	0	0	18
D-D' 3層	2	0	3	10	6	0	2	23
D-D' 4層	0	0	1	12	8	0	0	21
D-D' 5層	2	0	1	7	14	24	0	47
D-D' 6層	0	0	0	1	4	0	0	5
D-D' 7層	2	0	1	7	3	1	0	14
D-D' 8層	0	0	0	8	0	2	0	10
D-D' 9層	0	0	0	1	0	0	0	1
D-D' 10層	1	0	0	1	0	1	0	3
D-D' 11層	0	0	0	1	7	1	1	10
D-D' 12層	0	0	0	3	0	1	0	4
D-D' 16層	0	0	0	0	0	0	0	0
D-D' 17層	1	0	0	1	0	1	0	3
D-D' 22層	0	0	0	7	4	0	0	11
E-E' 5層上	0	0	5	2	0	1	0	8
E-E' 16層	0	0	1	11	4	0	0	16
E-E' 17層	2	1	1	9	1	0	1	15
E-E' 18層	6	0	3	21	4	4	0	38
E-E' 19層	0	0	0	1	0	0	0	1
E-E' 20層	5	0	2	7	4	5	0	23
層位なし	0	1	0	0	0	0	0	1
埋土	0	0	0	3	0	0	0	3
合計	130	33	112	711	439	82	25	1532
	(90,3010)	(10,221)	(67,423)	(528,171,12)	(341,85,13)	(41,40,1)	(2,17,6)	(1079,407,46)

第11表 分析対象とした竪穴建物跡の特徴と石器の出土数

調査地区 (報告書)	竪穴建物№	平面形など	炉形態	埋設土器	解位	時期 (土器型式)	石器総点数
中央 (I)	GH98	長方形 焼失住	石囲炉 地床炉	円筒上層 d-e式?	解位不明	—	35
					1-2層	上層 d-e・大木 8a-b・榎林	376
					3-5層 (第一次埋積土)	上層 d-e・大木 8a・榎林	25
					床上	大木 8a	1
馬場平道跡	BBTC-5	隅丸方形	地床炉 土器埋設炉	大木 8b	解位不明	—	6
					2-3層	大木 8b	8
					4層 (第一次埋積土)	大木 8b	0
					床上	大木 8b	3
馬場平道跡	BBTC-7	隅丸長方形	地床炉 土器埋設炉	円筒上層 d-e式	解位不明	—	119
					1-2層	上層 d-e・大木 8b	51
					3-5層	上層 d-e・大木 8a・8b	18
					8-11層	上層 d-e・大木 8a	29
					12-14層 (第一次埋積土)	上層 d-e・大木 8a	17
					床上	上層 d-e・大木 8a	5
					解位不明	—	55
中央 (II)	GF64-02	長方形	地床炉 土器埋設炉 石組炉	円筒上層 d-e式	1層	上層 d-e・榎林	62
					5層 (第一次埋積土)	上層 d-e・榎林	22
					埋設炉	上層 d-e	0
					解位不明	—	6
中央 (III)	FJ66-02	楕円形	東側未調査	—	1-10層	榎林・大木 8b	21
					11-13層	榎林・大木 8b	16
					海積緩衝土層	榎林・大木 8b	1537
					床上	榎林・大木 8b	1
中央 (IV)	GD64	楕円形 焼失住	籠式炉	—	解位不明	—	21
					1層	榎林・大木 8b・9・10	302
					2層	榎林・大木 8b・9・10	77
					3層	榎林・大木 8b・9	94
					4層	榎林・大木 8b・9	75
					5層	榎林・大木 8b・9	168
					6層	榎林・大木 8b・9	27
					7層 (第一次埋積土)	榎林・大木 8b・9	50
床上 (炉)	—	0					
西 (I)	DF14	隅丸長方形	土器埋設石囲炉	円筒上層 d-e式	解位不明	—	38
					1-2層	大木 9新	98
					4-6層 (第一次埋積土)	上層 d-e	50
					床上	上層 d-e	0
東 (I)	HD114	帯形	籠式炉	—	解位不明	—	2
					1層	大木 9新	66
					2層	大木 9新	100
					3層 (第一次埋積土)	大木 9新	9
					床上	大木 9新	0
東 (II)	HB120	楕円形	籠式炉	—	解位不明	—	5
					1層	大木 9新・10古	22
					2-3層	大木 9新	34
					4-5層 (第一次埋積土)	大木 9新	30
					床上 (炉)	大木 9新	79
西 (II)	DF22	楕円形 焼失住	籠式炉	—	解位不明	—	19
					1層	大木 10古	14
					2層	大木 10古	31
					3層 (第一次埋積土)	大木 10古	10
					4層	大木 10古	18
西 (III)	DH28	円形 焼失住	籠式炉	—	1-3層	大木 10古	1
					床上	大木 10古	0
西 (IV)	DE24	楕円形 焼失住	籠式炉	—	1-3層	大木 10古	2
					床上	大木 10古	0
西 (V)	DG26	円形 焼失住	籠式炉	—	1-3層	大木 10古	2
					床上	大木 10古	0

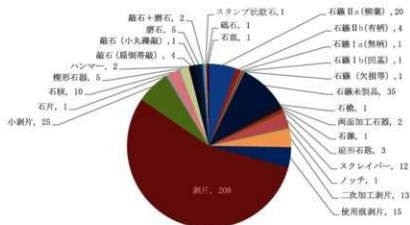


第13表 御所遺跡 DF14、HD114、HB120跡入建物跡 層別石器出土状況

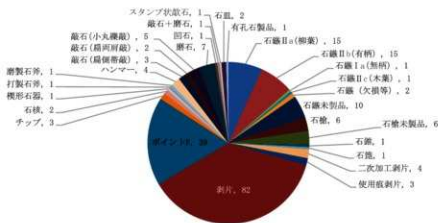
御所跡 DF14	御所跡 HD114	御所跡 HB120	御所跡 多摩川 テラス	層位不明		1層		2層		3層		4層		5層		6層		合計		
				層位不明	合計	層位不明	合計	層位不明	合計	層位不明	合計	層位不明	合計	層位不明	合計	層位不明	合計	層位不明	合計	層位不明
1層	1	1	1	1	5	10	11	3	7											38
2層	1	1	1	1	5															7
3層	1	1	1	1	3	41	39	3	13	1										91
4層	1	1	1	1	19	5	1	3	1											34
5層	1	1	1	1	14	6	4	6	1	1										35
6層	1	1	1	1	2	8		2												13
合計	6	6	6	6	39	74	62	26	22	1										2
1層	1	1	1	1	12	9	6	11	0	31	2	0	0	0	0	0	0	0	0	220
2層	1	1	1	1	1	25	4	3	2	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2
3層	1	1	1	1	3	41	16	7	3	25	1	1	1	1	1	1	1	1	1	67
4層	1	1	1	1	2	1	4													100
5層	1	1	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	9
6層	1	1	1	1	3	36	6	21	20	7	8	2	0	0	0	0	0	0	0	0
合計	6	6	6	6	22	92	33	41	31	62	2	2	2	2	2	2	2	2	2	176
1層	1	1	1	1	1	10	3	2	3											3
2層	1	1	1	1	1	5	3	1	1											22
3層	1	1	1	1	1	3	1	3	1											22
4層	1	1	1	1	1	1	1	1	1											12
5層	1	1	1	1	4	41	9	6	4	1	3									1
6層	1	1	1	1	1	2	1													7
合計	6	6	6	6	15	67	13	13	5	2	3	1	1	1	1	1	1	1	1	1
合計	2	2	2	2	16	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	171







第63図 GH68竪穴建物跡(大木8b式期)1~2層 全石器組成(n=376)

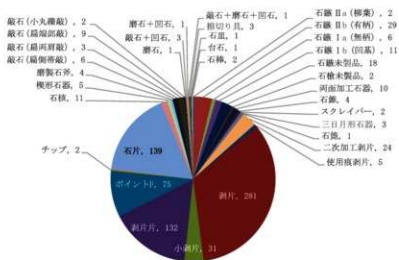


第64図 馬場平遺跡C7竪穴建物跡(円筒上層d~e・大木8a~8b古式期)全石器組成(n=221)



第65図 GF64-02竪穴建物跡(円筒上層d~e・榎林式期)全石器組成(n=139)

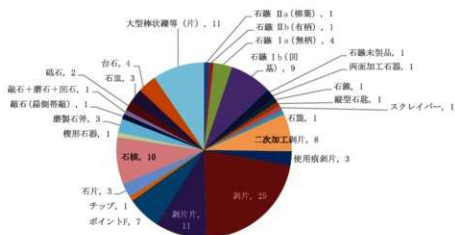




第66図 GD64竪穴建物跡(大木8b~9新式期)全石器組成(n=830)



第67図 HD114竪穴建物跡(大木9新式期)全石器組成(n=178)



第68図 DF22竪穴建物跡(大木10古式期)全石器組成(n=115)

### (3) 土製品・石製品 (第16表)

#### 1. 装身具・祭祀具

総括報告書作成に当たり、祭祀具や装身具もすべてを抽出して体系的に再整理した。これまで報告漏れだったものについては、概形がわかるものについて第73・74図に追加掲載した。出土地区や堅穴建物跡、土坑、盛土遺構などからの出土状況、特に遺構内のは共伴土器を捉えて所属土器型式期を認定した。先ず、装身具、祭祀具に大別し、器種を認定して、それぞれの属性の組合せなどを総合して細分型式(タイプ)に分類した。以下器種ごとに出土点数、出土状況、土器型式期などの時期、器種や型式の特徴などについて述べる。

#### 2. 装身具 (第69図)

##### a. 土製の玉類 (土玉)

長軸の中央に単孔が貫き、表面が湾曲する土製品を玉類とした。これまで御所野遺跡では、細い紡錘形のを土錘として報告してきた。しかし、表面に刺突や沈線で斜めの線や格子目文様、あるいは縄文や撚糸文を地文とするものが多く、また無文のものも形や大きさが同形のバリエーションに収まることから、すべて土製の玉類(土玉)とした。

出土地点は、他の装身具・祭祀具と同様に中央調査区に集中しているが、同区内の盛土遺構からはあまり出土していない。

##### 細い紡錘形の管玉 (第69図1～3)

縦に数条の直線あるいは斜めの沈線や格子文、撚糸文や縄文、横位にめぐる数段の沈線文が施される、細い紡錘形の玉である。西側調査区のDF22の焼失堅穴建物跡から大木10式期の土器と共に7点、中央調査区のGD64とGC66からは大木9新式期のものが発見されている。また、堅穴建物跡からの出土で9式もしくは9～10式期に所属することが分かる資料では、無文を含めた各種文様をもつ同じ形態のものが共伴しており、ほぼ同時に使用されたタイプであり、時期による型式的な変化は認められなかった。

##### 丸玉 (第69図4・5)

刺突が縦または横位に数列並ぶもの、無文のものもあり、これまで御所野遺跡では、土錘に含めてきたものもある。

##### 壺形玉 (第69図6)

無文の円筒形あるいは壺形の玉である。大きさは、約2～4cmで幅があるが、相似形で大きさも連続的な変化なので同種の装身具とした。後者は中央調査区の大木9～10式期のF160-02堅穴建物跡付近から、ほぼ同じ大きさ(2.3±0.3cm)と形のもので、まとまって6点出土しており、この地区の配石墓群に副葬された珠玉だったと推定されている(一戸町教育委員会 2006)。

##### b. 環状土製品 (第69図8)

薄いドーナツ形の土製品で、側縁は丸く、無文が多いが、刺突や縄文なども見られる。

##### c. 有孔円版状土製品(土製環状ペンダント・垂飾) (第69図9)

薄い円版形で、中央の孔は比較的小さく、内外縁は側面を持つ。側面や平面に刺突や撚糸による線状の文様、星形の多重沈線文がある。垂飾と考えられる。なお、中央調査区の大木9式期に属するGD64堅穴建物跡から出土した算盤玉を潰したような扁平な紡錘車形で、刺突が平面と側面に直線的に並ぶ土製品もこの仲間かもしれない(第69図7)。

#### d. 滑車形土製耳飾り (第69図19～22)

耳袋がはまる側面が、平坦なものから強く窪んだものまであり、平坦な表表面をもつ厚い滑車形の土製耳飾りである。中央に小孔から直径の半分ほどの大きさの穴をもつタイプと、それをもたない(無孔)タイプとがある。表裏の文様は、周縁に広がる渦巻や同心円状の沈線、あるいは十字形に刺突列があるものと、刺突が全面に施されるものもある。また中央孔を挟んで、大木10新式期の特徴である一對のヒレ状突起が見られる、型的に新しいと思われるものもある。

御所野遺跡では、表裏の周縁を刺突列が渦巻や同心円文(重圏文)、さらに十字形の刺突列やヒレ状の突起が加わるタイプが10点と、別タイプとした方が良いかもしれないが、輪が薄手で側面がくびれる4点の無文のものも含めて合計16点出土している。

東側調査区の1点を除き、中央調査区から出土している。盛土遺構から出土しているものはなく、大木9新式期のFE48堅穴建物跡から外周と孔の周囲を刺突列が巡るタイプ、10式期のFI62堅穴建物跡から無文タイプが出土し、前者には孔の内側に漆の付着が部分的に認められる。

### 3. 祭祀具

#### a. 土偶 (第70図1～3、第73図5・6)

特に性徴を顕わさないものも含めて、女性の「ヒトガタ」を表した土製品を土偶と呼ぶ。初現期である縄文時代草創期以来の土偶には、頭顔の表現はないが乳房は明示されているものも多く、乳房は重要な属性だったらしい。また写実的となり、具体的なポーズをとる土偶が多くなる後期には、産座・立産の姿をとり、仮面・耳飾り、連珠などを装身したシャーマン(巫女)を写したと考えられるものも多い。縄文女性が作り、祈りを込めた縄文文化の代表的な祭祀具である。

中期末葉(大木10式期)の東北北半には、頭が作られて手を横に広げて脚の無い、十字形の薄手の土偶で、乳房を小さく表現して、手と体軀・正中線を意識した刺突列が線状に並ぶ前十腰内ともいわれる土偶のタイプが分布する(阿部 2010)。御所野遺跡の第70図1・2は、そのタイプの体部破片である。

御所野遺跡の中央調査区から土偶は13点出土しているが、そのうち盛土遺構からは1点だけである。なお中央調査区の堅穴建物跡から円筒上層d・e式と大木8a式と榎林式土器に伴って第70図3の土偶が、そして大木9～10式土器に伴って上記の「前十腰内」式期の特徴をもった土偶が出土している。型式差と見て良いのだろう。

#### b. 省略立像形土製品 (第70図4～7)

「ヒトガタ」表現の面から見れば、頭が省略され、体部も楕円形から薄い楕円形の断面に簡略されている。底面を内湾させて大きく作り、安定して自立するチェスの駒のような形をしている。体側に弧状の刺突列などが見られるものと、無文のものがある。

御所野遺跡では「三角錐形土製品」、鹿角市天戸森遺跡では「呼鐘状土製品」、盛岡市湯沢遺跡では「土偶の一種」などと呼び、器種認定や名称が定まっていない。両手や「ヘソ」と見られる表現があるものも見られることから、乳房などの明瞭な女性表現はないものの土偶を省略した立像と見て仮称した。

中央調査区から3点と東側3調査区の大木10式期主体の粘土採掘坑から出土しているだけだが、岩手県内南部で5か所、盛岡市周辺で4か所など、御所野遺跡例を入れて全県下で合計12か所の遺跡と、秋田の鹿角市天戸森遺跡からも出土している。

#### c. 三角形土版 (第70図8～17、第73図7～15)

角が丸みを持った平面が正三角形から二等辺三角形で、各辺が5cm前後の扁平な土製品である。表面は緩やかなアーチ状に膨らみ、裏面は逆反りして無文である。新潟県信濃川中流域から広く東北全

域に分布しており、それらの全体を総合的に見て型式を分類した。底辺を上し頂角を下にし、①各端部が丸い厚手のY字状、②両肩と首回りを表現した角の丸い三角形、③両手肩と胸腹部の垂下を刺突列や沈線で表現したもの、④全面に刺突や縄文、無文のものがある（金子 1983）。④と⑤には下部に出バツ状の突起（男性器の表現とする意見もある）をもつものもある。

御所野遺跡では、東側調査区から3点、西側調査区から大木9式期のもの1点以外は、中央調査区から出土し、それらの内、盛土遺構から3点、竪穴建物跡から出土して土器型式との共伴が分かる資料が9点ある。それらは、大木8b・榎林式期が2点、8b～9式期が4点、大木9式期が2点、大木9～10式期が2点などである。

この器種は一般的に完形率が高く、型式が捉えやすい。御所野遺跡では合計33点が出土し、②の範疇にあり、頭、襟、下端からの山形が表現されたヤッコ形のもの4点、③に含められる両肩と正中線を沈線で表し、刺突を充填するものが4点、④に含められるが、隆線で曲線文3点、沈線で下部山形を表現したもの1点、全面縄文のもの8点、そして無文のものが13点出土している。各タイプに共通して下部に「ヘソ」所々に貫通孔もしくは盲孔をもち、型式学的には厚手のものから薄手でより整った三角形になり、文様も簡略化したものへ変遷すると推定される。しかし、土器型式期と各タイプとこれらの変異を時間軸に置いて、型式の年代的な変化は捉えられなかった。

#### d. 円形・三角形・隅丸方形土器片版（第71図19～23）

土器片を打ち欠き、または打ち欠き面を研磨して円形や三角形に整えたものや、時には四角形に近いものも作った。中期後半以前から東北日本に多数分布し、後晩期まで続く普遍的遺物であるが、その分布と変遷、用途などについては、明らかになっていない。

御所野遺跡では、円形のもの426（80%）点、三角形のもの72（14%）点、四角形に近いものが33（6%）点、合計531点が、各地区から万遍なく多量に出土し、特に中央調査区の盛土遺構から多く出土していることを報告している。

#### e. 棒状土製品（ミニ土棒）（第71図24・25、第74図23～25）

長さ5～6cm、太さ1cm弱の棒状土製品で、一端が棍棒の取っ手（グリップエンド）状や平坦となり、東北部の当該期に分布する二種の石棒を模したミニチュアにも見える。計29点が出土。表面が粗い無文のままのものから、良く磨かれた無文のものと、縄文が転がっているものがある。なお第16表の棒状土製品の数には、全体形が推定できないものも含めて示している。

#### f. 斧形土製品（第71図26～30、第74図16～22）

磨製石斧と同様な形状をもち、断面は丸に近い棒状のものから長楕円形のものまでであるが、隅丸長方形が多い。頭部と刃部に相当する部分も作り出されている。頭部に横または平面から真っ直ぐに貫通する孔を持つ。

御所野遺跡からは合計36点出土した。いずれも中央調査区から出土し、盛土遺構から5点、大木10式期のCG66-02竪穴建物跡から2点、大木9～10式期のE142竪穴建物跡から4点まとまって出土し、他の各2種の竪穴建物跡からも9式期と10式期の土器に伴って1点ずつなど合計11棟から発見され、9～10式期の間に使用されていたことが分かる。無文6点、表裏が縄文のもの25点、大木9式の懸垂文が施されているもの4点、不明が1点である。また前述したE142竪穴建物跡の埋め土1～2層で出土した4点は、無文、表裏縄文のもの2点、無文で棒状のものが共に出土し、これらのタイプがほぼ同時に使われ、廃棄されていたことが分かる。

宮城県の上川河口付近の上深沢遺跡や沼津貝塚から川筋を北上して旧涌谷町長根貝塚、旧田尻町舞岳遺跡、旧南方町青島貝塚、中田町浅部貝塚と分布する。これらは大木8b～9式期に属すると推定

され一部10式期のももあるという(興野 1990)。そして北上川沿いの北上市や盛岡市に集中し、さらに北上川を遡上して岩手県北(馬場平・御所野遺跡から多数出土している)に至り、三陸・八戸(八戸市松ヶ崎遺跡や是川長田沢遺跡)に下って馬淵川・新井田川沿いに分布する(阿部 2012)。なお、御所野遺跡と二戸市の荒谷A遺跡には、石斧の形を良く留める無文のタイプが目立って出土する特徴が認められる。また、北上川中流域から岩手県、八戸地方には、大木9式期の単位文様(懸垂文)が施されるタイプが分布し、細分される文化圏を形成しているのかも知れない。

また、秋田県北では米代川と米代川支流の小又川上流(二重鳥C遺跡)、同県南の能代川・子吉川流域(秋田市松木台Ⅲ遺跡など)、さらに鹿角市天戸森遺跡にもあり、散漫ではあるが点々と分布している。

一方、遠く北陸の石川県金沢市の笠舞遺跡と富山県小矢部市の桜町遺跡からは、いずれも後期の無文の斧形土製品が出土している。

なお、福島県南のいわき市や双葉・田村郡から郡山市の範囲でも同名称の土製品が発見されている(吉野 1988)が、時期が異なり、形態や文様(無文)も違うので系統関係はないと考えられる。

#### g. キノコ形土製品(第71図31～34)

キノコ形をした土製品なのでこの名が付いた。形態的な特徴で分類され、その地域で普通に食べられるキノコを模したものであることが推定されている(工藤 2000)。

まず、①傘の部分が丸くなり、柄が斜めにつく(斜面に生える様子を示す)ホンシメジ形、②①に似るが傘が大きくより丸く薄くなる、サマツモドキ形、③傘が円盤状になり真っ直ぐに柄が付く、シイタケ形、④傘がやや中高の丸い山形で肉厚であり、典型的なキシメジ型のバカマツタケ形、⑤傘が平らで少し中央が窪んで柄が直に付く、ハツタケ形などがあり、その地域でよく知られた食用キノコを想定することができるという。

最近、青森県西目屋町の川原平(4)遺跡で、類似のものが「鳥形土器」(シピン形)の口に挿入されたまま発見された(青森県埋蔵文化財センター 2014)。八戸市の丹後谷地遺跡などでも、同形土器とキノコ形土製品に似た土製品が近接して発見された例もある。傘部や柄に当たる部分の形態の違いなどを精査・吟味して、キノコ形土製品との違いを弁別する必要が出てきた。

御所野遺跡では合計8点出土した。東側調査区からの1点以外は、中央調査区から出土し、大木10式期のV区FIG2-01堅穴建物跡の埋土から1点出土した。前述した各タイプが、各地区からおのおの1～2点ほど出土している。

北海道渡島半島の南部、八雲町コタン温泉遺跡や栄浜1遺跡、函館市石倉貝塚などと、青森県では津軽から下北半島に分布し、八戸市の丹後谷地遺跡の25点を筆頭に大石平遺跡の5点、泉山遺跡4点など青森県内の約20遺跡から出土している。秋田県北部の米代川流域、そして北上川中流域にも分布する(第78図)。これらは中期後葉に始まり後期前葉の十数内I式土器文化期まで盛んにつくられた。

以上の分布とは離れて山形県の最上川中流域と、福島県の浜通りと中通りにも分布する。これらは中期後半に始まり、多くは後晩期に属するようだ。系統など両者の関係については、今後の課題である。

## 4. 石製祭祀具(第72図)

### a. 石棒

安山岩の角柱状の礫を素材とし、角(稜線)を打ち欠いて円柱に近く成形し(加工の程度で隅丸方形から楕円、そして角柱の平坦面を残すこともある)、さらに敲打・整形した大きな(完形品は約30～50cm)丸柱にした石棒(第72図37)と、円柱の頂部に柄(ハットのグリップエンド状)を作り出し

比較的整ってより長い「混棒状石棒」（第72図38）と仮称する安山岩や緻密な凝灰岩などで作られたものがある。前者は合計39点出土し、加工の程度は漸移的で自然石のままのものも竪穴建物内の祭壇や壁際に立てられていたり、床面からも安山岩を用いた適度な長さの丸柱状の自然石がでることから、それらの自然石も石棒として意図的に持ち込まれたものとした。これら丸柱状としたものの中に、下部端面に十字のレリーフが掘り出された「端面彫刻石棒」に類似するものが含まれる。また他の丸柱状石棒も、端部に重文や十字文がレリーフされる典型的なものは存在しないが、柱状の側面が張る（エンタシス状）ものもあり、円筒土器文化圏の中期後半に流行った石棒の流れを汲むものと考えられる。なお、混棒状の石棒もV区の大木9式期のFH60-C3竪穴建物跡の奥壁際から発見され、祭られていたことが分かる。

各区の竪穴建物跡から原位置をほぼ保って奥壁寄りのベット状壇に2本（2例）、炉の奥右壁中央に立て掛けて2本（2例）と壁際床（1例）、同じく左壁（1例）、奥壁際に2本（1例）、位置不明だが竪穴内床面のもの3例、埋め土中から2例が発見され、石棒祭祀が盛んであったことと、その様子をよく示している。2つの型式、加工程度などによる時期的な型式差は大木10式期まで認められないが、円筒上層d・e・大木8b～9式・榎林式期に属するものが多い。

#### b. 三日月形石器（三日月形の異形石器）

平成元年～17年度の発掘調査で、合計11点出土している。剥片を打ち欠き、湾曲した三日月形にした石器である。石鏃などの打製石器と、用材や剥離技術に何ら変わるところはない。他の人形や動物形などと共に異形石器として分類されることが多い（岩田 2015）。しかし、縄文時代中期後葉を中心としたこのタイプは、7～10cmにもなる大型のものが多く、全体が厚く、周辺を二次加工によって薄くする剥離も見られない。また三内丸山遺跡では、土坑墓に副葬された例もあり、一器種として独立させると共に祭祀具として扱った。

### 5. 祭祀具・装身具のまとめ

御所野遺跡の中央区は、中央に設置された環状配石墓地を竪穴建物や掘立柱建物を取り囲むように環状に廻り、その南側に沿って盛土遺構が半月状に囲んでいる。ほとんどの装身具や祭祀具は、この中央区から出土している。竪穴建物跡の窪地やその周辺から出土し、一方、盛土遺構からの祭祀具の出土は少ない。三内丸山遺跡などでは盛土遺構から多くの遺物に混じて多量の祭祀具が発見されているが、御所野遺跡では盛土遺構だけでなく、竪穴建物の窪地も廃棄・送りの場となっていたのだろう。御所野遺跡が営まれた縄文時代中期後半、つまり円筒上層d・e式・大木8・榎林式から大木10式期には、石製や土製の玉類、有孔円板状土製品（土製環状ペンダント・垂飾）、環状土製品、滑車形土製耳飾りなどの装身具や、土偶、省略立像形土製品、三角形土版、円形・三角形土器片版、斧形土製品、キノコ形土製品などの土製の祭祀具、石棒、三日月形石器（異形石器）などの石製祭祀具が使われていた。地域的・時期的にも装身や祭祀が盛んだったと考えられる。

中央区の大木10式期のFIG2-01竪穴建物跡では、床上の薄い堆積土から耳飾り、不定形の土玉、省略立像土製品、三角形土版、キノコ形土製品、円形や隅丸方形の土器片版が共に発見されている。これらの祭祀具・装身具が、並行して使われていたことを示している。

御所野遺跡のような、多量の祭祀具・装身具が、捨て場であり送りの場でもあった竪穴建物跡の窪みや盛土遺構などから多量に発見される集落跡は、墓地も持つ地域の拠点集落であり、葬送や祭祀・送りも行われていたことを示す。関東から北信越と南東北の文化圏でも、中期に発達した墓地や捨て場・送り場をもつ環状の拠点集落で、祭祀具が多く出土することは確かに相関するようだ。

また、これら祭祀具・装身具は、御所野遺跡にだけでなく、後述するように広く東北地方を越える場合もあるほど広く分布する。つまり一定の地域圏に分布していることが把握できると共に、三角形土版のように細分型式がより細分される地域圏をもって分布していたことが明らかになった。いうまでもなく祭祀具や装身具は、それに共通の価値や重要性を感じる、歴史や言語、精神文化を共有する集団が排他的に用いるもので、その器種、さらに細分型式の分布範囲は、そのような集団の広がりをも示す。

それぞれの装身・祭祀具の分布状況を説明し、他の文化事象、例えばこの時期に特徴的な竪穴建物内の複式炉や特殊ピット、土器型式も取り上げて、複合した精神文化とそれを担った集団の広がり・領域について検討したい(第75～78図)。

#### 最上川上流域と蔵王山麓文化圏

山形県側の蔵王山麓に当たる最上川上流域から宮城県南西部の蔵王山麓に、①先端が丸い厚手のY字形で、たすき掛けのような両肩部の表現、中央の円文などがあるタイプの三角形土版が、大木7式土器型式期に分布する(第77図)。ただし、福島県南も含めてこの地域には、斧形土製品も滑車形の耳飾りも分布していない。次に述べる信濃川中流域などの火焰型土器文化圏と同様に無文の鼓形や耳鏡形の耳飾りが分布する地域である。

#### 信濃川中流域などの火焰型土器文化圏

次いで新潟県の信濃川中流域から上流域にかけた火焰型土器の文化圏に、三角形土版(この地域では三角形土偶と呼ぶことも多い)が分布する。この地域には、量の多少の差は大きい、三角形土版の各細分型式(P.118参照)が出揃い、圧倒的多数が集中する。これまで全国一番の出土数は、新潟津南の道尻手遺跡の216点、二番は馬高遺跡の116点であったし、これまでに36遺跡から750点以上が発見されている(新潟県立歴史博物館編 2011)。これらの多くは、大木8式期に並行する馬高(火焰)式土器文化圏に分布している。(佐藤 2003)。

#### 北上川流域と馬淵川流域・米代川流域などの北緯40度周辺文化圏

北上川河口部・下流域から北上して盛岡周辺、さらに上流の馬淵川中流(一戸・二戸周辺)、そして八戸・階上町周辺へと続く地域には、両手や首・乳房を表す突起などの人体表現が抽象化され、ヤッコ形のタイプに退化形が残るが、単なる全面刺突や縄文に変わり、全体的に整った三角形で薄手で小型になり、首・乳房の表現はほとんどなくなり逆に下部に臍と言われる突起がしばしば見られる三角形土版が多い。また並行して無文のタイプが多くなり、全面に刺突や縄文が施文されることも多くなる。これらの型的変化は、東北で起こっており、各タイプは並行して大木8・9式期から10式期まで継続したと考えられるが、細分の型式変化を編年的にとらえることはできなかった。

さらにこの地域には斧形土製品が大木8式期から10式期まで存在し、北上川下流域から三角形土版と同じく岩手県北そして八戸地方までつながり、秋田でも能代・子吉川下流域と米代川流域に分布する(第78図)。滑車形耳飾りも、北上川から馬淵川中流域、八戸地方に分布し、鹿角市の天戸森遺跡にも見られる(第77図)。さらに岩手県南部から福島・山形県にも滑車形耳飾りは分布するが、この地域では新潟や北関東に分布する無文鼓形耳飾りと共存している。斧形土製品は、新潟や蔵王山麓地域に存在しないが、三角形土版、滑車形耳飾り、土玉類、キノコ形土製品の分布は重なり、細分タイプの特徴や組み合わせも類似し、これらが一緒に出土する遺跡も多い。

土製の紡錘形管玉や丸玉などの玉類、滑車形耳飾り、有孔円版状土製品や環状土製品、あるいは「前十腰内土偶」、三角形や円形などの土器片版、さらに竪穴建物跡の複式炉や特殊ピットなど新たな文化要素が出現した。また、御所野遺跡に見られる大木10式期を中心とした刺突文が目立つ「前十腰内土偶」

のタイプは、山形県の最上川中・下流域と北上川流域（河口付近の宮城県南方町青島貝塚からも出土）と馬淵川流域以北から本州北端まで分布しており、「北緯40度周辺文化圏」で用いられた土偶であったことを示す。さらに省略立像土製品も、分布範囲はほぼ岩手県内に限られるが、この文化圏に包括される分布圏をもつ。

なお、この広い地域での遺跡分布状況を見ると、河川流域にこれら祭祀具を出土する拠点集落が点在し、盛岡周辺や二戸・一戸などに集中している。また盛岡周辺とその西から日本海に流れる雄物川下流域の秋田市周辺、また一戸・二戸地方は、安代経由で秋田の米代川下流域（能代市）につながる、川筋・流域を経由する交流が想定される。一方で、これまで述べた各種祭祀具、装身具は、三陸沿岸の当該期遺跡では、種類も少なく分布量も少ない。このような祭祀具の型式変化と時間の傾斜は、文化の影響だけでなく祭祀、精神文化を共有する集団、それらを信奉した人びとや集団が流域沿いに移動したことを示している可能性がある。

#### 米代川流域から津軽・陸奥湾奥（青森市）文化圏

一方、米代川下流域から津軽の堀合・板留・十腰内・沢堀込などの遺跡、さらには陸奥湾奥の青森市三内丸山・近野・稲山遺跡などにも、全体が分厚くて三か所の角が丸まる形の特徴を持ち、岩手・秋田中心に見られる下部の臍状突起や盲孔はなく、文様は沈線で中心に円・渦巻・三角形を描き、それを人体表現のY字と組み合わせるタイプ、刺突列と沈線でY字人体表現するタイプ、全面に同心の三角多重や三角渦巻文が見られるタイプの三角形土版が分布する（第77図）。そして、盛土遺構を中心に約216点も多量に三角形土版が出土している三内丸山遺跡では、南・北盛土とも無文タイプが約半数を占めている。また同遺跡などに見られる小型石棒形土製品（棒状土製品）など、この地域特有な祭祀具もあり、個性的要素をもつ文化圏がうかがえる。ただし一方で、三内丸山や近野遺跡の全面刺突の三角形土版や、各々1点ずつだが三内丸山遺跡に見られる全面縄文の三角形土版や無文の斧形土製品もあり、以南の文化圏との共通性も見られる。

青森県内の三角形土版の所属時期を共伴の土器型式で検討すると、無文のものも含めて榎林式期に始まり、他地域との型式並行を考慮すると大木10式期、つまり中期期末まで続き、後期にもこの地域特有の沈線文、十腰内式土器の文様に類似する文様が描かれ、十腰内I式期まで存続したと考えられる。

#### まとめ

御所野遺跡などの「北緯40度周辺文化圏」は、大木8b式期以降の東北南部の大木文化の継続的な北上によって北上川流域と馬淵川流域・米代川流域などに分布し、大木8b式期には在地に榎林式土器文化圏を成立させた。さらに、大木10式へと土器は変遷し、南の文化圏に広がっていた沢部型の複式器も、この米代川流域から津軽・陸奥湾奥（青森市）文化圏に築かれた。ただし、滑車形耳飾りや斧形土製品は採用（北上）しなかった。さらにこの文化圏は、後期になって北海道南に広がり、十腰内式土器、キノコ形土製品、狩猟土器、青龍刀形石器などの祭祀具の文化圏に拡大した。

なおこの報告では、スプーン形土製品や「ミニチュア土器」は扱えなかったし、また有孔円版状土製品や環状土製品、あるいは滑車形耳飾りなどについても、器種・細分型式の分析も十分にできなかった。型式認定とその説明、それらの使用方法（特徴、使用痕、破損状況、類似などの観察・分析）などや、土器との共存関係や型式編年などの詳細については、今後とも検討を続けなければならない。

（岡村 道雄）



## 引用文献

- 青森県埋蔵文化財センター 2014『大川浜(3) 遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第542集
- 阿部昭典 2010『縄文時代後期前期の土偶の有脚化とその意義』『國學院大學伝統文化リサーチセンター研究紀要2』
- 阿部昭典 2012『縄文時代の斧状土製品の研究』『國學院大學伝統文化リサーチセンター研究紀要4』
- 一戸町教育委員会 2006『御所野遺跡Ⅱ』一戸町文化財調査報告書第53集
- 岩田安之 2015『三内丸山遺跡出土の異形石器の再検討』『特別史跡三内丸山遺跡年報18』
- 金子拓男 1983『三角形土版・三角形形版』『縄文文化の研究9』雄山閣出版
- 興野義一 1990『宮城県出土土製品2種の報告』『伊東信雄先生追悼考古学古代史論叢』
- 工藤伸一 2000『縄文時代のきのこについて』『簡報研究報告38』
- 佐藤雅一 2003『新潟県における土偶研究の視点』『新潟考古』第14号
- 田辺早苗 1990『三角形土偶』『季刊考古学』第30号 雄山閣出版
- 新潟県立歴史博物館編 2011『新潟の土偶 展示図録』
- 吉野高光 1988『斧形土製品について - 福島県を中心として -』『いわき地方史研究25』

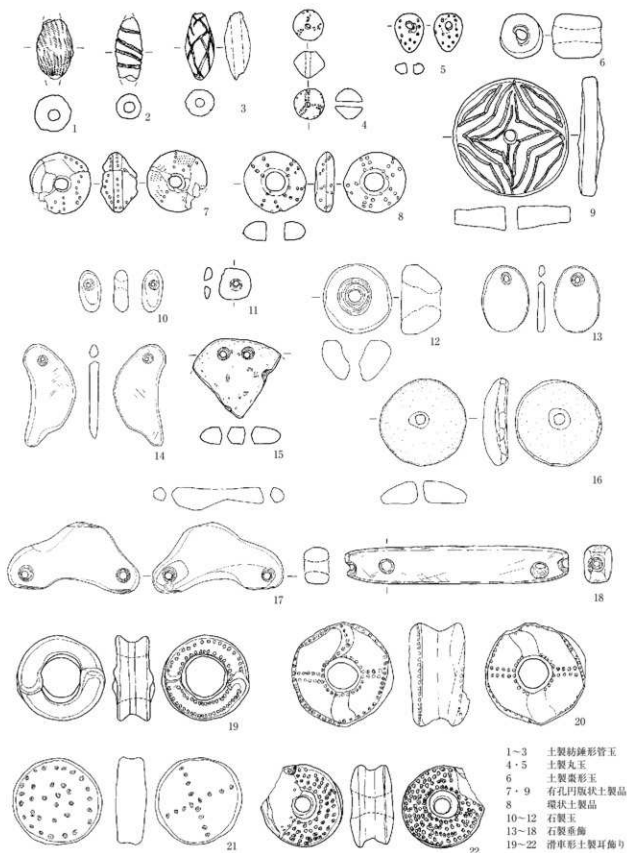
第16表 出土土製品・石製品一覧表

	土土			有孔 円板状 土製品	環状 土製品	土偶	有脚立 環状製品	三角形 土版	斧形 土製品	キノコ形 土製品	土器 片版	棒状 土製品	石棒	三日月 形石器	合計	
	紡錘形 丸形	環形	耳飾り													
I	1	2	1	7	5	7	3	11	14	3	343	7	6	4	419	
II	13	0	0	1	4	1	2	1	0	2	0	57	0	14	3	98
III	1	6	6	6	9	1	2	0	8	10	3	119	4	21	4	200
IV	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	12	0	1	0	15
補遺	3	1	1	2	0	12	4	0	13	9	2	-	18	0	0	65
合計	18	9	8	16	18	19	15	4	33	36	8	531	29	42	11	797

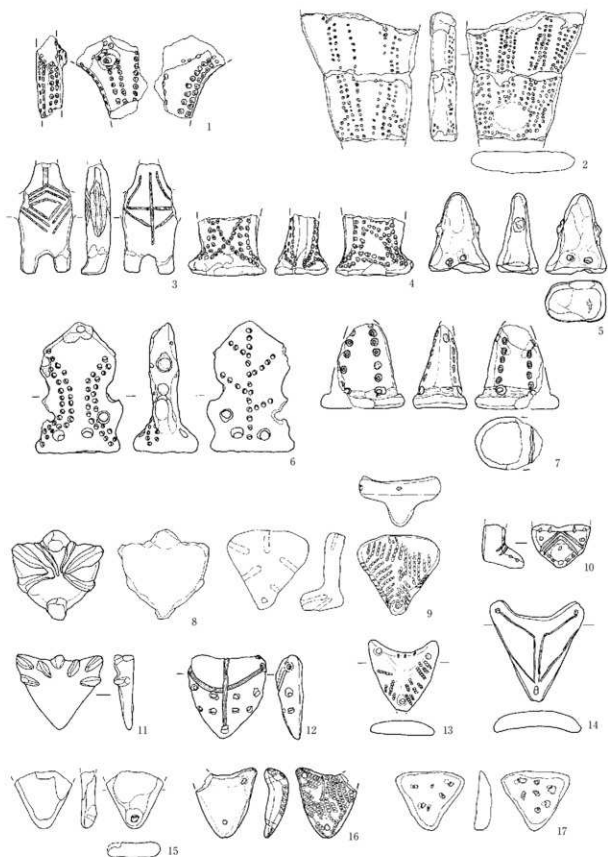
第17表 追加報告土製品一覧表

表 No.	図No.	遺物種別	地区	調査区	グラッド	出土地点	出土層位	取り 上げ No.
1		棒状土製品	中央			FG60配石	II層	
2		棒状土製品	中央			21号址		注記なし
3		棒状土製品	中央	栗林トレンチ	GA66		II層	
4		棒状土製品	中央	栗林トレンチ	GA68		II層	No.48
5		棒状土製品	中央	IV区	GA44		1号層	
6		棒状土製品	中央		FC34			注記なし
7		棒状土製品	中央	IV区	F48			注記なし
8		棒状土製品	中央	II b区	FC54-36			1回目
9		棒状土製品	中央	II b区		FA50-01 型穴建物跡		注記なし
10		棒状土製品	中央	II b区		FBS2-04 型穴建物跡		No.5
11		棒状土製品	中央	V区		FHR2-03 型穴建物跡		No.1
12		棒状土製品	中央	I区		GD06 型穴建物跡		3層
13		棒状土製品	中央		FJ58			1層
14	第74図23	棒状土製品	中央			16号址		注記なし
15	第71図24	棒状土製品	中央			16号址		注記なし
16	第74図24	棒状土製品	東		HH148			1層
17	第71図25	棒状土製品	中央	II b区		FD48-01 型穴建物跡		3層
18		環状土製品	中央		FG66			3層
19		環状土製品	中央			柱 397		注記なし
20		環状土製品	中央		GB48			1層
21		環状土製品	中央		GC74			II層
22		環状土製品	中央		FE48			II層
23		環状土製品	中央	IV区	GB4			1層
24		環状土製品	中央	FBS2トレンチ	FL60			注記なし
25		環状土製品	中央		FA54-35			注記なし
26		環状土製品	東		HG128			1層
27		環状土製品	中央	IV区	FJ48			注記なし
28		環状土製品	中央	V区		FJ60-01 型穴建物跡		注記なし
29		環状土製品	中央		FD52			1層
30		斧形土製品	中央		FJ58			II層

表 No	図No	遺物種別	地区	調査区	グリッド	出土地点	出土層位	取り 上げ No
31	第74図21	斧形土製品	中央	Ⅳ区	FE30		2回目	
32	第74図20	斧形土製品	中央	Ⅳ区	FJ48	79-29(原国での仮遺構No)	注記なし	
33	第74図22	斧形土製品	中央	Ⅱb区		FD48-01 竪穴建物跡 23号基壇溝	注記なし	
34	第74図19	斧形土製品	中央			FG64-04 竪穴建物跡	床土	No.2
35	第74図23	斧形土製品	中央					No.3
36		土偶	中央	Ⅱb区			注記なし	
37		土偶	中央	Ⅱa区		PC36-01 竪穴建物跡 146号址	注記なし	
38	第73図6	土偶	中央				1層	
39	第73図5	土偶	中央	Ⅱb区		FE30 土坑	5層	
40		スプーン形土製品	中央		FB36		Ⅱ層	P.3
41		スプーン形土製品	中央		GA54		Ⅱ層	
42	第74図27	スプーン形土製品	中央	Ⅲ区			注記なし	
43	第74図26	スプーン形土製品	中央				もり土	
44		耳飾り	中央		FJ68		Ⅱ層	
45		耳飾り	中央		FJ62		Ⅱ層	
46		キノコ形土製品	中央		GA68		注記なし	
47		キノコ形土製品	東		FB148		2層	
48	第73図4	輻輪形土製品	中央		FJ70		1層	
49	第73図1	土玉(紡錘形)	中央		GG64		1層	
50	第73図3	土玉(壺形)	中央		FE48		Ⅱ層	
51	第73図2	土玉(紡錘形)	東		FB136		CL	
52		(右) 瓶形土製品(ミニチュア)	中央		FJ58		Ⅱ層	
53		土玉(丸形)	中央		EH44		もり土	
54	第74図25	棒状土製品	中央	Ⅰ区		GD66-02 竪穴建物跡	注記なし	
55		土玉(紡錘形?)	中央	Ⅳ区	FH62-15	FG62-04 竪穴建物跡	注記なし	
56		不明土製品	中央		FJ64		Ⅱ層	
57		不明土製品	中央		FE46		Ⅱ層	
58		不明土製品	中央	Ⅱb区	FF46		Ⅱ層	
59		不明土製品	中央	Ⅲ区				
60		不明土製品	中央	Ⅱb区		FA30-01 竪穴建物跡	2層	
61		不明土製品	中央	Ⅳ区		FJ60-01 竪穴建物跡	注記なし	
62		不明土製品	中央	Ⅳ区	FB64-1		遺構確認面	
63		不明土製品	中央	Ⅳ区	FB62-22		遺構確認面	
64		不明土製品	中央	Ⅳ区	FB62		Ⅱ層	
65		不明土製品	中央	Ⅳ区		FJ60-06 土坑	注記なし	
66		不明土製品	中央		FB44		1層	
67		不明土製品	中央			16号基壇溝	注記なし	
68		不明土製品	中央	中央			CL	
69		不明土製品	中央		FH48		Ⅱ層	
70		不明土製品	中央		FJ58		Ⅱ層	
71		不明土製品	中央	Ⅳ区	GA54		Ⅱ層	
72		不明土製品	中央		FC48		Ⅱ層	
73		不明土製品	中央		GA68		Ⅱ層	
74		不明土製品	中央	Ⅳ区	FH48		2回目	
75		不明土製品	中央	Ⅳ区	FH46		注記なし	
76		不明土製品	中央	Ⅰ区	GC66 トレンチ	GD64 竪穴建物跡	2層	
77		不明土製品	中央	Ⅰ区			もり土	
78		不明土製品	東		HA140 ~ 142		CL	
79		不明土製品	中央		FD50-4	FC30 竪穴建物跡	注記なし	
80		不明土製品	中央	Ⅳ区			Ⅱ層一括	
81		不明土製品	中央	Ⅳ区	FJ58-9	FJ58-01 竪穴建物跡 165号址	注記なし	No.7
82		不明土製品	中央				2層	
83	第73図8	三角形土版	中央				CL	
84	第73図9	三角形土版	中央		FA50		1層	
85		三角形土版	中央		GG60		1層	
86	第73図11	三角形土版	西	西側調査区		DF14 竪穴建物跡	24層	
87	第73図7	三角形土版	中央	Ⅰ区		GD64 竪穴建物跡	2層	
88	第73図15	三角形土版	中央		GA54		注記なし	
89	第73図12	三角形土版	中央	Ⅱb区		16号址	注記なし	
90	第73図13	三角形土版	中央			23号基壇溝	注記なし	
91	第73図14	三角形土版	中央		FB62-4		注記なし	
92	第73図10	三角形土版	中央	Ⅳ区	FB62-21		注記なし	
93		三角形土版	中央		FG42		1層	
94		三角形土版	中央	Ⅳ区	FC34		もり土	
95		三角形土版	中央	Ⅲ区	EJ38		注記なし	
96	第74図16	斧形土製品	中央	Ⅱb区		FD48-02 竪穴建物跡	No.2	
97	第74図17	斧形土製品	中央	Ⅰ区		GD66-02 竪穴建物跡	2層	
98	第74図18	斧形土製品	中央		FJ64		Ⅱ層	



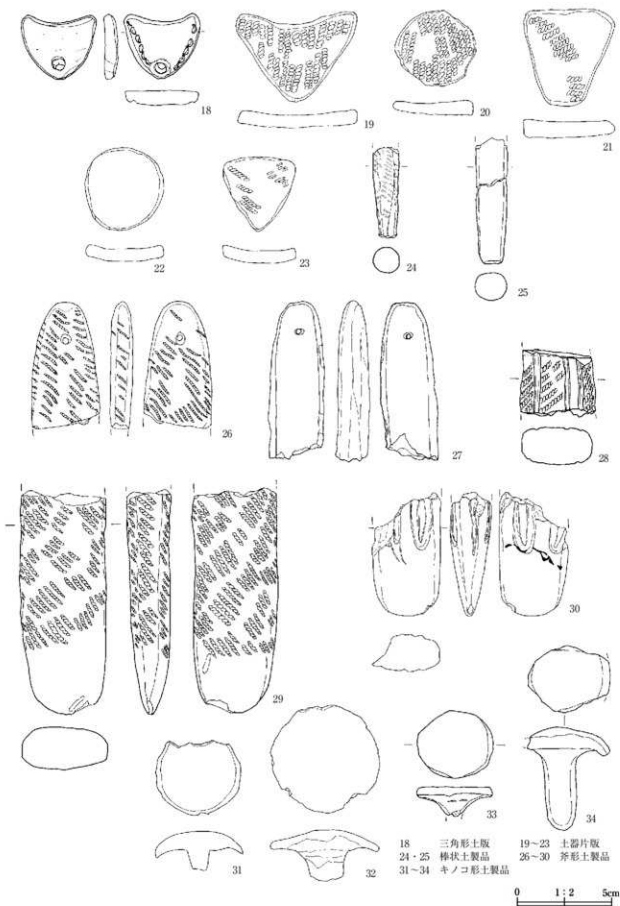
第69図 装身具カタログ



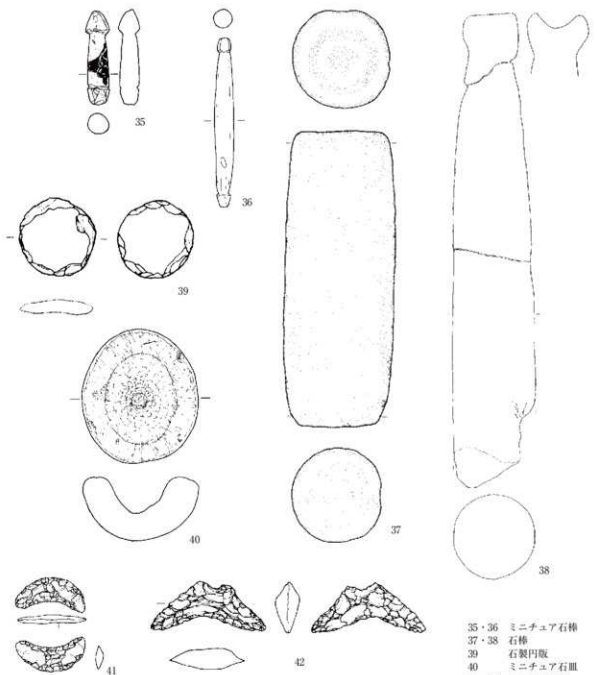
1-3 土偶 4-7 省略立像土製品  
8-17 三角形土版

0 1:2 5cm

第70図 祭祀具カタログ (1)



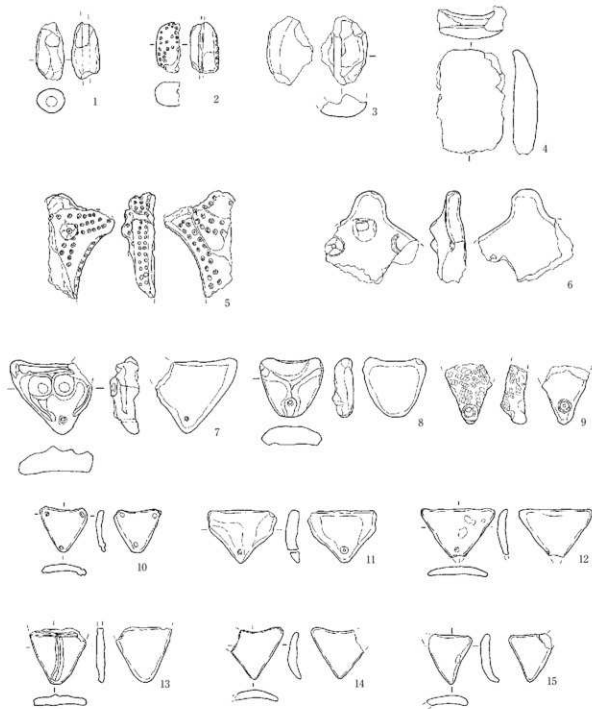
第71図 祭祀具カタログ(2)



- 35・36 ミニチュア石棒  
 37・38 石棒  
 39 石製円板  
 40 ミニチュア石皿  
 41・42 三日月形異形石器  
 (三日月形異形石器)

37・38は1:4  
 1:2  
 0 5cm

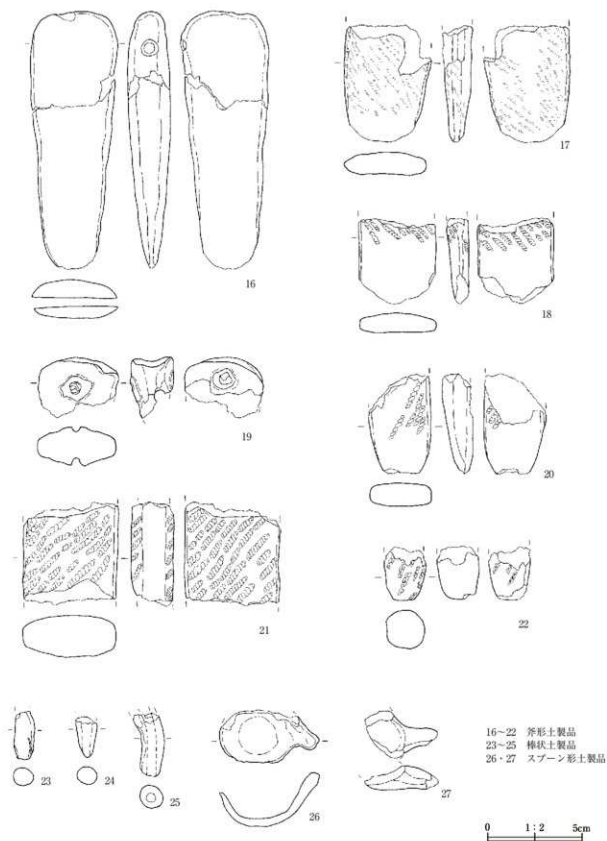
第72図 祭祀具カタログ(3)



1・2 土製紡錘形管玉 3 土製盃形玉  
 4 腕輪形土製品 5・6 土偶  
 7-15 三角形土版

0 1:2 5cm

第73圖 追加報告 祭祀具(1)



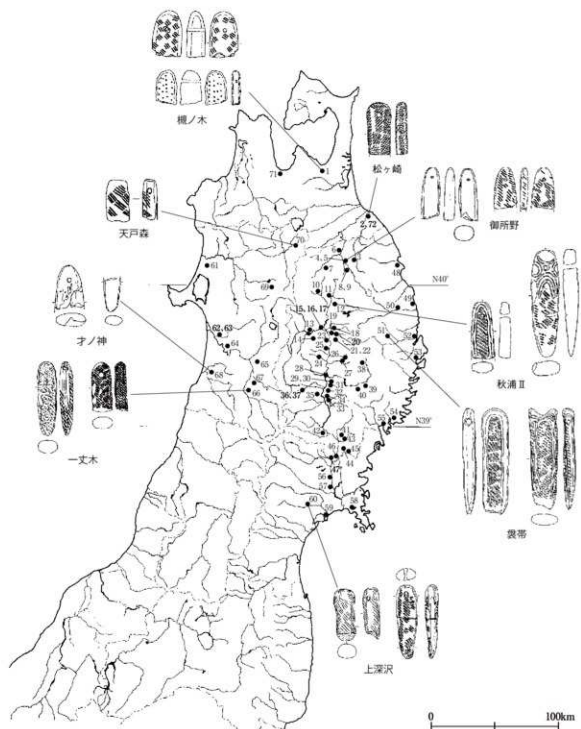
第74図 追加報告 祭祀具(2)





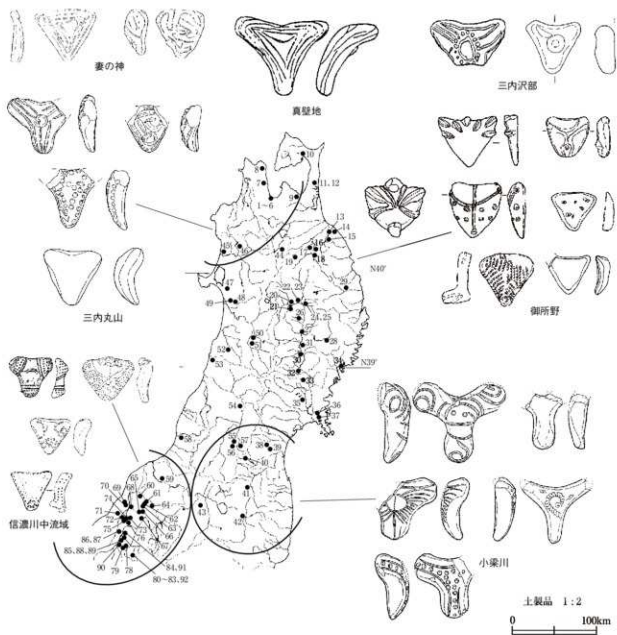
No.	遺跡名	所在地	No.	遺跡名	所在地	No.	遺跡名	所在地
1	熊ノ木遺跡	青森県・野辺地町	15	新田遺跡	岩手県・遠野市	29	長谷堂貝塚	岩手県・大船渡市
2	上川遺跡	青森県・七戸町	16	力持遺跡	岩手県・菅代村	30	青森貝塚	宮城県・南方町
3	園又(2)遺跡	青森県・三戸市	17	楠ノ水平遺跡	岩手県・盛岡市	31	大口森遺跡	秋田県・鹿角市
4	野場(5)遺跡	青森県・階上町	18	高沢遺跡	岩手県・盛岡市	32	枝の沢遺跡	秋田県・北秋田市
5	大目川遺跡	岩手県・軽米町	19	田川 A 遺跡	岩手県・盛岡市	33	高野遺跡	秋田県・仙北市
6	君成川遺跡	岩手県・軽米町	20	鎌倉堂遺跡	岩手県・花巻市	34	神矢川遺跡	山形県・巻町
7	臥屋敷 I a 遺跡	岩手県・軽米町	21	立石遺跡	岩手県・花巻市	35	加藤 C 遺跡	山形県・鳳凰町
8	鬼谷 A 遺跡	岩手県・二戸市	22	十文字遺跡	岩手県・一関市	36	西海原遺跡	山形県・村上市
9	長者原遺跡	岩手県・八幡平市	23	瀬町遺跡	岩手県・北上市	37	藤上遺跡	山形県・大江町
10	駒野遺跡	岩手県・一戸町	24	柳上遺跡	岩手県・北上市	38	立泉田遺跡	山形県・新庄市
11	田中遺跡	岩手県・一戸町	25	栗の原貝塚	岩手県・陸奥高田市	39	アオヤギ平遺跡	新潟県・朝日村
12	大字遺跡	岩手県・一戸町	26	中野台遺跡	岩手県・一関市			
13	馬立遺跡	岩手県・二戸市	27	上野平遺跡	岩手県・一関市			
14	青ノ久保遺跡	岩手県・二戸市	28	湯水遺跡	岩手県・一関市			

第75図 滑車形土製耳飾り分布図



No	遺跡名	所在地	No	遺跡名	所在地	No	遺跡名	所在地	No	遺跡名	所在地
1	櫛ノ木遺跡	青森県・野辺地町	19	榎ノ木平遺跡	群馬県・盛岡市	37	心形野遺跡	群馬県・北上市	55	雲ノ森貝塚	群馬県・藤原町
2	松ヶ崎遺跡	青森県・八戸市	20	小山遺跡	群馬県・盛岡市	38	藤山遺跡	群馬県・滝野市	56	香高貝塚	宮城県・方南町
3	田代遺跡	群馬県・九戸町	21	川口 A 遺跡	群馬県・盛岡市	39	新田 B 遺跡	群馬県・滝野市	57	高根貝塚	宮城県・涌谷町
4	新田野遺跡	群馬県・一戸町	22	戸野遺跡	群馬県・盛岡市	40	大塚野遺跡	群馬県・滝野市	58	遠津貝塚	宮城県・石巻市
5	瓦崎平遺跡	群馬県・一戸町	23	湯沢遺跡	群馬県・盛岡市	41	守野台遺跡	群馬県・一宮市	59	石ノ野貝塚	宮城県・新井町
6	矢野入遺跡	群馬県・二戸市	24	大塚野遺跡	群馬県・北上市	42	石巻遺跡	群馬県・一宮市	60	上流子遺跡	宮城県・大塚町
7	尾形 I 遺跡	群馬県・八幡平市	25	向原遺跡	群馬県・赤松町	43	藤原台遺跡	群馬県・一宮市	61	白井野遺跡	群馬県・藤田町
8	上流子遺跡	群馬県・一戸町	26	板橋神社前遺跡	群馬県・赤松町	44	上流子遺跡	群馬県・一宮市	62	上流子遺跡	群馬県・藤田町
9	野原遺跡	群馬県・一戸町	27	碓氷堂遺跡	群馬県・花巻市	45	上野子遺跡	群馬県・一宮市	63	藤岡川貝塚	群馬県・藤田町
10	岡部 I 遺跡	群馬県・八幡平市	28	大田野 A 遺跡	群馬県・北上市	46	下坂野遺跡	群馬県・北上市	64	赤木川遺跡	群馬県・藤田町
11	岡部 II 遺跡	群馬県・吾妻町	29	徳久遺跡	群馬県・北上市	47	日島貝塚	群馬県・一宮市	65	藤子遺跡	群馬県・藤子町
12	尾形 II 遺跡	群馬県・吾妻町	30	坊手野遺跡	群馬県・北上市	48	竹山遺跡	群馬県・大田町	66	一丈木遺跡	群馬県・赤松町
13	小石川地 I 遺跡	群馬県・吾妻町	31	八丈遺跡	群馬県・北上市	49	碓氷堂 I 遺跡	群馬県・川中町	67	内野遺跡	群馬県・赤松町
14	磐梯遺跡	群馬県・碓氷町	32	藤山遺跡	群馬県・北上市	50	藤山遺跡	群馬県・菅沼町	68	才ノ神遺跡	群馬県・高井町
15	小塚家遺跡	群馬県・碓氷町	33	五ノ丸神社前遺跡	群馬県・碓氷町	51	藤原遺跡	群馬県・碓氷町	69	二重倉 C 遺跡	群馬県・北秋田町
16	大塚町遺跡	群馬県・碓氷町	34	榎山遺跡	群馬県・北上市	52	高根遺跡	群馬県・沢吉市	70	水ノ川遺跡	群馬県・鹿角市
17	大塚町遺跡	群馬県・碓氷町	35	藤山遺跡	群馬県・北上市	53	藤原 I 遺跡	群馬県・山田町	71	三内山遺跡	群馬県・香森町
18	上内遺跡	群馬県・碓氷町	36	林崎野遺跡	群馬県・北上市	54	碓氷堂 II 遺跡	群馬県・大塚町	72	尾川貝塚前遺跡	群馬県・八戸市

第76図 斧形土製品分布図



No.	遺跡名	所在地	No.	遺跡名	所在地	No.	遺跡名	所在地	No.	遺跡名	所在地
1	三内丸山遺跡	青森県・青森市	25	平手遺跡	岩手県・盛岡市	49	根ノ上遺跡	秋田県・秋田市	73	猪苗代遺跡	群馬県・奥州市
2	三内沢部遺跡	青森県・青森市	26	大曲遺跡	岩手県・花巻市	50	江原町1遺跡	秋田県・横手市	74	湯水1遺跡	群馬県・集町
3	山形遺跡	青森県・青森市	27	丸田野遺跡	岩手県・花巻市	51	神台地遺跡	秋田県・横手市	75	小千谷遺跡	群馬県・小千谷市
4	三内丸山(南)遺跡	青森県・青森市	28	新田土遺跡	岩手県・滝野市	52	子神遺跡	秋田県・南秋田町	76	山ノ上遺跡	群馬県・小千谷市
5	山形遺跡	青森県・青森市	29	森川城遺跡	岩手県・野田町	53	榊原遺跡	山形県・高松町	77	鶴巻遺跡	群馬県・十日町市
6	山ノ上遺跡	青森県・青森市	30	打金遺跡	岩手県・一関市	54	飯沼遺跡	山形県・村上市	78	土ノ上遺跡	群馬県・南牧市
7	東の峰遺跡	青森県・五所川原市	31	土崎神社遺跡	岩手県・盛岡市	55	小千谷遺跡	山形県・山形市	79	土手遺跡	群馬県・南牧市
8	中千谷遺跡	青森県・八戸市	32	津金遺跡	岩手県・一関市	56	宮ノ川遺跡	山形県・上山市	80	津ノ原遺跡	群馬県・津波町
9	熊ノ木1遺跡	青森県・野田町	33	新田土遺跡	岩手県・一関市	57	秋野遺跡	山形県・上山市	81	湯風子遺跡	群馬県・津波町
10	熊ノ木遺跡	青森県・むつ市	34	門前屋遺跡	岩手県・陸奥高田市	58	高平遺跡	群馬県・村上市	82	藤原田遺跡	群馬県・津波町
11	瓦子平遺跡	青森県・六十町村	35	青森貝塚	宮城県・高松町	59	ソノテ遺跡	群馬県・阿知野町	83	尾山田遺跡	群馬県・津波町
12	湯ノ口1遺跡	青森県・六十町村	36	河之邊遺跡	宮城県・刈谷町	60	笠原史跡群	群馬県・三宅市	84	野山遺跡	群馬県・十日町市
13	船ヶ崎遺跡	青森県・八戸市	37	沼田貝塚	宮城県・石巻市	61	倉田遺跡	群馬県・三宅市	85	土ノ上遺跡	群馬県・十日町市
14	沢田遺跡	青森県・八戸市	38	中ノ内A遺跡	宮城県・田代町	62	土曲遺跡	群馬県・高崎市	86	小坂遺跡	群馬県・十日町市
15	田代遺跡	青森県・八戸市	39	谷地遺跡	宮城県・蔵王町	63	松倉遺跡	群馬県・長岡市	87	土ノ上遺跡	群馬県・十日町市
16	飯沼遺跡	岩手県・軽米町	40	小栗川遺跡	宮城県・七ヶ町	64	長野遺跡	群馬県・三宅市	88	湯原遺跡	群馬県・津波町
17	東谷A遺跡	岩手県・二戸市	41	吉倉遺跡	福島県・福島市	65	山下遺跡	群馬県・奥州市	89	大倉大塚遺跡	群馬県・十日町市
18	東谷B遺跡	岩手県・二戸市	42	山ノ原遺跡	福島県・郡山市	66	中込遺跡	群馬県・高崎市	90	土ノ上遺跡	群馬県・十日町市
19	瓦塚1遺跡	岩手県・八幡平市	43	庫土遺跡	福島県・青森市	67	御前遺跡	群馬県・奥州市	91	野田遺跡	群馬県・十日町市
20	小丘登壇1日遺跡	岩手県・平石町	44	土道塚(石石)	秋田県・雫石市	68	高取遺跡	群馬県・奥州市	92	土ノ上(南)城遺跡	群馬県・十日町市
21	蟹遺跡	岩手県・盛岡市	45	青森地蔵石	秋田県・能代市	69	高取遺跡	群馬県・奥州市			
22	大原利遺跡	岩手県・盛岡市	46	古沢地蔵2遺跡	秋田県・二樓町	70	南谷遺跡	群馬県・長岡市			
23	小原城遺跡	岩手県・盛岡市	47	上野崎中学校	秋田県・秋田市	71	野野史跡群	群馬県・長岡市			
24	山ノ上遺跡	岩手県・盛岡市	48	下野G遺跡	秋田県・秋田市	72	佐治遺跡	群馬県・小千谷市			

第77図 三角形土版分布図



註) キノコ形土製品は東北でも多く後期十層内式期のものを含み、北海道南にも分布を広げるが、ここでは省略した。

No.	遺跡名	所在地	No.	遺跡名	所在地	No.	遺跡名	所在地	No.	遺跡名	所在地
1	上尾川遺跡	青森県・六ヶ所村	23	大田岡遺跡	岩手県・軽米町	45	宇代森遺跡	岩手県・盛岡市	67	谷田遺跡	山形県・酒田川
2	六ヶ所川遺跡	青森県・六ヶ所村	24	飯島遺跡	岩手県・軽米町	46	飯山遺跡	岩手県・軽米町	68	小田高城遺跡	山形県・東田町
3	飯島遺跡	青森県・六ヶ所村	25	蔵元遺跡	岩手県・九戸町	47	宇代森遺跡	岩手県・盛岡市	69	白川高古石巻地内遺跡	山形県・庄内町
4	上尾川遺跡	青森県・七戸町	26	小野田町遺跡	岩手県・一戸町	48	観念堂遺跡	岩手県・鹿角市	70	三貝集丸塚	福島県・喜望峯町
5	飯山遺跡	青森県・青森市	27	上野遺跡	岩手県・一戸町	49	安楽塚遺跡	岩手県・鹿角市	71	野内乙遺跡	福島県・飯坂町
6	三内丸山(6)遺跡	青森県・青森市	28	熊野野遺跡	岩手県・一戸町	50	初田遺跡	岩手県・北上市	72	野丁A遺跡	福島県・飯坂町
7	三内丸山(6)遺跡	青森県・青森市	29	上志守遺跡	岩手県・一戸町	51	牛沼塚遺跡	岩手県・一戸町	73	稲岡塚B遺跡	福島県・飯坂町
8	三内丸山遺跡	青森県・青森市	30	野ノ久保遺跡	岩手県・二戸市	52	渡田台遺跡	岩手県・一戸町	74	七戸宮遺跡	福島県・直江町
9	中野遺跡	青森県・青森市	31	高土宮遺跡	岩手県・二戸市	53	高土宮遺跡	岩手県・一戸町	75	武ノ内遺跡	福島県・伊達市
10	中野遺跡	青森県・青森市	32	高土宮遺跡	岩手県・二戸市	54	藤ノ下遺跡	岩手県・一戸町	76	武ノ内遺跡	福島県・伊達市
11	一本木遺跡	青森県・五所川原市	33	寺久保遺跡	岩手県・二戸市	55	中津遺跡	岩手県・一戸町	77	宮津遺跡	福島県・飯高町
12	一ノ下山遺跡	青森県・弘前市	34	栗岡A遺跡	岩手県・二戸市	56	狂島貝塚	岩手県・一戸町	78	田山遺跡	福島県・南相馬市
13	大塚遺跡	青森県・宇治市	35	浜内遺跡	岩手県・岩手町	57	大森電状石	秋田県・鹿角市	79	湯津田遺跡	福島県・飯高町
14	飯野遺跡	青森県・八戸市	36	外志遺跡	岩手県・九戸町	58	小坂電状石石積基	秋田県・鹿角市	80	石ノ目遺跡	福島県・郡山市
15	野十戸遺跡	青森県・八戸市	37	二子塚	岩手県・九戸町	59	大池遺跡	秋田県・鹿角市	81	一本木遺跡	福島県・滝野川町
16	野十戸遺跡	青森県・八戸市	38	月形遺跡	岩手県・青森市	60	稲刈遺跡	秋田県・大館市	82	湯津田遺跡	福島県・滝野川町
17	尾川中津遺跡	青森県・八戸市	39	輪田出塚	岩手県・沢井町	61	伊勢堂付遺跡	秋田県・北秋田市	83	十子遺跡	福島県・飯野町
18	野十戸(5)遺跡	青森県・八戸市	40	岩内中津遺跡	岩手県・沢井町	62	鹿嶋遺跡	秋田県・北秋田市	84	石ノ目遺跡	岩手県・宮古町
19	野十戸遺跡	青森県・八戸市	41	けやきの平田地遺跡	岩手県・滝沢市	63	松下遺跡	秋田県・鹿角市	85	三内丸山群	青森県・青森市
20	本古遺跡	青森県・八戸市	42	小塚塚遺跡	岩手県・滝沢市	64	高原遺跡	秋田県・鹿角市			
21	飯山遺跡	青森県・三戸町	43	湯沢遺跡	岩手県・盛岡市	65	八木遺跡	秋田県・藤子町			
22	長者1遺跡	岩手県・軽米町	44	刈田A遺跡	岩手県・盛岡市	66	神谷地遺跡	秋田県・藤子町			

第78図 キノコ形土製品分布図

#### (4) アスファルト関係遺物 (第79図)

##### アスファルトの塊

御所野遺跡Ⅱa区 (FD58グリッド) の遺構確認面から、扁平な円形 (約9×8×4cm) で重さ162.2gのアスファルト塊が出土していた (第79図)。また中期末のⅡa区FB54-02堅穴建物跡、大木9式期のⅡb区FD48-01堅穴建物跡、中期末と思われるV区FG64-03堅穴建物跡からいずれも数グラムの塊が発見され (一戸町教育委員会 2003)、1991年調査のGG134グリッドからも小塊が出土していた。炭化物として取り上げられていたり、取り上げ後に破損していたが、今回、奈良文化財研究所の高妻洋成が、クロロホルム溶液に溶解させてアスファルトであることを実証した (第4章第5節参照)。なお、今回の分析でアスファルトであることが同定されたGG134グリッドの一部は、脂肪酸分析されたが (一戸町教育委員会 1993)、クロロホルム-メタノール混液による脂肪酸抽出過程で溶解していた。FJ66、FI64、HA100グリッドからも同様な炭化物が出土し (一戸町教育委員会 1993)、これらも同様に溶解していた ((株)ズコーシャ 1993)。いずれもアスファルト塊であった可能性が高い。

また、かつて「パン状炭化物」(一戸町教育委員会 1983) と報告した馬場平遺跡の中期中葉のC4大型堅穴建物跡から出土した約5×5cmの織状の線 (皺) がついた塊も、今回の高妻による分析の結果でアスファルト塊と同定された。

##### アスファルト付着遺物

御所野遺跡の大木8b式期のFE54-01堅穴建物跡床面から、内面にアスファルトが付着した大型鉢形土器片が出土している (第79図)。土器内側の凹面に楕円形のアスファルト付着範囲 (長軸27cm×短軸23cm) を残していた。反対の土器表面は、そこに吸着していた炭素が気化して飛び、赤褐色に変色しており、強く受熱したことが見て取れる。大型土器片は、凹面にハンバーグ形塊を置き、裏面側 (下側) から加熱したことが分かる。加熱により塊の下面は溶け、塊は溶けたことによって最凹部へ滑ってずれ下り、そこで安定した。その範囲には、1.2～1.8cm幅の縦方向の筋が4本見られる。つまり大型土器片を用いて加熱してアスファルト塊を溶かし、棒状工具 (木製の棒か?) を筥として使い、何度もすくい上げて接着剤として石織の基部などに塗ったと推定される。またアスファルトが付着した磨石が出土しており、それを砕いて摺った痕跡である可能性がある。

##### アスファルトで着柄した石器

他に御所野遺跡では、石織基部、有茎の石槍基部にアスファルト付着痕跡が認められ、また馬場平遺跡の大木8b式期C3堅穴建物跡から出土した石槍の基部には、紐巻き痕と見られるアスファルト痕が帯状に認められた。いずれも柄への装着法、紐巻きの様相などを示している。なお、石織には、どのタイプにも約10%付着していた。また磨製石斧頭部の付着痕も着柄を示すかもしれない。またアスファルト付着の三角形土器片版も出土しており、晩期の石製円版にしばしば認められる中心部へのアスファルト付着に通じるのかも知れない。

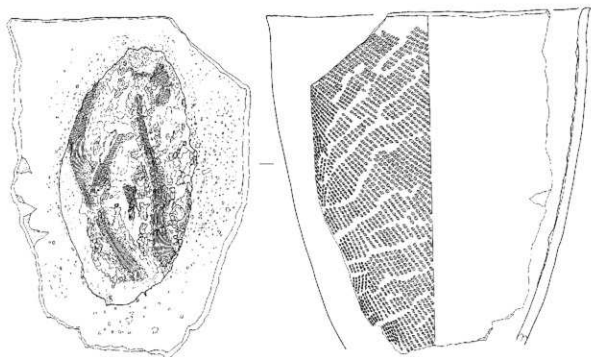
##### まとめ

アスファルト産地である新潟から東北の日本海側、あるいは道南の渡島半島から遠く離れたアスファルト消費地で、搬入されたアスファルト塊、アスファルトを砕いたと考えられるそれが付着した敲石や磨石が出土し、大型土器片で溶かし、それをパレットとして用いた塗布作業など、一連の作業工程が推定できた。御所野遺跡と同様に岩手県東南の一関市藤沢町ノ沢遺跡でも、晩期のアスファルト塊入り小型土器、塊、内面付着にアスファルトを筥状工具ですくった痕跡のある大型土器片が出土し (岩手県埋蔵文化財調査センター 2000)、御所野遺跡と同様な利用工程があったことをよく示している。

(岡村 道雄)

## 引用文献

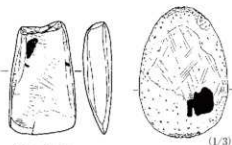
- 一戸町教育委員会 1983 「一戸バイパス関係埋蔵文化財調査報告書Ⅲ」一戸町文化財調査報告書第4集
- 一戸町教育委員会 2003 「御所野遺跡Ⅱ」一戸町文化財調査報告書第53集
- (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査センター 2000 「相ノ沢遺跡発掘調査報告書」岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第332集
- (株)ズコーシャ 1993 「炭化食物の残留脂肪酸分析」『御所野遺跡Ⅰ』一戸町文化財調査報告書第32集



アスファルトが付着した大型土器片 (1/4)



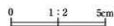
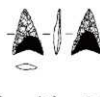
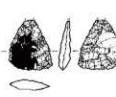
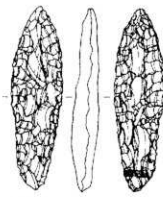
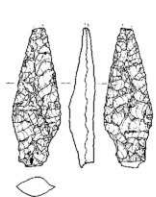
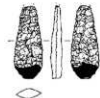
アスファルト塊 馬場平遺跡出土 (1/2)



(1/3)



アスファルト塊 (1/3)



第79図 アスファルト塊とアスファルト付着遺物

## (5) 漆付着遺物

既刊報告書の中で「漆付着」などの記載や図示があるものや「赤色顔料付着」の記載のあるもの、既刊報告書の不掲載遺物の中でも漆の可能性のある付着物が認められるものを第18表に集めた。赤色顔料がすべて漆塗りに使用されたとは限らないが、その可能性のあるものや漆塗りに加色する技術に関係する可能性があるものも含まれると考え、一覧に含めた。また、アスファルト付着遺物も含まれている可能性もあるが、同様に一覧に含めた。

集成した付着遺物41点の種別は、石器35点、石器4点、土製品2点である。土器片の内外面には黒色～暗褐色の塗膜があるものや赤色顔料がみられ、これらの土器は大木8b～10式併行のものがほとんどである。DF14竪穴建物跡2層出土の小形壺（No.10）の内面には赤色顔料・黒色の付着物が認められ、特筆されよう。また、内面に赤色顔料の付着や黒色の塗膜がみられる小形土器が8点出土している。石器では磨石の表面に赤色顔料が付着しているものがみられる。

肉眼観察だけでは漆が付着しているかどうかの判断が難しいこのような付着物の内容を明らかにするため、4点（No.1・10・11・20）の科学的な分析を行った。漆付着の可能性のある遺物の科学的な分析を実施したのは今回が初めてである。このうち、第18表No.20は成分分析を行ったところ、胴部～底部内面にみられる塗膜はパイプ状ベンガラが混和された赤色の漆塗膜であることなどの結果が得られた。詳しい分析内容は第4章第3節および第6節を参照していただきたい。

今後は、今回行った分析内容を踏まえながら遺物の観察を進めるとともに、御所野遺跡における漆利用やその技術などについて、さらに調査を進めていきたい。（菅野 紀子）

第18表 漆付着遺物一覧表

No.	報告書	調査区	バヤジ	報告書掲載No.	種別 (図号/形状)	時期	調査区	出土地点	出土層位 (遺り/上下)	付着物
1	I	23	新 第13区3	小形壺跡 (胴部下)	B	GA20 トレンチ	DF24 竪穴建物跡	3層		内面に暗褐色の塗膜
2	I	136	第 14区14	陶片	-	-	-	-	-	断面の付着物
3	I	136	第 14区15	磨石	-	-	16号古墳	5a層	-	表面に付着あり
4	I	196	第 13区13	漆跡 (1層跡)	V	東郷2調査区	DF33 竪穴建物跡	5a, 5b	-	内面に赤色顔料付着?
5	I	205	第 14区14	漆跡 (1層跡)	V	西郷調査区	D25 竪穴建物跡	1層	-	内面に赤色顔料の付着物
6	I	227	第 14区14	漆跡 (1層跡)	V	西郷調査区	D25 竪穴建物跡	1層	-	内面に黒褐色の付着物 (少量)
7	II	20	第 14区2	漆跡 (胴部下)	V	東郷1調査区	DF24 竪穴建物跡	P-2	-	内面に黒～暗褐色の塗膜
8	II	20	第 14区4	漆跡 (胴部下)	V	東郷1調査区	DF24 竪穴建物跡	P-4	-	内面に赤色顔料
9	II	113	第 14区12	網? (胴部下)	B	西郷調査区	DF14 竪穴建物跡	2層 点ベクト P-1	-	内面に赤色顔料
10	II	113	第 14区13	小形壺	B	西郷調査区	DF14 竪穴建物跡	胴部 P-2	-	内面に赤色顔料付着、黒色付着物もあり、内面に黒～暗褐色の塗膜
11	II	118	第 14区4	壺	V	西郷調査区	DF22 竪穴建物跡	胴部	-	内面に赤色顔料
12	II	119	第 14区11	漆跡 (胴部)	V	西郷調査区	DF22 竪穴建物跡	1層	-	内面に赤色顔料
13	II	130	第 14区6	漆跡 (胴部下)	V	西郷調査区	D25 竪穴建物跡	P-1	-	内面に黒～暗褐色の塗膜
14	II	107	第 14区12	小形壺	V	B, 区	PC24B 竪穴建物跡	5a, 1	-	内面に赤色顔料及び暗褐色塗膜、底子の裏面に付着
15	II	129	第 14区10	磨石	-	-	-	-	-	赤色顔料 (微量)
16	II	129	第 14区13	磨石	-	B, 区	-	-	-	赤色・褐色の付着物
17	II	111	第 14区4	土器片	-	B, 区	PC28-08 竪穴建物跡	5a, 1	-	内面に黒色の付着物
18	II	145	第 14区10	土器片	-	B, 区	PC28-08 竪穴建物跡	-	-	赤色顔料
19	V	62	DF 14区12	網? (胴部)	-	GA20 トレンチ	DF 14 遺跡	-	-	内面に黒色付着物
20	V	102	第 14区12	漆跡 (胴部)	付着	GA20, GA20	DF24 竪穴建物跡	2層, 3層, 5層	-	4層の黒褐色塗膜、黒褐色塗膜付着
21	V	1907	-	小形壺跡 (1層跡)	?	区	D214 竪穴建物跡	2層	-	内面に赤色の塗膜、内面に赤色顔料
22	V	1907	-	漆跡 (胴部)	B・V	区	DF24 小形壺建物跡	CL	-	内面に赤色顔料
23	V	1907	-	網? (胴部)	B・V	区	DF24 竪穴建物跡	2層	-	内面に赤色顔料
24	V	1907	-	漆跡 (胴部)	?	区	D214 竪穴建物跡	3層	-	内面に黒色の塗膜
25	V	1906	-	漆跡 (胴部)	B・V	区	D214 竪穴建物跡	1層	-	内面に赤色顔料
26	V	1906	-	小形壺跡 (胴部)	?	区	D214 竪穴建物跡	1層	-	内面に黒色の塗膜、内面に赤色顔料
27	V	1906	-	漆跡 (胴部)	?	区	GA24 竪穴建物跡	4層	-	内面に黒色の塗膜
28	V	1906	-	漆跡 (胴部)	?	区	GA24 竪穴建物跡	4層	-	内面に黒色の塗膜、赤色顔料
29	V	1906	-	漆跡 (胴部)	?	GA20 トレンチ	D214 竪穴建物跡	1層	-	内面に赤色顔料
30	V	1907	-	漆跡 (胴部)	B・V	西郷調査区	D214 竪穴建物跡	3層	-	内面に赤色顔料
31	V	1906	-	漆跡 (胴部)	B・V	西郷調査区	DF14 竪穴建物跡	2層	-	内面に赤色・暗褐色の塗膜、赤色顔料
32	V	1907	-	小形壺跡 (胴部)	D?	西郷調査区	DF14 竪穴建物跡	3層	-	内面に赤色・暗褐色の付着物
33	V	1906	-	網? (胴部)	D・V	西郷調査区	D214 竪穴建物跡	4層	-	内面に赤色顔料
34	V	1906	-	小形 (胴部)	B・V	西郷調査区	D214 竪穴建物跡	3層	-	内面に赤色顔料 (微量)
35	V	1906	-	漆跡 (胴部)	B・V	西郷調査区	D214 竪穴建物跡	3層	-	内面に赤色顔料
36	V	1906	-	漆跡 (胴部)	B・V	西郷調査区	D214 竪穴建物跡	2層	-	内面に黒色の塗膜、赤色顔料付着
37	V	1907	-	漆跡 (胴部)	V	西郷調査区	DF22 竪穴建物跡	4層	-	内面に赤色顔料、内面に黒色の塗膜
38	V	1907	-	漆跡 (胴部)	B・V	西郷調査区	DF22 竪穴建物跡	4層	-	内面に黒色・赤色の塗膜
39	V	1906	-	小形 (胴部)	B・V	西郷調査区	DF22 竪穴建物跡	CL	-	内面に黒色の塗膜 (一部は黒色Aがある)
40	V	1906	-	小形 (胴部)	B	西郷調査区	DF22 竪穴建物跡	1層	-	内面に赤色顔料
41	V	1906	-	漆跡 (胴部)	V	西郷調査区	D214 竪穴建物跡	5a, 1	-	内面に黒色の塗膜



## (6) 御所野遺跡の動物遺体の問題

### はじめに

御所野遺跡では焼骨が約3,000点出土している。粉状の資料も含むので数量の多さに余り意味がないが、その内容は十分に検討する価値がある。特に、この遺跡では遺跡全体の土地利用が理解できるように計画的に発掘調査が行われていることから、焼骨と遺跡全体との関係も考慮できるという長所がある。そこで、ここでは焼骨の問題を中心にこの遺跡出土の動物遺体の意義を考えることとする。

### 1. 動物遺体の内容

動物遺体の分析では、長さ2mm以下のものは粉状または微細破片として、それ以上の分析は行っていない。2mm以上の資料は同定に努めたが、部位と種名が判明したものは少ない。採取された土壌を水洗して小さな椎骨の検出に努めたが、水洗選別では動物骨は採取できなかった。これらの作業の結果、魚類ではコイ目のウグイ?が含まれていた。哺乳類ではシカ・イノシシ・ツキノワグマ・イヌ?・クジラ類・キツネまたはタヌキが含まれていることが分かった。鳥骨の破片も少量みられたが、部位と種名は分からなかった。

それらの資料を説明すると、コイ目の椎骨は長さ高さ約5mm前後であり、ウグイではないかと思われるが椎骨のため種同定はできない。ツキノワグマは中手骨または中足骨の遠位部の破片が1点みられただけであり、成獣のものと思われる。イヌ・キツネ・タヌキと推定されたものもごく少量である。それらは中手骨や中足骨の破片であり、収縮しているので種を決定できなかった。クジラとしたものは同一地点から小さな破片が8点出土しており、おそらく加工品であったと思われる。

シカとイノシシは焼骨の主体であり、どちらの種が多いかは分からない。この2種の四肢骨は長さ1cm程度の大きさに割れており白色化していた。十分に焼かれたものと思われる。顎骨に歯が残っているのが見られた。歯は骨よりも燃えやすいので、歯と顎骨が四肢骨と一緒に焼かれた場合は、歯が消滅するが、この遺跡でシカとイノシシの歯が残っていることから、頭部は焼かれずに遺棄されたものもあったと推測される。貝塚内で骨が残るように、周囲の土壌に灰や焼骨が多く含まれていれば、貝塚と同様に生の骨も保存されたとと思われる。シカの場合は、焼けた角が見られたので、骨と同様に角も焼かれた場合が多いであろう。鹿角の中で袋角が見られたことは注目すべきことである。袋角は成育途中の角であり、角(骨)質は弱く保存されにくい。焼かれていなければ消滅したであろう。今回の場合、角先部分であったため緻密質が十分にできていない袋角と認めることができたともいえる。袋角が残っていたことは、それらが意図的に焼かれたことを示している。なお、袋角が見られたことから、その個体が夏季に捕獲されたと推測される。

### 2. 焼骨の意味

#### a. 焼骨の生因

まず、焼骨の生因について考えてみると、火事等により焼ける場合と意図的に焼かれる場合がある。火事で焼ける場合は、土器・石器・骨製品などの生活道具も一緒に焼けて出土するし、焼けた人骨も伴うことがある。意図的に焼く場合は食事の時の調理によるものと儀礼に伴う場合がある。調理に伴う焼骨には魚骨が多い。この遺跡でもウグイと思われる椎骨は調理や食事に伴う焼骨かもしれない。そして儀礼的に焼く場合では、骨そのものに対する儀礼と骨を供物として扱って焼く場合が考えられる。生の骨は、肉を取り除いた後でも水分が多いため、骨に含まれる油脂分だけでは焼けない。筆者の経験では意図的に木炭などで焼かなければ骨を焼くことはできなかった。骨の表面が白色化して取

縮させるためには大きな焚火が必要であった。この遺跡の焼骨は、大部分がよく焼けて収縮し白色化していた。そのため、これらの骨は意図的に念入りに焼かれたものであることは明らかである。

#### b. 焼骨の出土位置

さて、焼骨の意味を考える手掛かりとして、出土位置を見てみたい。焼骨の分布域を第80図に示したが、焼骨は遺跡の中央部で出土していることが分かる。遺跡の発掘は中央部だけではなくその他の地点でも行われているが、焼骨が多く出土したのは中央部だけである。この地区は、縄文時代中期後半（大木8b式期～大木10式期）の竪穴建物跡と中期末葉の配石遺構と墓坑が出土した地点である。しかし、配石遺構と墓坑には焼けた骨が伴っていないことが発掘時点で確認されている。焼骨の出土位置を詳しく見ると、第81図に示したように、中期後半の竪穴建物跡の窪み及びその近くで出土していることが分かる。そして発掘調査の所見では、竪穴建物跡に伴う炉とは別に、焼土と灰を伴う炉跡が、竪穴建物跡の覆土の中に数か所見られたという。その炉の中には焼骨が含まれていた。おそらく、その炉で動物骨が焼かれたと推測される。焼骨全体の分布も、竪穴建物跡覆土及び骨を焼いた炉の近くに多く分布していることから、それらの焼骨は、出土地点で何らかの意図を持って散布されたものであろう。なお、焼骨の時期は、焼骨と骨を焼くための炉跡の出土状態からみて、縄文中期後半から中期末と推測される。

#### c. 焼骨の意味

次に問題となることは骨を焼く目的がその動物に対する儀礼であるか、または何らかの儀礼に伴う供物としての意味を持っていたかである。この点については、袋角が出土したことが注目される。シカの角は毎年生え換わることから、再生を象徴するものとして多くの民族例で知られている。この遺跡の場合、単なるシカの角ではなく袋角であったことは、意図的にそれを選んだことが考えられる。袋角の場合、骨質がもろいので遺棄されると消滅しやすい。焼けていなければ残っていないであろう。つまり意図的に焼いていることになり、鹿角をシカの再生の意味を込めて焼いた可能性が考えられる。

さらにこの遺跡の場合、焼けた骨が中期末の竪穴建物跡の窪みで焼かれたことが明らかである。この点を積極的に考えると、住居に暮らした祖先に対する儀礼であったことも考えられる。また、この場所が当時の村の儀礼の場所とされていた場合には、特定の祖先ではなく、その村全体に関わる儀礼が行われていたとも考えられる。現在のところ、焼骨の分布域が当時の村の中央部に偏っていることと、そこで焼かれていたことから考えると、この場所が村全体の儀礼の場所として意識されていたと推測される。もちろんその儀礼には、祖先に対する儀礼も含まれていたと思われる。

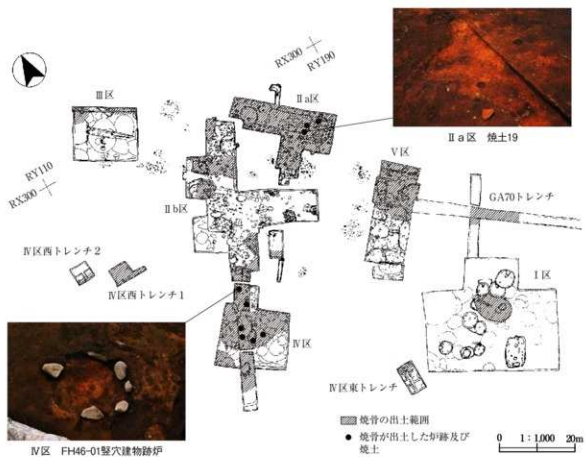
### 3. まとめ 一御所野遺跡の焼骨儀礼の意義

以上に述べてきたように、御所野遺跡の焼骨は、よく焼けているものが大部分であることから意図的に焼かれたことは確実である。そして、焼骨の出土地点が限定されていることから考えて、焼けた骨を用いた儀礼が行われたと推測される。その焼骨儀礼は、骨を焼いた炉が焼骨に伴って確認されたことにより、骨を焼く行為と骨を散布する行為のいずれもが同一地点で行われたことが確実となり、焼骨の出土地点そのものにも大きな意味があったことが明らかとなった。その出土地点は、この御所野集落の特別な聖なる場所であったことを意味している。つまり、御所野遺跡では、縄文中期末には集落の中央部が聖なる場所とされて、そこで焼骨儀礼が行われたと考えられる。

(西本 豊弘)



第80図 焼骨が出土した調査区



第81図 焼骨の出土地点

## (7) 植物遺体群 (種実類および木材)

### はじめに

御所野遺跡から出土した植物遺体群はすべて燃焼によって炭化したものである。主要なものは種実類(種子・果実、ときに茎・葉を含む)と木材である。これらはいずれも人が資源として利用したものである。その意味では植物遺体群と呼ばなくてはならないが、これまでの慣例によって植物遺体群と総称する。御所野遺跡では谷底や水路などの水成堆積物が確認されていないので、炭化していない植物遺体群は出土していない。したがって植生に由来する自然堆積の植物遺体群は見い出されていないので、植生とその場所性についての情報は乏しい。土器の圧痕も調査されているが、植生については限定的である。このことが御所野遺跡の植物遺体群の大きな特徴である。出土した植物遺体群は報告書名で『御所野遺跡Ⅰ』『御所野遺跡Ⅱ』『御所野遺跡Ⅲ』『御所野遺跡Ⅳ』『平成21年度一戸町文化財年報』『平成22年度一戸町文化財年報』および『環境文化史研究』第1号に記載されているが、ここではそれらを統合して御所野遺跡における植物遺体群の性格と植物資源利用についてまとめておきたい。なお、炭化植物遺体群は種実類と木材を主体にするため大気中の放射性炭素濃度に依拠する放射性炭素年代測定には好適な試料となるので、土器型式との関係が明らかなものについては放射性炭素年代も併記することにした。

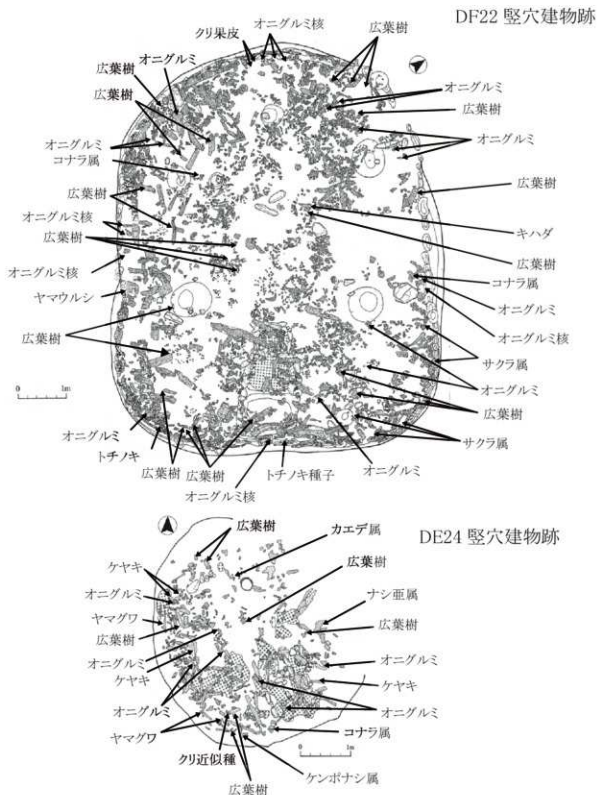
これまでに報告された出土種実類の地点・層位および組成を第19表にまとめた。遺構や層位など統合できるものは一括して示してある。また、誤同定など特記事項については最右欄に示した。たとえば、『御所野遺跡Ⅰ』でFJ46トレンチ炉3はバリノ・サーヴェイ(1993)でモモ核と同定されたが、再検討の結果ここではトチノキ種子に修正した。

### 1. 西側調査区における植物遺体群

西側調査区で出土した植物遺体群の大半は堅穴建物跡の炭化材からなる。これは西側調査区では堅穴建物跡が29棟も確認され、うち22棟の調査がされたためである。22棟のうち7棟が焼失建物跡であったため、燃焼によって残存した建築部材の炭化材の産出状況と樹種が精査されている。

DF22堅穴建物跡(第82図)では、調査時に精度の高い個体識別が行われた(一戸町教育委員会編、2004)。樹種同定の結果、焼失建物跡の床上からはクリ、オニグルミ、広葉樹が、床上10cm以内からはクリ、オニグルミ、キハダ、コナラ属が、床上10～25cmからはクリ、オニグルミ、トチノキ、サクラ属、広葉樹が、床上25～40cmからはクリ、ヤマウルシ、サクラ属、広葉樹が出土し、堅穴縁辺に直立していた炭化材はすべてクリであった。同定された炭化材505点のうちクリは444点でその大半を占めた。このほか個数は少ないもののコナラ属が2点、サクラ属が5点、オニグルミが16点、ヤマウルシが1点、トチノキが1点、キハダが1点、種属まで同定できなかった広葉樹が34点、樹皮が1点確認された。少数ながらもオニグルミがまんべんなく散在し、主要な部材と考えられる。これに対してサクラ属は東側の縁辺に限られ、特殊な部材であった可能性がある。種実類ではオニグルミの核、トチノキの種子、クリの果皮が出土したが、いずれも堅穴建物跡の縁辺に限られた。オニグルミの核の放射性炭素年代は $3970 \pm 20$ BP (PLD4445)(小林ほか、2006)である。土器型式は大木10式である。

DE24堅穴建物跡(第82図)では、同定された炭化材127点のうち、クリが97点と大半を占めた。ほかにクリ近似種1点、ヤマガワ3点、ケヤキ4点、コナラ属1点、オニグルミ9点、ナシ亜属1点、ケンボナン属1点、カエデ属1点、種属が同定できない広葉樹8点、不明1点が出土した。種実類では、クリの子葉、オニグルミの核が出土した。オニグルミの核の放射性炭素年代は $3990 \pm 40$ BP (IAAA-32074)(小林ほか、2006)である。土器型式は大木10式である。



DD18堅穴建物跡から出土した炭化材10点すべてがクリに同定された。DF14堅穴建物跡から出土した炭化材15点のうち14点がクリに同定された。DE18堅穴建物跡から出土した炭化材100点のうち87点がクリに同定された。他の13点は、ハリギリ1点、サクラ属1点、オニグルミ1点、ニガキ1点、広葉樹8点、環孔材1点であった。種実類ではコナラ属の種子が出土した。DH28堅穴建物跡から出土した炭化材7点はすべてクリに同定された。種実類ではオニグルミの核が出土した。

以上のように、西側調査区における堅穴建物跡の建築部材の大半はクリ材が使用されており、それ以外ではオニグルミをはじめとしてすべて広葉樹であった。こうしたクリ材への強い傾倒は、クリ林の維持管理を前提とした強い樹種選択があったと考えられる。その他の樹種についても二次林の要素であり、人為生態系の存在を示唆している。

## 2. 中央調査区における植物遺体群

中央調査区では、堅穴建物跡55棟が確認され、うち19棟が調査されている。

### I区

3棟の焼失堅穴建物跡で出土した炭化材の樹種同定と放射性炭素年代測定が行われた。GD64堅穴建物跡からの炭化材16点は、クリ14点、サクラ属1点、不明1点であった。種実類ではクリの子葉が出土し、その放射性炭素年代は $4140 \pm 25$  BP (PLD-4443) (小林ほか, 2006)であった。土器型式は大木9式である。GF64-02堅穴建物跡で出土した炭化材55点は、クリ42点、広葉樹6点、不明7点であった。種実類はクリの子葉で、その放射性炭素年代は $4420 \pm 40$  BP (IAAA-32069) (小林ほか, 2006)であった。土器型式は円筒上層d式である。GD66-02堅穴建物跡からの炭化材15点は、クリ11点、ニレ属2点、コナラ属1点、広葉樹1点であった。GD62-01堅穴建物跡から出土した種実類は、クリの子葉、オニグルミの核で、オニグルミの核の放射性炭素年代は $4155 \pm 40$  BP (PLD-4442) (小林ほか, 2006)であった。土器型式は円筒上層e・大木8b式である。GD66-01堅穴建物跡から出土した種実類はオニグルミの核で、その放射性炭素年代は $4175 \pm 40$  BP (MTC-04713) (小林ほか, 2006)であった。土器型式は大木10式である。GE60-01堅穴建物跡から出土した種実類はクリの子葉、オニグルミの核で、クリ子葉の放射性炭素年代は $4220 \pm 40$  BP (IAAA-32067) (小林ほか, 2006)であった。土器型式は大木9式である。

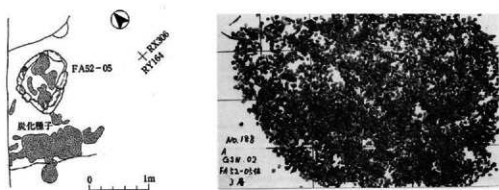
### IIa区

確認された遺構は、堅穴建物跡24棟、掘立柱建物跡2棟、土坑約70基、柱穴250個に及ぶ。

FA52-05堅穴建物跡では、石開戸周辺からトチノキの種子で占められる炭化種実類が確認された(第83図)。種皮がついていることが確認できるものもあった。他にクリの子葉、オニグルミの核、コナラ属の種子が含まれ、わずかに炭化材片が混入する。トチノキの種子の断面に土がほとんど付いていないことから、完形に近いものであったとことが示唆される。取り上げられたトチノキの種子の重量は1.3kgにもなる。トチノキの種子の放射性炭素年代は $3955 \pm 35$  BP (Tka-14213) (國木田ほか, 2008)であった。土器型式は大木10式である。FB54-01堅穴建物跡の柱穴からトチノキ種子が出土し、その放射性炭素年代は $3780 \pm 50$  C<sup>14</sup>BP (Tka-14214) (國木田ほか, 2008)である。土器型式は大木8b式である。

### IIb区

確認された遺構は堅穴建物跡21棟、掘立柱建物跡7棟、柱列2列、土坑約90基、柱穴636個に及ぶ。トチノキの種子を主体とする植物遺体群などが各所から出土している。主要なFC48掘立柱建物跡、FC50-1掘立柱建物跡、FC50-2掘立柱建物跡の位置と平面図および各柱穴の断面を合わせて第84図に



第83図 中央調査区Ⅱa区のFA52-05堅穴建物跡におけるトチノキ主体種子実遺体群の出土状況  
遺構図は御所野遺跡Ⅲ、遺物写真は辻ほか、2008より抜粋（ます目は5cm）

示す。

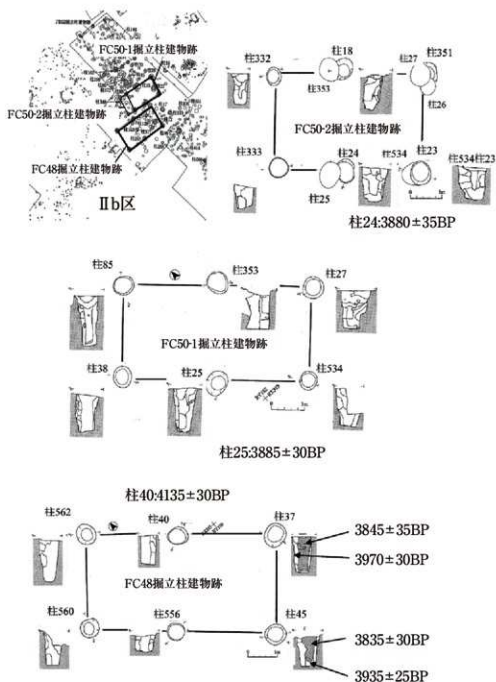
FA50-01堅穴建物跡は焼失建物跡と考えられた。出土した種実類はクリの子葉、オニグルミの核、トチノキの種子であった。柱穴146から出土したトチノキの種子は20gにもなる。クリ子葉の放射性炭素年代は $3900 \pm 40$  BP (IAAA-32071) (小林ほか、2006)、トチノキの種子の放射性炭素年代は $3870 \pm 35$  BP (Tka-14202) (國木田ほか、2008) であった。土器型式は大木9式である。FB52-03堅穴建物跡から出土した種実類はクリの子葉、オニグルミの核で、オニグルミ核の放射性炭素年代は $4110 \pm 40$  BP (IAAA-32075) (小林ほか、2006) であった。土器型式は大木8b式である。

FB52-04堅穴建物跡から出土した種実類はトチノキの種子、オニグルミの核で、トチノキ種子の放射性炭素年代は $4110 \pm 30$  BP (Tka-14203) (國木田ほか、2008) である。FC48-01堅穴建物跡から出土した種実類はトチノキの種子、クリの子葉で、クリ子葉の放射性炭素年代は $3860 \pm 40$  BP (IAAA-32072) (小林ほか、2006) である。土器型式は円筒上層d式である。國木田ほか (2008) は大木8b式の可能性のある土器を含む層のトチノキ種子で $4030 \pm 35$  BP (Tka-14204)、大木9式土器を含む層のトチノキ種子で $3910 \pm 35$  BP (Tka-14206)、円筒上層d式の可能性のある土器を含む層のトチノキ種子で $3855 \pm 45$  BP (Tka-14205) の放射性炭素年代を得ている。FD48-01堅穴建物跡から出土した種実類はオニグルミの核、クリの子葉、トチノキの種子で、クリ子葉の放射性炭素年代は $3945 \pm 25$  BP (PLD-4441) (小林ほか、2006) である。土器型式は大木9式である。FE48-01堅穴建物跡から出土した種実類はクリの子葉で、その放射性炭素年代は $4115 \pm 25$  BP (PLD-4446) (小林ほか、2006) である。土器型式は大木9式である。

FC48掘立柱建物跡 (第84図) の柱穴からは、多量のトチノキの種子と少量のクリの子葉を伴う炭化種実遺体群が出土した。特に柱穴37では総量約640g、柱穴45では総量約700gにもなる。土層断面では廃棄単位ごとに産出状況が確認でき、層位 (単位) ごとに取上げられている。柱穴37、柱穴45では柱を建てた時に5層、6層が、抜いた後を埋めた3層、1層の層位関係が確認でき、柱を抜いた後の埋土のトチノキ種子の放射性炭素年代はそれぞれ $3845 \pm 35$  BP (Tka-14211)、 $3835 \pm 30$  BP (Tka-14212) である (國木田ほか、2008)。本報告では柱穴37、柱穴45それぞれの柱を建てた時の5層、2層のトチノキ種子の放射性炭素年代が記載され (辻・國木田、2015)、それぞれ $3970 \pm 30$  BP (PLD-18632)、 $3935 \pm 25$  BP (PLD-18633) と測定された。さらに柱穴40の柱を建てた時のトチノキ種子の放射性炭素年代は $4135 \pm 30$  BP (PLD-18634) と測定された。このことは掘立柱建物を経てから柱

を引き抜くまでに放射性炭素年代で100年あるいはそれ以上が経過したことを示している。

FC50-1掘立柱建物跡（第84図）の柱穴25からは3gのトチノキの種子が出土した。トチノキ種子の放射性炭素年代は $3885 \pm 30\text{BP}$  (Tka-14253) (國木田ほか, 2008) である。FC50-2掘立柱建物跡（第84図）の柱穴24からは8.5gのトチノキの種子が出土した。トチノキ種子の放射性炭素年代は $3880 \pm 35\text{BP}$  (Tka-14208) (國木田ほか, 2008) である。柱穴24と柱穴25は切り合い関係にあるが、放射性炭素年代はおおむね一致する。



第84図 中央調査区IIb区のFC50-2、FC50-1、FC48掘立柱建物跡の平面図と柱穴の断面図 (御所野遺跡IIIより作図)



### Ⅲ区

竪穴建物跡24棟、土坑7基、柱穴9個が検出されている。柱穴1から少量のトチノキ種子が出土している。

### Ⅳ区

盛土遺構といわれる地域で、盛土遺構を横切るFH48トレンチ、FH46トレンチ、FJ46トレンチ、GA44トレンチを含む範囲である。Ⅳ区西側の西トレンチ1、西トレンチ2、東側の東トレンチを含めてⅣ区としている。配石遺構1基、竪穴建物跡18棟、土坑3基、柱穴21個が検出されている。

FJ46トレンチ：『御所野遺跡Ⅰ』で盛土遺構の野外炉FJ46No.3として記載されたが、その後の確認調査で床面と壁の立ち上がりか確認出来たことから竪穴建物跡とされた。FJ46-01竪穴建物跡の炉は複式炉と考えられ、炭化物がべったりと張り付いた状態で検出された（第85図）。炉の炭化物は『御所野遺跡Ⅰ』ではモモ核として報告されたが、同標本を再検討した結果、トチノキの種子に同定された（第86図）。他にクリ子葉片、オニグルミ核片が出土している。FJ46-02竪穴建物跡の種実はクリ子葉片、トチノキの種子、オニグルミの核が出土した。GA44トレンチ：GA44-01竪穴建物跡の出土種実類はクリの子葉、トチノキの種子、オニグルミの核である。GB44-01竪穴建物跡の出土種実類はトチノキの種子、オニグルミの核である。GB44-01竪穴建物跡の盛土遺構最下層面から検出されたオニグルミの核の放射性炭素年代は4405±25 BP (PLD-4444)（小林ほか、2006）であった。土器型式は円筒上層d式である。Ⅳ区東トレンチのGE56-05土坑から出土した種実類は、トチノキの種子、オニグルミの核である。Ⅳ区西トレンチ1のFE38-02竪穴建物跡のサブトレンチ1では6層上面にべったりと管状の炭化物が確認された。これらは幅2から3mmの管状で、その横断面からササ類近似種である可能性が高い。他に出土した種実類はトチノキの種子、オニグルミの核で、サブトレンチ2ではトチノキの種子、オニグルミの核が出土している。

## 3. 東側調査区における植物遺体群

竪穴建物跡34棟が確認され、うち30棟が調査されている。うち1棟が焼失建物跡である。

### 1 調査区

HD158竪穴建物跡において出土した炭化材26点は、23点がクリ、1点がケヤキ、1点が広葉樹、1点がハリギリに同定された。GI144竪穴建物跡から出土した種実類はトチノキの種子、クリの子葉で、クリ子葉の放射性炭素年代は4060±50 BP (IAAA-32070)（小林ほか、2006）であった。土器型式は大木10式である。

### 2 調査区

HA118竪穴建物跡から出土した種実類はオニグルミの核で、その放射性炭素年代は4080±40 BP (IAAA-32066)（小林ほか、2006）であった。土器型式は大木9式である。HB120竪穴建物跡から出土した種実はオニグルミ核で、得られた年代は4075±35 BP (MTC-04714)（小林ほか、2006）である。土器型式は大木9式である。

## 4. 御所野遺跡における炭化植物遺体群の性格と樹種選択

御所野遺跡における植物遺体群のほぼすべてが炭化植物遺体群であり、炭化種実類と炭化材からなることはすでに述べたとおりである。

まず炭化種実類の性格について検討しておこう。第19表から明らかなのは、炭化種実類がトチノキ種子、オニグルミ核、クリ子葉といったように3種の特定の部位にはほぼ限定されることである。こ

れらはいずれも縄文時代の主要な食料とされてきたもので、これら3種の種実が食料資源として重要な位置を占めていたことを示している。

3種の樹種のうちトチノキは、東北地方では縄文中期後半に森林植生を構成する主要素となり、縄文人によって利用されるようになったことが明らかになっており、その年代は放射性炭素年代で約4400BP、約4100BP、約3700BPと測定され、段階的に拡大していったとされている（國木田ほか、2008）。御所野遺跡の年代については各地区での種実類記載でも併記したように、約4400以降の円筒上層d式土器および大木8b式土器期にトチノキ種実が出土しており、その後の大木9式および大木10式土器期ではありふれて出土するようになり、かつ量的にも他を圧倒するような産出状況がうかがえる。だとすると御所野遺跡に居住した縄文人は、基本的にトチノキ利用という文化をもっていたか、文化を最初に形成した人々ということになるだろう。縄文中期後半以降におけるトチノキ種実利用については関東地方でも西日本においても確認されているので、トチノキ利用という文化がどこで成立し拡大あるいは伝播していったのかを検討しながら御所野遺跡の縄文社会の位置づけを行っていく必要があるだろう。

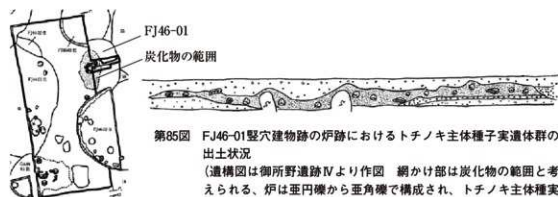
その上で考慮すべきことが二つある。一つは、炭化したオニグルミ核やクリ子葉が焼失建物跡内に散在していたのに対してトチノキ種子はほとんど見られず、むしろ建物内の石囲炉を中心にトチノキ種実が大量の遺体群として出土したことであろう。もう一つは、掘立柱建物跡の柱穴内の埋土と、柱を建てた時点の埋土と、柱を引き抜いた時点の埋土からも、トチノキ種実を主体としクリ子葉やオニグルミ核を少量ともう炭化種実類が出土していることである。両者に共通する特異な点として、種皮を伴ったトチノキ種実があること、さらに中途半端な炭化ではなく、種子内部まで燃焼が行き届いたいわば完全な蒸し焼きを示す産出状況を示すことである。このことは偶然に焼けてしまった可能性や、加熱処理などの工程でアクセントとして焼けてしまった可能性を否定する。すなわちトチノキ種実遺体群あるいはトチノキ主体種実遺体群は、意図して炭化されたのではないかということである。とくに柱穴に埋土とともに、あるいは埋土として入れられるには特別な意図がある可能性が高い。柱穴内の遺体群にはトチノキ種実だけでなくわずかなクリ子葉が必ずと言っていいほど伴っていることも特別な意図を示唆している。

縄文中期以降のトチノキ種実遺体群あるいはトチノキ主体種実遺体群が出土した各地の事例を見ておこう。岩手県二戸市赤坂田1遺跡ではピット内で容積にして80Lもの炭化トチノキ種子が出土しており、そのトチノキ種子の放射性炭素年代は $2650 \pm 80$ BP、 $2670 \pm 90$ BPと測定されている（岩手県埋蔵文化財センター、1983）。青森県三戸郡階上町野場（5）遺跡では、土坑から重量にして5200gもの炭化トチノキ種子が出土し（渡辺、1993）、この土坑出土のトチノキ種子の放射性炭素年代は $4050 \pm 45$ BP（Tka-14420）、 $4100 \pm 50$ BP（Tka-14421）、 $4070 \pm 50$ BP（Tka-14422）、 $4020 \pm 45$ BP（Tka-14423）と測定されている（國木田ほか、2008）。青森県八戸市風張（1）遺跡では、土坑から炭化トチノキ種子が出土している（八戸市教育委員会、2008）。新潟県長岡市中道遺跡からも炭化トチノキ種実が報告されているが、保存していたトチノキ種実が燃焼を受けた残滓と考えられている（胸形、1999）。千葉県佐倉市宮内井戸作遺跡では、野外炉MI54からトチノキ5.7kg、クリ1.2kg、オニグルミ0.3kgがまとまって出土しているが、クリとトチノキの果実・種子はほぼ完形かつ効果がないことから、特別な意図をもって焼かれたものと考えられた（辻、2009）。このクリ子葉の放射性炭素年代は $3345 \pm 25$ BP（PLD-7220）と測定された（小林ほか、2009）。福島県福島市和台遺跡では、住居の廃絶後に底面を掘り下げた穴から、クリ54.4kg、トチノキ3.84kg、オニグルミ2.56kgという大量の炭化種実が出土している。これは村落共同のクリ蒸し焼き施設か、または選りすぐったクリを用いた祭祀・儀礼の蒸し

焼き跡の可能性もあると述べている（飯野町教育委員会、2003）。以上のような事例からも明らかなように、トチノキ種実遺体群の炭化には特別な意図があると言わざるを得ない。その可能性の一つとして、トチノキ種子のあく抜きで示唆されるようなトチノキ種子のもつ強い毒性をもって邪悪を追い払うという意図である。ここでは可能性を示すにとどめ、今後の検証に期したい。

御所野遺跡の炭化材はほぼすべてが竪穴建物の建装部材であるといつてよい。すでに述べたようにその大半はクリ材に同定され、わずかにオニグルミ材に同定された以外はすべて広葉樹であった。さらにクリ、オニグルミを含めて、同定された広葉樹はすべて二次的な落葉広葉樹林を構成する要素と考えることができる。したがって人為的に意図して形成されたクリ林やオニグルミ林、森林への強い干渉によって形成された二次林の存在が示唆され、森林資源として維持する人為システムがあったことを示唆している。

（辻 圭子）



第85図 FJ46-01竪穴建物跡の炉跡におけるトチノキ主体種子実遺体群の出土状況  
 （遺構図は御所野遺跡Ⅳより作図 網かけ部は炭化物の範囲と考えられる、炉は亜円礫から亜角礫で構成され、トチノキ主体種実の炭化物層（網かけ部）がはりついている）



第86図 FJ46-01竪穴建物跡炉から出土したトチノキ種子  
 ①FJ46トレンチ炉3で報告されたモモ核（一戸町教育委員会 1993）  
 ②同一資料①を再検討し、トチノキ種子に同定した

#### 引用文献

- 飯野町教育委員会編 2003：和台遺跡 868p.  
 一戸町教育委員会編 1993：御所野遺跡Ⅰ 376p.  
 一戸町教育委員会編 2004：御所野遺跡Ⅱ 294p.  
 一戸町教育委員会編 2006：御所野遺跡Ⅲ 214p.  
 一戸町教育委員会編 2013：御所野遺跡Ⅳ 169p.  
 岩手県埋蔵文化財センター編 1983：赤坂田Ⅰ・Ⅱ遺跡発掘調査報告書 341p.

- 國木田大・吉田邦夫・辻誠一郎 2008：東北地方北部におけるトナノキ利用の変遷 環境文化史研究 第1号 7-26。
- 小林謙一・坂本 稔・新免歳清・辻 誠一郎・松崎浩之・村本周三 2006：御所野遺跡出土種子類の14C年代測定 御所野遺跡Ⅲ 204-210 一戸町教育委員会。
- 小林謙一・坂本 稔・西本豊弘 2009：宮内井戸作遺跡出土資料の14C年代測定 宮内井戸作遺跡 339-341 印旛都市文化財センター。
- 胸形俊剛 1999：新潟県長岡市中道遺跡 考古学ジャーナル447 20-24。
- 辻 圭子・辻 誠一郎・大松志伸・高田和徳 2008：岩手県御所野遺跡における縄文中期終末期のトナノキ種実遺体群の産出状況と意義 環境文化史研究 第1号 37-46。
- 辻 圭子 2009：Ⅲ-3地区MI-54炉跡より出土した炭化種実について 宮内井戸作遺跡 335-338 印旛都市文化財センター。
- 辻 圭子 2010：御所野遺跡から出土した植物遺体群にもとづく植生復元と植物資源利用 平成21年度一戸町文化財年報 51-70。
- 辻 圭子 2011：出土種実遺体と炭化木材からの御所野遺跡の植生復元と植物利用 平成22年度一戸町文化財年報 41-50。
- 辻 圭子 2013：御所野遺跡盛土遺構における出土種実遺体に関する考察 御所野遺跡Ⅳ 112-123 一戸町教育委員会。
- 辻 圭子・國木田大 2013：附・御所野遺跡Ⅳ区FJ46-01住の炉におけるトナノキ炭化種実の年代 御所野遺跡Ⅳ 124 一戸町教育委員会。
- 辻 誠一郎・辻 圭子・大松しのぶ 2006：御所野遺跡から出土した炭化植物遺体の調査 御所野遺跡Ⅲ 199-200。一戸町教育委員会。
- 辻 誠一郎 2015：御所野遺跡の年代 207-208 御所野遺跡Ⅴ 一戸町教育委員会。
- 八戸市教育委員会編 2008：風張（1）遺跡Ⅳ 382 p。
- 波辺 誠 1993：植物遺体 野場（5）遺跡発掘調査報告書 404-406 青森県埋蔵文化財センター

第19表 御所野遺跡の縄文時代遺構および土層から出土した炭化種実類遺体

調査区	年	遺構名	地点(グリッド)/層位	出土種実	年代推定, 特記事項
東横2調査区	1991	H1020型穴建物跡	2層	クワ子葉片, オニグルミ核残片	
東横2調査区	1991	H1020型穴建物跡	7a層	オニグルミ核残片	4075±30 ○オニグルミ
東横2調査区	1991	H1020型穴建物跡	南ト3層	オニグルミ核	○オニグルミ, 同定不確
東横調査区	1991	H1A00 Ⅱ層F		トナノキ種子一部片	
東横Ⅰ区	1991	H1B30 Ⅰ層		オニグルミ核片, 樹片	
東横Ⅰ区	1991	南一並ト1層	7a層	オニグルミ核片	
東横1調査区	1998	G214型穴建物跡	南ト 7a層	クワ子葉片, トナノキ種子片	4000±30
東横1調査区	1998	GP142土坑		トナノキ核残片	
東横2調査区	1997	H1A1型穴建物跡	1層	オニグルミ核片	4080±40
中央1区	1990	G898型穴建物跡	2層	オニグルミ核片	4400±40 ○オニグルミ
中央1区	1990	G898型穴建物跡	4層	クワ子葉	○同定不確(クワ?)
中央5区	1991	G244-40型穴建物跡	1層 7a層	オニグルミ核片	4015±25
中央1区	1998	G260-40型穴建物跡	7a層	クワ子葉片, オニグルミ核片	4220±40
中央1区	1994	G262型穴建物跡	GC66 Ⅱ上	オニグルミ核片	4130±25
中央1区	1998	G262-40型穴建物跡		クワ子葉片	
中央1区	1998	G262-40型穴建物跡		オニグルミ核片	
中央1区	1998	G262-40型穴建物跡	埋没部	オニグルミ核片	4200±40
中央1区	1994	G264-40型穴建物跡	4層	クワ子葉片	4140±25
中央1区	1998	GP144-40型穴建物跡		クワ子葉片	4420±40
中央1区	1994	GG60型穴建物跡	GC66 4層	オニグルミ核片	4175±40
西横調査区	1990	G1018型穴建物跡	2層	クワ子葉	
西横調査区	1997	D249型穴建物跡	M-2 2層	オニグルミ核片	
西横調査区	1997	D1039型穴建物跡		オニグルミ核片	
西横調査区	1997	DP22型穴建物跡	DP20 Ⅱ-4	オニグルミ核片, ヒメグルミ核片, トナノキ種子片	
西横調査区	1997	DP22型穴建物跡	DP22 Ⅱ-3	オニグルミ核片	
西横調査区	1997	DP22型穴建物跡	DP22 Ⅱ-5	オニグルミ核片, 竹葉類	
西横調査区	1997	DP22型穴建物跡	DP22 Ⅱ-6	オニグルミ核片, ヒメグルミ核片, トナノキ種子片	3970±30
西横調査区	1997	D249型穴建物跡	DP20 Ⅱ-6	クワ子葉片, オニグルミ核片	3900±40
中央5区	2002	FA32-06型穴建物跡	FA34-21 (A)	トナノキ種子片多数 (4488g) 炭化材片, 樹片	
中央5区	2002	FA32-06型穴建物跡	FB04-1 (A)	トナノキ種子片多数 (4103g) 炭化材片, 樹片	
中央5区	2002	FA32-06型穴建物跡	FA32-36 (A)	トナノキ種子片多数 (5175g)	
中央5区	2002	FA32-06型穴建物跡	FA32-6 (A)	トナノキ種子片多数 (9600g) 炭化材片, 樹片	
中央5区	2002	FA32-06型穴建物跡	3層	トナノキ種子片多数 (6220g) 炭化材片, 樹片	
中央5区	2002	FA32-06型穴建物跡		トナノキ種子片多数 (3185g) 炭化材片, 樹片, 石片	
中央5区	2002	FA32-06型穴建物跡	FA34-32 (B)	トナノキ種子片多数 (3404g) 炭化材片, 樹片, 石片	5265±35
中央5区	2002	FA32-06型穴建物跡	FA34-31 (B)	トナノキ種子片多数, 菓実片 (175.22g)	
中央5区	2002	FA32-06型穴建物跡	FB04-1 (B)	トナノキ種子片多数 (21.26g)	
中央5区	2002	FA32-06型穴建物跡	FB04-2 (B)	トナノキ種子片多数 (7.96g)	
中央5区	2002	FA32-06型穴建物跡	FB04-26 (B)	トナノキ種子片多数 (7.70g) 炭化材片, 樹片	
中央5区	2002	FA32-06型穴建物跡	(D)	トナノキ種子片多数 (31.52g) 炭化材片, 樹片	
中央5区	2002	FA32-06型穴建物跡		トナノキ種子片多数, クワ子葉片, オニグルミ核片, クワ子葉核残片	
中央5区	2002	FB24型穴建物跡	土坑	トナノキ種子片	
中央5区	2002	FB14型穴建物跡	柱穴1	トナノキ種子片	52580±50
中央5区	2005		FB24-2	オニグルミ核片	
中央5区	1999	FD08-1樹立柱建物跡	柱穴147	トナノキ種子片, オニグルミ核片	
中央5区	2005	FD08-1樹立柱建物跡	柱穴107	トナノキ種子片	
中央5区	2005		FD08-3	トナノキ種子片	
中央5区	2005		FD08-6	トナノキ種子片	
中央5区	2005		FD08-10	トナノキ種子片	
中央5区	2005		FD08-11	トナノキ種子片	
中央5区	2005		FD08-12 柱穴128	トナノキ種子片	
中央5区	2005		FD08-12	トナノキ種子片	
中央5区	2005		FD08-16	トナノキ種子片	
中央5区	2005		FD08-18	クワ子葉片, トナノキ種子片	
中央5区	2005		FD08-20	トナノキ種子片	
中央5区	2005		FD08-34	クワ子葉	
中央5区	2005		FD00-1	トナノキ種子片	
中央5区	2005		FD00-11	トナノキ種子片	
中央5区	2005		FD00-13	トナノキ種子片	
中央5区	2006		FD00-19	トナノキ種子片	
中央5区	2005		FD00-20	トナノキ種子片	
中央5区	2005		FD00-25	トナノキ種子片	
中央5区	1999	FA30-40型穴建物跡		クワ子葉片, オニグルミ核片, トナノキ種子片	
中央5区	1999	FA30-40型穴建物跡	FB32-7 7a層	クワ子葉片, トナノキ種子片	3800±40, 52820±20
中央5区	1999	FA30-40型穴建物跡	柱穴146	クワ子葉片, オニグルミ核片, トナノキ種子片多数 (200g)	
中央5区	1999	FB32-40型穴建物跡	PC32-9	クワ子葉片, オニグルミ核片	4110±40
中央5区	2000	FB32-40型穴建物跡	PC32-3	クワ子葉片	
中央5区	1999	FB32-40型穴建物跡		トナノキ種子片	54110±30
中央5区	2000	FB32-40型穴建物跡	PC32-21	トナノキ種子片, オニグルミ核片	
中央5区	2000	FC48-40型穴建物跡	FC48-11	トナノキ種子片	52855±45
中央5区	2000	FC48-40型穴建物跡		トナノキ種子片	
中央5区	2000	FC48-40型穴建物跡	FC48-11 1層	クワ子葉片	3901±40
中央5区	2000	FC48-40型穴建物跡	FD48-01	トナノキ種子片	52610±35
中央5区	2000	FC48-40型穴建物跡	FE48-01	トナノキ種子片	54095±35
中央5区	1999	FC48樹立柱建物跡	柱穴32	クワ子葉片, トナノキ種子片多数 (19832g)	
中央5区	1999	FC48樹立柱建物跡	柱穴2 2層	クワ子葉片, トナノキ種子片多数 (2238g)	
中央5区	1999	FC48樹立柱建物跡	柱穴3 3層	クワ子葉片, トナノキ種子片多数 (1441g)	52845±35
中央5区	1999	FC48樹立柱建物跡	柱穴3 4層	クワ子葉片, トナノキ種子片多数 (4019g)	

調査区	年	調査名	地点(グリッド)・施設	出土種名	年代相、特記事項
中央直区	1999	PC48Ⅱ-1有建物跡	柱穴27 5階	タテ子葉片、トナノキ種子片多数(44.13g)	★2010±30 (本報告)
中央直区	1999	PC48Ⅱ-1有建物跡	柱穴27 6階	トナノキ種子片多数(23.5g)	
中央直区	1999	PC48Ⅱ-1有建物跡	柱穴40	タテ子葉片、トナノキ種子片	★4135±30 (本報告)
中央直区	1999	PC48Ⅱ-1有建物跡	柱穴45	トナノキ種子片(2047)	
中央直区	1999	PC48Ⅱ-1有建物跡	柱穴45 1階	タテ子葉片、トナノキ種子片多数(2307g)	☆2035±30
中央直区	1999	PC48Ⅱ-1有建物跡	柱穴45 2階	タテ子葉片、トナノキ種子片多数(4701g)	★2035±25 (本報告)
中央直区	1999	PC48Ⅱ-1有建物跡	柱穴45 3階	トナノキ種子片多数(213 g)	
中央直区	1999	PC48Ⅱ-1有建物跡	柱穴45 4階	トナノキ種子片多数(1199g)・刻片石片	
中央直区	1999	PC48Ⅱ-1有建物跡	柱穴45 5階	タテ子葉片、トナノキ種子片多数(5046g)	
中央直区	1999	PC48Ⅱ-1有建物跡	柱穴45 6階	タテ子葉片、トナノキ種子片多数(2025g)	
中央直区	1999	PC48Ⅱ-1有建物跡	柱穴72	タテ子葉片、トナノキ種子片多数(3100g)	
中央直区	1999	PC48Ⅱ-1有建物跡	柱穴130	トナノキ種子片	
中央直区	1999	PC48Ⅱ-1有建物跡	柱穴106	タテ子葉片、オニグルミ・桃片、トナノキ種子片多数(3010g)	
中央直区	1999	PC50-1Ⅱ有建物跡	PC52-26	オニグルミ・桃片、トナノキ種子片	☆4000±35
中央直区	1999	PC50-1Ⅱ有建物跡	柱穴25	トナノキ種子片多数(3107g)	☆2085±30
中央直区	1999	PC50-1Ⅱ有建物跡	柱穴27	トナノキ種子片多数(0127g)	
中央直区	1999	PC50-1Ⅱ有建物跡	柱穴28	トナノキ種子片	
中央直区	1999	PC50-1Ⅱ有建物跡	柱穴23	トナノキ種子片	
中央直区	1999	PC50-1Ⅱ有建物跡	柱穴24	トナノキ種子片多数(510g)	
中央直区	1999	PC50-1Ⅱ有建物跡	柱穴29	トナノキ種子片多数(018g)	
中央直区	1999	PC50-2Ⅱ有建物跡	柱穴23	トナノキ種子片多数(032g)	
中央直区	1999	PC50-2Ⅱ有建物跡	柱穴24	トナノキ種子片多数(044g)	☆2080±35
中央直区	2000	PC48-Ⅲ型穴建物跡	PC49-26 Na3	オニグルミ・桃片、トナノキ種子片多数(3473g)	
中央直区	2000	PC48-Ⅲ型穴建物跡	PC49-26 Na3	タテ子葉片?	3045±25
中央直区	1999	PC48-Ⅲ型穴建物跡	柱穴23	トナノキ種子片	
中央直区	1999	PC48-Ⅲ型穴建物跡	柱穴20	トナノキ種子片多数(110g)	
中央直区	1999	PC48-Ⅲ型穴建物跡	柱穴26	トナノキ種子片多数(510g)	
中央直区	1999	PC48-Ⅲ型穴建物跡	柱穴242	タテ子葉片、トナノキ種子片多数(109 g)・刻片	
中央直区	1999	PC48-Ⅲ型穴建物跡	柱穴254	トナノキ種子片多数(510g)	
中央直区	1999	PC48-Ⅲ型穴建物跡	Na3	タテ子葉片	4115±25
中央直区	1999	PC50Ⅱ回	柱穴8	トナノキ種子片多数(039g)	
中央直区	2004	柱穴71	F300	タテ子葉片、オニグルミ・桃片、トナノキ種子片多数(2996g)	
中央直区	1999		ピート	トナノキ種子片多数(1098g)	
中央直区	1991	PC48型穴建物跡	Na3 6階	オニグルミ・桃片	
中央直区	1990	PC48Ⅱ石	P1	トナノキ種子片	○同定不能
中央直区	1994		柱穴グリッド掘出	タテ子葉片	
中央直区	1994	柱穴42型穴建物跡	2階	タテ子葉片	
中央直区	1994	PC48トレンチ土坑		トナノキ種子片	
中央直区	1994	PC48トレンチ	PC49グリッド掘出	トナノキ種子片	
中央直区	1992	PC52トレンチ	PC48	タテ子葉片、トナノキ種子片	
中央直区	1992	PC52トレンチ	PC50	オニグルミ片	
中央直区	1992	PC52トレンチ	PC52 2階目 Na1	トナノキ種子片	○オモ
中央直区	1992	PC52トレンチ	PC52 2階目 Na2	タテ子葉片	
中央直区	1992	PC52トレンチ	PC52 2階目 Na4	タテ子葉片	○タテ
中央直区	1992	PC52トレンチ	PC52	タテ子葉片、オニグルミ・桃片、トナノキ種子片	
中央直区	1992	PC52トレンチ	PC52 2階	タテ子葉片	○同定不能
中央直区	1992	PC52トレンチ	PC52 1階	トナノキ種子片	
中央直区	2011	PC46型穴建物跡	2階	トナノキ炭化種子片・平炭化材料	
中央直区	2011	PC46型穴建物跡(Ⅱ)	炭化層1	トナノキ種子片	
中央直区	2011	PC46型穴建物跡(Ⅲ)	炭化層1	トナノキ炭片	
中央直区	2011	PC46型穴建物跡(Ⅳ)	炭化層1	トナノキ炭片	
中央直区	2011	PC46型穴建物跡(Ⅴ)	炭化層2	トナノキ種子片	
中央直区	2011	PC46Ⅱ石	石が穿っている層	トナノキ種子片	
中央直区	2011	PC46型穴建物跡	南側バリス裏1階	トナノキ種子片	
中央直区	2011	PC46型穴建物跡	南側土層	トナノキ種子片(確定付)・タテ子葉片(1以上の個体)	
中央直区	2011	PC46型穴建物跡	南側 焼土ブロックが埋布	タテ子葉片・炭化材料	
中央直区	1992	PC46型穴建物跡	6階	トナノキ種子片	
中央直区	2009	PC46型穴建物跡サブトレンチ西		トナノキ炭化種子片	
中央直区	1992	PC46-Ⅲ型穴建物跡	Na1	トナノキ種子片一部付種子片	○同定不能(オモ?)
中央直区	1992	PC46-Ⅲ型穴建物跡	Na2	タテ子葉片	○同定不能(オモ?)
中央直区	1992	PC46-Ⅲ型穴建物跡	Na3	トナノキ種子片	○オモ、同定不能可能(オモ?)
中央直区	1992	PC46-Ⅲ型穴建物跡	炭化層1	トナノキ種子片一部付	
中央直区	1992	PC46-Ⅲ型穴建物跡	炭化層2	トナノキ種子片一部付	
中央直区	1992	PC46-Ⅲ型穴建物跡	炭化層2	トナノキ種子片一部付	
中央直区	1992	PC46-Ⅲ型穴建物跡	炭化層3	トナノキ種子片	
中央直区	1992	PC46-Ⅲ型穴建物跡	炭化層3	トナノキ種子片	
中央直区	1992	PC46-Ⅲ型穴建物跡	炭化層3	オニグルミ・桃片	
中央直区	1992	PC46-Ⅲ型穴建物跡	炭化層3	オニグルミ・桃片	
中央直区	1992	PC46-Ⅲ型穴建物跡	徳土層	トナノキ種子片	
中央直区	2009	PC46-Ⅲ型穴建物跡	6階	トナノキ種子片・炭化片多数	4210±30 (法・榎本他、2013)
中央直区	2010	PC46-Ⅲ型穴建物跡	1階	オニグルミ・桃片、トナノキ種子片、炭化材料	
中央直区	2010	PC46-Ⅲ型穴建物跡	2階	トナノキ種子片	
中央直区	2010	PC46-Ⅲ型穴建物跡	3階	タテ子葉片、オニグルミ・桃片、炭化材料	
中央直区	2010	PC46-Ⅲ型穴建物跡	4階	オニグルミ・桃片、炭化材料	
中央直区	2010	PC46-Ⅲ型穴建物跡	5階上	トナノキ炭化種子片・炭化材料・細砂・石膏片	
中央直区	2010	PC46-Ⅲ型穴建物跡	5階	オニグルミ・桃片、トナノキ種子片・炭化材料	
中央直区	2010	PC46-Ⅲ型穴建物跡	5a階	オニグルミ・桃片、トナノキ種子片・炭化材料(Ⅱ)	
中央直区	2010	PC46-Ⅲ型穴建物跡	6a階	炭化材料	
中央直区	2010	PC46-Ⅲ型穴建物跡	6b階	オニグルミ・桃片、トナノキ種子片、炭化材料	



第20表 炭化種実類遺体群からみた掘立柱建物跡と他の柱穴との比較（数字は重量グラム）

遺構	柱穴	層	炭化材	オニグルミ核	クリ子葉	トチノミ種子	トチ種皮片
FC50-2 掘立柱建物跡	柱穴 19					0.8	
	柱穴 23					0.3	
	柱穴 24					8.44	
FC50-1 掘立柱建物跡	柱穴 25					3.07	
	柱穴 27					0.37	
	柱穴 38					破片	
	柱穴 253					破片	
	柱穴 545					5.0	
FC48 掘立柱建物跡	柱穴 37				2個	188.52	
		2層	0.71	0.86	0.1	32.88	2.93
		3層	2.19	0.2	0.45	144.0	16.0
		4層	0.04	0.08	0.53	40.19	7.99
		5層	0.25	1.14	0.18	41.13	4.0
		6層				3.51	
	柱穴 45		0.28	0.97	5.91	304.68	5.6
		1層	4.02		3.85	339.70	27.54
		2層	0.69		0.38	47.01	8.15
		3層				2.13	
		4層	0.01			1.99	
		5層		1.35	0.57	64.46	7.94
	6層	0.51		0.88	39.05	10.51	
	柱穴 40				破片	破片	
	柱穴 130					破片	
柱穴 556		破片	破片	破片	30.0		
FB54-1 掘立柱建物跡	柱穴 1					破片	
FD58-1 掘立柱建物跡	柱穴 147			破片		破片	
	柱穴 107					破片	
FG50 柱列	柱穴 8					0.98	
FF46 柱列	柱穴 52				破片	破片	
FD58-12	柱穴 128					破片	
FA50-01 竪穴建物跡	柱穴 146			破片	1個	30.0	
FD48-01 竪穴建物跡	柱穴 253				1個	破片	
FD48-01 竪穴建物跡	柱穴 254					5.0	
	柱穴 260					10.0	
	柱穴 265					5.0	
	柱穴 343				2個	10.0	
柱穴 71	柱穴 71		0.09		0.14	30.98	4.6
柱穴 72	柱穴 72				破片	10.0	



## (8) 土壌試料の大型植物遺体

### 1. はじめに

日本列島の土壌は通常酸性であるため、過去の植物利用を示すさまざまな痕跡は、生の状態では遺存せず、特殊な条件の下でないと残らない。特殊な条件とは、低湿地遺跡と呼ばれる地下水位が高く、植物が空気に触れず水分でバククされる環境や、炭化して無機物になった状態があげられる。

御所野遺跡は台地上に立地するため、生の植物遺体が残らない。このため植物に関する調査は炭化した植物遺体を対象に行われてきた。炭化した植物を検出するには、調査時に肉眼で採取する方法と、土壌を水洗して回収する方法がある。炭化種実が発掘調査中に検出される場合もあるが、小型の種実や破片を肉眼で採取するのは難しい。これまで御所野遺跡では、肉眼で採取する方法と土壌を水洗する方法を併用して炭化種実が回収されてきた。しかし、これまで得られた炭化種実は比較的大型の木本植物を中心としており、草本植物の実態は不明であった。また土壌の水洗方法には改良の余地があった。ここでは、御所野遺跡の堆積物にあわせて、微小な種実も回収可能な土壌の水洗方法を提示し、水洗した結果を報告する。

### 2. 試料と方法

炭化種実は、人が火を用いた場所（住居の炉の周囲や炭化物層）に残る場合が多い。このため、御所野縄文博物館が採取した、堅穴建物跡であるFJ46-01堅穴建物跡（縄文時代中期後葉～末葉）とFJ46-02堅穴建物跡（縄文時代中期中葉）から回収された土壌を試験的に水洗した。

台地上の遺跡の土壌を水洗する場合、フローテーション（浮遊選別）法という、炭化物が水より軽いことを利用して、水に浮いた炭化物を回収する方法を用いる場合が多い。しかし、御所野遺跡でこれまでみつまっているクルマヤクリなどは、大きさが大きい炭化していても水に浮かず、沈殿する場合がある。このため、浮いた炭化物を最初に回収した後で、沈殿した炭化物を回収するという2段階の水洗・選別方法を用いた。水洗方法の詳細は、第88～90図に示した。また水洗のための道具は、博物館にある備品と、ホームセンターなどで購入可能な道具で行った。水洗作業は、基本500cc単位を1試料として最小0.5mm目の篩を用いて行い、作業は御所野縄文博物館で行った。

炭化種実の抽出・同定・計数は、肉眼および実体顕微鏡下で行った。抽出作業の詳細は、第91・92図に示した。同定された試料は、御所野縄文博物館に保管されている。

### 3. 結果

63試料（堆積18,940cc）を水洗した結果、36試料（57%、堆積17,120cc）で炭化種実が産出した。

同定した結果、木本植物ではオニグルミ炭化核と、クリ炭化果実・炭化子葉、コナラ属炭化果実・炭化子葉、トチノキ炭化種子の4分類群が得られた。また、科以上に識別可能な識別点を欠く種実を同定不能炭化種実とした。種実以外には炭化材が得られたが、同定の対象外とした（第21・22表、付表1～3）。

すべて破片のため破片数での比較は難しいが、水洗量が多かったFJ46-01堅穴建物跡をみると、圧倒的にクリが多く、次いでオニグルミが多く得られた。トチノキとコナラ属はごく微量で、これまで御所野遺跡で得られた炭化種実と同様の産出傾向であった。クリの炭化子葉は割れやすいため重量を計量し、これまで御所野遺跡で出土した完形のクリ炭化子葉の重量（1点=1.03g）から完形換算個体数を求めた。この結果、最もクリが多く得られたFJ46-01堅穴建物跡で約16個体分であった。また状態が悪く同定ができない同定不能炭化種実は、FJ46-01堅穴建物跡で約2,600点と非常に多かった。

FJ46-02堅穴建物跡からは、オニグルミとクリ（子葉）がわずかに得られた。GE56-02土坑では、同定可能な種実 は得られなかった。GE56-05土坑からは、クリ（子葉）がわずかに得られた。

土壌水洗の結果、FJ46-01堅穴建物跡をみると、1つの遺構から得られた種実の数としては、御所野道跡で最も多い数が得られた。ただし、木本植物のみが得られ、草本植物は得られなかった。

次に、炭化種実の記載を行い、図版に写真を示して同定の根拠とする。

(1) オニグルミ *Juglans mandshurica* Maxim. var. *sieboldiana* (Maxim.) Makino 炭化核 クルミ科  
すべて1/2以下の破片である。完形ならば側面観は広卵形。本来は縦方向の縫合線があるが、残存していない。表面には浅い溝と凹凸が不規則に入る。壁は緻密で硬く、ときどき空隙がある。断面は角が尖るものが多い。最大の破片で、残存高11.0mm、残存幅7.9mm。

(2) クリ *Castanea crenata* Sieb. et Zucc. 炭化果実・炭化子葉 ブナ科  
果実は、完形ならば側面が広卵形。表面は平滑で、細い縦筋がみられる。殻斗着痕は残存していない。果皮内面にはいわゆる渋皮が厚く付着する。最大の破片で、残存高9.1mm、残存幅7.2mm。子葉は、完形ならば側面観が広卵形で、表面一面に縦方向のしわ状の溝がある。しわ以外の面は平坦でやや光沢があり、硬質。最大の破片で、残存長9.3mm、残存幅12.5mm、残存厚10.0mm。

(3) コナラ属 *Quercus* spp. 炭化果実・炭化子葉 ブナ科  
果実は破片のため、全体形は不明。形状から楕円体の可能性がある。最大の破片で、残存高7.9mm、残存幅5.0mm。子葉は円柱形で、上部はやや細くなり、下半部が太い。コナラ属のうち、全体の形状はコナラ属コナラ節に似るが、状態が悪く属以上の詳細な同定はできなかった。最大の破片で、残存高9.8mm、残存幅5.5mm。

(4) トチノキ *Aesculus turbinata* Blume 炭化種子 トチノキ科  
破片で、下半部は光沢がなく、上半部は光沢がややある。完形ならばゆがんだ楕円形。上下の境目の下に少し突出した着点がある。種皮は薄くやや硬い。種皮は3層からなり、各層で細胞の配列方向が異なる。種皮表面には指紋状の微細模様が生じる。最大の破片で、残存長7.2mm、残存幅9.0mm。

第21表 土壌試料から得られた炭化種実 (括弧内は破片数)

調査区	Ⅳ区		Ⅳ区東トレンチ		
	遺構名 FJ46-01 堅穴建物跡		FJ46-02 堅穴建物跡	GE56-02 土坑	GE56-05 土坑
	時期	中期後葉～末葉	中期中葉	中期中葉～後葉	
分類群	水洗量 (cc)	9600	7120	100	200
オニグルミ	炭化核	(62)	(13)		
クリ	炭化果実	(1199)			
	炭化子葉	※ 16 16.55g	<1 0.48g		<1 0.1g
コナラ属	炭化果実	(3)			
	炭化子葉	(7)			
トチノキ	炭化種子	(1)			
同定不能	炭化種実	(2603)	(30)	(1)	(13)

クリ炭化子葉の数は、完形のクリ炭化子葉1個体の重量1.03gから求めた完形換算個体数

#### 4. 考察

竪穴建物跡と土坑から出土した炭化種実を同定した結果、縄文時代中期中葉～後葉ではクリ、中期後葉～末葉では食用可能なオニグルミとクリ、コナラ属、トチノキが得られた。これら堅果は、当時頻繁に利用されていた種類と考えられる。食用にならないオニグルミの核とクリの果実、コナラ属の果実は、食用になる子葉を利用するために割った残滓である可能性や、保管されていたものが炭化した可能性、祭祀などに伴って炭化した可能性などが考えられる。特に約10kgの土壌を水洗した縄文時代中期後葉から末葉のFJ46-01竪穴建物跡からは、0.5mm目の篩で水洗したにも関わらず、特定の利用可能な大型の堅果類しか得られていない。何らかの意図でこれらの大型の堅果類が炭化した可能性もある。

#### 謝辞

今回の土壌水洗ならびに炭化種実の抽出作業は、菅野紀子氏、久保田滋子氏、木村由美子氏、鈴木雪野氏、根反早百合氏のご協力をいただき、菅野紀子氏と高田和徳氏には作業にあたりさまざまな便宜を図っていただいた。また炭化種実同定にあたっては、株式会社パレオ・ラボのバンダリ・スダルジャン氏のご協力を得た。本文の内容については、株式会社パレオ・ラボの菊地有希子氏、森林総合研究所能城修一氏にご教示いただいた。記して感謝致します。  
(佐々木 由香)

第22表 付表1 御所野遺跡から出土した炭化種実(1)(括弧内は破片数)

種別	FJ46-01 竪穴建物跡											
	1号	2号	3号	4号	5号	6号	7号	8号	9号	10号	11号	12号
検出数	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
炭化率(%)	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100
オニグルミ 炭化核	1(1)	1(1)	1(1)	1(1)	1(1)	1(1)	1(1)	1(1)	1(1)	1(1)	1(1)	1(1)
クリ 炭化果実	1(0)	1(0)	1(1)	1(1)	1(1)	1(1)	1(1)	1(1)	1(1)	1(1)	1(1)	1(1)
炭化子葉	≧ 1.53μg	≧ 1.13μg			1→3.47μg	< 1.67μg	< 1.67μg	< 1.67μg	< 1.67μg	< 1.67μg	< 1.67μg	< 1.67μg
コナラ属 炭化子葉												
トチノキ 炭化種子	1(1)											
検出率	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100

FJ46-01 竪穴建物跡は、定形クリ炭化子葉1個検出の炭量1.05μgから算出した炭化種実検出数

付表2 御所野遺跡から出土した炭化種実(2)(括弧内は破片数)

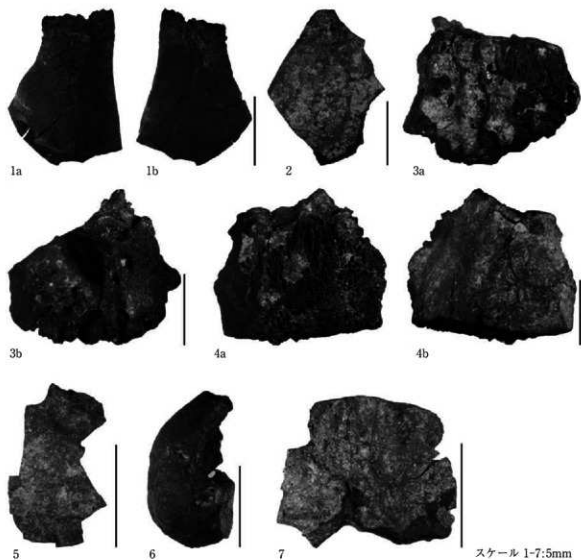
種別	FJ46-01 竪穴建物跡											
	1号	2号	3号	4号	5号	6号	7号	8号	9号	10号	11号	12号
検出数	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
炭化率(%)	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100
オニグルミ 炭化核	1(1)	1(1)	1(1)	1(1)	1(1)	1(1)	1(1)	1(1)	1(1)	1(1)	1(1)	1(1)
クリ 炭化果実	1(1)	1(1)	1(1)	1(1)	1(1)	1(1)	1(1)	1(1)	1(1)	1(1)	1(1)	1(1)
炭化子葉	≧ 1.67μg	< 1.67μg			< 1.67μg	< 1.67μg	< 1.67μg	< 1.67μg	< 1.67μg	< 1.67μg	< 1.67μg	< 1.67μg
コナラ属 種子												
検出率	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100

FJ46-01 竪穴建物跡は、定形クリ炭化子葉1個検出の炭量1.05μgから算出した炭化種実検出数

付表3 御所野遺跡から出土した炭化種実(3)(括弧内は破片数)

種別	FJ46-01 竪穴建物跡											
	1号	2号	3号	4号	5号	6号	7号	8号	9号	10号	11号	12号
検出数	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
炭化率(%)	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100
オニグルミ 炭化核	1(1)	1(1)	1(1)	1(1)	1(1)	1(1)	1(1)	1(1)	1(1)	1(1)	1(1)	1(1)
クリ 炭化果実	< 1.67μg							< 1.67μg				< 1.67μg
炭化子葉												
コナラ属 炭化種子												
検出率	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100

FJ46-01 竪穴建物跡は、定形クリ炭化子葉1個検出の炭量1.05μgから算出した炭化種実検出数



第87図 御所野遺跡から出土した炭化種実

1. オニグルミ炭化核 (No.41)、2. クリ炭化果実 (No.56)、3. クリ炭化子葉 (No.31)、4. クリ炭化子葉 (No.56)、5. コナラ属炭化果実 (No.41)、  
6. コナラ属炭化子葉 (No.41)、7. トチノキ炭化種子 (No.37)



①水洗単位ごとに水洗番号を付す（遺跡内で通し番号とする）。ラベルの情報はノートに記載する。2000ccまでの目盛がある把手付きプラスチックビーカーにあらかじめ1000ccの水を入れておき、土壌をいれる。



②500ccの土壌を水洗する場合は、1500ccの目盛まで土壌を入れて、500ccの体積を計量する。



③把手付きビーカー内を攪拌しながら、浮遊物を0.5mm目より小さい湯取りネットの中に流し込む（フローテーション法）。土壌が少ない場合は、ビーカー内をシャワーの水を使って攪拌しながら流し込む。



④土壌が多く、ビーカー内で土壌を攪拌しにくい時は、片口バケツの中にすべて移し、シャワーの水流で炭化物を浮遊させ、湯取りネットに流しこむ（水中にシャワーを入れるとより攪拌する）。500cc以上を1回で水洗する場合は、ビーカーから片口バケツに移す量を何回かに分け、バケツの底に土壌が溜まらないようにする。



⑤浮遊物が浮かなくなったら、沈殿物を0.5mm目のフルイの中にシャワーの水流を利用して流し込む。沈殿物が多い時は2回以上に分割する。



⑥テンバコに水を張り、上はシャワーの水、下はテンバコの水を利用してフルイを振動させ、0.5mm目より小さいものをフルイから落とす（水洗選別法）。

第88図 御所野遺跡での土壌水洗方法（1）



⑦シャワーの水の力でフルイ内に土壌を広げ、水をまんべんなく篩の残渣物にかけるようにする。



⑧フルイからの落下物がほぼなくなったら、フルイの中の残渣を水の力とフルイの振動を利用してフルイの片側に寄せる。



⑨土壌が水洗できたかどうかを確認するために、澄んだ水を貼った確認用テンパコ内で0.5mm 目のフルイに残った沈殿物を振動させ、水があまりにこらなければ水洗作業を終了する。



⑩フルイに残った残渣を乾燥させるため、シャワーの水を利用して、1.0mm 目の寒冷砂を2枚重ねた遺物洗いかごに沈殿物を移動させる（この作業時に寒冷砂の方が目が粗いため、残渣が水の力で落ちないように水はなるべく使わないように、⑥の作業を繰り返して工夫する）。



⑪かごをやや傾けて天日で十分乾燥させる。かごの四方は洗濯バサミで留めておく。残渣が乾燥したら洗濯バサミをはずして、寒冷砂からビニール袋に移す。ビニール袋に水洗番号を記入する。



⑫漏れ取りネットに回収した浮遊物は、底の方に水をつかってまとめ、裏返して、三角コーナーのネット（ストックングのように目が細かいもの）を2枚重ねた中に移動させる（この作業時なるべく水を使わないようにする）。

## 第89図 御所野遺跡での土壌水洗方法（2）



洗浄袋物と同じ水洗番号のラベルをつけて、針金で回転させておく。



洗浄バサミで挟み、物干し竿に吊るして、天日で乾燥させる。



第90図 御所野遺跡での土壌水洗方法 (3)



①乾燥した沈殿物を仕分けやすくするため、粗い目と細かい目のフルイにあける。



②粗い目のフルイを細かい目のフルイの上にし、乾燥フルイがけをする（乾フルイ法）。



③ポスターなど、平滑な光沢紙の裏紙の四隅をホックキスで留めて壁をつくり、その上に粗いフルイがけに残った沈殿物を移動する。



④竹串やピンセットなどで土器、石器、焼骨、炭化材、炭化種実、不明に分類して紙箱に入れる。チェック済みと未チェックを区別しながら仕分ける。上記以外の残渣はバケフに入れ廃棄する。



⑤0.5mm 目のフルイを使ってフルイがけをする。フルイを通った沈殿物はバケフに入れ、廃棄する。



⑥フルイに残った沈殿物を紙の上に移動し、平坦にならしながら、石器と炭化種実で目立ったもののみを目視で回収する。残渣は保管する。残渣は実体顕微鏡で一度チェックをしてから、廃棄する。

第91図 御野遺跡での炭化種実抽出・分類方法（1）





⑦浮遊物を紙の上にあける。細かいものが多い場合は、0.5mm 目のフルイを用いてフルイかけを行う。



⑧フルイ回収物と同様に、種別ごとに仕分ける（抽出物は沈殿物と一緒にする）。残渣は保管する。残渣は実体顕微鏡でチェックした後に廃棄する。



⑨チャック付き袋にサンプル番号を書き、分類したものと浮遊物の残渣、0.5mm 目のフルイに残った残渣を保管する。ノートにおおよそ得られたものや作業日を記入する。



⑩ひとつの袋にすべての小袋を入れ、水洗番号別に管理する。抽出した炭化種実を実体顕微鏡下で同定する。



第92図 御所野遺跡での炭化種実抽出・分類方法（2）

## (9) レプリカ法による土器圧痕の分析

### 1. はじめに

御所野遺跡および周辺の遺跡は、台地上に立地する遺跡である。したがって、縄文時代当時の生の植物はバクテリアで分解されてしまうため遺存しない。御所野遺跡で植物利用を検討する場合、炭化種実または土器の胎土に残る種実圧痕の解析が有効である。御所野遺跡では、利用された植物を調査するため、2012年から土器圧痕として残る植物を調査してきた(佐々木 2013, 2014)。

土器圧痕は、土器の材料である粘土の中に偶発的に入ったか意図的に入れられた(押し付けられた)有機物の痕跡である。植物や昆虫などの有機物は、土器焼成の際に灰化あるいは炭化し、形のみが圧痕として残る。ただし、無機物は焼成後に残るが、時々抜けて圧痕のみが残る場合もある。

有機物の圧痕は深い穴になっている場合もあり、凹凸が実物と逆になっているため、圧痕そのものの観察だけでは、その種類を特定するのは困難である。このため、圧痕にシリコン樹脂を流し、元の種実や昆虫などのレプリカを作製し、そのレプリカで同定するレプリカ法が1980年代から実施されてきた(丑野・田川, 1991)。このレプリカ法による土器の圧痕同定方法は、最近再び注目され、各地の遺跡で実践されている。ここでは、レプリカ法による土器種実圧痕の探索を行い、御所野遺跡および周辺遺跡での利用植物を検討した。

### 2. レプリカ法による圧痕の採取方法

種実圧痕調査は2012～2013年度の2カ年に渡り実施した。調査の対象とした土器は、2013年度については御所野遺跡で2009～2011年度の調査で出土した土器を中心に、500点を観察した。土器の時期は、縄文時代早期中葉から弥生時代である。2013年度については、既報の報告書に掲載された御所野遺跡の竪穴建物跡10棟から出土した縄文時代中期後半の土器271点(円筒上層d-e式期3棟、大木9式期3棟、大木10式期4棟)と、馬場平遺跡の竪穴建物跡1棟から出土した縄文時代中期中葉(円筒上層e式期)の土器71点、大平遺跡の古代の土器1点である(第23表)。この中から御所野縄文博物館において目視または拡大鏡を用いて種実などの圧痕の可能性のある土器を抽出した(1次抽出)。2014年度実施分で、1次抽出後の土器数の合計は、御所野遺跡が26点(9.6%)、馬場平遺跡が12点(16.6%)、大平遺跡が1点である。

レプリカの採取に用いた印象剤(シリコン)は、実体顕微鏡下で同定しやすく、かつ硬化時間が短い、株式会社JMシリコンレギュラータイプを用いた。以下に、レプリカの採取方法を記載する。

- ①圧痕の中を筆で良く洗い、拡大鏡や実体顕微鏡で観察する。
- ②印象剤であるシリコンが土器に残らないように圧痕内部とその周囲を保護するため、離型剤(パラロイドB72アセトン5%溶液)を圧痕内とその周囲に塗布する。
- ③圧痕内部および周囲にシリコンを注射器で注入する。

第23表 種実圧痕検討遺構と1次抽出土器個体数

遺構名	遺構名	胎土上層期体数	胎土上層期体数	時期	母坑上層期体数	母坑期体数
御所野	DF14竪穴建物跡	5	30	円筒上層d-e式	48	115
御所野	GF64-42竪穴建物跡	2	30	円筒上層d-e式	48	75-78
御所野	G199竪穴建物跡	4	54	円筒上層d-e式	32	62-65
御所野	IG28竪穴建物跡	0	36	大木10式	48	110
御所野	DF22竪穴建物跡	5	77	大木10式	48	118-123
御所野	IG36竪穴建物跡	0	3	大木10式	48	130
御所野	IG28竪穴建物跡	0	4	大木10式	48	131
御所野	IG24竪穴建物跡	2	15	大木9式	48	64
御所野	IG120竪穴建物跡	4	28	大木9式	32	109-106
御所野	IG114竪穴建物跡	2	13	大木9式	32	107
	小計	26	271			
馬場平	C7竪穴建物跡	12	71	円筒上層d-e式	4	194
大平	IG163	1		古瓦		

- ④固化したらシリコンを取り出し、実体顕微鏡で観察する。離型剤はアセトンで除去する。  
 ⑤実体顕微鏡である程度同定可能な試料のみ、走査型電子顕微鏡で観察・写真撮影を行う。  
 ⑥実体顕微鏡と走査型電子顕微鏡で同定を行う。

①～④までの作業は、御所野縄文博物館で行った。走査型電子顕微鏡の試料は、試料台にカーボンテープで固定し、その後イオンスパッタにて金蒸着を施し、走査型電子顕微鏡 (KEYENCE社製 VE-9800) を用いて写真撮影を行った。なお、採取したレプリカは御所野縄文博物館に保管されている。

### 3. 結果

#### a. 御所野遺跡

2年度に渡って実施した結果をまとめて検討する。御所野遺跡では、科以上の詳細な同定ができた圧痕が4点、シダ植物が7点、単子葉植物の葉または稈 (?も含む) が31点、不明種実・種実片 (?も含む) が48点、不明葉・茎状・根状・刺状・繊維・木材・植物遺体 (?も含む) ・繊維が116点、その他植物遺体以外の不明と昆虫?、未同定が各1点の計209点が得られた (第24表)。またこれら以外にも土器についた指紋や爪痕、縄文原体、動物圧痕が得られたが、報告の対象外とした。

種実では、木本植物のモミ属葉とニワトコ核、ガマズミ属?核の3分類群、草本植物ではイネ科?種子の1分類群の、計4分類群が得られた。このほかに、科以上に分類可能な識別点が残存しない一群を不明種実、種実かどうかを確定できない一群を不明種実?とし、種皮または果皮状の破片を種実片、種実片?とした。シダ植物では、ワラビ裂片とゼンマイ裂片、シダ植物葉柄?の3分類群が得られた。

以下に、主要な土器圧痕の記載を行い、図版に写真を示して同定の根拠とする。

- (1) モミ属 *Abies* sp. マツ科 (No.107) : 破片であるが全体形は針形と推定される。基部は吸盤状だが残存していない。先端は幅広で中央部が窪む。残存しているのは背面側で、中央部には溝がある。残存長2.75mm、幅1.56mm。
- (2) ニワトコ *Sambucus racemosa* L. subsp. *sieboldiana* (Miq.) H.Hara 核 スイカズラ科 (No.1019) : 上面観は腹面側の中央がやや隆起する扁平、側面観は楕円形で基部がやや尖る。基部に小さな着点があるが不明瞭である。頂部は残存していない。波状の凹凸が横方向に走る。残存長2.50mm、幅1.38mm。
- (3) ガマズミ属? *Viburnum* sp.? 核 スイカズラ科 (No.12) : 上面観は扁平、側面観は先端がやや尖る卵形。表面には縦方向の1本の隆起があるが、全体的に不明瞭のため、ガマズミ属?とした。長さ5.00mm、幅3.33mm。
- (4) イネ科? Gramineae sp.? 種子 (No.1122) : 状態が悪いが、側面観は基部がやや尖る狭楕円形。下端に胚がある。
- (5) ワラビ *Pteridium aquilinum* (L.) Kuhn subsp. *japonicum* (Nakai) Å. et D.Löve 裂片 コバノイシグマ科 (No.1003・1101-3・1267-1・1267-2・1269) : 長楕円形。鈍頭で全縁。葉脈は2~3又状に分岐し、平行に並ぶ。No.1003は残存長7.44mm、幅3.33mm、No.1267-2は残存長5.60mm、残存幅2.24mm。
- (6) ゼンマイ *Osmunda japonica* Thunb. 裂片 ゼンマイ科 (No.1002) : 披針形で、先が尖る。全縁。羽脈は両面から見え、側脈は単脈または1~2回2分岐する。基部は丸いが残存していない。残存長13.14mm、残存幅4.17mm。
- (7) 不明種実 (No.1261) : 半月形。表面は平滑で緩やかな皺がある。臍部は直線的。ウルシ属の外果皮の可能性もある。長さ4.12mm、幅2.95mm。
- (8) 不明種実 (No.224) : 状態が悪いが、卵形か。表面は平滑。長さ2.42mm、幅1.48mm。
- (9) 不明種実 (No.1245-1) : 上面観は楕円形、側面観は長楕円形で先端が尖る。先端にふ毛の可能性



縄文中期中葉～後葉の土器からは、31点について何らかの同定ができ、ニワトコとガマズミ属?が各1点、不明種実?が2点、不明種実?が2点、不明種実片?が1点得られた。単子葉植物の葉?または稈?が4点、その他は不明の葉や茎状や根状、木材などであった。

縄文中期中葉～末葉(後葉～末葉を含む)の土器からは、114点について何らかの同定ができ、ワラビが2点、ゼンマイとイネ科?種子?が各1点、不明種実?が6点、不明種実?が14点、不明種実片?が4点、不明種実片?が6点得られた。不明種実片?はトチノキの種子片に類似しているものが多く、今後再検討する必要がある。単子葉植物(?を含む)の葉または稈?が15点、その他は不明の葉や茎状や根状、木材などであった。

中期末葉の土器からは、7点について何らかの同定ができ、モミ属葉?が1点、不明種実?が1点、不明種実片?が1点、単子葉植物稈?が1点得られたほかは不明の木材であった。

中期末葉～後期初頭の土器からは、単子葉植物の稈?が1点得られた。

弥生時代の土器からは、シダ植物の葉柄?が1点得られた。

種実圧痕の付着部位や付着面は、特定の部位に偏って検出される傾向はみられなかった。

## b. 馬場平遺跡

馬場平遺跡出土の縄文時代中期の土器からは、種実圧痕が3点、単子葉植物稈?が1点、不明種実・冬芽・茎状・木材(枝)・植物遺体が8点の、計12点が得られた(第25表)。種実圧痕は木本植物のアサダ果実?が1点、草本植物のササゲ属アズキ亜属種子とアズキ亜属?種子?が各1点得られた。

アズキ亜属とアズキ亜属?は、中期中葉の同一個体の土器の口縁部外面から得られた。そのほかの圧痕の付着部位や付着面は、特定の部位に偏って検出される傾向はみられなかった。

以下に、主要な植物圧痕の記載を行い、図版に写真を示して同定の根拠とする。

(1) アサダ *Ostrya japonica* Sarg. 果実 カバノキ科 (No.1274) : 上面観は扁平に近い両凸レンズ形、側面観は長卵形で先端が突出する。表面には縦方向の浅い筋が数本ある。長さ5.37mm、幅3.13mm、厚さ1.31mm。

(2) ササゲ属アズキ亜属 *Vigna* subgenus *Caratotropis* 種子 マメ科 (No.1254・1253) : 上面観は方形に近い円形、側面観は方形に近い楕円形。小畑ほか(2007)に示されたアズキ亜属の特徴である、方形に近い長楕円形の臍の内部の厚膜(Epithilum)が残存する。臍は全長の半分から2/3ほどの長さで、片側に寄る。No.1254の大きさは、長さ4.22mm、幅2.90mm、残存厚2.36mm。小畑(2008)に示された現生種と大きさを比較すると、野生種のヤブツルアズキの大きさに近い。アズキ亜属?としたNo.1253は、アズキ亜属とはほぼ同じ大きさであるが、全体的に楕円形でやや扁平で、表面に皺がある。へそは不鮮明のため、種子ではなく子葉や未熟種子の可能性もある。長さ3.87mm、幅2.64mm、残存厚2.24mm。

(3) 不明種実(No.1305) : やや扁平な楕円形で、大きな丸をもつ。マメ科種子の背面側の可能性がある。残存長4.71mm、残存幅2.68mm。

(4) 不明冬芽(No.1286) : 全体形は不明であるが、山形の芽鱗が覆瓦状に重なる鱗芽である。残存長4.76mm、幅2.24mm。

## c. 大平遺跡

大平遺跡出土の時期不明の土器からは、不明種実?が2点得られた。同一個体に重なっ

第25表 馬場平遺跡出土土器圧痕の同定結果

分類群	付着部位	1. 検出		2. 同定		3. 検出		合計
		内面	外面	内面	外面	内面	外面	
アサダ	果実			1				1
ササゲ属アズキ亜属	種子	1						1
ササゲ属アズキ亜属?		1						1
冬芽	芽?					1		1
不明	冬芽		1					1
	茎状		1	1			1	3
	木材(枝)				1			1
	植物遺体			1	1			2
合計		2	2	3	3	2	2	12

ている。圧痕は、古代（平安時代？）の土器器底部の外面に付いていた。

(1) 不明種実？ (No.1306)：いびつな長楕円体。先端がやや尖る。冬芽の可能性もある。長さ7.44mm、2点あわせた幅は3.88mm。

#### 4. 考察

土器圧痕として得られる種実や昆虫は、当時の土器作りの場の環境を反映する。復元済土器と土器破片を調査した結果、種実などの植物の圧痕が得られた。

御所野遺跡の縄文時代中期の土器圧痕でみつかったモミ属と、ガマズミ属？、ニワトコ、ワラビ、ゼンマイは、炭化物でも発見されていなかった種である（第3章第2節(8)参照）。御所野遺跡の周辺にこれらの植物が生育し、また土器作りの場にあったことを示す。なお、不明種実もしくは不明種実？にした試料も多く、詳細な同定については、今後の課題にしたい。

馬場平遺跡から出土した縄文時代中期中葉のアズキ亜属とアズキ亜属？は、野生種のヤブツルアズキに近い大きさであった。アズキやダイズは、日本列島の関東・中部地方で縄文時代中期頃に野生種から栽培種へと栽培化された可能性が指摘されている（小畑 2011；中山 2010）。しかし、東北地方はレプリカ法による土器圧痕調査が低調のため、これまで縄文時代中期のママ類は土器圧痕でほとんど確認されていなかった。見出されたアズキ亜属は野生種のヤブツルアズキに近い大きさであるが、土器づくりの場の周囲にアズキ亜属があり、利用されていた可能性を示唆する。

本稿は、平成24・25年度御所野縄文博物館嘱託研究の一部である。シダ植物の同定にあたっては、中央大学西田治文氏のご教示をいただいた。記して感謝致します。

(佐々木由香・菅野紀子・木村由美子・米田恭子・バンダリ スタルシャン)

#### 引用文献

- 丑野 毅・田川裕美 (1991) レプリカ法による土器圧痕の観察. 考古学と自然科学, 24: 13-36. 日本文化財科学会.  
 小畑弘己・佐々木由香・仙波靖子 (2007) 土器圧痕からみた縄文時代後・晩期における九州のダイズ栽培. 植生史研究 15-2, 97-114.  
 小畑弘己 (2008) ママ科種子同定法. 小畑弘己編「極東先史古代の穀物 3」: 225-252. 熊本大学.  
 小畑弘己 (2011) 東北アジア古民族植物学と縄文農耕. 同成社.  
 佐々木由香 (2013) 御所野遺跡における利用植物の解明. 「平成24年度一戸町文化財年報」: 31-39. 一戸町教育委員会.  
 佐々木由香 (2014) 土器圧痕からわかる御所野遺跡の利用植物. 「平成25年度一戸町文化財年報」: 32-36. 一戸町教育委員会.  
 中山誠二 (2010) 植物考古学と日本考古学の起源. 同成社.

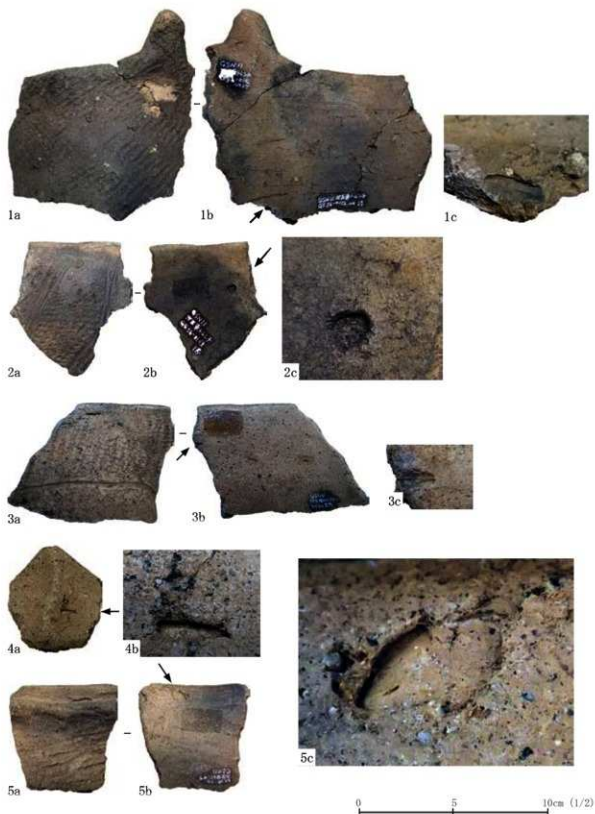
第26表 (1) 土器圧痕の一覧

図録号	遺物名	発出層	発出年	調査区	出土層/部位	遺物番号	付帯品別	行名表	目録表	図説	備考	同定
1253	高塚中	4層	96/924	10778	C7型六建跡跡 10-11層		1組底	内面	ヤブツルアズキ亜属	種子	1253-1254層-1組底	中野中葉
1254	高塚中	4層	96/924	10778	C7型六建跡跡 10-11層		1組底	外面	ヤブツルアズキ亜属?	種子	1253-1254層-1組底	中野中葉
1274	高塚中	-	-	10778	C7型六建跡跡	3649	側壁	内面	アズキ	葉実	-	中野中葉?
1276	高塚中	-	-	10778	C7型六建跡跡	36464	側壁	外面	不明	植物遺跡	-	中野中葉?
1278	高塚中	-	-	10778	C7型六建跡跡		側壁	外面	不明	葉実	断面丸	中野中葉?
1279	高塚中	-	-	10778	C7型六建跡跡 2層		底壁	裏面	種子層植物	種子?	へちま状	中野中葉?
1282	高塚中	-	-	10778	C7型六建跡跡 1017	2	底壁	外面	不明	葉実	断面丸	中野中葉?
1284	高塚中	-	-	10778	C7型六建跡跡	3623	側壁	裏面	不明	種子	-	中野中葉?
1286	高塚中	-	-	10778	C7型六建跡跡		側壁	外面	不明	葉実	-	中野中葉
1300	高塚中	-	-	10778	C7型六建跡跡		側壁	内面	不明	植物遺跡	葉?	中野中葉?
1303	高塚中	-	-	10778	C7型六建跡跡 110		側壁	内面	不明	葉実	断面丸	中野中葉?
1305	高塚中	-	-	10778	C7型六建跡跡	36198	側壁	裏面	不明	葉実	-	中野中葉?
1306	大平	02層	2区	S202 棟基礎	底壁1041-1		底壁	外面	不明	種子?	2点あり	古代



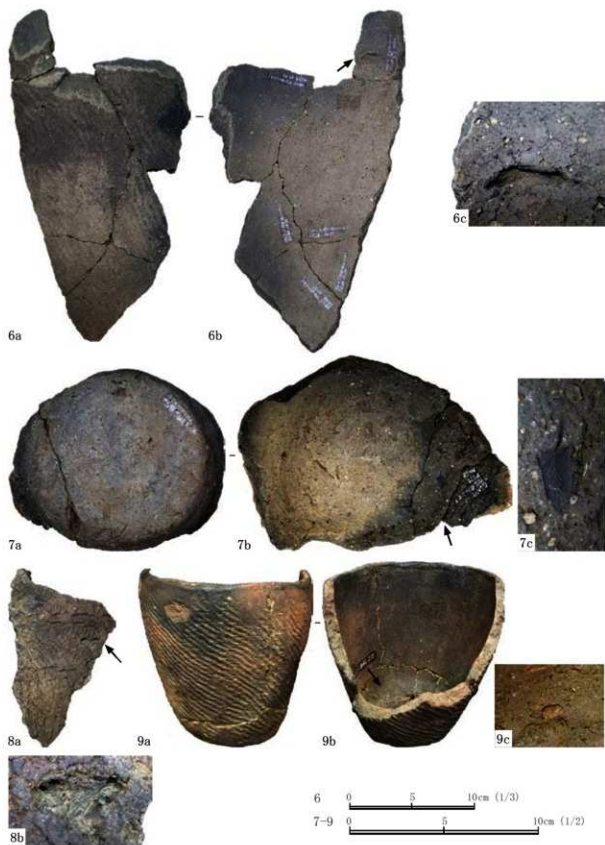






第93図 御所野遺跡出土の圧痕付着土器（1）

1. No.3（不明形）、2. No.12（ガマズミ属？根）、3. No.107（モミ属葉）、4. No.116（不明種実片？）、5. No.136（不明種実片）  
 a：土器表面、b：土器内面、c・d：圧痕拡大（5倍）、写真中の矢印は圧痕位置を示す



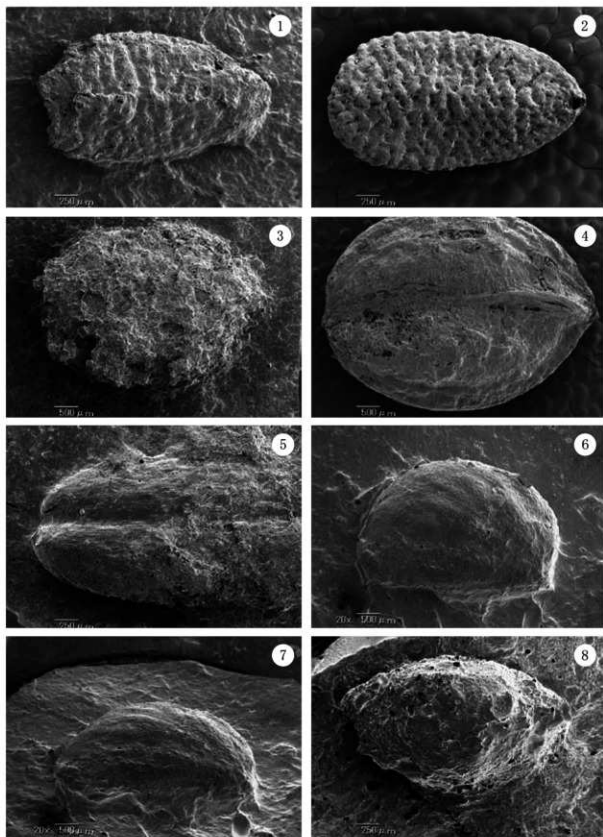
第94図 御所野遺跡出土の圧痕付着土器（2）

6. No.1002（ゼンマイ裂片）、7. No.1003（ワラビ裂片）、8. No.1007（不明繊維）、9. No.1019（ニフトコ核）  
 a：土器表面、b：土器内面、c：圧痕拡大（5倍）、写真中の矢印は圧痕位置を示す



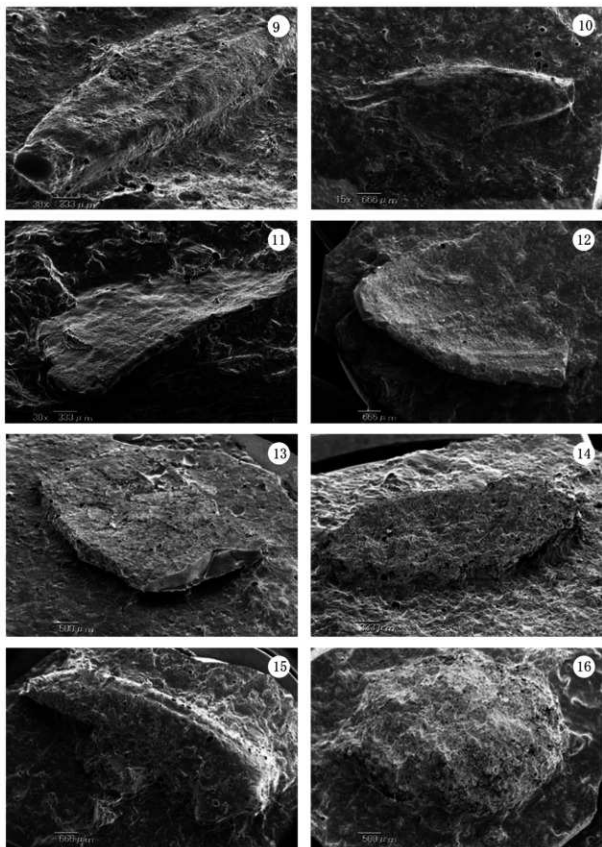
第95図 御所野遺跡と馬場平遺跡出土の圧痕付着土器

10. 御所野遺跡 No.1021 (木材), 11. 御所野遺跡 No.1230 (単子葉植物?), 12. 馬場平遺跡 No.1253 (アズキ亜属種子), 13. 馬場平遺跡 No.1254 (アズキ亜属種子) a: 土器表面, b: 土器内面, c: 圧痕拡大、写真中の矢印は圧痕位置を示す



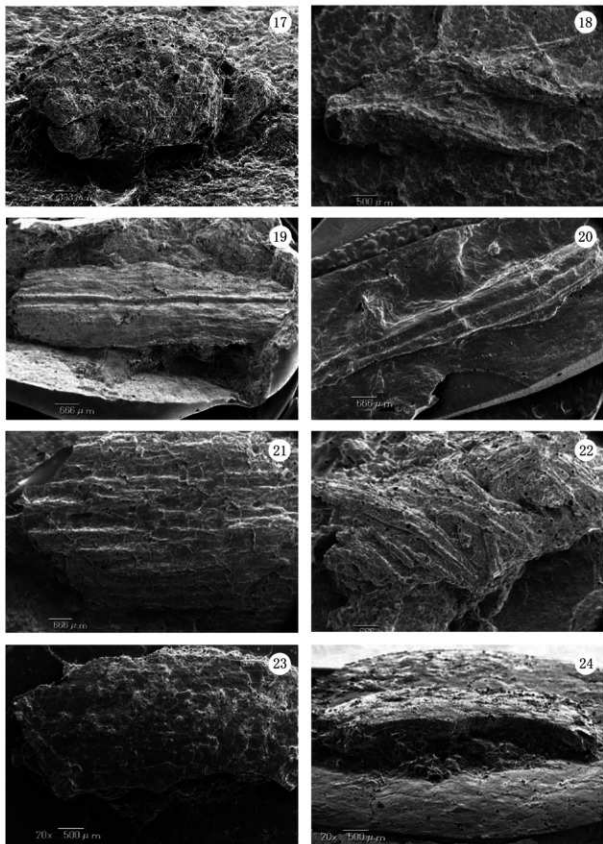
第96図 御所野遺跡出土土器の圧痕レプリカの走査型電子顕微鏡写真（1）

1. ニワトコ核 (No.1019), 2. 現生ニワトコ核, 3. ガマズミ属?核 (No.12), 4. 現生ガマズミ核, 5. モミ属葉 (No.107),  
6・7. 不明種実 (No.1261), 8. 不明種実 (No.224)



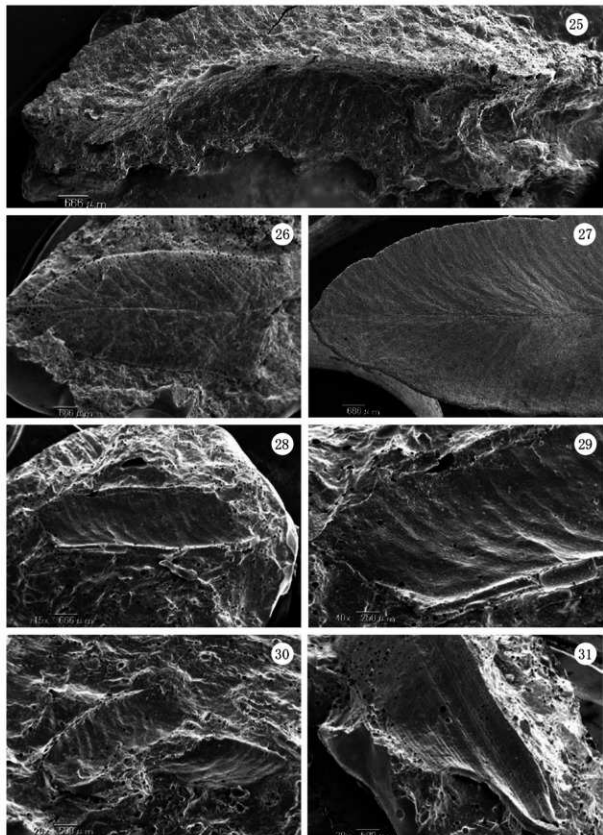
第97図 御所野遺跡出土土器の圧痕レプリカの走査型電子顕微鏡写真(2)

9・10. 不明種実 (No.1245-1)、11. 不明種実片? (No.1308)、12. 不明種実片 (No.136)、13. 不明種実片 (No.1024b)、  
14. 不明種実片? (No.1005)、15. 不明種実片? (No.116)、16. 不明種実? (No.1008)



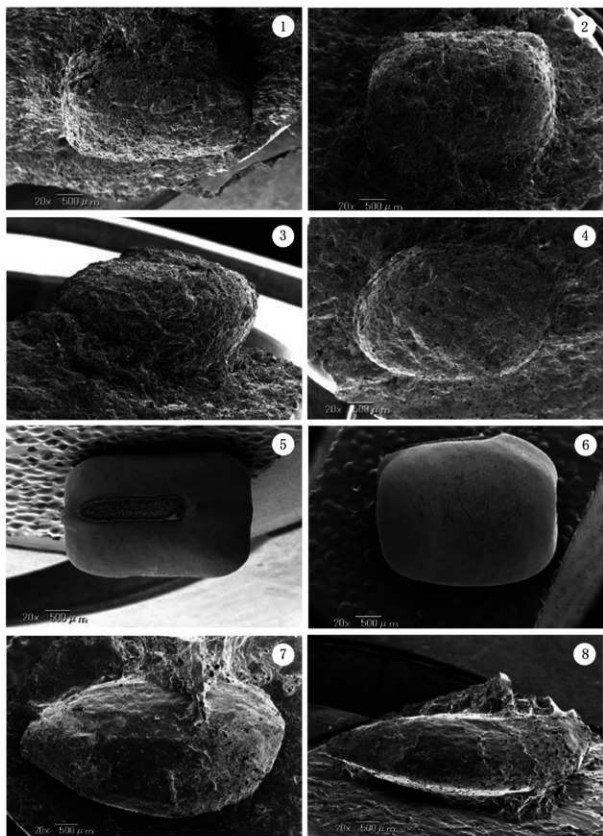
第98図 御所野遺跡出土土器の圧痕レプリカの走査型電子顕微鏡写真(3)

17. 不明種実? (No.28), 18. 不明茎状 (No.1006), 19. 不明茎状 (No.3), 20. 単子葉植物? (No.180), 21. 不明木材 (No.1021), 22. 不明繊維 (No.1007), 23・24. 単子葉植物? (No.1230)



第99図 御所野遺跡出土土器の圧痕レプリカの走査型電子顕微鏡写真（4）

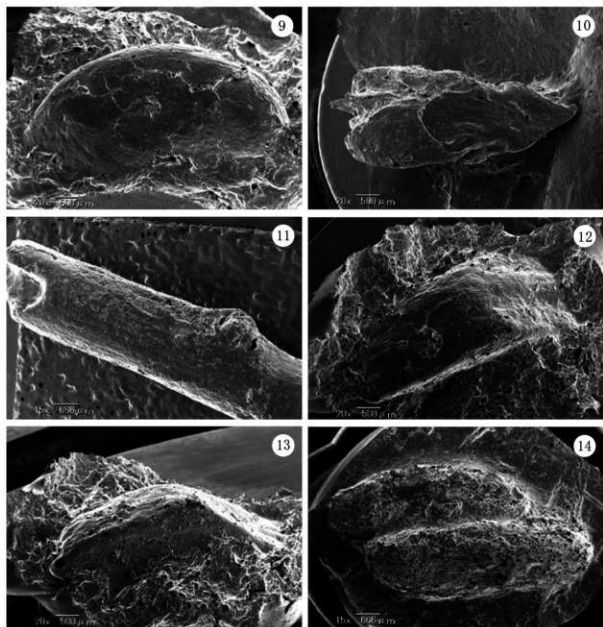
25. ゼンマイ裂片 (No.1002)、26. ワラビ裂片 (No.1003)、27. 現生ワラビ裂片、28・29. ワラビ裂片 (No.1267-2)、  
30. ワラビ?裂片 (No.1269)、31. ササ類葉? (No.1270)



第100図 馬場平遺跡出土土器の圧痕レプリカの走査型電子顕微鏡写真と現生ヤブツルアズキ

1・2. ササゲ属アズキ亜属種子 (No.1254)、3・4. ササゲ属アズキ亜属?種子 (No.1253)、5・6. 現生ヤブツルアズキ種子、  
7・8. アサダ果実 (No.1274)





第101図 馬場平遺跡と大平遺跡出土土器の圧痕レプリカの走査型電子顕微鏡写真

9. 不明種実 (No.1305), 10. 不明冬平 (No.1286), 11. 不明木材 (No.1284), 12・13. 単子葉植物? (No.1279),  
 14. 不明種実? 2点 (No.1306) (14のみ大平遺跡)

## (10) レプリカ法による敷物圧痕の観察

### 1. はじめに

土器を成形する際に敷物として用いた編組製品や葉などの痕跡が土器底部に残る場合がある。こうした痕跡は「敷物圧痕」(松永 2003)と呼称されている。

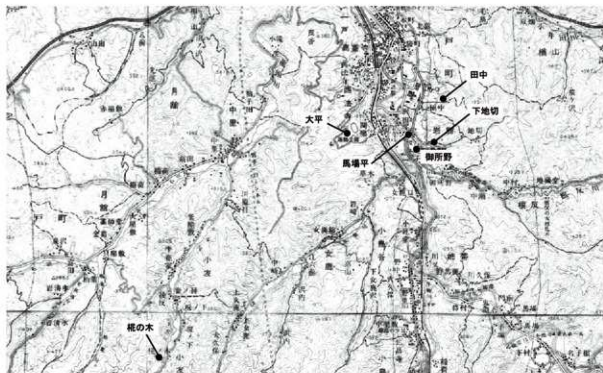
敷物圧痕は凹凸が実物と逆になっているため、圧痕そのものの観察だけでは、その技法や素材植物を観察するのは困難である。また敷物圧痕のうち編組製品の痕跡が付いた「編物痕」(真邊 2013)は、当時の編組技術だけでなく、その素材となる植物を知る手がかりになる。同様に葉の痕跡が付いた「木葉痕」は、遺跡周辺に生育していた植物のうち、土器製作の際に敷いた葉を知ることができる。ここでは、レプリカ法による敷物圧痕の採取を行い、技法や利用された素材植物を検討した。

### 2. レプリカ法による敷物圧痕の採取方法

レプリカを採取した敷物圧痕は、御所野縄文博物館によって抽出された縄文時代の土器底部133個体である。遺跡別の内訳は、御所野遺跡76個体、大平遺跡37個体、馬場平遺跡2個体、梶の木遺跡5個体、田中遺跡7個体、下地切遺跡6個体である(第27・29表)。

レプリカの採取方法は、真邊(2013)を参考にした。印象剤(シリコン)は、広い面積を採取する必要があるため粘性が低いアグサ・ジャパン(株)製のブルーミックスソフトを使用した。採取方法を以下に記載する。

- ①敷物圧痕の部分および周囲に離型剤を塗布する作業までは、種実などの小型圧痕の採取方法と同様(第3章第2節(9)を参照)。
- ②敷物圧痕の縁辺部にやや固めの印象剤を盛り、土手を作る。
- ③土手の内部に柔らかい印象剤を流し込む。
- ④固化後にレプリカを剥がし、アセトンで離型剤を除去する。



第102図 土器底部圧痕を採取した遺跡の立地

⑤レプリカの全体および部分の拡大写真を撮影し、必要に応じて部分的に切り取り走査型電子顕微鏡で観察する。走査型電子顕微鏡用の試料は、試料台上カーボンテープで固定し、その後イオンスパッタにて金蒸着を施し、走査型電子顕微鏡 (KEYENCE社製VE-9800) にて写真撮影を行なった。

なお、編物痕のうち、タテ材とヨコ材の幅と厚さが計測可能な個体は、最大1方向5カ所についてデジタルノギスを用いて小数点第1位まで計測した。

### 3. 結果

#### a. 御所野遺跡

御所野遺跡で抽出された敷物圧痕をもつ土器は、縄文時代中期から後期が主体である。時期が判別可能な土器は少ないが、12点のみ縄文時代中期に限定可能な個体があった。敷物圧痕は編物痕が主体で、レプリカを採取した76個体中71個体 (93.4%) が編物痕であった (第27・28表)。4個体に広葉樹の葉を用いた木葉痕もあり、編物痕と木葉痕の両方の痕跡がつく場合も4個体みられた。これは土器の底に編組製品を敷く場合と葉を敷く場合、また両方を敷く場合があったことを示す。1個体は胴部文様と同じ絡条体が底部にも付いていた。両方敷く場合は、いずれも編組製品を敷いた後に葉が敷かれていた。さらに御所野No.19と、26、29、220、585、642の6個体には、編物痕が付いた後に指紋が付いていた。同様に、No.23と74の2個体には、爪痕と推定される孤状の鋭い窪みが付いていた。

編物痕で土器底部の縁が残る個体には、意図的に磨り消したと推定される工具痕 (以下、磨り消し痕と呼称する) が残るか、土器を回転したために底部縁部部の編物痕が消えたと推定される回転痕が付いていた。磨り消し痕が確認できた個体のうち、No.11-2と15の2個体には土器底部の中央が窪み、ナダの痕跡がみられた。編物痕がある71個体中で磨り消し (? を含む) は21個体 (29.6%) と全体の1/3弱の個体に認められ、回転痕 (? を含む) は39点 (52.1%) と半数以上の個体に認められた。

さらに、磨り消し痕と回転痕の双方が確実に認められる個体は1個体で、磨り消し痕と回転痕? が認められる個体が3個体あった。磨り消し痕も回転痕もない編物痕ないし編物痕? のみの個体は、15個体 (21.1%) であった。ただし、磨り消し痕も回転痕もない個体は、全体の1/4から1/8の残存率の個体が多く、痕跡が残っている部位が残っていなかった可能性もある。この結果は、編物痕が付いた後に土器を回転したり、あるいは底部に付いた圧痕を磨り消したりする作業を行っている場合が多いことを示す。

編物痕の編組技法は、71個体中66個体がタテ材とヨコ材が1本1単位で1越え、1潜り、1送りの「ござ目」であった。1個体は「2本飛びござ目」、3個体はタテ材1～2本を1単位として格子状に組み、1本の横方向の巻き付け材でヨコ材を留める「巻き付け」、1個体はタテ・ヨコ材を6本1単位の「網目」が含まれていた (第106・107図)。中期? とされたNo.292の個体は、胴部外面と同じ縄文 (絡条体: 単筋L+LR+LR+L) が底部にも確認された。

付帯物として、No.9には「ござ目」の編組製品の上面に右捻りの縄 (幅25～40mm) が別の幅広の素材 (幅3.5mm) で留められていた。

#### b. 大平遺跡

大平遺跡で抽出された敷物圧痕をもつ土器は、縄文時代中期から後期が主体で、2個体は平安時代の土器であった。3個体は縄文時代中期、4個体は縄文時代後期、4個体は縄文時代後期? に限定可能であった (第29・30表)。

敷物圧痕は編物痕が主体で、レプリカを採取した37個体中33個体 (89.1%) が編物痕であった。うち



呼称	素材植物	編組技法	呼称	素材植物	編組技法
ござ目編み [1越え1漕り1送り]	スズタケ 削り製材材		網代編み* [3越え3漕り1送り] ※タテ・ヨコ材共に 2本を1単位とする	削り製材材	
飛びござ目編み [2越え1漕り1送り] ※タテ材のみ2本を 1単位とする	削り製材材		波形網代編み* ※3越え3漕り1送りの飛び目を山形 に削り返し、それを繰り返すことにより 波形状を呈する	削り製材材	
巻き付け編み [1越え1漕り1送り]	削り製材材				
巻き付け編み [2越え2漕り1送り]	削り製材材				

第103図 御所野遺跡および周辺遺跡の編物痕でみられる編組技法

1個体は編物痕と木葉痕の両方が付いていた。4個体（うち2個体は平安時代）は広葉樹の葉を用いた木葉痕であった。（第29表）。

編物痕に磨り消し（?を含む）は4個体（12.1%）認められ、回転痕（?を含む）は16個体（48.5%）と約半数の個体に認められた。

編物痕の編組技法のほとんどはタテ材とヨコ材が1本1単位の「ござ目」で、1個体のみ「2本飛び網代」、1個体のみ「巻き付け」が含まれていた（第108図）。

No. 1はほぼ完形個体であるが、底部外面に漆様の黒色物が付着していたため、付着物以外の箇所のみレプリカを採取した。No. 2と3、17の3個体には節、No. 7の1個体には程から伸びる芽が確認できた。No. 8と9は複数方向から編物痕がついており、土器を敷物から離れたのちに再度（土器が乾燥しないうちに）敷物に載せたと推定される。No. 17は「ヨコ添え2本巻き付け編み」（佐々木ほか2014）が2段確認された。ただし、ヨコ添えされた外面側ではなく、内面側が採取されている。また巻き付け材を境としてタテ材の本数が増加しているため、かごの一部と推定される。No. 24と49、84の3個体も、タテ材が途中から2分岐しており、かごの破片の可能性がある。

### c. 柵の木遺跡

柵の木遺跡で抽出された敷物圧痕をもつ土器は、縄文時代後期の5個体である。4個体が編物痕、1個体が木葉痕であった（第29・30表）。

編物痕には2個体に回転痕、2個体に磨り消しが確認された。うち1個体は回転痕と磨り消し（周囲のみ）の両方が確認できた。

編物痕の編組技法は3個体が「ござ目」、1個体が「2本飛びござ目」であった。また柵の木遺跡の「ご



「ご目編み」は、タテ・ヨコ材の間隔が狭いところに特徴がある。

No.733Cは、底部の縁辺部に編物痕がついた後、中央部のみ方向をかえて編物痕がついていた。

#### d. 馬場平遺跡

馬場平遺跡で抽出された敷物圧痕をもつ土器は、縄文時代中期中葉の円筒上層d～e式期の2個体である。2個体共に編物痕であった(第29・30表)。

編物痕の1個体に磨り消し?ともう1個体に回転痕?が確認できたが、残存が悪く明瞭ではなかった。編組技法は、1個体が「ご目」、1個体が「巻き付け」であった。馬場平遺跡のご目はややタテ材間隔が狭かった。

#### e. 田中遺跡

田中遺跡で抽出された敷物圧痕をもつ土器は、縄文時代中期から後期の7個体である。うち1個体は中期、1個体は後期に限定できる可能性がある。7個体共に編物痕で、うち1個体には編物痕と木葉痕が付いていた(第29・30表)。

編物痕には6個体に回転痕(?を含む)、1個体に磨り消しが確認できた。編物痕の編組技法は7個体共に「ご目」であった。第111図に掲載したNo.3と5の接合個体は、タテ材が1本ないし2本1単位でタテ材の本数に変化があり、かごの一部と推定される。また節がタテ材とヨコ材共に残存する。No.30はタテ材の間隔が上部に向かって広がっており、かごの一部と推定される。

#### f. 下地切遺跡

下地切遺跡で抽出された敷物圧痕をもつ土器は、縄文時代中期から後期の6個体である。うち2個体は縄文時代中期、1個体は後期に限定できる可能性がある。5個体は編物痕、1個体は木葉痕である(第29・30表)。

編物痕には、3個体に回転痕?、1個体に磨り消しが確認できた。編物痕の編組技法は4個体が「ご目」、1個体が「3本飛び波形網代」であった。ただし、部分的にしか残存していないので、「波形網代」とした個体は「連続網代」の可能性もある。下地切遺跡の「ご目」は、タテ材の間隔が狭い特徴がある。

### 4. 敷物圧痕の素材植物の同定

#### a. 編物痕の素材植物

特徴的な敷物圧痕を詳細に観察するため、25点を抽出し、実体顕微鏡による拡大写真と走査型電子顕微鏡(SEM)による素材植物の拡大写真を撮影し、残存が良い箇所について幅と厚さの計測を行った(第31表)。タテ・ヨコ材共に0.2～0.5mmの厚みのヘギ材が多かった。

素材の植物は、割り裂き材がほとんどで、段差をもつ節が御所野遺跡では2個体、大平遺跡では2個体、田中遺跡では1個体、節から出る芽が大平遺跡で1個体観察されたため、単子葉植物と推定された。また、節の段差はササの皮(稈鞘)が残る部分で、さらに節の部分は影らまないという特徴が認められた。技法は、いずれも「ご目」であった。節や芽が残存していない個体も節や芽が確認された個体と同様な形状の素材植物であった。

植物学と考古学の成果によると、縄文時代の日本列島にはタケは分布しておらず、ササが主体であったと考えられている(佐々木ほか2014)。編物痕の素材植物を同定するには、現在一戸町に分布する

第31表 編物痕の素材植物の幅と厚さ(単位mm)

遺跡	No.	編織技法	ヨコ材幅					ナギ材幅					ヨコ材厚			ナギ材厚							
			1	2	3	4	5	平均	1	2	3	4	5	平均	1	2	3	平均	4	5	6	平均	
御野野	No.256	ござ目	24	23			2.35							0.5	0.7								
御野野	No.257	網代	20	1.8	20	17	22	1.94	20	2.3	26			2.80	0.3	0.3	0.30		0.4	0.3	0.3	0.35	
御野野	No.800	巻き目付	22	2.2	2.8	2.2	2.3	2.34	27					2.70	0.4	0.5	0.3	0.40	0.3			0.30	
大平	No.7	ござ目	20	26	25	29	3.3	2.96							0.4	0.5	0.3	0.40					
大平	No.16	ござ目	25	28	35	25	2.1	2.08	30	20	22	25	20	2.38	0.4	0.6	0.5	0.50	0.8	0.6	1.0	0.80	
大平	No.17	ござ目	36	43	43	40	3.3	4.02	30	42	44	35	34	3.70	0.4	0.4	0.5	0.50	0.8	0.4	0.5	0.57	
大平	No.26	巻き目付	32	27	28	25	3.9	3.62	28	29	28	40	0.5	2.98	0.3	0.7	0.50						
大平	No.29	2本巻の網代	23	20	20	21	2.08		1.6	21	27	26	20	2.20	0.4	0.3	0.3	0.40	0.3	0.3	0.4	0.30	
大平	No.49	ござ目	30	35	25	23	2.9	2.84	37	35	32	30	32	3.32	0.5	0.4	0.3	0.40	0.3	0.3	0.4	0.30	
大平	No.78	ござ目	20	22	29	36	30	3.34	35	30				3.25	0.5	0.2	0.3	0.30	0.3	0.3	0.3	0.30	
大平	No.84	ござ目	25	30	30	25	1.7	2.54	28	29	3.1	28	28	2.80	0.4	0.2	0.3	0.30	0.2	0.3	0.2	0.27	
大平	新56集24回-5	ござ目?	29					2.90															
大平	新56集30回-5	ござ目?	32	25	27	25		2.70															
大平	新56集56回-4	ござ目?	37	36	32	29	3.7	3.42	23?	43?					0.3	0.7	0.3	0.43					
大平	新56集96回-1	ござ目	39	26	4.4	36	42	3.74	48	43	40	40	39	4.20	0.5	0.4	0.4	0.43	0.5	0.5	0.4	0.47	
穂の本	194	ござ目	20	26	1.5	30	26	2.34	19	24	22	17	28	2.80	0.5	0.3	0.5	0.43	0.5	0.2	0.4	0.37	
穂の本	752C	2本巻のゴザ目	0.5	1.0	1.0	0.9	0.7	0.82	20	25	28	22	20	2.80	0.3	0.3	0.3	0.30	0.4	0.3	0.3	0.30	
穂の本	960	ござ目	1.1	1.5	1.6	1.4	1.5	1.42	1.6	1.5				1.65	0.3	0.3	0.2	0.27					
西蔵平	No.8	ござ目	23	21	1.9	23	1.9	2.03	1.4	1.7	2.2			1.77	0.4	0.3	0.3	0.33	0.7			0.70	
西蔵平	No.25	巻き目付	2.3	2.5	2.1	1.7	2.22		1.8	2.7	2.8			2.43	0.4	0.2	0.4	0.33	0.4	0.4	0.6	0.47	
御中	No.5	ござ目	1.7	1.7	2.5	2.0	2.6	2.30	2.8	2.7	3.0			2.80	0.5	0.3	0.3	0.37					
御中	No.29	ござ目	40	33	34			3.80							0.5	0.5	0.50						
御中	No.30	ござ目	1.7	2.0	1.6	3.3	2.1	1.94	2.5	2.9	2.8	2.4	2.7	2.86	0.4	0.3	0.4	0.37	0.5			0.50	
下蔵田	No.6	ござ目	24	25	2.1	22	2.8	2.40	22	23	25	20	1.9	2.38	0.4	0.5	0.3	0.40	0.5	0.3	0.5	0.43	
下蔵田	No.15	3本巻の波網代	20	18	1.6	22	1.5	1.92	27	20	19	30	25	2.42	0.2	0.3	0.2	0.23	0.3	0.2	0.3	0.27	

ササ類の現生標本との比較、またその素材植物を使って編めるかが同定の一助になる。一戸町に分布するササ類で、縄文時代に分布していたと考えられる植物には、チシマザサ(ネマガリダケ)と、クマイザサ、スズタケ、アズマネザサの4種があり、さらにこれらの雑種であるナンブスズ(スズタケ×クマイザサの雑種)、オモエダケ(スズタケ×ミヤコザサの雑種)、オクヤマザサ(チシマザサ×クマイザサの雑種)、トウゲダケ(チシマザサ×アズマネザサの雑種)の計8種がある。このうち、一戸町で現在でもカゴ作りが行われるササの種類はスズタケ(現地呼称:シノ)と、ナンブスズ(現地呼称:アズキシノ)、トウゲダケ(現地呼称:メダケ)が該当する。上記の中で、出土した編物痕の節や芽に似ている種はスズタケとナンブスズの2種のみである。この2種は他の種よりも稈が細く、節の段が明瞭である。スズタケとナンブスズは近縁種であり、節の形状のみでは区別がつかない。ナンブスズは節間の皮(稈鞘)が短く、節間の上部では稈の肌が見えるのに対し、スズタケは皮(稈鞘)が長く、稈の肌は隠れて見えない点で区別される。したがって、稈の節と芽の特徴からスズタケないし雑種のナンブスズと同定された。

## b. 編物痕の復元製作

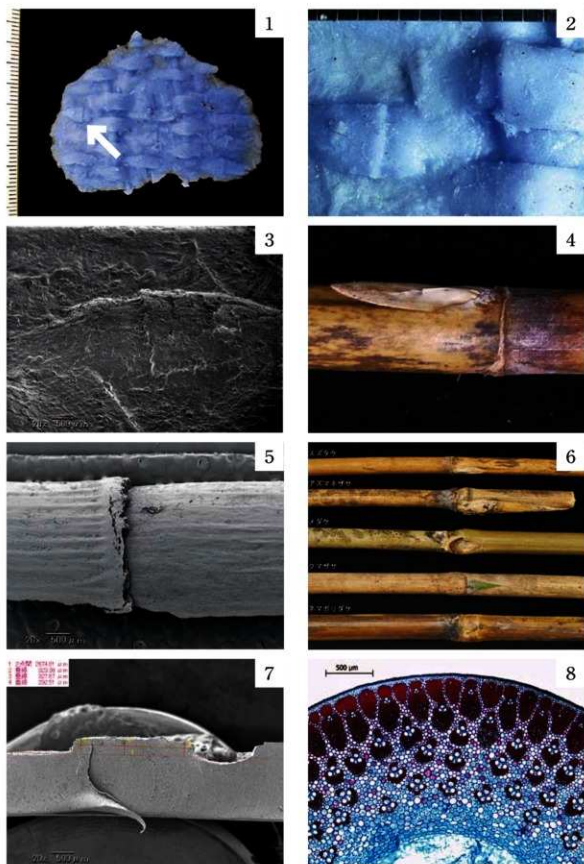
No.35と48の2点を単子葉植物の節が確認されたため、この2点をモデルに一戸町に生育する単子葉植物を用いて復元実験を行った。復元実験は、柴田恵氏と中市日女子氏によって行われた。復元に用いた植物は、①ヨシ、②ススキ、③スズタケ、④メダケ(トウゲダケかアズマネザサ)、⑤アズマザサ、⑥ネマガリダケ(チシマザサ)の6種で、技法はござ目である。

このうち、ヨシとススキは、素材の材料を製作する過程でいずれも割れてしまい、御野野遺跡から出土するござ目を編む編物痕の素材とはならないことを確認したため、残りのササ類で復元実験を行った。

### 【復元①御野野遺跡No.35】

スズタケとメダケ、ネマガリダケで復元した。いずれも4分割後、中の肉を取り、調整してから製作した。メダケとネマガリダケはいずれも節が高く、編物痕のようなタテ材とヨコ材の隙間がほとんど





第104図 土器底部織物痕のレプリカおよび現生ササ類の稈

1-3. 御所野遺跡土器底部織物痕のレプリカ(No.68), 4-5. 現生スズタケの稈, 6. 一戸町生竹のササ類, 7. 底部織物痕のレプリカの厚さ(No.48), 8. 現生スズタケの稈の横断面 3, 5, 7: 走査型電子顕微鏡写真, 1, 2のスケールの目盛は1mm

どない「ごご目」は押し込めないといふ編めなかった。柔らかく弾力性のあるスズタケの方が容易に編めた。

#### 【復元②御所野遺跡No.48】

スズタケとメダケ、アズマザサを用いたが、アズマザサは割れ裂くと薄く、全体がまるまってしまうため編物痕のような形状にはならない。スズタケとメダケはいずれも4分割してから中の肉を取り、調整してから製作した。節の形は盛り上がりのないスズタケに酷似している。メダケは程が硬く「ごご目」を編みにくい。

さらに復元後、これらを粘土版に押し付けて編物痕をとり、粘土版を焼成してレプリカを採取し、復元品との比較も行っているが、大きさに著しい収縮はみられなかった。

今回は、スズタケの雑種であるナンブスズでの復元は行わなかったが、一戸町に現在でも行われている鳥越地区の竹細工では、ナンブスズは皮がない部分に日光があたってその部分が変色するために、あまり使われておらず、主にスズタケが用いられている。

以上の結果、植物自体がもつ情報と、編組技術の情報を加えると、御所野遺跡および周辺遺跡で縄文時代中～後期の編物痕として残る編組製品の材料となった植物は「スズタケの可能性が高い」といえる。さらに編物痕をみると、材料が扁平で薄いという特徴がある。現代のかごに用いられる太さのスズタケの厚さと比べるとかなり薄く、薄い部分では0.2～0.3mm程度の厚さである(第31表)。編物痕に用いられた素材植物の薄さや、編み目が密である点から、縄文時代においても素材植物をかなり薄く調整して、編組製品の製作に用いられていたと考えられる。

#### c. 木葉痕の素材植物

木葉痕の葉の同定は、東北大学植物園所蔵の現生標本と対照して行った。同定の結果、木本植物で広葉樹のアズキナシとクス、マンサク、ハクウンボクの4分類群と、草本植物のフキの1分類群の、計5分類群が同定された。同定できた点数は8点である。

遺跡別にみると、御所野遺跡では縄文時代中～後期の土器からクスとマンサク、フキの3分類群が各1点、下地切遺跡の縄文時代中～後期の土器からハクウンボクが1点、大平遺跡の縄文時代中～後期の土器からクスが1点、同じく大平遺跡の平安時代の土師器からクスが1点、樫の木遺跡の後期中葉～後葉の土器からアズキナシが1点見出された。同定された点数が少ないため、遺跡ごとの傾向はつかめないが、縄文時代中～後期の3遺跡からクスが得られており、クスが複数の遺跡で比較的用いられていたといえる。またこれらの葉で、木葉痕に用いられる大きさに成長するのは、初夏から初秋にかけてであり、葉を採取し、保管せずそのまま用いたと仮定すると、この時期に土器作りが行われていた可能性がある。

以下に同定された分類群と同定根拠を示す。

##### (1) アズキナシ *Aria alifolia* (Siebold & Zucc.) Decne. バラ科 (樫の木遺跡No.198)

側脈が直線的で平行に多数並んでいる点はカバノキ科の仲間にも共通する性質であるが、側脈の間隔や細脈が不明瞭なことを考慮するとアズキナシに最も整合的である。サワシバも同じような特徴があるが、木葉痕にみられる葉の幅が広いサワシバはないため、アズキナシとした。

##### (2) クス *Pueraria lobata* (Willd.) Ohwi マメ科 (大平遺跡No.15, No.19, 御所野遺跡No.10, No.74)

いずれも主要脈が比較的細いながらも硬質である点で共通しており、細脈の様子からみても同一種に属すると推測できる。特に大平遺跡のNo.19では葉の基部の短い小葉柄が明瞭に識別でき、その部分の脈の分岐パターンはこの植物が基部から2本以上の脈を出すことを示す。この分岐パターンから考

えると、No.19は側小葉の可能性が高い。最大の大きさである大平遺跡のNo.15は、側脈が下部で対生しているため頂小葉と考えられる。最下部の側脈は、これより下の部分が欠けているためあくまで推測であるが、基部から出ていると思われ、特に左側の葉ではその側脈からさらに外側に出ているやや太い二次脈を認めることができる。同様の二次脈は大平遺跡のNo.19でも観察できる。

(3) マンサク *Hamamelis japonica* Siebold & Zucc. マンサク科 (御所野遺跡No.35)

木葉痕が二重に重なっているため不鮮明であるが、側脈が直線的で平行している点、細脈が不明瞭な点などから、側脈の角度や間隔を考慮するとマンサクの可能性が最も高い。

(4) ハクウンボク *Styrax obassia* Siebold & Zucc. エゴノキ科 (下地切遺跡No.13)

断定はできないが、ハクウンボクの可能性が最も高い。側脈が中央脈に対してやや外側へ反り返り気味に規則的に分岐している点や、側脈の間隔、また表面に毛があると推測される点から推定した。合わない点としては、側脈がほとんど対生していること(ハクウンボクではふつう互生)、側脈を結ぶ細脈の角度が中央脈に対して鈍角になっていること(ハクウンボクではふつうもっと垂直に近い)、現生標本に当たった結果、このような分岐パターンのもまれにはあり、他に候補もないためハクウンボクとした。

(5) フキ *Petasites japonicus* (Siebold & Zucc.) Maxim. キク科 (御所野遺跡No.178)

フキおそらくは亜種のアキタブキ *Petasites japonicus* subsp. *Giganteus* (G.Nicholson) Kitam. と思われる。ほとんど同じ太さの太い主要脈が3本以上放射状に走っている状況は、この木葉痕が円形や扇形の葉の一部であることを示唆する。主要脈から分岐する側脈が急角度で出て、しかもその先が隣り合う主要脈から出る側脈ときれいな網目を作らない点、細脈がごく不明瞭な点は、木本の候補種には合わないため、草本で当たった結果、フキの葉と考えると最も総合的である。

## 5. 考察

御所野遺跡および周辺遺跡で土器底部に残る敷物圧痕の観察を行った結果、縄文時代中～後期の敷物圧痕として残る編物痕は、ほとんど「ごご目編み」で製作されており、その素材となる植物は薄く調整されたスズタケの可能性が高い点が明らかになった(第104図)。今回検討しなかった残存が悪い個体の底部の編物痕の技法もほとんど「ごご目」であったため、土器の敷物として使われた編組製品は、「ごご目」で製作されているのがこの地域の特徴といえる。またいくつかの個体はタテ材の本数が途中で増加しており、形状も聞くような形がみられたため、本来はかごであった製品を敷物にしていた。また、ヘギ材の幅は2～3mm、厚さは0.2～0.5mmのものが多く、素材植物本来の形状から割り裂かれ、薄く調整して作られていたことが明らかになった。このうち、確実に後期の土器である柘の木遺跡の編物痕は、ヘギ材の幅が1～2mmと中期よりも細く、密に編まれていた。これが時期差なのか、柘の木遺跡が他の遺跡より離れているという立地による差なのかは今後検討を行いたい。

編物痕における素材植物の同定の重要さは真邊(2013)などで指摘されているが、これまで植物学的に種レベルで同定された事例はない。したがって、単子葉植物ならば節と芽の形状である程度の種が絞り込めることが明らかになった点は、編物痕の素材植物を検討する上で重要である。

スズタケは編組製品の材料としていつから、どの地域で使われ始めたのかは明らかになっていない。また縄文時代中期と現代の間には約4500年の開きがあるが、その間にどのように編組技術や材料と

なった植物の情報が伝わったのかも不明である。現在一戸町にはスズタケを扱っている職人が多く在住し、ササ製の製品が多く保管されているため、考古学と植物学だけでなく、現在の竹細工の民俗知識から編物痕となった植物や編組技術をさらに検討していきたい。

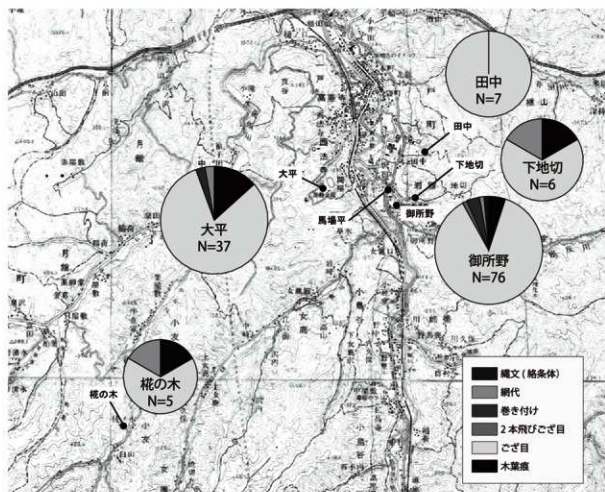
## 謝辞

中市日女子氏、柴田恵氏、稲葉イト氏には素材の植物を収集・提供頂くと共に鳥越の竹細工についてご教示頂いた。森林総合研究所の能城修一氏には東北大学植物園での現生標本調査にご協力頂いた。記して感謝したい。なお、本稿は、平成25年度の御所野遺跡嘱託研究の一部である。

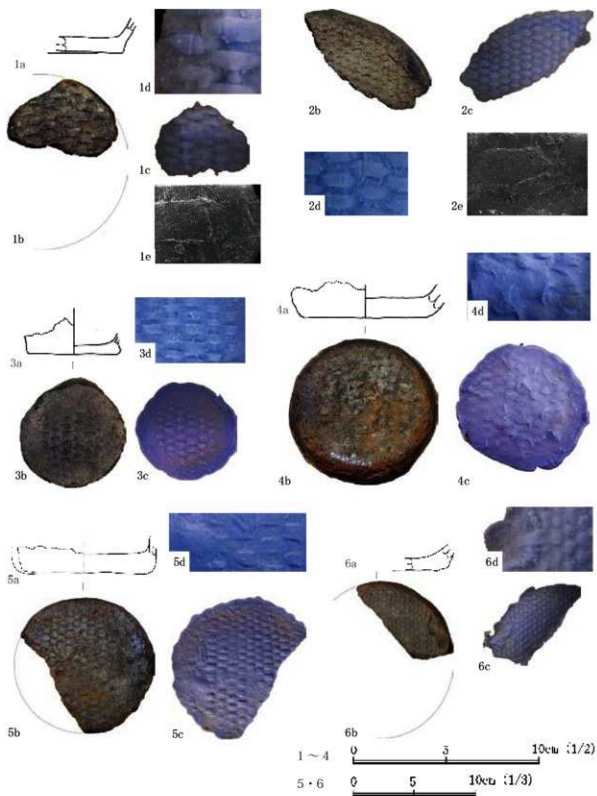
(佐々木由香、黒沼保子、米倉浩司、小林和貴、首野紀子、木村由美子)

## 引用文献

- 真邊 彩 (2013) レプリカ法による土器製作用具の復元: 素材形状からみた南九州地方の編物痕. 地域政策科学研究, 10, 141-170.
- 佐々木由香・小林和貴・鈴木三男・能城修一 (2014) 下宅部遺跡の編組製品および素材束の素材からみた縄文時代の植物利用. 国立歴史民俗博物館研究報告, 187, 323-346.
- 松水篤知 (2003) 中国新石器時代の「敷物圧痕」について. 中国考古学, 3, 22-45.



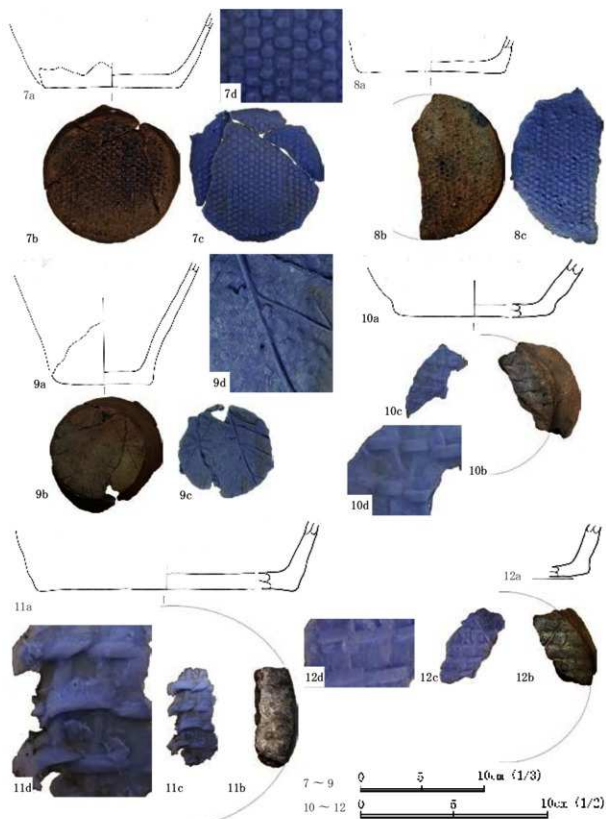
第105図 土器底部圧痕を採取した遺跡の立地と敷物圧痕の種別 (縄文時代中～後期のみ)



第106図 御所野遺跡出土編物痕の土器およびレプリカ (1)

1. No.48 (ござ目)、2. No.35 (ござ目)、3. No.5 (ござ目+回転)、4. No.23 (ござ目+回転?+爪痕?)、5. No.19 (ござ目+回転?+指紋)、6. No.9 (ござ目+回転?)

a: 実測図、b: 土器、c: レプリカ、d: レプリカ拡大 (3倍)、e: レプリカの節部の走査型電子顕微鏡写真 (スケールは写真中に記載)

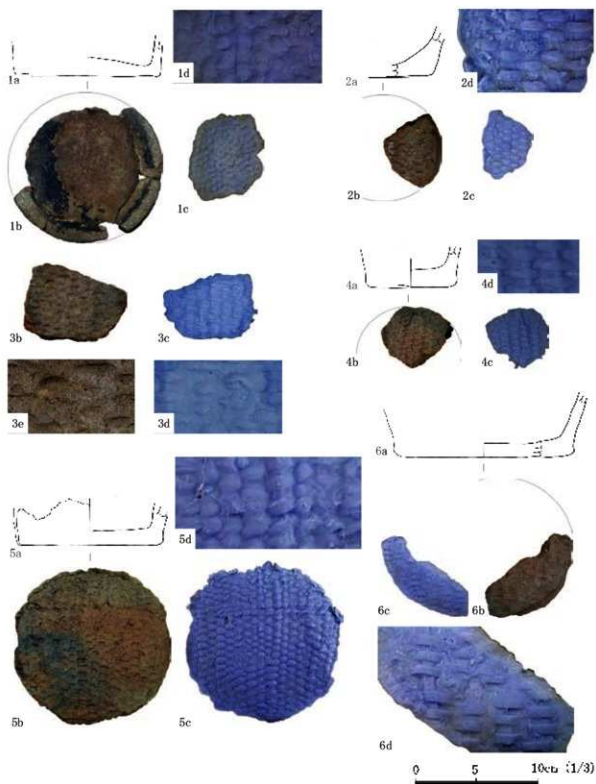


第107図 御所野遺跡出土編物痕の土器およびレプリカ(2)

7. No.17 (ござ目+回転?), 8. No.16 (ござ目+回転?+木葉痕), 9. No.49 (ござ目+木葉痕), 10. No.800 (巻き付け).

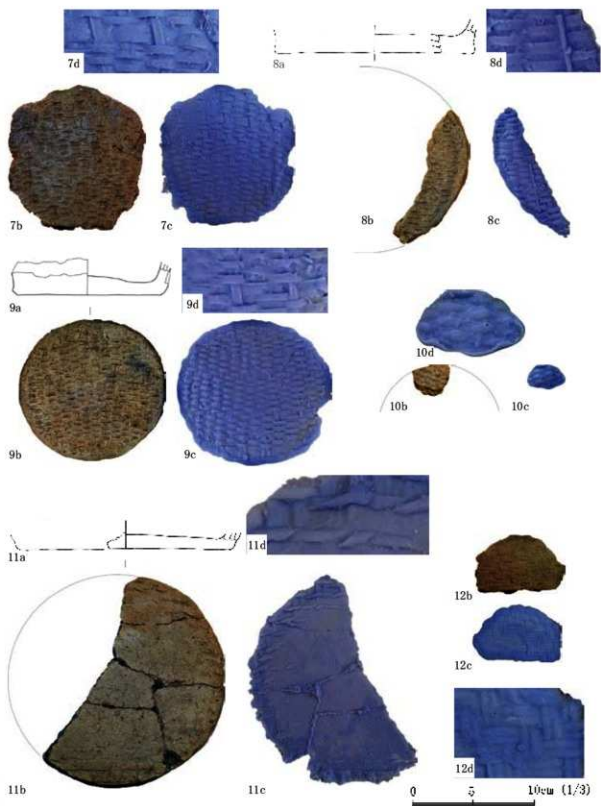
11. No.40 (巻き付け), 12. No.31 (巻き付け)

a:実測図, b:土器, c:レプリカ, d:レプリカ拡大(3倍)



第108図 御所野遺跡周辺遺跡出土編物痕の土器およびレプリカ (1)

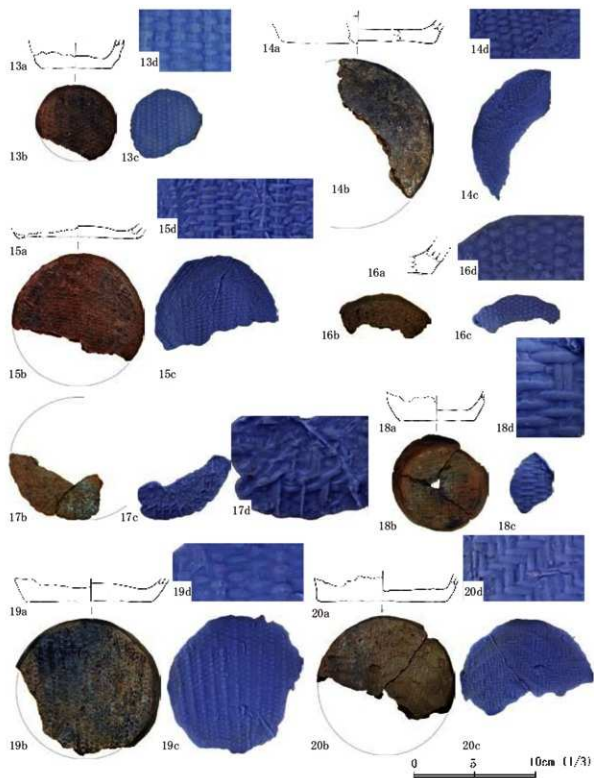
1. 大平遺跡 No1 (ござ目+回転?), 2. 大平遺跡 No3 (ござ目+回転), 3. 大平遺跡 No7 (ござ目+磨り消し?), 4. 大平遺跡 No16 (ござ目),  
 5. 大平遺跡 No17 (ござ目), 6. 大平遺跡 No24 (ござ目+回転)  
 a: 実測図, b: 土器, c: レプリカ, d: レプリカ拡大 (3倍), e: 編物痕の拡大 (3倍)



第109図 御所野遺跡周辺遺跡出土編物痕の土器およびレプリカ (2)

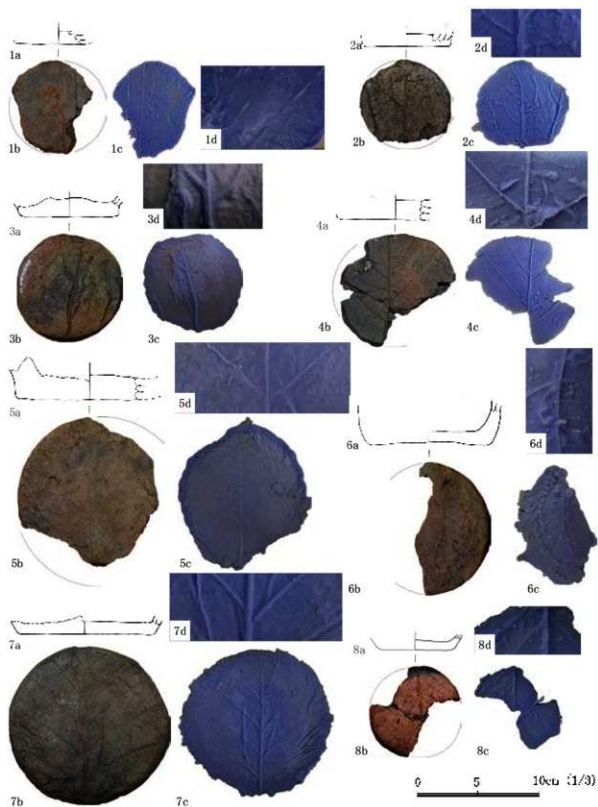
7. 大平遺跡 No.49 (ござ目), 8. 大平遺跡 No.78 (ござ目), 9. 大平遺跡 No.84 (ござ目+回転), 10. 大平遺跡 No.2 (ござ目), 11. 大平遺跡 No.28 (巻き付け+磨り消し), 12. 大平遺跡 No.39 (2本飛び網代+回転?)  
 a: 実測図, b: 土器, c: レプリカ, d: レプリカ拡大 (スケール任意)





第110図 御所野遺跡周辺遺跡出土編物痕の土器およびレプリカ (3)

13. 槌の本道跡 No.194 (ござ目+回転), 14. 槌の本道跡 No.960 (ござ目+磨り消し), 15. 槌の本道跡 No.733c (2本戦びござ目), 16. 馬場平道跡 No.8 (ござ目+磨り消し?), 17. 馬場平道跡 No.25 (巻き付け+回転?), 18. 田中道跡 No.3+5 (ござ目+回転), 19. 田中道跡 No.30 (ござ目+回転), 20. 下馬切道跡 No.15 (3本戦び波形網代)  
 a: 実測図, b: 土器, c: レプリカ, d: レプリカ拡大 (3倍)



第111図 御所野遺跡および周辺遺跡出土木葉痕の土器およびレプリカ

1. 御所野遺跡 No.585 (マンサク), 2. 御所野遺跡 No.178 (フキ), 3. 御所野遺跡 No.10 (フキ), 4. 御所野遺跡 No.74 (クス), 5. 大平遺跡 No.15 (福物痕? + 本葉痕 (クス) + 回転), 6. 大平遺跡 No.19 (本葉痕 (クス) + 回転), 7. 下地切遺跡 No.13 (ハクウンボク), 8. 槇の本遺跡 No.198 (アズキナシ)  
 a 実測図, b 土器, c レプリカ, d レプリカ拡大 (3倍)

### 第3節 御所野遺跡の時期と変遷

#### (1) 遺跡の時期と変遷 (第112～115図)

御所野遺跡の時期は縄文時代中期中葉から末葉までである。同時期で最も古い遺構は隣接する馬場平遺跡で検出していることからここでは馬場平遺跡も含めて遺跡の変遷についてまとめてみたい。

##### I期 (円筒上層c式期)

馬場平遺跡の北西部に位置するA3竪穴建物跡の入口施設下の土坑に円筒上層c式の深鉢形土器が逆位の状態で埋設されていた。北側に隣接するA1竪穴建物跡の最下層や周辺の遺構外からも同型式の土器が出土しており、A地区の未調査部分に同時期の遺構が分布している可能性が高い。馬場平遺跡ではこのA地区より南のB・C地区でも同型式の土器がまとまって出土しており、調査区内で遺構は確認できなかったが、この地区にも同時期の遺構が分布していた可能性がある。

円筒上層c式の土器は馬場平遺跡の東側に位置する比高15mの段丘崖上に位置する御所野遺跡の西側調査区からも出土している。大型のDF14竪穴建物跡では埋設土器に同型式の土器が使用されていることや、隣接するDD18竪穴建物跡の堆積土中や北側のトレンチでも同時期の土器が出土しており、御所野遺跡西側にも馬場平遺跡と同時期もしくは後続する遺構が分布していたことは確実である。そのほか円筒上層c式の土器は中央部の盛土遺構周辺でも数片出土している。

##### II-1期 (円筒上層d式期)

II期は円筒上層d式とe式に相当する。御所野遺跡でd式からe式へ変遷することが確認されていることから前者をII-1期、後者をII-2期とする。以上の土器群は従来分類しているII A群に相当するが、この時期にはII B群とした大木8a式が共存する。

II期になると遺構数が増加し、分布範囲も大幅に拡大する。馬場平遺跡北西部(A区)では円筒上層c式に後続する土器群が遺構内、あるいは遺構外からも出土しており、居住が継続していたことを示している。同じ土器群は馬場平遺跡南東部のB・C区からも出土しており、ほぼ同時期か近接した時期に遺構があった可能性が高い。馬場平遺跡では、竪穴建物跡などの遺構を伴うのは次の時期からであり、II-1期からII-2期まで中央部の大型住居跡を核とし、中型竪穴、小型竪穴の組み合わせによる変遷をあとづけられる(第115図)。つまり円筒上層d式からe式、さらに大木8b古段階(III期)までを一連のものとして把握できる。以上から馬場平遺跡南東区では大型1棟に対しておおよそ中型・小型竪穴をそれぞれ数棟ずつという単位を基本として推移した可能性が高い。

II期になると御所野遺跡でも分布域が拡大する。馬場平遺跡に近い西側調査区の大形竪穴1棟のほか中型竪穴1棟、小型竪穴2棟を調査している。いずれも円筒上層d式でも古く、馬場平遺跡北西部の遺構群にほぼ近い時期の竪穴群と考えられる。ほぼ同時期と考えられる竪穴建物跡は東側1調査区や東側2調査区でも確認している。遺構検出時のIV A区でも円筒上層d式土器が出土している。

##### II-2期 (円筒上層e式期)

II-2期の竪穴建物跡は東側調査区と中央調査区で確認している。東側1調査区ではII-1期の分布域よりやや離れた北西端部で2棟、東側2調査区で1棟、いずれも径3m程の竪穴建物跡を調査している。そのほか遺構検出で確認した各調査区のうち東端部でも該期の土器が出土している。

中央調査区IV区の中央トレンチでは盛土遺構下のGB44竪穴から多量の獣骨とともに土器が出土している。同時期の遺構はIV区東トレンチ、さらに東側に隣接している中央調査区I区で7～8棟を調査している。径12mの大形竪穴から3m以下のものまであり、大形竪穴を核とした建物群があった可能性が高い。

### Ⅲ期（大木8b式併行期）

Ⅲ期も土器の細分にもとづきⅢ-1期とⅢ-2期とに分けて説明する。馬場平遺跡は引き続き大型堅穴を核として中型、小型の堅穴群で構成される。御所野遺跡では、該期の堅穴建物跡は西側調査区、東側調査区において1棟ずつ確認しているだけで土器の出土量も少ない。中央調査区のほぼ全面でⅢ期からⅣ期の遺構を検出しているが、遺構の重複が激しく時期毎の遺構の変遷は明確ではない。なかでもⅢ-1群土器はⅠ区のGF64-02堅穴建物跡（Ⅱ期）の堆積土の上層からまとまって出土している。Ⅳ区ではⅢ-2群～Ⅳ群土器が多く出土し、この時期の堅穴建物跡は盛土遺構を掘り込んで構築されている。

### Ⅳ期（大木9式併行期）

Ⅳ期の遺構も中央部のほぼ全域に分布する。Ⅰ区で大型堅穴のGD64を調査しているほか、GA70トレンチでもⅢ～Ⅳ期の大型堅穴が重複しており、配石遺構周辺のトレンチではⅢからⅣ期の遺構が密集している。Ⅳ期の遺構は東側調査区や西側調査区にも分布しており、東側調査区では大型堅穴2棟を調査しているが、いずれもⅣ-2期の遺構であり、遺構検出の段階で出土した土器も圧倒的にⅣ-2期の土器が多い。西側調査区でもⅣ期の堅穴を7～8棟ほど確認しているが、出土する土器はいずれもⅣ-2群土器であり、Ⅳ-2期になっても大型堅穴を中心に中型、小型の堅穴が分布するものと考えられる。

### Ⅴ期（大木10式併行期）

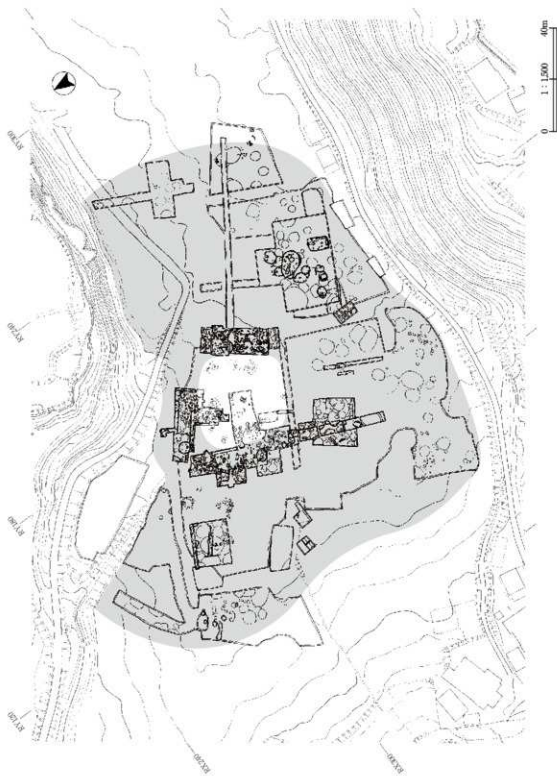
Ⅴ期の遺構は遺跡のほぼ全面に分布する。

東側調査区の遺構検出では、Ⅰ～Ⅲ区全てからⅤ群土器が出土している。各調査区において堅穴建物跡などの遺構を検出しており、大半はⅤ期の遺構群と考えられる。それを具体的に示しているのが、遺構を完掘した東側1調査区である。西端の堅穴5棟はいずれもⅤ期に相当し、径6～7mのやや大型、径4mの中型、3m前後の小型の堅穴などを調査しており、このような堅穴数棟を単位とした集落構成と考えられる。東側調査区から出土した土器は圧倒的にⅤ-1群土器が多いが、南東端のⅡ区、ⅣA区ではヒレ状突起を持つⅤ-2群土器、さらに東側3調査区の堅穴建物跡と粘土採掘坑からは、縄文施文の隆線やヒレ状突起、さらに刺突を伴う隆線文施文の土器が出土しており、いずれもⅤ-2群に位置付けられる。またⅣB区、Ⅶ区からも方形区画文施文の土器が出土しており、検出した遺構のなかにⅤ-2期のものが含まれている可能性がある。

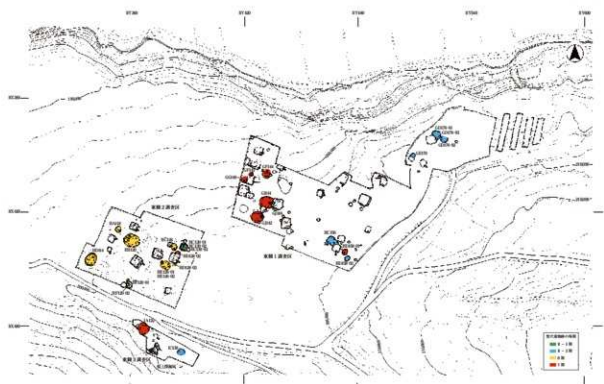
西側調査区はⅤ期の堅穴が広く分布しており、時期を確定できたものは7棟ある。径8×6m以上の大型堅穴1棟、径4m以上の中型堅穴が1棟、3m前後の小型堅穴が5棟である。7棟のうち5棟は焼失しており、そのうち4棟はほぼ同時に焼かれた可能性が高い。西側調査区から出土した土器はⅤ-1群土器である。

中央調査区のⅡa区、Ⅴ区でもⅤ期の遺構を確認している。Ⅱa区の北西端でⅤ-1期の堅穴が2棟重複している。いずれも部分的な調査であり詳細は不明であるが、1棟から炭化種子が多量に出土している。そのほか隣接している東側で1棟、北東端で1棟確認しており、いずれもⅤ-2期の遺構である。特に北東端の1棟は東側3調査区の粘土採掘坑から出土した土器と酷似しており、やや新しい時期に位置づけられる。Ⅴ区ではⅤ-2期に位置付けられる堅穴建物跡を3棟確認している。そのほか北東側のFG64-01、トレンチ中央よりやや南よりの東壁際で一部確認している大型建物跡もⅤ期の可能性はあるが、詳細は不明である。

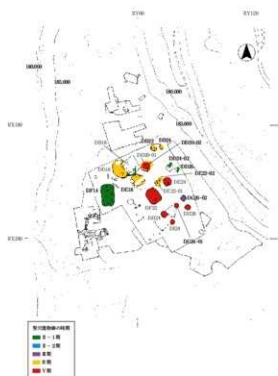
中央Ⅰ区でトックリ形土器がまとまって出土したGD66-02焼失堅穴もⅤ-1期の堅穴であり、やや南西に位置するGE60堅穴の堆積土中からⅤ-2群土器が出土しており、周辺にその時期の遺構が分布



第112図 中央調査区における竪穴建物跡の分布



第113図 東側調査区の竪穴建物跡の変遷

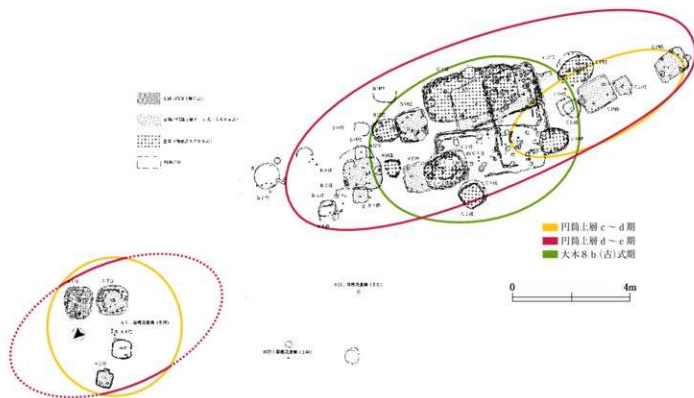


第114図 西側調査区の竪穴建物跡の変遷

している可能性が強い。

縄文の森調査区からも散発的ではあるが堅穴建物跡と土坑を検出している。出土する土器は、IC204-02出土の壺型土器のように御所野遺跡で最も新しい時期のものであり、その時期に周辺に拡大したことを示している。以上が御所野遺跡の時期変遷である。

(高田 和徳)



第115図 馬場平遺跡の堅穴建物跡の変遷

## (2) 御所野遺跡と周辺の遺跡

御所野遺跡の位置する馬淵川中流域ではその支流域も含めて縄文時代の遺跡が数多く分布している。なかでも中期の遺跡は馬淵川沿いの谷底平野の両岸に形成された段丘に立地している。谷底平野は北から二戸市の市街地周辺、一戸町中心部、さらに小鳥谷に分布しており、それぞれ二戸市北端の下山井から三戸町梅内付近、一戸町北部の鳥越から二戸市の石切所周辺、一戸町中心部の南側の守子から小姓堂周辺の古生層の狭い峡谷により分断されている。以上の谷底平野両岸の段丘面上に多くの遺跡が立地する。第32表および第116図には、この地域の縄文時代中期後半～後期初頭の集落遺跡を集成し位置を示した。

最も北に位置する二戸市街地周辺では、馬淵川西岸の福岡段丘面に荒谷A遺跡があり、その北に家ノ上遺跡、南に下村B遺跡、さらに上村遺跡が連続する。荒谷A遺跡は中期後半の太木8b式から9式期、さらに後期初頭から前葉までの遺跡である。中期の堅穴建物跡が100棟以上検出されており、最大長軸18mの大型堅穴をはじめ、10m以上の大型堅穴や中型、小型の堅穴建物跡を調査していることから、大型堅穴建物跡を核とした集落構成を想定できる(注1)。荒谷A遺跡の北隣に位置する家ノ上遺跡では中期末の堅穴建物跡が1棟検出されている。南隣の下村B遺跡では中期後半から後期初頭の堅穴建物跡が5棟と墓坑を伴う配石遺構群が調査されており、墓坑1基からは後期初頭の土器が出土している。上村遺跡では中期末から後期初頭の堅穴建物跡が5棟調査されている。出土した中期の土器は太木10式の新しい時期の特徴をもち、そのまま後期に継続する土器群と考えられている。

御所野遺跡のある一戸町中心部(一戸盆地)には、谷底平野の両側に分布する河岸段丘上に遺跡が密集する。この段丘面はいずれも南北に長く、東西の小谷により開析され、地すべりなどの影響もあり起伏に富んだ地形となっている。

御所野遺跡の北側には田中遺跡群が南北に連なっている。いずれも標高180～200mの一戸段丘面の丘陵頂部から緩斜面にかけて立地、段丘先端部に位置するのが田中I遺跡、田中II遺跡である。前者は丘陵頂部に中期中葉の大型フラスコ土坑とやや小ぶりの晩期の土坑が密集している。中期の土坑からは円筒上層4式の土器が出土している。一段低いテラス状の南側の緩斜面では太木9・10式期の堅穴建物跡2棟と配石遺構1基を調査している。田中II遺跡も丘陵の南側斜面で堅穴建物跡3棟、土坑10基を調査している。小谷を隔てた北側で東側に突き出した平坦面は田中IV遺跡、さらに小谷を経て北側は田中V遺跡となっている。田中IV遺跡では4～5m前後の堅穴建物跡を2棟、田中V遺跡では6棟の堅穴建物跡とフラスコ形土坑を2基調査している。以上の遺構からいずれも太木10式土器(V-2群土器)が出土している。

田中I遺跡・田中II遺跡の東側には田中III遺跡が広く分布する。いずれも起伏に富んだ丘陵頂部や緩斜面にかけて遺構が分布しており、26,000㎡のほぼ全域で発掘調査を実施した。堅穴建物跡97棟、土坑218基を調査しており、遺構の時期は、中期中葉、中期末から後期初頭、後期前葉から中葉、晩期前葉から中葉という4時期に大別できる。中期末葉から後期初頭の堅穴建物跡が最も多く、径7～9mの大型堅穴建物跡がいくつかあるほか、径3～6mの堅穴も多く含まれており、大小数棟の組み合わせで堅穴群が構成されていた可能性が高い。いずれも東から西への丘陵頂部に密集しており、同じ場所で繰り返し構築されている。そのほか南側のやや離れた場所で、7mと4～5mの堅穴がそれぞれ1棟と3m規模の堅穴1棟の組み合わせ、4～6mの堅穴1棟を核とし3m規模の堅穴2棟の3棟の組み合わせを3ヶ所確認しており、この時期の堅穴群のまとまりを伺い知ることができる。

以上の遺構群はいずれも太木10式期以降の遺構群であり、御所野遺跡のV-2群土器に相当する土器が多く出土している。なお、田中I遺跡では、丘陵鞍部からさらに東側の緩斜面で中期中葉の堅穴



建物跡2棟と土坑36基を検出している。段丘先端部の土坑群とともに、御所野遺跡とはほぼ同時期の遺構群であり注目される。

御所野遺跡の対岸には大平遺跡が位置している。標高210～240mの岩館段丘面に位置しており、同じく起伏の激しい丘陵性の段丘で、遺跡中央の東西に深い谷が入るほか、全体に西から東のほか、南から北への緩斜面に広く遺構が分布している。調査した縄文時代の堅穴建物跡のうち、時期が明らかなのは、御所野遺跡と関係ある中期前半の10数棟、中期末から後期初頭の43棟である。以上の堅穴群はやや大きめの堅穴を中心に中型・小型の堅穴がまとまり、7ヶ所に分布している。中期の遺跡では、大型の堅穴の規模が8～10mと大きい場合は周辺の堅穴の数が多くなるが、大平遺跡では大型の堅穴の規模は大きい、周辺の堅穴の数はそれほど多くない。後期初頭に位置付けられる堅穴は全体的に規模が小さくなる。

以上のように一戸盆地内では東側の田中遺跡群と西側の大平遺跡で中期末から後期初頭の遺跡が広く分布することを確認しており、そのほか御所野遺跡の南に位置する子守A遺跡、北側の下地切遺跡、さらに田中遺跡の北側の上野遺跡でも同じく中期末から後期初頭の堅穴建物跡を調査している。そのほか一戸盆地には未調査の中期の遺跡がいくつか分布している。

小鳥谷地区の谷底平野周辺では最近次々と発掘調査が行われており、縄文時代中期末から後期初頭の遺跡が調査されている。仁昌寺Ⅲ・野里遺跡からは大木9式期の堅穴建物跡が検出されている。周辺の仁昌寺Ⅱ・野里上Ⅱ遺跡からは、大木10式期の堅穴建物跡が検出されている。出土した大木10式土器は、御所野遺跡のV-2群土器に相当するものであり、この時期に集落が拡大していったものと考えられる。

以上が御所野遺跡周辺の遺跡群である。縄文時代中期の遺跡は河川沿いに分布することは以前から知られているが、馬淵川上流域でも同じことが確認できる。中期になってから大平遺跡での居住が確認でき、その後、馬場平遺跡から御所野遺跡に長期に居住し大規模な集落を営んだ集団が、中期末、特に御所野遺跡のV-2期になると御所野遺跡周辺に拡散していった様相を確認できる。周辺には未調査の中期の遺跡も数多く分布しており、今後さらに資料が増えるものと予想される。同じ中期の遺跡は、馬淵川支流の小井田、龍頭（二石川・小友川）、女鹿、平糠などの各河川域や馬淵川の上流域に相当する姉帯地区でも確認されている。その場合でも河川に近い場所が選択されるようである。

注1 荒谷A遺跡は国道4号二戸バイパス工事に伴い調査し最大規模の大型堅穴など19棟調査している。その後国道が開通したことにより東側に大型店舗が計画され中期の堅穴100棟以上を調査している。

(高田 和徳)

第32表 御所野遺跡周辺の遺跡

遺跡名	所在地	主な遺構	時期（土器型式）
長瀬 A	二戸市	竪穴 2、土坑 1、埋設 1、陥し穴 4	後期初頭（袋沢式?）
荒谷 A		竪穴・竪穴状 19、石圍炉 1、配石 1、土坑 31、陥し穴 4	中期中葉から後葉（大木 8b・9 式、榎林式）
家ノ上		竪穴 4、地床炉 2、土坑 16	後期初頭から前葉（袋沢式～十腰内 I 式）
下村 B		竪穴 5、石圍炉 1、埋設 1、配石遺構群	中期後葉から末葉（大木 9・10 式）、後期初頭（十腰内 I 式）
上村		竪穴 30、竪穴状 4、石圍炉 1、焼土 1、土坑 47、埋設 8、遺物集中区 2	前期中葉、中期前葉（円筒上層 a～b 式）、中期末葉（大木 10 式）、後期前葉から中葉（上村式、十腰内 I～III 式）、晩期後葉（大洞 A～A' 式）
馬立 I	一戸町	竪穴 56、石圍炉 1、焼土 7、土坑 27、埋設 4	中期後葉から末葉（大木 9・10 式）、後期初頭（袋沢式、十腰内 I 式）
子守 A		竪穴 2、土坑 2	中期末葉（大木 10 式）
田中 I		竪穴 2、石圍炉 2、土坑 36、配石 1	中期後葉から末葉（大木 9・10 式）
田中 II		竪穴 3、土坑 10、焼土 1、集石? 1	中期末葉（大木 10 式）
田中 IV		竪穴 2、土坑 1、陥し穴 5	中期末葉（大木 10 式）
田中 V		竪穴 6、石圍炉 1、地床炉 1、土坑 2、陥し穴 1	中期末葉（大木 10 式）
田中		竪穴 97、土坑 218、陥し穴 20	中期中葉から後期中葉（円筒上層 c・d 式、大木 8a・9～10 式、十腰内 I～II 式）、晩期前葉から中葉（大洞 BC～C2 式）
下地切		竪穴 18、地床炉 1、土坑 5	中期末葉（大木 10 式）、後期初頭（十腰内 I 式）
大平		竪穴 131、竪穴状 21、焼土 1、土坑 184、陥し穴 19	中期（大木 7a 式、円筒上層 a～e 式、大木 10 式）、後期初頭（袋沢式、馬立式）、後期後葉（十腰内 I 式）、晩期前葉から中葉（大洞 B・C1 式）
仁昌寺 II		竪穴 33、地床炉 2、土坑 20、陥し穴 10	中期末葉（大木 10 式）、後期初頭（上村式、蒔窪式、袋沢式、宮戸 I b 式）
仁昌寺 III		竪穴 6、土坑 45	中期後葉から末葉（大木 9・10 式）、後期前葉（十腰内 I 式）
野里		竪穴 5、石圍炉 2、土坑 17、埋設 1、包含層 1	中期後葉（大木 9 式）、晩期前葉～中葉（大洞 B～C1 式）
野里上 II		竪穴 4、焼土 3、土坑 10、埋設 1、遺物集中ブロック 4	中期末葉（大木 10 式）、後期初頭（馬立式）、晩期（大洞 BC～A' 式）
上野 F		竪穴 2、土坑 2	中期末葉（大木 10 式）
親久保 II		竪穴 2、竪穴状 1、土坑 30、陥し穴 1	中期末葉（大木 10 式）、後期（十腰内 I～V 式）、晩期前葉（大洞 BC 式）



## 引用文献

- 一戸町教育委員会 1981 『一戸バイパス関係埋蔵文化財調査報告書Ⅰ』一戸町文化財調査報告書第1集
- 一戸町教育委員会 1981 『一戸バイパス関係埋蔵文化財調査報告書Ⅳ』一戸町文化財調査報告書第5集
- 一戸町教育委員会 1991 『一戸町の遺跡(Ⅰ) -平成2年度一戸遺跡群詳細分布調査報告書-』  
一戸町文化財調査報告書第25集
- 一戸町教育委員会 1992 『一戸町の遺跡(Ⅱ) -平成3年度一戸遺跡群詳細分布調査報告書-』  
一戸町文化財調査報告書第28集
- 一戸町教育委員会 1993 『一戸町の遺跡(Ⅲ) -平成4年度一戸遺跡群詳細分布調査報告書-』  
一戸町文化財調査報告書第33集
- 一戸町教育委員会 1994 『一戸町の遺跡(Ⅳ) -平成5年度一戸遺跡群詳細分布調査報告書-』  
一戸町文化財調査報告書第35集
- 一戸町教育委員会 1995 『一戸町の遺跡(Ⅴ) -平成6年度一戸遺跡群詳細分布調査報告書-』  
一戸町文化財調査報告書第37集
- 一戸町教育委員会 1996 『一戸町の遺跡(Ⅵ) -平成7年度一戸遺跡群詳細分布調査報告書-』  
一戸町文化財調査報告書第38集
- 一戸町教育委員会 2003 『田中遺跡』一戸町文化財調査報告書第46集
- 一戸町教育委員会 2006 『大平遺跡』一戸町文化財調査報告書第56集
- 一戸町教育委員会 2008 『下地切遺跡・蒔前遺跡・野里遺跡・一戸城跡』一戸町文化財調査報告書第62集
- 一戸町教育委員会 2010 『平成20・21年度町内遺跡発掘調査報告書-上野遺跡・下村遺跡・西田子8遺跡・中山家向Ⅱ遺跡-』一戸町文化財調査報告書第66集
- (財)岩手県埋蔵文化財センター 1982 『二戸バイパス関連遺跡発掘調査報告書 二戸市 家ノ上遺跡・長瀬A遺跡』  
岩手県埋蔵文化財センター文化財調査報告書第35集
- (財)岩手県埋蔵文化財センター 1983 『上村遺跡・下村A遺跡・下村B遺跡発掘調査報告書』  
岩手県埋蔵文化財センター文化財調査報告書第56集
- (財)岩手県埋蔵文化財センター 1983 『寛谷A遺跡発掘調査報告書』岩手県埋蔵文化財センター文化財調査報告書第57集
- (財)岩手県埋蔵文化財センター 1987 『親久保Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ遺跡発掘調査報告書』  
岩手県文化振興事業団文化財調査報告書第116集
- (財)岩手県埋蔵文化財センター 1988 『馬立Ⅱ遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団文化財調査報告書第122集
- (財)岩手県埋蔵文化財センター 2002 『仁昌寺Ⅱ遺跡・仁昌寺遺跡発掘調査報告書』  
岩手県文化振興事業団文化財調査報告書第400集
- (財)岩手県埋蔵文化財センター 2004 『五月館跡・仁昌寺Ⅲ遺跡発掘調査報告書』  
岩手県文化振興事業団文化財調査報告書第424集
- (財)岩手県埋蔵文化財センター 2007 『野里上Ⅱ遺跡・中屋敷上遺跡発掘調査報告書』  
岩手県文化振興事業団文化財調査報告書第491集

## 第4章 自然科学分析手法による成果

### 第1節 御所野遺跡の年代

御所野遺跡とその周辺の遺跡では、これまでに縄文中期後半の円筒上層c式土器から大木10式土器を伴う竪穴建物などの施設を中心とした集落が確認されている。施設とそれに伴う土器型式から、集落はⅠ期（円筒上層c式期）、Ⅱ期（円筒上層d・e式期）、Ⅲ期（大木8b式期）、Ⅳ期（大木9式期）、Ⅴ期（大木10式期）へと移り変わったとされる。このなかで御所野遺跡での集落はⅡ期からⅤ期であることが確かめられている。ここでは、縄文中期後半の土器型式について実施されてきた放射性炭素年代測定の結果を総括したうえで、御所野遺跡において得られた放射性炭素年代と暦年較正によって得られた較正暦年代から御所野遺跡の年代を明らかにする。

東北北部の縄文前期から中期の一連の土器型式に対して体系的に放射性炭素年代が実施されたのは青森市の三内丸山遺跡が初めてであり、円筒下層c式と円筒上層c式の2型式を除く円筒下層から円筒上層、さらに榎林式、最花式、大木10式土器について放射性炭素年代が示された（辻・中村2001）。残念にも御所野遺跡と周辺のⅠ期にあたる円筒上層c式についての年代は示されなかったが、円筒上層d・e式の終わりは4,300BP、榎林式から大木10式までが4,300～3,750BPとされた。較正暦年代はそれぞれ、2,950calBC、2,950～2,250calBCである。その後、小林・坂本（2004）や小林（2005）が三内丸山遺跡から出土した土器を中心に土器に付着した炭化物の放射性炭素年代測定を行い、榎林式は3,090～2,880calBC、最花式は2,820～2,650calBC、大木10式は2,820～2,660calBCという較正暦年代を報告している。辻・中村（2001）の年代より全般に古いが、土器に付着した炭化物の放射性炭素年代が少なく、また、海洋リザーバ効果によって古く測定されている可能性が指摘されている（小林 2005）。岡本田ほか（2008）は、とくに東北地方における縄文中期のトチノキの出現・増加と資源としての利用史を編年することを目的に、2008年までに報告された多数の放射性炭素年代測定値を集成した。その結果、円筒上層e式の終わりは4,300BP、大木9式の始まりは4,100BP、大木10式は4,000～3,800BPと評価できるとしている。大木8b式は榎林式に、また、大木9式は最花式に対応するとされるので、大木8b式は4,300～4,100BP、大木9式は4,100～4,000BPと考えることができる。

御所野遺跡の発掘調査によって土器型式との対応が確かめられている種子・果実類の炭化物の放射性炭素年代測定値を第33表に示した。すべてがクリ子葉、オニグルミ核、トチノキ種子のいずれかであり、海洋リザーバ効果を考えなくてもよい試料である。円筒上層e式についてはほぼ4,400BPでまわっており、これまでの測定値と調和的である。先行研究を配慮すれば、円筒上層d・e式は4,400～4,300BPの可能性が高い。大木8b式についても調和的である。続く大木9式については4,200～4,150BPに入る古い測定値があるが、これら多数の測定値を重視するならば、大木8b式は4,300～4,150BP、大木9式は4,150～4,000BP、大木10式は4,000～3,800BPの可能性が高いと言える。それぞれの土器型式の測定値幅からはずれる測定値が稀に見られるが、御所野遺跡の竪穴建物跡が複雑な切り合い関係にあることを考慮すると、土器型式とは異なる炭化物の混入による可能性も十分に考えられる。これらについては今後も層位や土器型式との関係について十分な検討がなされることが望まれる。

以上のような先行研究の総括と御所野遺跡での放射性炭素年代測定値の対応関係から、確実に居住があったことが確かめられている円筒上層d・e式から大木10式までの御所野遺跡の年代は、4,400～3,800BP、すなわち較正暦年代では3,000～2,200calBCと考えることができる。このことから約800年間も存続した集落であったことがわかる。また、Ⅱ期は3,000～2,800calBP、Ⅲ期は2,800～2,700calBC、Ⅳ期は2,700～2,500calBC、Ⅴ期は2,500～2,200calBCであったと考えられる。（辻 誠一郎）

## 引用文献

- 小林謙一 (2006) 「付着炭化物の AMS 炭素 14 年代測定による円筒土器の年代研究」『特別史跡三内丸山遺跡年報』第 8 号、P.81-91.
- 小林謙一・坂本 稔 (2004) 「青森県青森市三内丸山遺跡出土土器付着物の 14C 年代測定」『三内丸山遺跡』24、P.174-180.
- 小林謙一・坂本 稔・新免成靖・辻 誠一郎・松崎清之・村本周三 (2006) 「御所野遺跡出土土器類の 14C 年代測定」『御所野遺跡Ⅲ』、P.204-210.
- 岡木田 大・吉田邦夫・辻 誠一郎 (2008) 「東北地方北部におけるトチノキ利用の変遷」『環境文化史研究』第 1 号、P.7-26.
- 辻 圭子・岡木田 大 (2013) 「御所野遺跡Ⅳ区 FJ46-01 住の跡におけるトチノキ炭化種実の年代」『御所野遺跡Ⅳ』、P.124.
- 辻 誠一郎・中村俊夫 (2001) 「縄文時代の高精度編年：三内丸山遺跡の年代測定」『第四紀研究』第 40 巻、P.471-484.

第33表 土器型式と放射性炭素年代

土器型式	遺 跡	測定試料	14C年代 (BP)	測定機関番号	引用文献
大木10式	DF22型穴建物跡 DF20	オニグルミ核	3970±20	PLD-4445	小林ほか、2006
	DE24型穴建物跡 DE24	オニグルミ核	3990±40	IAAA-32074	小林ほか、2006
	FA52-05型穴建物跡 FA54-32	トチノキ種子	3855±35	Tka-14213	岡木田ほか、2008
	FC48-01型穴建物跡 FC48-11	トチノキ種子	3855±45	Tka-14205	岡木田ほか、2008
	FC48-01型穴建物跡 FC49-11	クリ子葉	3860±40	IAAA-32072	小林ほか、2006
	FC48型立柱建物跡 柱穴37 3層	トチノキ種子	3845±35	Tka-14211	岡木田ほか、2008
	FC48型立柱建物跡 柱穴37 5層	トチノキ種子	3970±30	PLD-18632	本報告
	FC48型立柱建物跡 柱穴45 1層	トチノキ種子	3835±30	Tka-14212	岡木田ほか、2008
	FC48型立柱建物跡 柱穴45 2層	トチノキ種子	3935±25	PLD-18633	本報告
	FC48型立柱建物跡 柱穴40	トチノキ種子	4135±30	PLD-18634	本報告
大木9式	FC50-1型立柱建物跡 柱穴25	トチノキ種子	3885±30	Tka-14253	岡木田ほか、2008
	FC50-2型立柱建物跡 柱穴24	トチノキ種子	3880±35	Tka-14208	岡木田ほか、2008
	FA50-01型穴建物跡	トチノキ種子	3870±35	Tka-14202	岡木田ほか、2008
	FA50-01型穴建物跡 FB52-7	クリ子葉	3900±40	IAAA-32071	小林ほか、2006
	FB52-04型穴建物跡	トチノキ種子	4110±30	Tka-14203	岡木田ほか、2008
	FC48-01型穴建物跡	トチノキ種子	3910±35	Tka-14206	岡木田ほか、2008
	FC48-01型穴建物跡 FD48-01	トチノキ種子	4030±35	Tka-14204	岡木田ほか、2008
	FC48-01型穴建物跡 FE48-01型穴建物跡	トチノキ種子	4095±35	Tka-14207	岡木田ほか、2008
	FD48-01型穴建物跡 FC46-36	クリ子葉	3945±25	PLD-4441	小林ほか、2006
	FE48-01型穴建物跡	クリ子葉	4115±25	PLD-4446	小林ほか、2006
大木8b式	GD66型穴建物跡	クリ子葉	4140±25	PLD-4443	小林ほか、2006
	GD66型穴建物跡 GC66	オニグルミ核	4175±40	MTC-04713	小林ほか、2006
	GE66型穴建物跡	クリ子葉	4220±40	IAAA-32067	小林ほか、2006
	GI144型穴建物跡	クリ子葉	4060±50	IAAA-32070	小林ほか、2006
	HA118型穴建物跡	オニグルミ核	4080±40	IAAA-32066	小林ほか、2006
	HB120型穴建物跡	オニグルミ核	4075±35	MTC-04714	小林ほか、2006
	FB52-03型穴建物跡 FC52-8	オニグルミ核	4110±40	IAAA-32075	小林ほか、2006
	FB54-01型穴建物跡 柱穴1	トチノキ種子	3780±50	Tka-14214	岡木田ほか、2008
	FJ46-01型穴建物跡 炉	トチノキ種子	4210±30	PLD-18631	辻・岡木田、2013
	GD62-01型穴建物跡 GC66	オニグルミ核	4155±40	PLD-4442	小林ほか、2006
円筒上層d・e式	GB44-01型穴建物跡 最下	オニグルミ核	4405±25	PLD-4444	小林ほか、2006
	GE62-07型穴建物跡	オニグルミ核	4390±40	IAAA-32068	小林ほか、2006
	GP64-02型穴建物跡	クリ子葉	4420±40	IAAA-32069	小林ほか、2006
	GI68型穴建物跡	オニグルミ核	4400±40	IAAA-32073	小林ほか、2006

## 第2節 土器の胎土分析

既述のように東側3調査区の東南端で粘土採掘坑を検出し調査した。史跡整備で計画していた屋外ガイダンス施設の建設前の調査で確認されたものであり、調査後、施設は位置をずらして遺構は全面保存している。この粘土採掘坑から出土した粘土は基本層序Ⅶ層の大不動火砕流のシラスが粘土化したものである。なお、建物の基礎工事では同じ粘土層を確認したので採取し博物館の体験事業で使用している。

以上のように遺跡から粘土採掘坑が確認されたことと発掘調査で未使用の粘土が多数出土していることもあり、遺跡から出土した土器と粘土の関係を明らかにするため、平成24年度に胎土分析を委託した(注1)。

粘土は発掘調査で68点確認されている(第118図、第35表)。内訳は堅穴建物跡から37点、土坑から5点、柱穴から7点、遺構が密集する中央区の各調査区から18点出土している。それに粘土採掘坑出土を含めた点数である。土器づくりとの関係も予想される堅穴建物跡からの出土例は、縄文の森丘陵頂部1点、東側調査区5点、中央調査区25点、西側調査区6点となるが、そのなかで床上から出土したものはそれほど多くはなかった。分析結果の概要は以下のとおりである。

出土した粘土と土器は、(1) 鉱物片および岩石片の種類構成(2) 粒径組成(3) 砕屑物・基質・孔隙における砕屑物の割合という3つの方法で分析した(第34表)。(1) は多様な岩石片を多く含むA群と花崗岩片の多いB群とに大別できた。A群はさらに今回の試料では最も多く標準的な資料をA1類、変質岩の量が多いものをA2群、流紋岩・デイサイトの多いものをA3類、A群のなかで花崗岩類を少量含むものをA4類とした。B群も斜長石とカリ長石や角閃石・黒雲母の量比からB1群、B2群とした。(2) では粒径の規模の割合によりI類からIV類に分類した。方法は、今回の試料では土器も粘土も中粒砂が多いため、中粒砂を基準として粗粒砂の割合と細粒砂の割合をそれぞれ軸として散布図を作成、その分布からI～IV類に分類した。I類が最も粗粒傾向が強く、徐々に細粒傾向となりIV類が最も細粒となる。(3) 砕屑物の割合は、土器試料が砕屑物20%前後と10%前後に区別できたが、1点だけ10%未満のものがあつた。なお粘土資料はいずれも10%未満である。

以上の分析を整理すると、今回分析した粘土は、遺跡東側の粘土採掘坑から採取した自然堆積物の粘土(A1類)と共通するもので、いずれも遺跡周辺から採取された粘土の可能性が高いことが指摘された。粘土の分析をもとに出土した土器試料と比較すると、ほぼ共通するものがNo.1からNo.6、No.14～No.16の9点、A2～A4は若干混入物が異なるが、基本的には馬淵川流域で採集した粘土の可能性が高いということであり、詳細は不明であるが混和材などの差が分析にでている可能性もある。

今回の胎土分析で大きく異なるのはB類である。いずれも花崗岩類の岩石片が圧倒的に多いことが指摘されている。特にB1類は遺跡対岸に位置する一戸岩体と呼ばれる茂谷山周縁部の堆積物が使用された可能性があるという。このことから、A1類の粘土に混和材として花崗岩の風化土を混入していたのではないかと考えパルノ・サーヴェイ株式会社を確認したところ、A1類とは全く別起源の粘土との回答を得た。次に茂谷山周辺の花崗岩の風化土起源の粘土と考えたが、茂谷山周辺の石英モンゾニ岩より石英粒子が細粒とのことで、現状ではそのまま茂谷山に結び付けることはできないようである(注2)。いずれB1類の胎土についても今後更に茂谷山周辺の花崗岩の調査も含めて検討する必要がある。

興味深いのはA1類の粘土採掘坑から別系統のB1類の土器が出土していることである。いずれもV群土器であり、B2類に分類されたV-2群の土器も含めて今後検討したい。B2類の土器については、周辺からの搬入の可能性もあるという。

(2) 粒径組成・(3) 砕屑物の割合でも成果があった。縄文の森から出土し、土器の中に入った状態で出土した粘土(第34表、粘土No. 7)は、粒径組成が他と全く異なる細粒粘土であるとの結果が得られた。他のA1類の土器づくりの粘土とは別ものということである。同じ竪穴建物跡の床面と異質な粘土が出土していることになる。(3)の砕屑物の分析では、その割合が粘土と土器で異なっており、粘土は10%未満、土器は20%前後と10%前後との2種類あるという結果が得られたことも非常に興味深い。粘土と土器の差は混和材の有無の差とも考えられるが、どうであろうか。粘土のうちNo. 2とNo. 4はその割合が高いことから調整済の粘土となっている。以上のなかでNo.15は唯一10未満ということで明らかに他の土器と異なっている。土器はⅢ-2期(大木8b式)の土器であり、周辺で作られた土器でない可能性もあるという。以上が出土した粘土と土器そのものの分析から得られた結論である。

現在御所野縄文博物館では周辺から採取した粘土を使用して土器づくり体験を行っている。その際採取した粘土だけでは粘性が強すぎることもあり、粘土層(V層)より上のⅣ～Ⅴ層の土に山砂を一定の割合に混ぜて素地としている。縄文時代の土器づくりにとって、採取した粘土とともに、この混和材は欠かせないものと考えられ、粘土と混和剤の両面からの胎土分析が必要だと考えている。幸い御所野遺跡では粘土採掘坑が見つかっており、その土も採取されていることから、今後は想定される混和材も含めて計画的に分析していきたい。

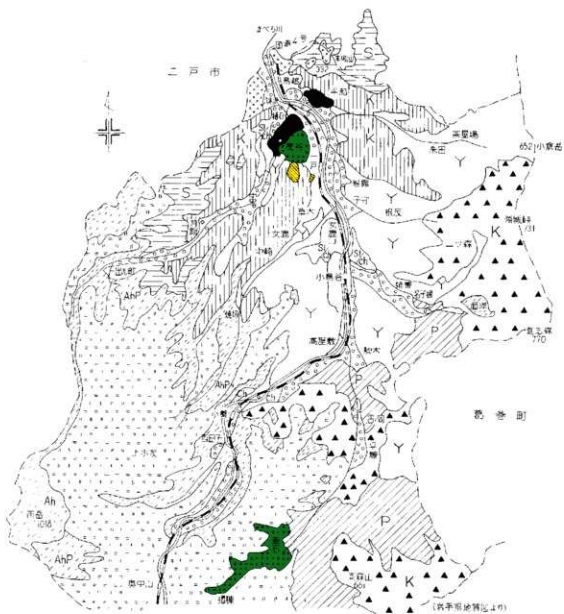
注(1)分析はパリオ・サーヴェイ株式会社に委託した。その分析結果は『御所野遺跡Ⅳ』に掲載している。

注(2)分析結果については、二戸市歴史民俗資料館の菅原孝平館長に紹介していただいた独立行政法人産業技術総合研究所地質総合センター地質情報研究部門の辻野匠先生から種々ご指導をいただいた。今回の報告では必ずしもその内容を活かせなかったが、今後の調査に活かしていきたい。お二人に衷心よりお礼申し上げます。(高田 和徳)

第34表 胎土分析による分類

試料No.	種類	遺構名	出土層位	調査区	時期	胎土分類			
						鉱物・岩石	粒径組成	砕屑物量	
土器No.1	縄文土器	FE48-01 竪穴建物跡	1層	中央Ⅱ b	大木9式	A1	I	1	
土器No.2	縄文土器	FE48-01 竪穴建物跡	2b層	中央Ⅱ b	大木8b-9式	A1	I	1	
土器No.3	縄文土器	HE126 竪穴建物跡	—	東側Ⅱ	大木9式	A1	I	1	
土器No.4	縄文土器	GD64 竪穴建物跡	2層	中央Ⅰ b	大木9式	A1	Ⅱ	2	
土器No.5	縄文土器	GD64 竪穴建物跡	2層	中央Ⅰ b	大木9式	A1	I	1	
土器No.6	縄文土器	GD64 竪穴建物跡	3層	中央Ⅰ b	大木9式併行	A1	Ⅲ	2	
土器No.7	縄文土器	IC126 粘土採掘坑	—	東側Ⅲ	大木10式	B1	I	1	
土器No.8	縄文土器	IC126 粘土採掘坑	—	東側Ⅲ	大木9式	A2	I	1	
土器No.9	縄文土器	IC126 粘土採掘坑	—	東側Ⅲ	大木10式	B1	I	1	
土器No.10	縄文土器	FE24 竪穴建物跡	—	中央	大木10式	A1	Ⅱ	1	
土器No.11	縄文土器	IV14西トレンチ2	Ⅱ層	中央Ⅳ	大木10式	B2	Ⅱ	2	
土器No.12	縄文土器	GH88 竪穴建物跡	3層	中央Ⅰ b	四層土層 d-e 式	A4	Ⅱ	2	
土器No.13	縄文土器	GH88 竪穴建物跡	2層	中央Ⅰ b	四層土層 d 式	A2	Ⅱ	2	
土器No.14	縄文土器	DF14 竪穴建物跡	3層	中央Ⅰ b	四層土層 c 式	A1	Ⅱ	2	
土器No.15	縄文土器	IV14西トレンチ1	1層	中央Ⅳ	大木8b 式	A1	Ⅱ	3	
土器No.16	縄文土器	IV14西トレンチ1	FE28 1層下	中央Ⅳ	大木8b-9式	A1	Ⅱ	2	
粘土No.1	粘土	HE126 竪穴建物跡	床土	東側Ⅱ	大木9式	A1	Ⅱ	3	
粘土No.2	粘土	IC130 竪穴建物跡	床土	東側Ⅲ	四層土層 d-e 式	A1	Ⅱ	2	
粘土No.3	粘土	IC126 粘土採掘坑	床土	東側Ⅲ	大木10式	A1	Ⅱ	3	
粘土No.4	粘土	GD64 竪穴建物跡	床土	中央Ⅰ	大木9式	A1	I	2	
粘土No.5	粘土	FE48-01 竪穴建物跡	3層	中央Ⅱ b	大木9式	A1	Ⅲ	3	
粘土No.6	粘土	FD29 竪穴建物跡	床土	西側	大木9-10式	A1	Ⅱ	3	
粘土No.7	粘土	IA229 竪穴建物跡	床土(縄文土器の中に入っていた粘土)	西側	縄文の森トレンチⅡ	大木9-10式	A1	Ⅳ	3
粘土No.8	粘土	IA229 竪穴建物跡	床面	縄文の森トレンチⅡ	大木9-10式	A1	Ⅱ	3	
粘土No.9	粘土	粘土採掘坑 南側セクション	自然層	東側Ⅲ	大木10式	A1	Ⅱ	3	





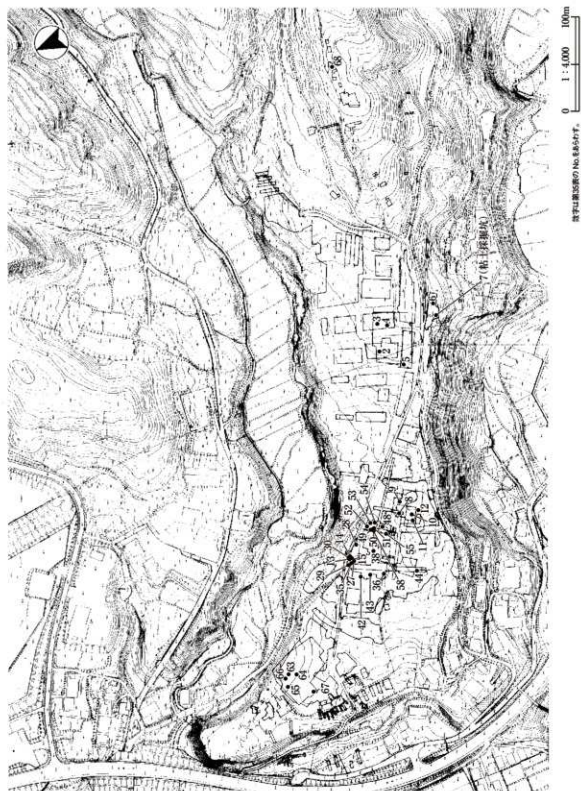
P	アモ 礫	花巻岩質帯	アンタレン色	▲▲▲	礫状の安山岩
Y	ユウ 灰層	輝石質安山岩		- - -	ニエートンズリイト(新代不詳)
K	クワ 沢瀉	輝石質安山岩		- - -	火山砕屑物 火山岩
S	サウ 松山層	輝石質安山岩		●●●●	珪瓦層植物
	黄 砂 帯				
Ah	相模安山岩				
Ahp	南関東石安山岩				

(二戸科学教育研究会 1978「二戸の地学」に加筆)

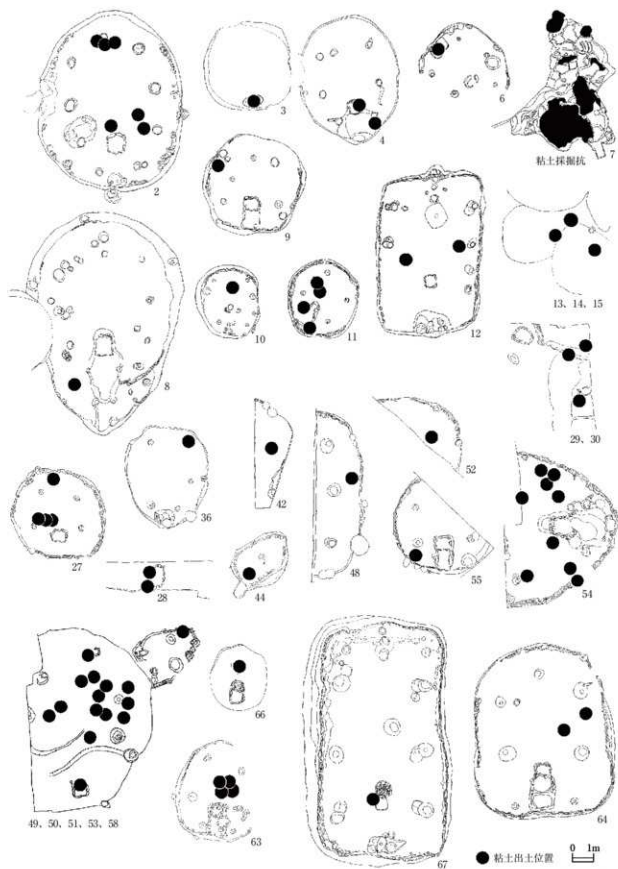
第117図 一戸町地質図

第35表 粘土出土地点一覧

No	調査区	調査年度	遺構またはグリッド名	No	調査区	調査年度	遺構またはグリッド名
1	東側 1	1991	HJ142 土坑	35	中央 II b	1999	FA50-01 竪穴建物跡
2	東側 2	1991	HB120 竪穴建物跡	36	中央 II b	1999	FE48-01 竪穴建物跡
3	東側 2	1997	HC130 竪穴建物跡	37	中央 II b	1999	FB50-01 土坑
4	東側 2	1998	HE126 竪穴建物跡	38	中央 II b	1999	FF56-01 土坑
5	東側 2	1999	HD114 竪穴建物跡	39	中央 II b	1999	柱穴 45
6	東側 3	1998	IC130 竪穴建物跡	40	中央 II b	1999	柱穴 127
7	東側 3	1998	IC126 粘土探掘坑	41	中央 II b	1999	柱穴 169
8	中央 I	1994	GD64 竪穴建物跡	42	中央 II b	2000	FB48-01 竪穴建物跡
9	中央 I	1994	GD66-02 竪穴建物跡	43	中央 II b	2000	FD48-01 竪穴建物跡
10	中央 I	1994	GE64 竪穴建物跡	44	中央 IV	1991	GB44-01 竪穴建物跡
11	中央 I	1998	GE60 竪穴建物跡	45	中央 IV	1992	FH46-29 グリッド
12	中央 I	1998	GF64-02 竪穴建物跡	46	中央 IV	1998	FI48-7 グリッド
13	中央 II a	2002	FB56-01 竪穴建物跡	47	中央 IV	1998	FI48-19 グリッド
14	中央 II a	2002	FB56-02 竪穴建物跡	48	中央 V	2003	FI62-01 竪穴建物跡
15	中央 II a	2002	FB56-03 竪穴建物跡	49	中央 V	2004	FG62-03 竪穴建物跡
16	中央 II a	2002	FD56-03 土坑	50	中央 V	2004	FG62-04 竪穴建物跡
17	中央 II a	2002	柱穴 12	51	中央 V	2004	FG62-05 竪穴建物跡
18	中央 II a	2002	FA54-27 グリッド	52	中央 V	2004	FG64-01 竪穴建物跡
19	中央 II a	2002	FA54-35 グリッド	53	中央 V	2004	FG64-05 竪穴建物跡
20	中央 II a	2002	FB56-27 グリッド	54	中央 V	2004	FH62-03 竪穴建物跡
21	中央 II a	2002	FC58-36 グリッド	55	中央 V	2004	FJ58-01 竪穴建物跡
22	中央 II a	2002	FD56-10 グリッド	56	中央 V	2004	FG64-02 土坑
23	中央 II a	2002	FD56-13 グリッド	57	中央 V	2004	柱穴 56
24	中央 II a	2002	FD56-19 グリッド	58	中央 V	2004	FH60-03 竪穴建物跡
25	中央 II a	2002	FE56-3 グリッド	59	中央 V	2004	FG64-36 グリッド
26	中央 II a	2002	FE56-13 グリッド	60	中央 V	2004	FH62-27 グリッド
27	中央 II a	2002	FB54-02 竪穴建物跡	61	中央 V	2004	FH62-28 グリッド
28	中央 II a	2002	FC58-01 竪穴建物跡	62	中央 V	2004	FH64-3 グリッド
29	中央 II a	2002	FA52-04 竪穴建物跡	63	西側	1996	DE24 竪穴建物跡
30	中央 II a	2002	FA54-01 竪穴建物跡	64	西側	1996	DF22 竪穴建物跡
31	中央 II a	2005	柱穴 113	65	西側	1997	DD16 竪穴建物跡
32	中央 II a	2005	柱穴 123	66	西側	1997	DD20 竪穴建物跡
33	中央 II a	2005	FC60-32 グリッド	67	西側	1997	DF14 竪穴建物跡
34	中央 II a	2005	FD58-24 グリッド	68	縄文の森	2004	IA220 竪穴建物跡



第118図 粘土が出土した竪穴建物跡の分布



第119圖 粘土出土狀況

### 第3節 御所野遺跡出土土器付着物の成分分析

#### 1. はじめに

二戸郡一戸町岩館に所在する御所野遺跡より出土した縄文時代の土器付着物を試料として、蛍光X線分析と、赤外分光分析（FT-IR分析）、塗膜分析を行い、材質について検討した。なお、赤外分光分析は藤根、塗膜分析は竹原と米田、蛍光X線分析は竹原、本文は竹原、藤根、佐々木がそれぞれ担当した。同一試料の胴部内面塗膜を用いて放射性炭素年代測定と、レプリカ法による底部敷物圧痕の観察も行われている（各分析の項参照）。

#### 2. 試料と方法

分析対象は、GA50グリッドのⅡ層より出土した土器（No. 17）の付着物である。土器の型式学的な推定時期は縄文時代中期であるが、胴部～底部内面の漆塗膜を用いた放射性炭素年代測定の結果、縄文時代後期前葉の暦年代範囲が得られた（第4章第4節参照）。土器は、胴部～底部内面全面に漆と予想される塗膜が塗られ、胴部外面の一部に赤色顔料が観察された。また、底部外面には黒色付着物が観察された（第124図-1～4、7）。そこで、それぞれを微量採取し、底部外面の黒色付着物（分析No.1）について赤外分光分析（FT-IR分析）、胴部内面の塗膜（分析No.2）について赤外分光分析と塗膜分析、胴部外面に付着する赤色顔料（分析No.3）について蛍光X線分析を実施した（第36表）。

第36表 分析を行った試料とその詳細

分析No.	調査年	グリッド	層位	登録番号	時期	破片番号	採取部位	分析項目			備考
								蛍光X線分析	FT-IR分析	塗膜分析	
1						17-3	底部外面		○		黒色付着物
2	GSS90	GA50	Ⅱ層	17	縄文時代後期前葉	17-3	胴部内面		○	○	内面塗膜
3						17-4	胴部外面	○			赤色顔料

#### [赤外分光分析（分析No.1、No.2）]

分析試料は、底部外面の黒色付着物と、胴部内面に塗布された塗膜である。試料は、表面部分から一部を削り取った。なお、分析No.1は、最初に破片番号17-1の底部外面（第124図-1）から一部を採取して測定したものの、敷物圧痕のレプリカを採取する際に塗布されたパラロイドが残存していたために、パラロイドの吸収が大きく検出された。そのため、パラロイドが塗布されておらず接合関係にある破片番号17-3の底部外面の黒色付着物（第124図-2）から改めて試料を採取し、測定した。

採取した試料は、押しつぶして厚さ1mm程度に裁断した臭化カリウム（KBr）結晶板に挟み、油圧プレス器を用いて約7トンで加圧整形した。測定は、フーリエ変換型顕微赤外分光光度計（日本分光製FT/IR-410、IRT-30-16）を使用して透過法により赤外吸収スペクトルを測定した。

#### [塗膜分析（分析No.2）]

分析試料は、胴部内面に塗布された塗膜である。試料は、ミニルーターを用いて塗膜を胎土ごと切り取り、薄片を作製して、光学顕微鏡と走査型電子顕微鏡による観察およびX線分析を行った。

薄片は、高透明エポキシ樹脂を使用して包埋し、薄片作製機および精密研磨フィルム（#1000、#4000）を用いて厚さ約50μm前後に仕上げ、まず走査型電子顕微鏡（日本電子株式会社製JSM-5900LV）による反射電子像観察を行った。さらに、塗膜について電子顕微鏡に付属するエネルギー分散型X線分析装置（同JED-2200）による定性分析を行った。その後、再度精密研磨フィルムを用いて

厚さ約20 $\mu\text{m}$ 前後に調整した後、偏光顕微鏡を用いて塗膜構造の観察を行った。

#### [蛍光X線分析 (分析No.3)]

分析試料は、胴部外面の一部に付着する赤色顔料である。実体顕微鏡下でセロハンテープに微量採取して分析試料とした。

分析装置は、エネルギー分散型蛍光X線分析装置である(株)堀場製作所製分析顕微鏡XGT-5000Type II を使用し、標準試料を用いないファンダメンタル・パラメータ法 (FP法) による半定量分析を装置付属ソフトで行った。さらに、蛍光X線分析用に採取した試料を観察試料として、生物顕微鏡で赤色顔料の粒子形状を確認した。

### 3. 結果および考察

#### [分析No.1 (黒色付着物)]

第120図に赤外吸収スペクトルを示す。スペクトルは、実線が黒色付着物、点線が生漆で、数字は生漆の赤外吸収位置 (第37表) を示す。

測定した結果、試料のスペクトルは、生漆の吸収スペクトルとは一致しなかった。底部外面の黒色付着物は、光沢があり粘性のあるタール質物と考えられる。

植物が燃えた場合に生成されるタールは、植物質により異なることが実験により分かっているが、現段階では該当するタールは見当たらない。今後、さまざまな植物質タールを作り、比較・検討する必要がある。

#### [分析No.2 (内面塗膜)]

第121図に赤外吸収スペクトル、第122図に塗膜のX線分析スペクトルを、第124図-5、6に断面の光学顕微鏡写真と走査型電子顕微鏡反射電子像をそれぞれ示す。

塗膜層は、胎部a層の上に塗膜層c層が1層のみ観察された。赤外分光分析では、漆のウルシオール (No.7) が確認された。なお、975 $\text{cm}^{-1}$ 付近に劣化に伴うゴム質の吸収が大きい箇所がみられる。測定した塗膜c層は、劣化が著しいが漆と考えられる。また、c層は光学顕微鏡下では不透明であり、X線分析では鉄 (Fe) が強く検出された。走査型電子顕微鏡反射電子像では、直径約1 $\mu\text{m}$ のバイブ状粒子が観察できる (第124図-6 c層中の白色物)。以上より、いわゆるバイブ状ベンガラが混和された赤色漆が塗布されていると考えられる。

#### [分析No.3 (胴部外面赤色顔料)]

分析により得られたスペクトルおよびFP法による半定量分析結果を第123図に示す。鉄 (Fe)、ケイ素 (Si)、アルミニウム (Al) が主に検出された。また、生物顕微鏡観察により得られた画像を第124図-8に示す。直径約1 $\mu\text{m}$ のバイブ状粒子が認められた。

鉄が多く検出されており、赤色顔料はベンガラと考えられる。また、バイブ状粒子が検出されており、いわゆるバイブ状ベンガラであった。

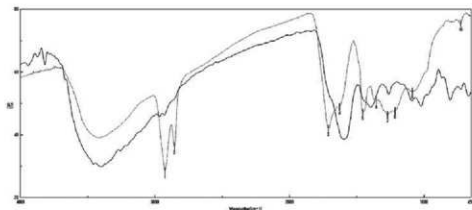
第37表 生漆の赤外吸収位置とその強度

吸収No.	生漆		
	位置	強度	ウルシ成分
1	2925.48	28.5337	
2	2854.13	36.2174	
3	1710.55	42.0346	
4	1633.41	48.8327	
5	1454.06	47.1946	
6	1351.86	50.8030	ウルシオール
7	1270.86	46.3336	ウルシオール
8	1218.79	47.5362	ウルシオール
9	1087.66	53.8428	
10	727.03	75.3890	

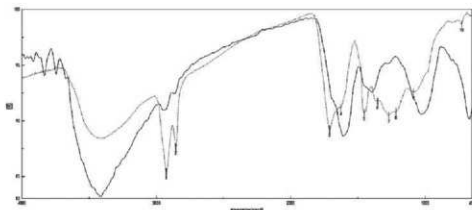
#### 4. おわりに

御所野遺跡より出土した土器の付着物について検討した結果、底部外面に付着する黒色物質はタール質物、胴部～底部内面塗膜はバイブ状ベンガラが混和された赤色の漆塗膜、胴部外面の一部に付着する赤色顔料はバイブ状ベンガラであった。

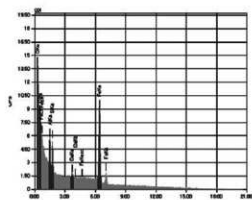
(竹原弘展・藤根 久・米田恭子・佐々木由香 (パレオ・ラボ))



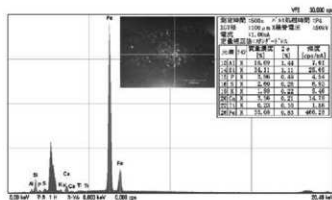
第120図 底部外面黒色付着物 (分析No.1) の赤外吸収スペクトル



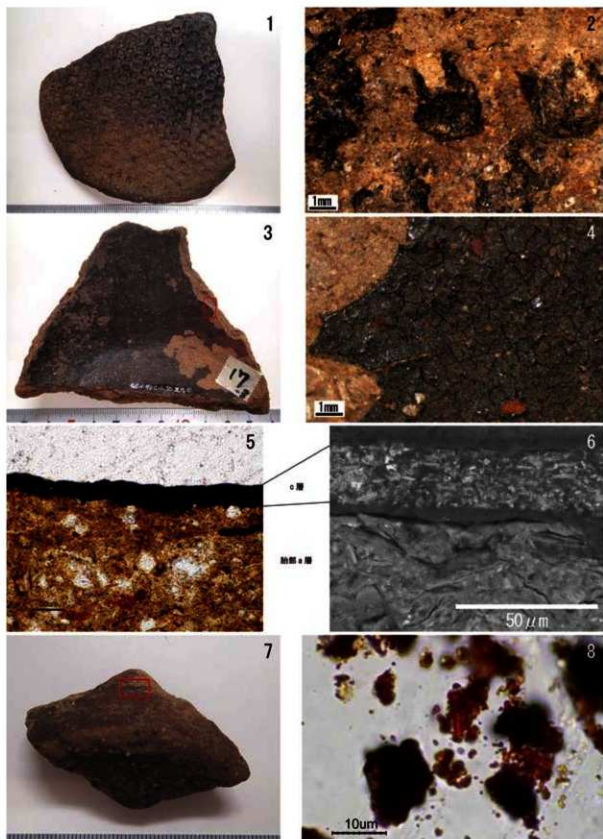
第121図 胴部内面塗膜 (分析No.2) の赤外吸収スペクトル



第122図 胴部内面塗膜 (分析No.2) のX線分析スペクトル



第123図 胴部外面赤色顔料 (分析No.3) の蛍光X線分析スペクトルおよびFP法による半定量分析結果



第124図 土器付着物の成分分析

1. 底部外面の黒色付着物 (17-1)、2. 黒色付着物 (分析No1) の実体顕微鏡写真、3. 胴部内面塗膜 (分析No2)、4. 内面塗膜 (分析No2) の実体顕微鏡写真、5. 塗膜断面 (分析No2) の偏光顕微鏡写真、6. 塗膜断面 (分析No2) の走査型電子顕微鏡反射電子像、7. 胴部外面付着赤色顔料 (分析No3)、8. 赤色顔料 (分析No3) の偏光顕微鏡写真



## 第4節 放射性炭素年代測定

### 1. はじめに

御野遺跡より出土した土器の漆塗膜試料について、加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定を行った。なお、同一試料を用いて、土器付着物の成分分析及レプリカ法による底部敷物圧痕の観察も行われている（それぞれの分析の項参照）。

### 2. 試料と方法

測定試料の情報、調製データは第38表のとおりである。試料は、GA50グリッドのⅡ層より出土した土器（No.17-3）で、内外面に赤色漆が塗られている（第125図）。底部全体と胴部がわずかに残る破片で、測定試料として胴部立ち上がり付近の内面から漆塗膜を採取した。土器の推定時期は、縄文時代中期である。

試料は調製後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクトAMS：NEC製 15SDH）を用いて測定した。得られた<sup>14</sup>C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、<sup>14</sup>C年代、暦年代を算出した。

第38表 測定試料および処理

測定番号	遺物データ	試料データ	前処理
PLD-25233	登録 No.17-3 グリッド：GA50 層位：Ⅱ	種類：土器付着物（漆塗膜） 部位：胴部立ち上がり付近内面 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：12N, 水酸化ナトリウム：0.1N, 塩酸：1.2N） サルフィックス処理

### 3. 結果

第39表に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（ $\delta^{13}\text{C}$ ）、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した<sup>14</sup>C年代を、第126図に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下1桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

<sup>14</sup>C年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。<sup>14</sup>C年代（yrBP）の算出には、<sup>14</sup>Cの半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した<sup>14</sup>C年代誤差（ $\pm 1\sigma$ ）は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の<sup>14</sup>C年代がその<sup>14</sup>C年代誤差内に入る確率が68.2%であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の<sup>14</sup>C濃度が一定で半減期が5568年として算出された<sup>14</sup>C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の<sup>14</sup>C濃度の変動、および半減期の違い（<sup>14</sup>Cの半減期5730 $\pm$ 40年）を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

<sup>14</sup>C年代の暦年較正にはOxCal 4.1（較正曲線データ：IntCal 13）を使用した。なお、1 $\sigma$ 暦年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された<sup>14</sup>C年代誤差に相当する68.2%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に2 $\sigma$ 暦年代範囲は95.4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は<sup>14</sup>C年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

第39表 放射性炭素年代測定および暦年較正の結果

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$ )	$^{14}\text{C}$ 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$ )	$^{14}\text{C}$ 年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1 $\sigma$ 暦年代範囲	2 $\sigma$ 暦年代範囲
PLD-25233 登録No.17-3	-29.64 $\pm$ 0.23	3772 $\pm$ 21	3770 $\pm$ 20	2272BC (10.4%) 2258BC 2307BC (15.7%) 2191BC 2181BC (42.1%) 2142BC	2286BC (19.6%) 2240BC 2235BC (75.8%) 2136BC

#### 4. 考察

試料について、同位体分別効果の補正および暦年較正を行った。以下、暦年較正結果のうち2 $\sigma$  (95.4%の確率)に注目して検討する。縄文時代の土器編年と暦年代の対応関係については小林 (2008) や、榎本 (2008) に集成された測定例を参照した。

土器 (No.17-3) の漆塗膜の年代は、2286-2240 cal BC (19.6%) および2235-2136 cal BC (75.8%) であった。小林 (2008) や榎本 (2008) によると、これは縄文時代後期前葉に相当する。得られた年代は漆液が採取された年代を示す。今回の漆塗膜の測定結果は、土器の推定時期である縄文時代中期よりも新しい年代を示した。

(バレオ・ラボAMS年代測定グループ)

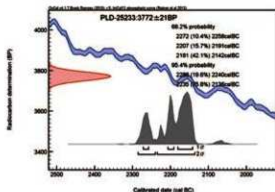
(伊藤 茂・安昭炫・佐藤正教・廣田正史・山形秀樹・小林絏一  
Zaur Lomtadze・Ineza Jorjoliani・黒沼保子・佐々木由香)

#### 引用・参考文献

- Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. Radiocarbon, 51 (1), 337-360.  
 榎本剛治 (2008) 十勝内I式土器, 小林達雄編「総覧縄文土器」: 530-535, アム・プロモーション.  
 小林謙一 (2008) 縄文時代の暦年代, 小杉 康・谷口康浩・西田泰民・水ノ江和同・矢野健一編「縄文時代の考古学2 歴史のものさし-縄文時代研究の編年体系-」: 257-269, 同成社.  
 中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の $^{14}\text{C}$ 年代編集委員会編「日本先史時代の $^{14}\text{C}$ 年代」: 3-20, 日本第四紀学会.  
 Reimer, P.J., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hafflidason, H., Hajdas, I., Hatte, C., Heaton, T.J., Hoffmann, D.L., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., Manning, S.W., Niu, M., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Staff, R.A., Turney, C.S.M., and van der Plicht, J.(2013) IntCal13 and Marine13 Radiocarbon Age Calibration Curves 0-50,000 Years cal BP. Radiocarbon, 55(4), 1869-1887.



第125図 試料採取土器内面



第126図 暦年較正結果

## 第5節 御所野遺跡および馬場平遺跡より出土した黒色物質の赤外分光分析

### 1. はじめに

縄文の遺跡からは、黒色の物質が附着した土器や土器が出土することがある。これらの黒色物質は分析調査を経ることなく、その質感から炭化物や漆と報告されている例が多い。今回、御所野遺跡と馬場平遺跡から出土した黒色物質はすでに報告書に記載されているか、あるいは報告書が刊行されているものの記載から漏れているものを、赤外分光分析により材質の同定を試みたものである。以下に、結果を報告する。

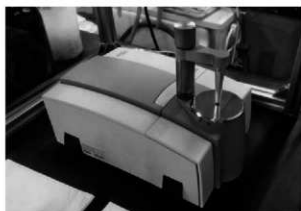
### 2. 分析試料と分析方法

分析に供した試料を第40表に示す。第40表には遺跡名と併せ、報告書の号数と掲載ページを付記してある。遺物の詳細については、掲載報告書を参照されたい。

一般に土器などに附着している黒色物質としては、炭化物、漆およびアスファルトを想定することができる。このうち、漆はクロロホルムには不溶であり、炭化物は一部が溶解することがあっても不溶残渣が残ることが多い。これに対し、アスファルトはクロロホルムに易溶であるため、クロロホルムへの溶解性により漆との簡易的な峻別が可能である。

クロロホルムへの溶解性による峻別はあくまでも、当該の黒色物質が漆かアスファルトのどちらかである場合にのみ可能となるものであり、正確な同定結果を示すものではない。そこで、クロロホルムに溶解せずに赤外分光分析法により分析した後、同試料をクロロホルムに投入して溶解性を確認し、さらに得られた溶液からクロロホルムを気化させて得られた黒色物質の赤外分光分析をおこなった。

赤外分光分析にはBruker製フーリエ変換赤外分光分析装置ALPHA（第127図）を用いた。分析はATR法により、分解能 $4\text{cm}^{-1}$



第127図 フーリエ変換赤外分光分析装置

第40表 分析試料

番号	遺跡名	報告書	ページ	報告書掲載No.	調査区	出土地点	出土層位	備考
1	御所野	53集	194	表No 1	II a区	FB54-02 堅穴建物跡	-	
2	御所野	53集	194	表No 2	II a区	FD58 グリッド	-	本報告第79図
3	御所野	53集	194	表No 3	V区	FG64-03 堅穴建物跡	-	
4	御所野	-	-	-	II b区	FD48-01 堅穴建物跡	2層	炭化物として取り上げ
5	御所野	-	-	-	II b区	FD48-01 堅穴建物跡	2層	炭化物として取り上げ
6	御所野	32集	369	表1 試料No 4 もしくは5		GG134 グリッド	III層	炭化物として取り上げ
7	馬場平	4集	294	第195図6		C4 堅穴建物跡	D層 (13-18層)	「バン状炭化物」として報告。本報告第79図
8	御所野	32集	66	第39図2		GH68 堅穴建物跡	2層	石炭。基部にアスファルト付着と報告。
9	御所野	48集	82	第57図63	I区	GD64 堅穴建物跡	5層	石炭。基部にアスファルト付着と報告。
10	御所野	53集	119	第52図46	V区	FB202 堅穴建物跡	No.2	石炭。基部にアスファルト付着と報告。

で $400\text{cm}^{-1}$ から $4000\text{cm}^{-1}$ の範囲を64回スキャンして吸収スペクトルを得た。

### 3. 分析結果

すべての試料がクロロホルムに容易に溶解したことから、これらの黒色物質は漆ではないといえることができる。

第41表はアスファルトの赤外吸収スペクトルの帰属である。第128図から第137図に赤外分光分析により得られた吸収スペクトルを示す。各々の図の下の方のスペクトルがクロロホルムに溶解する前の黒色物質の赤外スペクトル、上の方が黒色物質をクロロホルムに溶解して得られた黒色溶液からクロロホルムを蒸発させて得られた黒色物質の赤外スペクトルである。試料番号9と10の石鏝からは、十分な量の試料を得ることができなかったため、クロロホルムに溶解した後に、クロロホルムを蒸発させて黒色物質を十分に得ることができなかった。

試料番号1から試料番号9については、得られた赤外スペクトルからこれらの黒色物質がアスファルトであるといえることができる。試料番号10については十分な試料を採取することができなかったため、アスファルトと断定することはできないが、わずかに得られたスペクトルから、アスファルトである可能性が高いといえることができる。

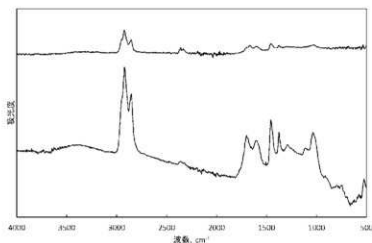
### 4. まとめ

今回分析を行なった御所野遺跡および馬場平遺跡から出土した黒色物質は、試料番号10を除いて、クロロホルムへの溶解性および赤外吸収スペクトルより、アスファルトであるといえることができる。

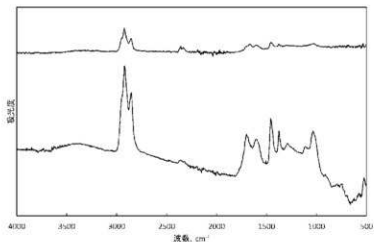
(高妻 洋成)

第41表 アスファルトの赤外吸収スペクトル

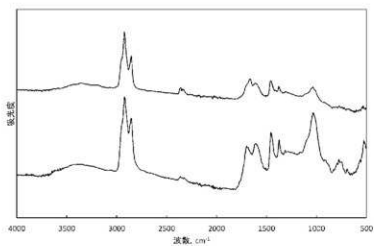
波数, $\text{cm}^{-1}$	帰属
3373	O-H, N-H
2922	C-H
2856	
2955	
1708	C=O
1607	C-O, N-H
1460	C-H
1165	C-O
1095	Si-O, Al-O
1032	Si-O-R
754	Si-O



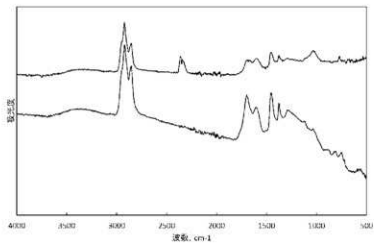
第128図 試料番号1の赤外吸収スペクトル



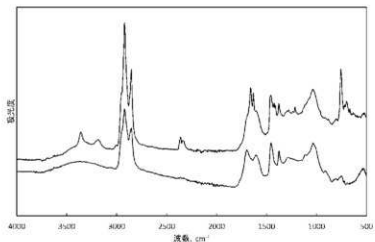
第129図 試料番号2の赤外吸収スペクトル



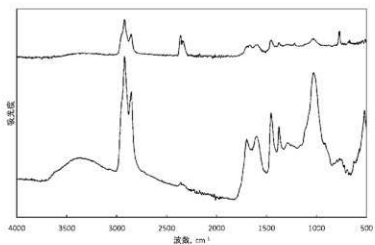
第130図 試料番号3の赤外吸収スペクトル



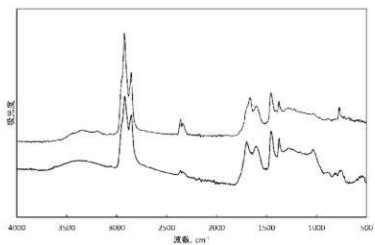
第131図 試料番号4の赤外吸収スペクトル



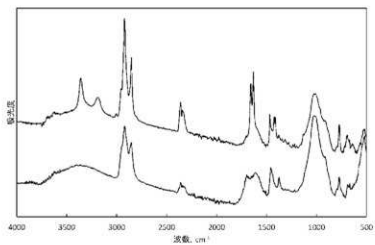
第132図 試料番号5の赤外吸収スペクトル



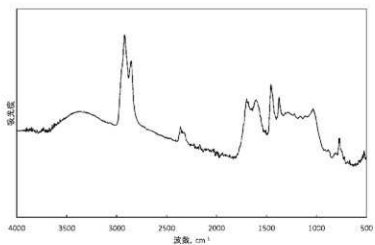
第133図 試料番号6の赤外吸収スペクトル



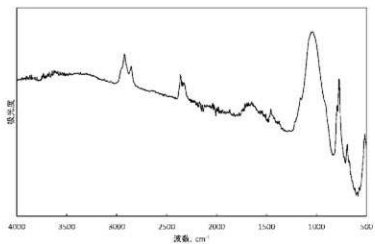
第134図 試料番号7の赤外吸収スペクトル



第135図 試料番号8の赤外吸収スペクトル



第136図 試料番号9の赤外吸収スペクトル



第137図 試料番号10の赤外吸収スペクトル



試料番号 1



試料番号 2



試料番号 3



試料番号 4



試料番号 5



試料番号 6

第138図 分析試料



## 第6節 御所野遺跡試料分析結果について

### 1. 分析試料について

御所野遺跡の調査で出土した土器付着物の理化学分析を実施した。今回の分析では、GSN90の底部より得られた試料1点(第18表No20)と、側面より得られた試料1点(第18表No1)、GSN96(第18表No10)より得られた試料1点、GSN97(第18表No11)より得られた試料1点を分析対象とした。時期は中期後半である。

### 2. 熱分解-ガスクロマトグラフ/質量分析装置について

漆器の剥落片の分析には、熱分解-ガスクロマトグラフ/質量分析装置を用いた。本装置は熱分解装置、ガスクロマトグラフ、質量分析装置およびデータ処理装置から構成されている。この分析は熱分解装置で、微量な漆膜片を瞬間的に高温にして熱分解し、得られた生成物をガスクロマトグラフのキャピラリーカラムに導入し、各成分に分離する。その後質量分析計で各成分のバイログラム、マススクロマトグラムおよび質量スペクトルを測定した。

本装置名と分析条件を次に示した。

#### <分析装置>

熱分解装置はフロンティア・ラボ社製ダブルショットパイロライザー HP-3030D、ガスクロマトグラフはHP社製ガスクロマトグラムHP6890、質量分析装置はHPG 5972A、データ処理装置はHPG 1701AJ、キャピラリー分離カラムはUltraAlloy PY1 (100% methylsilicone)、30m、直径0.25mmφ、膜厚は0.25μmを用いた。

#### <分析条件>

熱分解温度は500℃、イオン化電圧は70eV、ガスクロマトグラムカラム温度：40-280℃(rate: 20℃/min)、インジェクション温度：250℃、インターフェイス温度：280℃、質量分析計室内温度：180℃、カラム流量：ヘリウム、1.0ml/minで測定した。

### 3. 分析結果と考察

分析結果のイオンクロマトグラフィーを次ページに示す。 $m/z$  108は漆のバイオマーカーである3-アルケニルカテコール類を、 $m/z$  202はススなどに特徴的なフルオランセンを、 $m/z$  60は油脂類に特徴的なカルボン酸類を抽出した結果である。

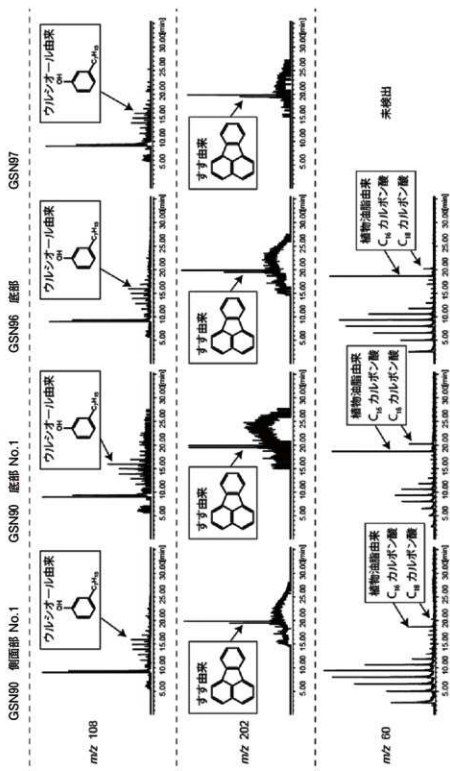
いずれの試料からもウルシオール類が検出され、アスファルトや膠、松やにのような成分は検出されなかった。また、全ての試料から共通に検出された成分としては、ススなどに由来するフルオランセンが存在した。このことは、これらの土器が煮炊きに使われていたか漆に煤が混合された可能性を示唆するが、あわせて土器の形態や型式学的な特徴からの検証も必要である。また、底面の試料からは油脂由来成分が非常に多く検出された。

これらの結果からGSN90(第18表No20)に関しては、①利用の過程にてススや油脂が付着する状況にあった、②埋設中の汚染として付着した、と考えることができる。一方、GSN97(第18表No11)からはススが検出される一方、油脂が検出されなかった。これは、サンプルを採取した部位がススのみが付着しやすい場所(GSN90(第18表No1)側面よりもより上部の部位)であったためと考えられる。

高燥な火山灰台地の遺跡に埋蔵される資料は、土中に埋まるまでの間、または土中においてバクテリアなどによって塗膜が分解し、顔料の粉末だけが表面に遺存する場合が多いが、本例は塗膜が残存しており、興味深い。

今回の分析は発掘調査後に一定の時間が経過した資料であり、土中での遺存状況などを詳細に検討することはできなかった。そのため埋存環境に関する評価はできなかったが、今後の課題としたい。

(本多貴之・阿部芳郎)



第139図 御所野遺跡試料 Py-GC/MS分析結果

## 第5章 総括

### 第1節 馬淵川流域の縄文遺跡と御所野遺跡 (第140図、第42表)

馬淵川は北上山地の安家森周辺を水源とする延長142mの大川で、一戸町小鳥谷で平糠川、二戸市石切所で安比川と合流し、県境を越えてから熊原川や猿辺川、浅水川などの支流を合わせて八戸湾に注いでいる。源流から中・上流部ではほとんどこで古生層の峡谷となり、その間は河岸段丘が発達しているが、下流の八戸市周辺は沖積平野が発達し谷底平野が広く形成されている。

以上の地形的な要因が八戸市周辺の縄文時代の遺跡は馬淵川流域に少なく、より南東の新井田川流域に集中している(村木2010・田村2007)。馬淵川流域の遺跡は三戸町の泉山遺跡のほか南部町周辺でいくつか調査例はあるが、中期後半の遺跡の実体はまだ明らかではない。調査例が多くなりその内容が明らかなのは、岩手県に入ってからであり、二戸市街地に近い荒谷A遺跡周辺、一戸町の御所野遺跡とその周辺、小鳥谷周辺などの資料が増えている。一方馬淵川の東側を北流する新井田川流域では、八戸湾に近い丘陵地に位置する松ヶ崎遺跡(西長根遺跡を含む)を中心とした遺跡群、上流の南郷区の遺跡群、さらに軽米町の大日向Ⅱ遺跡周辺、九戸村の田代遺跡を中心とした地域、というように中期後半から後期初頭の遺跡がそれぞれ密集している。ここでは御所野遺跡と関連する馬淵川流域とともに新井田川流域も対象として、この地域の遺跡群の分布と時期的変遷について検討したい。

この地域の縄文時代中期後半～後期初頭の集落遺跡は、次のような特徴から、規模の大きい拠点集落とその他の集落に分類できる。拠点集落の特徴としては、1) 竪穴建物跡を中心とした遺構数が多いこと、2) 大型竪穴建物や盛土遺構を持ち集落のインフラ整備が行われていること、などを挙げることができる。

#### 八戸周辺の遺跡群

八戸周辺で拠点集落と考えられるのは、新井田川沿いに位置する松ヶ崎遺跡と石手洗遺跡である。石手洗遺跡は円筒上層e式期から大木8b式期までの中期中葉を中心とし、盛土遺構が確認されている。その対岸に位置するのが松ヶ崎遺跡である。同じく円筒上層e式期から大木9式期まで継続する遺跡で、大規模な盛土遺構のほか大型竪穴建物跡がいくつも確認されている。竪穴建物跡のほかには掘立柱建物跡、土坑墓、土坑、屋外炉などが調査されており、八戸地方の縄文時代中期後半を代表する大規模な拠点集落跡である。なお松ヶ崎遺跡の西側は当初西長根遺跡として登録されていたが、調査の進展とともに連続することが明らかになってきたため現在は松ヶ崎遺跡として統一されている。なお石手洗遺跡とは一部重複する時期もあるが、その後遺跡群の拠点集落は松ヶ崎遺跡に移ったものと考えられる。このような時期的変遷は、一戸町の馬場平遺跡から御所野遺跡への変遷に類似している。

石手洗遺跡と松ヶ崎遺跡のような拠点集落が中期末になって周辺に分散するという様相は新井田川流域でも確認できる。赤御堂、一王寺(1)、堀田、風張(1)、牛ヶ沢(4)などの遺跡とともに、さらには馬淵川の支流である土橋川流域に立地する丹後谷地、鴨平(2)、韭菜などのように中期末から後期前葉まで続く遺跡が多くなる。新井田川流域の上流では同じ八戸市の野場(5)、松石橋、田代なども同時期の遺跡である。野場(5)遺跡は大木9式、松石橋遺跡と田代遺跡は中期末から後期初頭の遺跡である。

#### 軽米町・九戸村周辺の遺跡群

新井田川は県境を越えると瀬月内川と雪谷川に分岐する。軽米町では雪谷川沿いの大日向Ⅱをはじめ、呷屋敷、馬場野Ⅰ・Ⅱ、君成田Ⅳの中期末の大木10式期の遺跡が集中している。呷屋敷遺跡群のうち呷屋敷Ⅰa遺跡では大木9式の竪穴建物跡が調査されているが、これまでのところ軽米町では中期

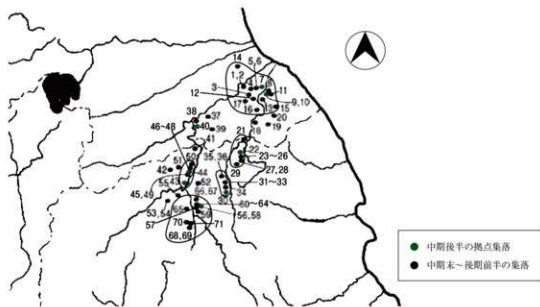
後葉の拠点集落は確認されていない。九戸村の瀬月内川西岸に位置する田代遺跡は、前期後半から中期後葉まで継続する遺跡である。大型竪穴建物跡は確認されていないが、盛土遺構の可能性があり、遺跡の規模も大きいことから拠点集落と考えられる。田代遺跡に後続するのが中期末から後期初頭の竪穴建物跡などを検出している江利家Ⅴ、滝谷Ⅲ、嶽Ⅱ、道地などの遺跡である（岩手県埋蔵文化財センター 1986）。

#### 二戸市・一戸町周辺の遺跡群

馬淵川中流域の二戸市、一戸町周辺には中期の遺跡が多い。前期末葉から中期中葉まで継続する集落が上里遺跡である。家族と考えられる7体の合葬人骨が出土した遺跡として知られている。上里遺跡に後続するのが荒谷A遺跡である。中期中葉の大木8b式から9式期の遺跡で、大型竪穴建物とともに中・小型の竪穴建物跡を100棟以上調査しており拠点集落遺跡と考えられる。周辺では上村遺跡、家ノ上遺跡、沢内B遺跡、米沢遺跡、下村A遺跡など、前期末葉から後期初頭の遺跡が分布しており、この地域でも中期後葉の拠点集落から周辺への分散という状況が見られる。なお中期末から後期初頭の列状の配石墓群と考えられるのが下村B遺跡である。それに後続するのが荒谷A遺跡の環状列石である。人骨が出土した改葬甕棺墓などを伴っており後期前葉を中心とした遺構と考えられている。

以上の遺跡群の上流に位置するのが一戸から小鳥谷にかけての遺跡群である。詳細は第3章で詳述しており省略するが、中期中葉から後期初頭までの拠点集落から周辺に分散する様相が見て取れる。そのなかでも小鳥谷の野里遺跡は、御所野遺跡と同時期の大木9式の大型竪穴を調査しており、その在り方は、新井田川流域の松崎遺跡の上流に位置する野場（5）遺跡と同じである。

縄文時代の遺跡のうち拠点集落は前期後半から中期初頭、あるいは中期中葉まで継続する遺跡が多く、それに後続する遺跡が今回検討した遺跡群である。いずれも中期中葉から後期初頭までの遺跡群で、中期後葉までは一か所に集中し多様なインフラを持つ拠点集落を形成するが、中期末の大木10式期に周辺に分散する様相が新井田川流域の八戸市周辺、軽米町、九戸村、馬淵川中流域の二戸市周辺でも同じような様相を確認できた。



第140図 馬淵川流域を中心とした縄文時代中～後期の集落遺跡

第42表 馬淵川流域を中心とした中～後期の集落遺跡

No.	遺跡名	県	市町村	時期	No.	遺跡名	県	市町村	時期
1	鴛窪	青森県	八戸市	後期初頭～前葉	37	館向	青森県	南部町	中期後半
2	牛ヶ沢 (3)	青森県	八戸市	中期末葉～後期初頭	38	佐野平	青森県	南部町	中期後半
3	田面水平 (1)	青森県	八戸市	中期末葉～後期前葉	39	水上	青森県	南部町	後期初頭～前葉
4	丹後谷地	青森県	八戸市	中期末葉～後期前葉	40	嵐山	青森県	三戸町	中期中葉～末葉
5	長久保 (2)	青森県	八戸市	中期中葉～後葉	41	川口 I	岩手県	二戸市	後期初頭～前葉
6	糠塚小沢	青森県	八戸市	中期末葉～後期初頭	42	門松	岩手県	二戸市	後期前葉
7	石手洗	青森県	八戸市	中期中葉	43	上里	岩手県	二戸市	中期中葉
8	赤御堂	青森県	八戸市	中期中葉～後期初頭	44	荒谷 A	岩手県	二戸市	中期中葉～後期前葉
9	松ヶ崎・西長根	青森県	八戸市	中期中葉～後葉	45	上村	岩手県	二戸市	中期末葉～後期前葉
10	湧次郎窪 I	青森県	八戸市	後期初頭	46	家ノ上	岩手県	二戸市	後期初頭～前葉
11	黒坂	青森県	八戸市	中期末葉～後期初頭	47	沢内 B	岩手県	二戸市	中期末葉
12	一王寺 (1)	青森県	八戸市	中期中葉～後期初頭	48	末沢	岩手県	二戸市	中期末葉～後期前葉
13	風張 (1)	青森県	八戸市	後期前葉	49	下村 B	岩手県	二戸市	中期後葉～後期前葉
14	笹ノ沢 (3)	青森県	八戸市	中期～後期	50	浜瀬 A	岩手県	二戸市	後期初頭
15	牛ヶ沢 (4)	青森県	八戸市	中期～後期	51	寺久保	岩手県	二戸市	後期初頭～前葉
16	鴨平 (2)	青森県	八戸市	中期後葉～後期前葉	52	矢神	岩手県	二戸市	後期初頭～前葉
17	比窪	青森県	八戸市	中期末葉～後期初頭	53	馬立 I	岩手県	二戸市	中期末葉～後期前葉
18	松石橋	青森県	八戸市	中期末葉	54	馬立 II	岩手県	二戸市	後期初頭～前葉
19	円代	青森県	八戸市	中期末葉	55	舘久保 II	岩手県	二戸市	中期末葉～後期前葉
20	野場 (5)	青森県	軽米町	中期後葉～後期初頭	56	御所野	岩手県	一戸町	中期中葉～末葉
21	水吉 VI	岩手県	軽米町	中期末葉	57	馬場平	岩手県	一戸町	中期中葉
22	大日向 II	岩手県	軽米町	中期末葉	58	下地切	岩手県	一戸町	中期末葉
23	臥屋敷 I a	岩手県	軽米町	中期後葉～末葉	59	子守 A	岩手県	一戸町	中期末葉
24	臥屋敷 I b	岩手県	軽米町	中期末葉	60	田中 I	岩手県	一戸町	中期末葉
25	臥屋敷 II	岩手県	軽米町	中期末葉～後期初頭	61	田中 2	岩手県	一戸町	中期末葉
26	臥屋敷 III	岩手県	軽米町	中期末葉?	62	田中 4	岩手県	一戸町	中期末葉
27	馬場野 I	岩手県	軽米町	中期末葉～後期初頭	63	田中 5	岩手県	一戸町	中期末葉
28	馬場野 II	岩手県	軽米町	中期末葉～後期初頭	64	田中	岩手県	一戸町	中期中葉～後期前葉
29	若成田 IV	岩手県	軽米町	中期末葉～後期前葉	65	大平	岩手県	一戸町	中期中葉～後期前葉
30	田代	岩手県	九戸村	中期中葉～後葉	66	上野 F	岩手県	一戸町	中期末葉
31	江刺家 IV	岩手県	九戸村	中期後葉～末葉	67	上野 H	岩手県	一戸町	中期末葉～後期初頭
32	江刺家 V	岩手県	九戸村	中期末葉	68	仁昌寺 II	岩手県	一戸町	中期末葉～後期前葉
33	江刺家	岩手県	九戸村	中期末葉～後期	69	仁昌寺 III	岩手県	一戸町	中期後葉～後期前葉
34	滝谷 III	岩手県	九戸村	後期前葉	70	野里	岩手県	一戸町	中期後葉
35	畝 II	岩手県	九戸村	中期後葉～末葉	71	野里上 II	岩手県	一戸町	中期末葉～後期初頭
36	遺地 III	岩手県	九戸村	中期末葉					

## 第2節 東北地方北部での御所野遺跡の位置付け

東北地方北部では前期中葉以降円筒土器文化圏が形成され、中期中葉まで継続するが、御所野遺跡とそれに先行する馬場平遺跡はいずれもこの円筒土器文化圏のなかで成立発展した遺跡である。

### 円筒土器文化圏内での遺跡の立地の特徴 (第142図、第43表)

- A 大きな河川とその支流域に立地する遺跡群で、青森県東部の岩木川、秋田県北部の米代川、それに青森県東部から岩手県北部を流れる馬淵川と新井田川など、内陸の河川域に立地する遺跡群。
- B 青森県の陸奥湾や津軽半島の西部部、さらに下北半島や三陸海岸北部など沿岸部に立地する遺跡群である。比較的前期を主体とする遺跡が多い。
- C 青森県東部の小川原湖やその北部の湖沼地帯、さらに秋田県の八郎潟周辺など湖沼周辺に立地する遺跡。

以上のA～Cが円筒土器文化圏内での遺跡の立地の特徴と考えられる。

### 円筒土器文化圏内の遺跡の存続時期

- ① 前期 (円筒下層式期前半) を中心とする遺跡
- ② 前期の円筒下層式期後半から中期の円筒上層式期前半 (円筒下層d式期～円筒上層a・b式期)
- ③ 中期の円筒上層式期後半 (円筒上層d・e式期以降)

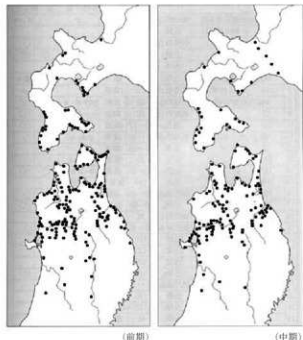
というように3時期に区分できようである (北の縄文研究会 2012)。ちなみに立地と存続時期を組み合わせると御所野遺跡はA③、二戸市の上里遺跡はA②に相当する。

ここでは御所野遺跡と同じく中期中葉から続く遺跡 (③) の拠点集落とその周辺遺跡群について検討してみる。なお拠点集落は基本的には竪穴建物跡数と大型竪穴建物跡や盛土遺構の有無などから判断しており、貯蔵穴や墓坑など居住施設以外の施設も多い。

#### A) 内陸の河川域に立地する遺跡群

馬淵川・新井田川流域以外では秋田県北部の米代川流域に例がある。上流域の拠点集落に相当するのが甕角市の天戸森遺跡である。円筒上層e式から中期末の大木10式まで継続する遺跡で、調査面積は約9000㎡で竪穴建物跡140棟、プラスチック土坑65基、土坑38基、配石遺構21基を検出している。集落は中期中葉の円筒上層e式段階では大型竪穴建物跡を核として3箇所に分布しているが、大木9式期の段階で規模が大きくなるとともに竪穴建物跡は馬蹄形に分布しその内側が広場となる。集落は大木10式期まで継続するが、中期末になると極端に縮小し遺跡は途絶える。配石遺構は少なくとも3箇所に分布している。広場とは別の段丘先端部や竪穴群の外側に位置しており、大木9式から大木10式期の遺構と想定されている。

米代川の下流域では二ツ井町の烏野遺跡



(北の縄文研究会 2012) より転載

第141図 円筒土器出土主要遺跡

の例がある。中期中葉から後期初頭まで継続する遺跡で、南北2ヶ所に厚厚1.3m、最大幅20m、長さ100m以上の盛土遺構があり、その間は削平されて低くなっている。調査面積約6000㎡で、堅穴建物跡125棟、掘立柱建物跡31棟、プラスチック土坑21基、土坑8基、炉跡9基、土器埋設遺構2基、配石墓3基（報告では集石としている）が検出されている。堅穴建物跡などは盛土遺構の上にも構築されるが、時期が新しくなるにつれて斜面下の低い方につくられるようになる。掘立柱建物跡も盛土遺構の斜面だけでなく配石墓とともに低地に構築されることから、盛土遺構間の低地は墓域として利用されたと考えられる。

以上が米代川流域の中期中葉の2ヶ所の拠点集落の状況である。天戸森遺跡周辺の花輪地区では御休堂、猿ヶ平Ⅱ、案内Ⅴ・Ⅵ、八幡平地区では上葛岡Ⅰ・Ⅱ、北の林Ⅰ・Ⅱ、飛鳥平、鳥居平、居熊井などの中期末の遺跡が集中している。下流の鳥野遺跡周辺にも竜毛沢館跡、館下Ⅰ、大内坂Ⅱ、腹鞍の沢、寒川Ⅰなど中期末から後期初頭の遺跡が集中している（秋元 1991）。天戸森遺跡、鳥野遺跡ともに中期末の配石遺構を検出しているが、その時期に拠点集落から周辺の小規模集落への分散がはじまるようであり、それぞれ関連があると考えられる。特に天戸森遺跡の場合、周辺の小規模な集落は後期まで連続する例も多いし、やがて出現する高屋館遺跡や大湯環状列石など後期前半の大規模な環状列石成立の端緒と考えることができる。鳥野遺跡の場合も周辺に分散した後、いくつかの変遷を経て伊勢堂岱遺跡の大規模な環状列石が成立したのであろう。

馬淵川・新井田川流域の拠点集落では、既述のように新井田川の下流域に松ヶ崎（石手洗）遺跡、上流域に御所野遺跡（馬場平、荒谷A）の例がある。特に御所野遺跡周辺では、中期中葉の拠点集落から中期末での周辺への分散とともに、配石遺構群が出現し、典型的な環状列石へと変化する過程を具体的に確認できる。Aの立地では米代川流域や馬淵川流域の上・下流域にそれぞれ拠点集落があり、拠点集落から分散した遺跡群が周辺に集中するとともに、その後後期前葉の大規模な環状列石が成立している。

## B) 沿岸部に立地する遺跡群

Bを代表するのが三内丸山遺跡である。三内丸山遺跡は円筒土器文化圏の遺跡としてはめずらしく前期中葉から中期末まで継続する遺跡となっている。集落の詳細な変遷は、前期の集落が盛土遺構などの下にあるためやや不明で、中期中葉（上層d・e式）になって集落が拡大するとともにそれに伴う施設も増加し、最も繁栄すると言われている。堅穴建物跡の数も増えるが全般的に小型化するという。一方では同時期に長軸が30mを越す大型堅穴が構築され、建替えや拡張などを頻繁に繰り返している。盛土遺構は谷の西側にある北盛土、南側斜面にある南盛土、さらに集落の西側に構築された西盛土があり、この南北の盛土下に前期の遺構が分布している。掘立柱建物跡は北西部の台地の縁辺部、集落の中央部、更に南盛土の南西付近にある。直径1mのクリの巨木の掘立柱建物跡は北西端に位置している。これらの掘立柱建物跡はそれぞれ規模も異なることから機能が別な可能性が強いと言われている。粘土採掘坑は土坑墓の南側で検出している。土坑墓と埋設土器はいずれも埋葬に伴う施設であり、土坑墓は中央の谷の東側に位置し、幅12mの道路の両側に並列しており、420mまで確認している。谷の西側では南北に370m程伸びる道路跡の両側にも土坑墓があり、西側は環状配石墓となっている。埋設土器は、谷の東側の台地の縁辺部と西側の居住域北側に分布している（岡田 2005）。

大規模な墓地があったり、環状配石墓など特殊な墓が構築されたりすること、さらに盛土遺構から土偶や小形土器が多量に出土することなどから遺跡で継続的に祭祀行為が行われたこと、併せて他地域からの搬入品、黒曜石、ヒスイ、コハクなどがまとめて出土していることは頻繁に交流が行われていたことを示している。中期中葉になると三内丸山遺跡を中心としてその周囲に遺跡が集中するが、

中期末以降集落規模も縮小し、やがて遺跡は衰退し周辺に拡散する。後期になると遺跡数は増加するが、いずれも小型化し、従来とは異なる場所に立地するようになるという(岡田 2005)。周辺の集落遺跡として知られているのは並置遺跡であるが、逆に配石遺構を持つ稲山、太師森、四ツ石などの遺跡とともにやがて小牧野のような巨大な環状列石が構築される。なお三内丸山遺跡は円筒土器文化圏の集落としてはめずらしく前期中葉から中期末まで継続する遺跡であるが、同じくBの沿岸部に立地する遺跡として岩手県北部の菅代村に位置する力持遺跡の例がある(岩手埋文 2008)。円筒土器文化圏の縁辺部に位置する前期前葉から中期末葉にかけての遺跡で、三内丸山遺跡よりさらに長期に遺跡が存続した可能性がある。あるいは沿岸部に立地することが集落が長期に及ぶ要因のひとつなのかも知れない。

### C) 湖沼地帯周辺に立地する遺跡群

Cの湖沼地帯周辺の代表的な遺跡は青森県六ヶ所村の富ノ沢(2)遺跡である。六ヶ所村尾駈の尾駈湖北岸に位置する中期中葉の円筒上層e式期から大木10式期までの遺跡で、約20,000㎡で堅穴建物跡543棟、掘立柱建物跡9棟、配石遺構4基、屋外炉9基、埋土土器2基、土坑1,000個以上を調査している。円筒上層d式期から最花式(大木9式)期までの遺構が多い。集落は円筒d・e式期とそれ以降とではやや配置が異なり、前者ではやや弧状に堅穴建物跡などが分布し、その先端部に墓坑群、後者では基本的には同じ場所に堅穴建物跡などが分布するが、ブロック毎にまとまりがあり、その内側に墓坑が集中する。この墓坑群は配石遺構を伴っており、榎林期、あるいは最花期の時期が想定されるという。大木10式の時期にはほとんど遺構がみられなくなり、周辺に新たな遺跡が出現する。中期末から後期初頭の弥栄平(1)・(2)、上尾駈(2)、大石平、沖附、鷹巣などである。弥栄平遺跡を除いて中期末の堅穴が数棟あるほか後期前葉を主体とする遺跡で、上尾駈(2)と大石平にはいずれも配石遺構がある。なお弥栄平(1)遺跡の甕棺から出土した人骨は18～19歳の女性のもので「縄文美人」として復元されている。

#### まとめ

三内丸山遺跡を除いて、中期中葉以降あらたに出現した拠点集落が中期末から後期初頭にかけて集落が解体し、周辺に分散する様相がうかがえた。分散した集落は後期前葉になると更に範囲を拡大しており、それを繋ぐ精神的な拠点として、祭祀的な施設である大規模な環状列石が構築される。つまり拠点集落で培われた集団の紐帯を維持発展するための施設が大規模な環状列石ということになる。その出発点となったのが米代川の上流域では天戸森遺跡、下流域では烏野遺跡であるが、いずれも集落の最終段階で配石遺構がつくられており、そのことを暗示している。米代川流域での中期の遺跡分布の状況では同じような拠点集落がほかにも予想されることから、そのような遺跡も含めて成立したのが上流域では大湯環状列石、下流域では伊勢堂岱遺跡と考えられる。

沿岸部に立地する巨大な三内丸山遺跡も中期末から後期初頭になると遺跡は消滅し、周辺に集落が分散する。三内丸山遺跡では中期後葉になると環状配石墓が構築されるようになり配石遺構の萌芽がみられる。その後周辺の遺跡には小規模な配石遺構が出現するようになり、やがて小牧野遺跡に大規模な環状列石が構築される。湖沼地帯の富ノ沢遺跡と周辺の遺跡群や新井田川流域の松ヶ崎遺跡と周辺の遺跡群でも同じような様相を看取できる。

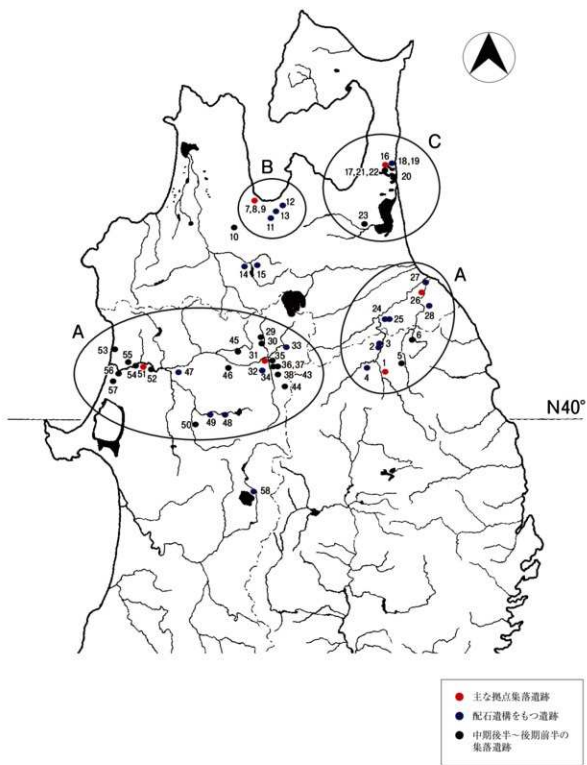
今回は詳述できなかったが、津軽地方の岩木川流域、あるいは小川原湖周辺でも今後拠点集落が確認された新たな情報が得られる可能性が高い。特に小川原湖周辺では前期から中期にかけての遺跡が集中しており、この地域での拠点集落の有力な候補が七戸町に位置する二ツ森貝塚である。今後調査が進めば集落の詳細な内容も明らかになってくるであろう。



御所野遺跡の東北部における位置づけは、円筒土器文化圏における内陸の大河川域に立地する典型的な拠点集落であることが確認できた。しかも南の太木式土器文化圏との接触地帯にあることからその影響を受けながら集落は変遷し、中期末になると周辺に分散する。ただ大規模な配石遺構はそのまま存続し、御所野遺跡だけでなく周辺遺跡群も含めた祭祀的な葬祭センターとしての機能をより強める。やがて後期になるとともに徐々に周辺の遺跡もなくなり、馬淵川の支流域や丘陵地帯にまで拡大する。この時期二戸市の下村B遺跡の配石遺構や荒谷A遺跡の環状列石が成立する。

第43表 円筒土器文化圏における主な集落遺跡と配石遺構

No.	遺跡名	集落	配石	郡	市町村	時期	No.	遺跡名	集落	配石	郡	市町村	時期
1	御所野	○	○	岩手県	一戸町	中期後葉～末葉	30	ほりま館			秋田県	小坂町	前期、中期末葉～後期
2	下村B		○		二戸市	中期後葉～後期初頭	31	天戸森	○	○		鹿角市	中期中葉～末葉
3	荒谷A	○	○		二戸市	中期中葉～後葉	32	高尾館				鹿角市	後期前葉
4	馬立Ⅱ		○		二戸市	後期前葉	33	大湯環状列石		○		鹿角市	後期前葉
5	田代	○			九戸村	中期中葉～後葉	34	御休堂				鹿角市	中期末葉
6	大日向Ⅱ	○			軽米町	中期末葉	35	鯉ヶ平Ⅱ				鹿角市	中期末葉
7	近野	○			青森市	中期中葉～後期前葉	36	案内V				鹿角市	中期末葉
8	三内沢部	○		青森市	中期後葉	37	案内VI			鹿角市	中期末葉～後期		
9	三内丸山	○		青森市	前期～中期	38	上巻園Ⅰ			鹿角市	中期末葉		
10	沢沢	○		青森市	後期初頭	39	上巻園Ⅱ			鹿角市	中期末葉～後期		
11	小牧野	○	○	青森市	後期前葉	40	北の林Ⅰ			鹿角市	中期末葉～後期初頭		
12	桶山		○	青森市	後期初頭～前葉	41	北の林Ⅱ			鹿角市	中期末葉～後期		
13	四ツ石	○		青森市	後期前葉	42	飛鳥平			鹿角市	中期末葉～後期		
14	太郎森	○		平川市	後期初頭～前葉	43	鳥居平			鹿角市	中期末葉		
15	一ノ渡		○	黒石市	後期前葉	44	石燈井			鹿角市	中期末葉～後期		
16	富ノ沢(2)	○	○	六ヶ所村	中期	45	玉林寺跡			大館市	中期末葉		
17	赤栄平(1)	○		六ヶ所村	中期末葉～後期	46	本道端			大館市	中期末葉		
18	大石平	○	○	六ヶ所村	後期前葉	47	伊勢堂跡		○	北秋田市	後期前葉		
19	上尾鞍(2)		○	六ヶ所村	後期前葉	48	深渡		○	北秋田市	中期末葉		
20	萬葉	○		六ヶ所村	後期前葉	49	日麗跡B			北秋田市	後期初頭		
21	沖附(2)	○		六ヶ所村	後期前葉	50	上岱Ⅰ			北秋田市	中期前葉～末葉		
22	赤栄平(2)	○		六ヶ所村	中期末葉～後期前葉	51	鳥野		○	雄代市	中期中葉～後期初頭		
23	七戸森	○		七戸町	中期後葉	52	電毛沢館跡			雄代市	中期末葉～後期初頭		
24	象山	○	○	三戸町	中期後葉	53	中田面			雄代市	中期後葉～末葉		
25	水上		○	南郷町	後期初頭～前葉	54	館下Ⅰ			雄代市	中期後葉～末葉		
26	松ヶ崎・西長根	○		八戸市	中期中葉～末葉	55	大内坂Ⅱ			雄代市	中期後葉～後期初頭		
27	丹後谷地	○	○	八戸市	後期	56	龍鞍の沢			雄代市	中期中葉～後期初頭		
28	野場(5)	○	○	隆上町	中期後葉～後期初頭	57	壱川Ⅰ			雄代市	中期後葉～後期初頭		
29	白長根館Ⅰ			秋田県	小坂町	中期末葉～後期前葉	58	湖前		○	弘前市	後期初頭以降	



第142図 円筒土器文化圏における主な集落遺跡と配石遺構

### 第3節 御所野遺跡の価値と重要性

#### 遺跡の概要

御所野遺跡は円筒土器文化圏における代表的な拠点集落のひとつである。集落は中央部の墓域を中心として、墓域の周辺や集落の東西の居住域に竪穴建物跡が多く分布している。墓域は中央部北側に位置し、ほぼ全域が削平され、削平された土は南側に高く盛り盛られ盛土遺構となる。盛土遺構中からは土器・石器などのほか焼けた獣骨・植物種子などが多量に出土するとともにいくつも焼土面が形成されている。同じような焼土面は墓域の北東部でも確認しており、中央部の盛土遺構と墓域の周辺で祭祀的な儀礼行為が行われていたことは疑いない。墓域の外側には掘立柱建物跡などに伴う柱穴が密集しており、同じく葬送儀礼や祭祀に伴う遺構群と考えられる。居住域では竪穴建物跡のほか貯蔵施設である土坑がいくつも検出されている。また東南端崖際では、粘土探掘坑という生産遺構も確認されている。竪穴建物跡は長軸10m前後の大型竪穴建物跡が多数検出されていることやその分布から主に大型竪穴を核とし中・小型竪穴数棟ずつで構成される建物群が集落の基準単位となっていた可能性が高い。竪穴建物跡は少なくとも1,000棟以上、土坑は500基以上と推定されており、日本列島のなかでも最大規模の縄文集落と考えられる。

#### 遺跡の変遷

集落の変遷も明らかになってきた。中期中葉に集落がつくられ、大型竪穴を核とした1～3単位の住居群が形成され、Ⅲ期の削平により墓域と盛土遺構が形成されるとともに焼骨や炭化種実が集約的に出土するなど、祭祀的空間を中央に持つ集落が形成される。

#### Ⅱ期（円筒上層d～e式期）

円筒土器文化圏の中期中葉に馬場平遺跡からはじまった集落はやがて御所野遺跡に移り、それぞれ西、中央、東にも竪穴建物跡を中心とした遺構群が分布するようになる。竪穴建物跡の組み合わせには2パターンあり、大型竪穴建物跡を核として中・小型竪穴数棟を基本単位とする建物群と中・小型竪穴だけで構成される建物群とがある。前者は西、中央南側、東の3箇所で確認しているが、当然集団の規模も大きいことが予想されるのに対して、後者は遺跡北東部（東側1調査区）だけで確認しており該当する竪穴建物跡は2～3棟と規模も小さくなる。

#### Ⅲ期（榎林式・大木8b式併行期）～Ⅳ期（大木9式併行期）

Ⅲ期は円筒土器文化が終焉を迎え大木式土器文化圏の影響が強まった時期に相当する。南の大木式土器の影響を強く受けた土器群（榎林式）が多く出土する。最近の調査で盛土遺構がⅢ-1期に形成され、しかもその直後から盛土遺構の上に次々と竪穴が構築されたことが明らかになってきた。同時期の遺構群は北側の削平地でも確認され、その周辺に集落が環状に形成されるようになり、Ⅳ-1期まで継続している。ところがⅣ-2期になると、Ⅱ期までと同様大型建物跡を中心とした竪穴群が東、西、中央に分布する。ただ大型竪穴建物跡の規模はⅣ-1期に比較して若干小さくなる。

#### Ⅴ期（大木10式併行期）

西側調査区ではⅤ期の竪穴建物跡の組み合わせを確認している。大型1棟、中型1棟、小型2棟が一時期の組み合わせと考えられる。以上の組み合わせをⅡ期と比較すると、核となる大型竪穴の規模が縮小するとともに竪穴数も少なくなっている。このような竪穴群の構成が変化するとともに集落の配置も変わってくる。それまで東南端部、中央南側から北側の削平地周辺、さらに西側の北よりに集中していた遺構が、東側調査区の北側の緩やかな斜面にまで分布するようになる。このような竪穴建物跡群の立地の変化からⅤ期になると集落内の集団の単位が小さくなるとともに居住域が拡大する。縄文の森と名付けた東側丘陵頂部や北側の谷を隔てた下地切遺跡をはじめ、田中遺跡群、さらにその

北に位置する上野F遺跡、あるいは馬淵川対岸の大平遺跡、小島谷地区の仁昌寺Ⅱ遺跡でも同時期の遺構が確認されている。特に田中遺跡群の各遺跡の竪穴建物跡の大半はこのV-2期のものである。以上の遺跡群のうち田中遺跡、大平遺跡、仁昌寺Ⅱ遺跡は後期まで続く遺跡である。

#### 配石遺構

V期になると集落内に配石遺構が構築される。中央部の配石遺構群のうちⅣ区トレンチに隣接しているF146の下ではV-2期の遺構を調査している。F146配石は配石遺構のなかではより南側に位置しており、新たに範囲が拡大した後の配石遺構の可能性もあるが、そのほか配石遺構に対応すると考えられる掘立柱建物跡の柱穴がいずれもⅣ期以降の竪穴建物跡を切っていることからほぼ近い時期が想定される。つまりⅢ-1期に削平されて墓域が形成されて以降いくつも墓坑が構築されるが、V期になって墓坑の上に石が設置された可能性もある。配石遺構は居住域の拡大により集落が周辺に分散したことで新たに採用されたインフラと考えることもできる。

馬淵川中流域における配石遺構は縄文中期末の御所野遺跡を最古として、後期初頭の二戸市下村B遺跡、後期前半の荒谷遺跡という変遷が考えられる。このうち下村B遺跡や荒谷A遺跡の周辺で発掘された竪穴建物はやや時期を異にしており、配石遺構と同時期の竪穴建物跡を持つ遺跡は御所野遺跡だけである。このような配石遺構群はそれ以降東北地方各地に分布するようになる。

#### 遺跡の重要性

御所野遺跡は、計画的に行った調査によって、集落の広がりや範囲・構造、そして中期中葉から中期末まで継続した拠点集落であることが明らかになった。通常縄文集落は一定期間存続すると途絶え、その後再び同じ場所に集落が形成される例も多いが、御所野遺跡の場合、馬場平遺跡からはじまり500年以上集落が継続している。このように長期間途切れることなく集落が継続したということも遺跡の価値のひとつである。繰り返して述べたように、御所野遺跡は、円筒土器文化圏内で成立発展した集落で、より南の大木土器文化圏の影響を受けて集落構造全体が大きく変化した遺跡である。すなわち円筒土器文化圏特有の遺構群が東西に並列する集落から、中央部北側の墓域の形成とともに、その周囲に竪穴建物などの居住施設が集中し所謂環状集落となる。墓域はあらかじめ広範囲に削平され、その土は南側に高く盛り盛土遺構となる。このような大がかりな土木工事を示す遺構は縄文時代の社会構造を考える上で重要である。その後居住域は台地の東西に分散されるが、墓域は集落の中心施設としてそのまま維持される。

ところで御所野遺跡の竪穴建物群は、大型竪穴を核とし中型、小型竪穴数棟ずつで構成される単位と東1調査区で確認された2〜3棟で構成される単位がある。このような単位は、御所野遺跡の各時期にほぼ共通する居住単位と考えられる。やがて墓域には配石遺構が出現するが、その分布と掘立柱建物跡は対応しており、それぞれが墓域における単位と考えられる。このように御所野遺跡は同時期の居住単位と墓域における単位の対応関係が検討できる遺跡でもある。

縄文時代の中期末から後期初頭は、それまでの社会構造が徐々に崩壊し新たなしくみが形成された時期である事は早くから指摘されているが、御所野遺跡とその周辺遺跡の検討でも確認できる(高田2008)。このような集落構造の変化と前後して御所野遺跡でも土偶、土製品、石製品、石棒が増加したり、中央部で焼いた痕跡をもつ多量の獣骨や種実が出土するとともに、配石遺構の立石が馬淵川の対岸から運んだり、竪穴内に祭祀空間を設けて意図的に焼く行為など、祭祀的な色彩が非常に強くなる。このように中期末から後期初頭の社会構造の変化を考える上で御所野遺跡は重要な遺跡である。

今後研究が進展すれば、遺跡における土器生産や植物利用、石材やアスファルトの流通などについて、周辺の地生生態系(地形・地質)や生物生態系などの多様な要因により、この地に御所野遺跡が立地し、

北東北を代表する拠点集落として長期間継続した意味についても明らかになってくるであろう。

#### 第4節 課題と展望

御所野遺跡の発掘調査は平成元年度にはじまり既に四半世紀以上経過した。調査は遺跡の保存から整備、さらに範囲確認などを目的としているが、その間に多くの情報が得られ、遺跡の全体像やその内容も少しずつはあるが明らかになってきている。今回はそのまとめとして総括報告書を作成した。現在までの調査の一覧や検出遺構・出土物については別表などにまとめたが、調査した範囲も一部でありまだまだ不明な点が多い。ここではその不明な点など今後の課題についてまとめる。

##### 各時期の課題

御所野遺跡は中期中葉の集落のはじまりから円筒上層式までのⅠ～Ⅱ期、大木式土器文化圏からの影響を受けて集落が再構成されるⅢ～Ⅳ期、御所野から周辺へ分散するⅤ期という変遷をたどるが、各時期の集落の様相にはまだ不明な点も多い。

Ⅰ～Ⅱ期は大型堅穴を核とするやや規模の大きい堅穴群と小規模な堅穴群とがあるが、いずれも墓域や廃棄場所などについては不明である。特に馬場平遺跡も含めて墓域の確認が課題である。遺物の廃棄場所については、馬場平遺跡のC7のように焼失後の堅穴などへの集中的な廃棄が一般的だった可能性もあるが、いずれ他遺跡で見られるような遺物包含層などは確認していない。

Ⅲ期になるとともに中央部北側が削平されるとともに南側に盛土遺構が構築されるが、盛土遺構の上には堅穴建物跡が重複することが最近の調査で明らかになってきた。同時期の堅穴建物跡は北側の削平地周辺にも分布しており、この時期中央部に典型的な環状集落が形成される。環状集落はⅣ期まで継続するが、Ⅳ～Ⅱ期になると中央部だけでなく東、西へと再度居住域が拡大する。中央部北側の削平地は墓域と考えられるが、墓坑そのものはほとんど未調査のため時期的な変遷も明らかではない。削平地の範囲とその内容の把握も今後の課題である。削平地の北側斜面で確認した包含層の出土土器はⅢ群土器が最も多い。また大型堅穴建物跡の窪地への遺物廃棄はⅣ期にも継続される。Ⅲ～Ⅳ期の堅穴群は、大型堅穴を中心とした構成が考えられ、今後各時期毎に検討する必要がある。

Ⅴ期は二時期に時期区分できたが、今後周辺遺跡との比較検討や集落の分散を具体的に裏づけるためには更なる細分や検討が必要である。特に中央部の配石遺構はⅤ期の可能性が高いが、その構築時期を確実に把握するためにも今後更に土器群の細分が必要である。

##### 集落の分散と祭祀

Ⅴ期の集落の分散に関する可能性のあることがいくつかあげられる。そのひとつは焼失堅穴建物跡についてである。御所野遺跡では、実験で土屋根堅穴は意図的に焼かない限り燃えないことを確認しており、検出した焼失堅穴建物はいずれも意図的に燃やしたものと考えている。その場合、Ⅱ～Ⅳ期までとⅤ期で焼失の目的が違う可能性を指摘できる。前者では特に大型堅穴建物跡に顕著であるが焼失後凹地に多量の遺物が廃棄されるのに対し、後者では焼失前の堅穴にはほぼ完形の土器や特殊な土器などを置いたまま焼いており、焼失後も堅穴に遺物などは廃棄されないということである。つまり家を焼くことの意味がⅤ期になって変わった可能性もある。

配石遺構の出現がⅤ期の集落分散と関連することは前章で指摘したが、配石遺構群のうち特に大型の花崗岩はいずれも対岸の茂谷山から運んだ可能性が高い。配石遺構と掘立柱建物跡は関連が強いと考えられるが、掘立柱建物跡はいずれもⅣ期の堅穴建物跡より新しいことからⅤ期に構築された可能性が高い。FC48掘立柱建物跡では柱を抜き取った跡に多量のトチヤクミナの炭化種子や炭土粒や炭化材などとともに入れられており、祭祀的な行為が行われたことを示している。その他土器の胎土分析でもⅤ期の土器が他時期と素材が異なるか、あるいは花崗岩起源の混和材を混入しているのか、い

ずれ異なる素材が使用された可能性があることが指摘されている。以上からV期の集落の変化は遺構だけでなく、出土遺物の分析でも具体的に説明できそうである。今後御所野遺跡の調査では以上の視点でさらに研究する必要がある。

#### 遺跡の理解と活用に向けて

御所野遺跡を端緒として平成になってから各地で拠点集落の調査が相次ぎ、かなりの資料が蓄積されてきた。ところが御所野遺跡のように保存されて計画的に調査のできる遺跡は稀である。特に縄文時代の遺跡からは膨大な量の遺物が出土するにも拘わらず限られた時間内で野外調査から整理作業を進め、出土した遺物も選別された一部だけを報告し、そのほかは山積みになっている場合が多い。このような状況で縄文時代の情報が正しく理解される筈がない。特に大規模な遺跡の多い北海道東北の状況がきちんと理解されないまま資料の蓄積だけが進んでいる。幸い今回総括報告書の作成にあたっては、未報告の遺物も整理し、遺物の全体量が把握できるよう台帳作成も行った。そのような作業をするなかで新たに明らかになったことも多い。その意味でも今回の総括報告書を作成できたのは、御所野遺跡にとっても非常に有益であった。特に今回まとめていただいた種子や底部の編組製品の圧痕調査などは、取藏されている資料から情報を引き出すという意味でも今後の新たな研究、あるいは文化財保護の方向性を示す貴重な報告になったと思う。

#### 遺跡研究の今後の展望

今回の報告では地質、植物などのほか他分野の分析情報も多く取り入れているが、配石遺構の分析など未分析の資料も多い。胎土分析などは出土品だけでなく、周辺の地質の資料なども含めて計画的に行なわなければならない。いずれ遺跡から得られる多くの情報は考古学だけではなく、あらゆる関連分野の学問的成果が必要であり、それを結集した総合科学として取り組むことが今後の縄文研究に最も必要なことだと改めて痛感した。

(高田和徳、菅野紀子)

#### 引用・参考文献

- 青森県教育委員会 1985「大石平遺跡発掘調査報告書」青森県埋蔵文化財調査報告書第90集  
青森県教育委員会 1986「大石平遺跡Ⅱ発掘調査報告書」青森県埋蔵文化財調査報告書第97集  
青森県教育委員会 1987「大石平遺跡Ⅲ発掘調査報告書」第1・2分冊 青森県埋蔵文化財調査報告書第103集  
青森県教育委員会 1985「弥生平 (1) 遺跡発掘調査報告書」青森県埋蔵文化財調査報告書第98集  
青森県教育委員会 1988「上尾敷 (1) 遺跡A地区」青森県埋蔵文化財調査報告書第112集  
青森県教育委員会 1988「上尾敷 (2) 遺跡 (1)」青森県埋蔵文化財調査報告書第114集  
青森県教育委員会 1991「富沢 (1)・(2) 遺跡Ⅲ」青森県埋蔵文化財調査報告書第133集  
青森県教育委員会 1992「富ノ沢 (2) 遺跡V発掘調査報告書 (3)」青森県埋蔵文化財調査報告書第143集  
青森県教育委員会 1993「富ノ沢 (2) 遺跡VI発掘調査報告書 (2)」青森県埋蔵文化財調査報告書第147集  
青森県教育委員会 1993「富ノ沢 (3) 遺跡」青森県埋蔵文化財調査報告書第147集  
青森県教育委員会 2004「長久保 (2) 遺跡」青森県埋蔵文化財調査報告書第367集  
青森県教育委員会 2007「館向遺跡」青森県埋蔵文化財調査報告書第425集  
青森県埋蔵文化財調査センター 1992「青い森の縄文人とその社会 縄文時代中期・後期編」図説「ふるさと青森の歴史」シリーズ②  
秋田県教育委員会 1979「館下Ⅰ遺跡発掘調査報告書」秋田県文化財調査報告書第62集  
秋田県教育委員会 2006「鳥野上坊遺跡——般国道7号琴丘能代道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書XVI——」秋田県文化財調査報告書第406集  
秋田市教育委員会 1988「秋田市 秋田新都市開発整備事業関係埋蔵文化財発掘調査報告書 下堤A遺跡 下堤B遺跡」

秋元信夫 1991 「米代川流域の縄文時代中期の集落－住居形態の変遷について－」『よねしろ考古第7号』

よねしろ考古学研究会

岩手県立博物館 2005 『岩手県立博物館第54回企画展展示図録 縄文北緯40° 前・中期の北東北』

(財)岩手県埋蔵文化財センター 1986 『岩手の道跡』

(財)岩手県埋蔵文化財センター 1979 「二戸市 沢内B道跡(昭和53年度)」岩手県埋蔵文化センター文化財調査報告書第7集

(財)岩手県埋蔵文化財センター 1982 『田代道跡発掘調査報告書』岩手県埋蔵文化センター文化財調査報告書第41集

(財)岩手県埋蔵文化財センター 1983 『滝谷Ⅲ道跡発掘調査報告書』岩手県埋蔵文化センター文化財調査報告書第49集

(財)岩手県埋蔵文化財センター 1983 『上里道跡発掘調査報告書』岩手県埋蔵文化センター文化財調査報告書第55集

(財)岩手県埋蔵文化財センター 1983 『上村道跡・下村A道跡・下村B道跡発掘調査報告書』

岩手県埋蔵文化センター文化財調査報告書第56集

(財)岩手県埋蔵文化財センター 1983 『荒谷A道跡発掘調査報告書』岩手県埋蔵文化センター文化財調査報告書第57集

(財)岩手県埋蔵文化財センター 1983 『江刺家Ⅳ-V道跡発掘調査報告書』岩手県埋蔵文化センター文化財調査報告書第59集

(財)岩手県埋蔵文化財センター 1983 『道地Ⅱ道跡・道地Ⅲ道跡発掘調査報告書』岩手県埋蔵文化センター文化財調査報告書第64集

(財)岩手県埋蔵文化財センター 1984 『謀Ⅱ道跡発掘調査報告書』岩手県埋蔵文化センター文化財調査報告書第78集

(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1986 『大日向Ⅱ道跡発掘調査報告書』

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第100集

(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1997 『田代道跡発掘調査報告書』

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第262集

(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2002 『上村道跡発掘調査報告書』

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第375集

(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2002 『仁昌寺Ⅱ道跡・仁昌寺道跡発掘調査報告書』

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第400集

(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2004 『五月館跡・仁昌寺Ⅲ道跡発掘調査報告書』

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第424集

(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2007 『野里上Ⅱ道跡・中屋敷上道跡発掘調査報告書』

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第491集

(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2007 『野里上道跡・野中道跡発掘調査報告書』

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第492集

(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2008 『力持道跡発掘調査報告書』第1～Ⅳ分冊

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第510集

岡田康博 2005 『北日本の縄文文化と三内丸山道跡の集落変遷』『ドイツ展記念概説 日本の考古学』上  
独立行政法人奈良文化財研究所

小笠原雅行・斎藤岳・中村美杉 2000 『本州北端の巨大集落 青森県三内丸山道跡1』『白い国の詩』531号  
東北電力株式会社

小笠原雅行・斎藤岳・中村美杉 2000 『本州北端の巨大集落 青森県三内丸山道跡2』『白い国の詩』532号  
東北電力株式会社

小保内裕之 2004 『八戸市松ヶ崎道跡出土の縄文時代中期後半の土器について』海峽土器編年研究会

鹿角市教育委員会 1984 『天戸森道跡発掘調査報告書』鹿角市文化財調査資料26

鹿角市教区委員会 2009 『秋田県鹿角市道跡詳細分布調査報告書』鹿角市文化財資料95

北日本縄文文化研究会 2011 『北日本縄文時代大型住居集落』

北の縄文研究会 2012 『北の縄文 円筒土器文化の世界－三内丸山道跡からの視点－』

国立歴史民俗博物館 2001 『縄文文化の扉を開く 三内丸山道跡から縄文列島へ』

児玉大成 2007 『青森県の諸道跡』『季刊考古学』第101号 雄山閣

『三内丸山道跡などの盛土遺構の研究』会務事務局 2010 『三内丸山道跡などの盛土遺構の研究－予稿集－』

高田和徳 2007 『岩手県の諸道跡』『季刊考古学』第101号 雄山閣

田村正樹 2007 『東北地方北部における中期縄文集落の様相』『宮城考古学』第9号 宮城県考古学会

- 八戸市教育委員会 1995『牛ヶ沢(4) 遺跡 石灰石採掘表土堆積場設置事業に伴う第3次試掘調査』  
八戸市埋蔵文化財調査報告書第63集
- 八戸市博物館 1985『縄文時代の馬淵川』
- 八戸市埋蔵文化財センター是川縄文館 2002『是川縄文館開館記念企画展 八戸の埋蔵文化財』
- 八戸市埋蔵文化財センター是川縄文館 2012『平成24年度秋季企画展示図録 縄文のストーンサークル』
- 武藤祐浩 2007『秋田県の縄遺跡』『季刊考古学』第101号 雄山閣
- 村木 淳 2010『新井田川下流域における縄文・弥生集落』『河川流域の縄紋景観』東北芸術工科大学



## Summary

Goshono Site is a Middle Jomon period base settlement located in Ichinohe Town in northern Iwate Prefecture. Based in the Ento pottery culture found in Northern Tohoku and Southern Hokkaido, with influence from the Daigi-type pottery culture from the south, the site lasted from the middle to the end of the Middle Jomon period (2500–2000 BC).

Divided into Phases I-V, the following is an outline of settlement transitions.

In Phase I, the settlements of Goshono were located in the adjacent Babadaira Site to the west. Settlements were composed of one large-size pit dwelling with diameters over 10 meters with middle- and small-size pit dwellings around it and continued in this way until Phase III-1. From Phase II, settlements appeared at Goshono along the east-west plateau of the site, and while changing locations over time, they extended throughout the entirety of the site. In Phase II-1 pit dwelling remains were detected in the east and west sides of the site and in Phase II-2 remains were discovered in the central area and east side.

Entering Phase III, the structure of the settlement changed significantly due to influences of the Daigi-type pottery culture. The north side of the central area was flattened and the excavated soil was moved to the south side creating a raised mound (*morido*). Later, the flattened land became an open plaza (*hiroba*) and pit dwellings and other buildings were constructed along the circumference, including atop the raised mound, forming a circular-shaped settlement. The settlement during this phase was limited to the central area and contains many overlapping structural remains.

In Phase IV-1, remains of a large-size pit dwelling were detected in the eastern side of the central area. Whereas building remains had been limited to the central area, upon entering Phase IV-2, settlements appeared at the east side, central area, and west side of the site around large-size pit dwellings. The settlement at the open plaza continued through this phase.

Entering Phase V, large-size pit dwellings over 10 meters in diameter vanished and the scale and number of pit dwellings remains diminished. Settlements dispersed into the hillside of the east side as well as other areas throughout the entire site. Furthermore, stone features started to be constructed in the central area. The stone features consist of groups of riverbed stones as well as large standing stones over one meter in length, and as a whole they form circular patterns. Analysis found that a large stone was granite that had been carried from Mt. Moya from the opposite bank of Mabuchigawa River, showing that the Jomon people of Goshono had some special connection to the mountain or these stones. In the area around the stone features, overlapping oval-shaped graves were discovered along with remains of several six-post pillar buildings that formed a radial pattern around the graves.

Furthermore in this period, while several settlements were distributed within a two kilometer range of Goshono – including Shimojigiri Site located on the north side of Goshono, Tanaka Site, Ueno Site and Odaira Site located

on the opposite shore of Mabuchigawa River – the graves were maintained in the north side of the central area of Goshono Site.

In the central area of the site, small fragments of burnt animal bones (largely deer and wild boar) and many charred seeds (mostly horse chestnut) were found inside hearth remains of pit dwellings and amongst burnt earth remains. There is an attention-grabbing example where the postholes of pillared buildings, which after having the posts removed, were intentionally filled with many charred nuts (horse chestnut with some chestnut and Japanese walnut). Based on this, the central area of stone features and graves is thought to also be a location where rituals involving fire were conducted. The pillared buildings are also thought have been utilized for ritual activities.

The following are some of the characteristics of excavated remains.

At the site, the remains of clay gathered for making pottery was discovered (clay-mining pit). Investigations of replica molds of the bottom of pottery showed that *Pesudosasa purpurascens* (East Asian bamboo) was one of the plants used for braded products. The stone materials used for tools included petrified wood obtained from the Nesorigawa river valley that neighbors the site, with arrowheads comprising 90 percent of the flake tools discovered. The artifacts excavated included multifarious ornaments and ritual objects, showing that Goshono site was a base settlement for festivals and ritual activities. Moreover, excavations of stone materials and asphalt that originates from the Hidaka district in Hokkaido and Oga peninsula in Akita show that trade occurred between distant areas.

## 報告書抄録

ふりがな	ごしょのいせきこ							
書名	御所野遺跡V							
副書名	総括報告書							
シリーズ名	一戸町文化財調査報告書							
シリーズ番号	第70集							
編著者名	高田和徳・岡村道雄・辻誠一郎・山本総光・西本豊弘・辻圭子・佐々木由香・米田恭子・ バンダリ スタルシヤン・黒沼保子・米倉浩司・小林和貴・高妻洋成・本多貴之・阿部芳郎・ 木村由美子・久保田滋子・菅野紀子							
編集機関	一戸町教育委員会							
所在地	〒028-5311 岩手県二戸郡一戸町高善寺字大川鉢 24-9 TEL 0195-33-2111							
発行年月日	2015年12月28日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
御所野遺跡	岩手県二戸郡 一戸町岩館字 御所野	03524	JF20- 2013	40度 11分 22秒	140度 39分 02秒	1989～1992 1994～1996 ～2000・ 2002～2005 2007～2008 2009～2012	16,172㎡ 12,906㎡ 1,080㎡ 270㎡	保存目的調査 内容確認調査  範囲確認調査 内容確認調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
御所野遺跡	集落	縄文時代 中期	配石遺構、竪穴建物 跡、掘立柱建物跡、 盛土遺構、土坑、粘 土採掘坑、柱穴列、 柱穴、焼土遺構	縄文土器・土製品 石器・石製品 動物遺体・植物遺体・ アスファルト塊		縄文時代中期中葉から 末葉の拠点的な集落遺 跡		
要約	<p>御所野遺跡は東北地方北部から北海道南部にかけて広がる円筒土器文化圏内で成立し、東北地方南部の大木式土器文化圏の影響を受けながら、縄文時代中期中葉から末葉まで存続した。5期区分した時期（Ⅰ～Ⅴ期）ごとに集落の変遷の特徴がみられる。中期中葉（Ⅲ期）には遺跡中央部が削平され、その南側に掘削土によって盛土遺構が形成される。削平地は広場となり、盛土遺構を含むその周囲には竪穴建物が構築され、環状集落が形成される。中期末葉（Ⅴ期）になると、集落は東側の丘陵部など遺跡全体や周辺遺跡にも分散する。中央部には配石遺構が構築される。</p> <p>レプリカ法による土器底部の敷物圧痕の観察結果からは、編組製品の素材となる植物の一つとして、スズタケが用いられていた可能性が高いことが明らかになった。石器製作の石材には、遺跡に隣接する根反川流域に産出する珪化木が多用されており、定型剥片石器の約9割を石楯が占める。多種多様な装身具や祭祀具が出土することからも、拠点的な集落であったことがうかがえる。また、秋田県男鹿半島などを原産とする石材の利用やアスファルト塊の出土から、遠隔地との物流が行われていたこともうかがえる。</p>							

一戸町文化財調査報告書70集

**御所野遺跡Ⅴ**

— 総括報告書 —

平成27年12月25日印刷

平成27年12月28日発行

発行 一戸町教育委員会

〒028-5311 岩手県二戸郡一戸町高善寺字大川録24-9

TEL (0195) 33-2111

印刷 株式会社 杜陵印刷

〒020-0122 岩手県盛岡市みたけ2-22-50

TEL (019) 641-8000